

一応、復讐でもしますか
かね。

エメレンシア / 観察端末

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

まあ、なんだ。

すべてを託すよ、とかさ。重いんだわあ。

そんな感じで始まる復讐劇。

目次

1.	あつさりした復讐の理由	1
2.	あつさりした出会い	16
3.	あつさりした救出	32
4.	あつさりした取引	47
5.	あつさりした救いの手	61
6.	あつさりした襲撃	76
7.	あつさりした再会と出立	92
8.	あつさりした悲嘆と説明	106
9.	あつさりした情報交換	123
10.	あつさりした邂逅	137
11.	あつさりした戦闘	153
12.	あつさりした終幕?	169
13.	あつさりした心変わり	184
14.	あつさりした決着	200
15.	あつさりした劣敗と、慟哭。	212
16.	あつさりした衝突と脱出	225
17.	あつさりした目標設定	240
18.	あつさりした否定と解決策	253
19.	あつさりした対面と、珍しいやる	268
二十.	昔の話と、少し前の話。	284
21.	あつさりした摩擦と、善なる者	302
気		

22.	あつさりした諦めと拒絶	—	320
23.	もう一つの解法、あるいは囁き		
	333		
24.	あつさりした無効化	—	349
25.	あつさりした復讐（実はもう、どうしようもなかった）	—	365
26.	あつさりした焼き増し	—	382
27.	あつさりした完結	—	397

1. あつさりした復讐の理由

「まあ、なんだ……一番、不真面目で、一番、生への渴望の強いお前に——すべてを託すよ、ラナエ」

そう言って。俺の胸に、その指を置いて。

目を瞑り、力尽きる——我が母。

……重いわあ。

プロローグ／

狐であつた。その生、二度目。つまるところ転生^{てんしやう}。因果の畔か輪廻の湖か、はたまた何かしらの勘繰りか。知らないからどうでも良い事ではあるが、なんだ、別に俺でなくとも良かったんじゃないかと、そう思う。

狐である。二度目の生は、その環境は、お世辞にも良いとは言えなかった。まずネット環境がない。というか日本じゃあない。そもそも地球ですらないっぽい。何が悲しくて現代っ子が山育ちからスタートしなければならぬのか。おかげさまで毎日が充

実しているし、精神衛生も十分に保たれている。脱ネット。悲しいかな、真実。

そして、狐である。新しい名前はラナエ。母がいて、父はいない。死んだそうだ。あっさりとしていた。山育ちは倫理観に恵まれていない事がわかる。妹が二人。弟が一人。どこかへ行った。俺よりも早い段階で親離れた。野性味あふれるのは良い事だが、どうせ、その辺で野垂れ死んでいる事だろう。野生は厳しいのだ。

そう、狐なのである。

……狐なのだ。

正確に言えば、狐の亜人種、とでもいうべき種族。無論母も妹弟も亜人などという言葉は口にしなかつたし、なんなら狐という言葉も使わなかつたから、この世界にはこの世界なりの呼称があるのだと伺える。言語自体が違うのだ、同じである方が気持ち悪い。恐らくだけど、この言語とて田舎の……山の中と少し外にしか通じないソレなのだろう。都会に行けば自分が話していたのが方言だと知ってショックを受けるカツペミたいなものになる事安請け合い。

狐である。そもそも、人間らしい人間がいるのかさえ怪しい所だが、まあ、いるだろ。あれらは、いることに關してはどの生物よりも優れている。

さて、狐といえばの話をしよう。

狐と言えば、狸と双璧を為して幻術に優れるのが通説だろう。化かして化かして化か

して馬鹿にして。何を隠そう俺にもそれが使えるとききた。ニホンギツネかあ？ あるいは中国か。まさかテウメーツソスじやあるまいに。自分の血統書を確認する術がないのは不便なことだ。別に困りやしないが。

元々ヒトガタをしているけれど、フィクションよろしく耳が生えている。流石に四つもありやしない。それを幻術でちよちよいと被せれば、まあ、見た目は人間だ。尻尾はデフォルトで幻術かかっている。種族的にそうらしい。

尻尾は太さや長さで実力が分かってしまうから、基本は隠すもの、だそうだ。分かってしまつて悪い事？ そりゃあ襲われるんだと、外敵に。

さてまあ、之この様に、狐として生を受けて早五年。親元離れずうだうだしている俺の元に、騒動の種が歩み寄るのである。

山が、燃えていた。

んー乱世乱世。もとい炎上炎上。

山火事は瞬く間に俺達の生活スペースにまで入り込み、火に対抗する手段の無い俺達は、湧き水の出る洞窟に身を隠してぶるりぶるりと震えるしかなかった。これあ妹も弟

も死にましたね。野垂れ死んでなくとも、丸焦げだあ。

「ラナエ。一つだけ、教えておく」

「んあ？」

「この災害は自然のものではないよ。前に話したろう、我らの敵によるものだ」

「襲撃ってこと？」

「ああ。悲しいかな、私達は決して彼らに敵対行動を取った事は無いというのに、彼らにとつて、私達は商品らしい。理解は出来るかな」

「敵は、どういう姿をしているの？」

「なんともまあ、予想の範囲内。であれば兄弟は死んでいないかもしれないな。奴隷だ。商品、などという言葉が母の口から出るとは思わなかった。狐の亜人種に金銭の概念があったのか。あるいは、母も昔、ああ父親が死んだつてそういう？」

「めらめらと赤く燃え盛る洞窟の外を見つめながら、母は言う。零す、と言った方が正しいか。」

「耳が、ここにある。丸い耳だ。そして尻尾を持たない」

「ふうん」

「確定。人間様だ。まあ、食と性に関しては我慢をしないのが人間である。獣欲ここに極まれり。獣に言われるとは終わってんなー。」

けれど、終わつてゐる彼らがここに辿り着くのも時間の問題だ。襲撃ということはここに俺達がいるとわかつての放火だろう。逃げ場を失くし、燻すための。つまるところ、なんだ。

「……だ、この洞窟が最後だ！」

山の全体マップくらい、持つていてもおかしくはないって話。

さて、獣といえども母は母、我が子を守るためなら身も張るといふ所か。俺に不可視の幻術をかけて、自らは巨大な化け物に変化して。ああ、けれど、人間の方が何十手も上手だ。武器には毒を、盾には棘を。見る間もなく、見るも無残に弱つていく母に、しかし俺は何もしなかった。残念ながらこの大事な命を張つてまで助ける程の情がない。妹にも弟にも、五年間を連れ添つた母にさえも。

このまま不可視であれば人間たちは去るだろう。それで、まあ、殺した母の亡き骸を素材にでもするか。生け捕つた妹弟たちをキレイにして、売りに出すか。安全を見計らつて俺は逃げる事にしよう。さらば第二の家族。

そして、その時は来る。

大きな音を立てて倒れる母の幻像。それはそのまま動かなくなつた。それだけ。

人間たちも疑問を持ったのだろう。死んだのに変化が解けない。それは彼らの常識においてあり得ない事だ。だから警戒して、だろう。死体撃ちはマナー違反だぞ、と言いたくなる程、ザクザクとその化け物を切り刻み始めた。洞窟が血に汚れ、湧いたそばの水に赤が混じる。黒が混じる。

10分くらいか、人間たちがそれを続けていたのは。

どれほど痛めつけても化け物が化け物のままだと悟つた彼らは、今まさに幻術に掛けられているのだと判断した。クソ、などと悪態をついて洞窟を早足に抜け出していく。どこかに逃げたと踏んだのだろう。

まさか切り刻まれ続けた彼女が未だに生きている、などとは微塵も思わずに。

人間が完全に出て行った後、その化け物は、ようやく本来の姿を取り戻した。本来の姿などと。ああ、そんなことはない。これほど血まみれで、傷だらけな母を本来の姿など。

けれど、化け物ではない。

「……まあ、なんだ」

母は口を動かす。笑っているのか泣いているのか。

なんだ。それほど情があつたか、俺に。俺が愛を向けた事なぞ、ただの一度も無いだろうに。

「すべてを託すよ、ラナエ」

血だらけの指を、とん、と俺の胸において。

力尽きる。どき、と。まあ、有体に言えば——死んだ。死した。死亡した。

瞬間、彼女の身体から、燐光が溢れ出る。白とも金とも取れる色をしたその光は、ふらふらと宙を漂い——大きく、息を吸った俺の口の中に吸い込まれていった。

……重いわあ。というか。

「知ってたのか。俺のコレ。……まあ、仮にも母親か」

左手を見る。それは直後、母の身を何度も刺した槍へと変貌した。

実体を持つ変化。先ほどまでの俺には出来なかつた事。そして、母がその命を散らすために使用した幻術。

左手の人差し指と中指の間を口に当てて、息を吸う。吐く。

何も持つちやいないし、何があるわけでもない。ただの手癖だ。

「さてじゃあ、いつちよ」

復讐でもしますかね。

／プロローグ

1 / ◇

洞窟から出ると、見るも無残な禿山が目の前に広がった。黒く染まった枝。緑の無い地面。空は灰色で空気は焦げ臭い。

「んー。しかし手掛かりが／zero」

先ほどの人間たち、なんか目立つ紋章でも付けてりや良かったんだが、私服も私服。まあんな身元特定してください！みたいな服装で密漁なんかやるわけもなし。鷹狩みたいな趣味のハンティングとして広まっていたんならお手上げだ。その時は悲しいけれど人類全滅だろう。連帯責任ってヤツ。

迷うのは性に合わん。とりあえず洞窟を出て直進。そこで人間か、あるいは別のか、ま、なんらかの文明にぶつかりやあ、ある程度なんとかなるだろう。

というわけで歩き出した。太陽を見て直進、みたいな愚かなことはしない。動くものを目印にするなど何度言ったら。目印はあの洞窟と、俺の足跡。幸い禿山だからな。足跡は付きやすい。何が幸いだ。俺のマイペース生活を奪いやがって。養ってくれるんだらうな。

「そういえば腹が減ったのを忘れていた」

声に出す。流石の俺も死んだ母を食べる程サイコじやあない。ちゃんと埋葬しましたよ、洞窟の最奥に。流石の俺つてどんな俺だよ。

いや、腹が減り申した。余計な自分ツツコミを入れているとエネルギーを消費する。これは早い所人里に降りて食べ物乞おう。あるいは盗もう。

「あら？」

「んあ」

まだ禿山の中——だというのに、俺は、俺とその子は、ばったりと出会った。後ろで彗星でも降っているかもしれない。この見渡しの良い禿山でどうやってばったり会うというんだ。俺だつて一応さっきの密猟者がいないかとか周囲に気を配っていたというのに、この子は突然現れたぞ。虚空から。もしかして幽霊では？ 写真撮るか……。

「貴女、一人？」

「二人に見えるのなら医者を紹介するよ」

「それじゃ、紹介してくれる？」

「残念だけど医者を知り合いいないんだ」

話しかけてきた。こちらの身長に合わせるよう膝を折って、身を屈め。あ、言い忘れてたけど俺 i s T S 狐。まあ狐の性別なんかどっちでもいい。雄なら去勢しないといけないかったかもしれない。

「貴女、名前は？」

「教える義理がないかな」

「私はエメレンシア。貴女は？」

「名乗られたら名乗り返すのが礼儀。ラナエだよ」

「じゃあ、ラナエ」

エメレンシアは指パッチンを一つした。

空間に穴が開く。うわ、ファンタジー。それ指パッチン必要だった？ 実は何もしな

くても開けられる奴じゃない？ 今カッコつけたでしよ絶対。

「お腹、空いてない？ ご馳走するわよ」

「空いてるけどわざわざ檻の中に入る程馬鹿じゃない」

「……あらら」

こんな禿山で、迷子の心配をしてくる奴は怪しいに決まってる。一人かどうかを聞いたのは親がいいないかどうか——もう一匹いないかどうかの確認。まあ、こいつも密猟者ということ、FA。

そもそもこのタイミングで山に来る奴は密猟者が地元に住民くらいだろう。シタツパー、sが残りの二匹を見つけれなかったと聞いて、親玉が出てきた。そんなところか。遠距離での通信技術が発達しているのか、あるいは近場に待機していたか。煙玉で

も上げたかな。なんにせよ、組織だつてることだ。

「悪い様にはならないわよ？　貴女ほど可愛ければ、お金持ちの家で永遠幸せに暮らせるでしょうし」

「魅力的な提案だけど、俺はお金持ち側になりたいね」

「お金持ちは大変よ。日々、刺客に狙われることになる」

「ヒュウ、密猟で稼いでるお金持ちは言う事が違うね」

「出来れば傷つけずに捕獲したいのよ。自分から入ってくれと嬉しいのだけど」

「そりゃあ残念」

右腕を剣にする。

前傾姿勢。

「アンタは既に復讐対象だ——出来れば傷つけて、殺したい所だね」

返事を待たずに突撃する。と見せかけて、横にジャンプ。瞬間後に俺の突っ込もうとした場所に空間の穴が開いた。やっぱり指パッチンやらずに使えるじゃねーか。カッコつけめ。

右手を引いて、引き絞って、思い切り拳を突き出す。同時に形態変化。母の身を突いた槍を模す。それは投擲もかくや、一直線にエメレンシアの元へ伸びる。伸びきる前に、変化を解く。エメレンシアの顔の前に現れた穴に触れないように腕を引き戻して、

跳躍。バックステップ。

「だっるいなあ、ソレ」

「便利と言つてほしいわね。けれど、よくわかつたわね？ 触れただけで引き込める、つて」

「知らんかつたけど、大体そうだろ、そういうのは」

エメンシアは無駄に無意味に空間の穴を多数開け閉めしながら、改めてこちらに向き直つた。全部開けきつてくれりゃあ最大展開数とか測れたんだが、何分閉じているものがあるからわからんちゃん。

これは分が悪いオブザデッド。

さて、優先事項は俺の命だ。最優先事項。次点で復讐。託されたものをずっと持つてたら重いからな。早々に解消しちまいたい。抱えて生きていくなんてまっぴらごめんだ。

それじゃあ、触れなきやいいんだろ戦法に切り替えで行こう。まだ命の危機には瀕しちやいない。

右腕を変える。記憶の中にしかないもの——銃器に。それも架空の銃だ。中の構造は想像でしかない。何分、FPSが好きだったもので。

「……銃？ 山に暮らすイオピクスの子供がなんでそんなものを知っているの？」

「さて、なんでだろうね」

銃、あるのか。怖い怖い。でもさっきの人間たちは持つてなかつたな。普及してるもんじゃないのかね。

今はどうでも良い事か。さて、撃てるかどうかは一八だけど。

狙いを澄ませる。引き金を引く感覚はあるけど、引き金に指が伸びているわけじゃない。右腕全体が銃になつてゐるからな、そりや当たり前つてことで。

ばあん。

瞬間、着弾地点に空間の穴が開く。知つてたさ。それで、俺に向かう空間の穴が開くんだろ？ 使い古された反射だな。

ああけどそれ、銃弾じゃないんだ。

閃光弾でさ。フラッシュバンつてやつ。

「ウツ!？」

タアン！ と。

脳天に直撃ヒット。銃弾はそのまま頭蓋を貫通し、近くの焦げ木へと突き刺さる。

倒れるのは、俺の身体。

「……貴女の敗因は、私の仲間の存在を忘れていたことね。大丈夫、安心なさい。死んでしまつても剥製にして売つてあげるから。無駄にはしないわ」

「そりゃあ、ありがたい話だ」

確実に心臓を貫く。背から胸にかけてを、毒の浸み込んだ槍で。力、と小さな呻きを上げるエメレンシア。何故、と口が動いた。

「おいおい、何言ってるんだ。」

「狐だぜ？ そりゃあ、化かすだろ」

槍を引き抜く。

引き抜いて、大きくバックステップをした。ギリギリ。目の前ギリツギリにまで大口を開けたのは、地に影を落とすように生成された空間の穴。

「……この借りは、必ず返すわ。ラナエ。覚えたから」

「おいおいなんでそれで死んでないんだ……人間じゃねえのか？」

エメレンシアは問いに対しては不敵に笑うだけ。

そのままずぶずぶと空間の穴に飲み込まれていくエメレンシアが、最後の最後、首だけになった状態で、ようやく。

「そうそう、貴女の家族は私達が預かっているから、返してほしかったら」

「いらないよ。好きに使いな。煮るなり焼くなり。覚悟の上だよあいつらも」

「……酷いお姉ちゃんなのね」

消えていった。

遠くの方に確認していたスナイパーの姿も無い。まだ隠れている可能性はあるが……まあ。

「エメレンシアという奴隷商人、でいいのかね。その一派か」
簡単に死んでくれると助かるんだがなあ。

◇ / 1

2. あっさりした出会い

2 / ◇

言うほどの距離は無かったな、というのが感想である。何って、人里まで。

なんならこの五年間、ちよつと遠出したい欲が出ていれば辿り着けただろう場所。まあ遠出したい欲が湧かなかつたからさっきのさっきまで親元にいたわけなんだが。

で、人里。まあ”里”なんて表現をしちやあいるが、そこその規模の……少なくとも村ではない、町くらいの規模はあるだろうそこは、これまたそこその人間で溢れかえっていた。

既に俺は人間モード。狐であるとバレル由も無いが、如何せん子供だ。残念ながら年齢までは弄れなかった。五歳の狐ってそこそこじゃね？とか思わないでもないんだが、事実は事実^に現実童女。悲しいね、時の流れには逆らえないんだ。スピードアップも出来ない^と来た。

町の入り口らしき場所には門番衛兵なんてものは居らず、ただ看板に「ようこそガールイェ」の文字。驚いた、文字が読めるぞ。狐の田舎文字とほとんど同じらしい。そん

なバナナ。あるいは母親が、やはり奴隷の出か。なんにせよありがたいこつて。

「やあ、お嬢さん。一人かな。親御さんは、いるかい？」

「もうすぐ、戻ってくる」

「そうかい？ それじゃあそれまでおじさんとちよつと話さないかい？」

「人攫いと話す事は何も無いかな」

指を鳴らす。無意味な行為。エメレンシアがやつてたやつのパクリ。

でも、それだけで“おじさん”はギャツ！と悲鳴を上げて、顔を掻き塗り始めた。大きく仰け反つて、仰向けに倒れる。安心してほしい、ただの幻術だよ。山には沢山いたんだなあ多足類。とりわけ大きなムカデさん。眼球に貼っつけてやったわ。

しっかし、おいおい、俺が会つた人間今の所密猟者と人攫いだけなんだけど。なにこれ悪性の人間しかいないオチ？ 善性の人間はいないのか世界よ。それとも亜人種を探した方が早いのか？ どうせ同じく被害者だろうし。

流石に人一人が倒れて眼球を擦りまくつてるとなれば騒ぎにもなる。早々に姿を消していた俺を通り過ぎて、町の人間が集まつてきた。人間ばつかだな。なんかギルドとかないもんかね。情報収集といえばギルドだろ。そしてトラブルの種。

ああ、でも、なんだろう。この町、そういう系じゃないというか、街中を歩いている人間に筋骨隆々な奴とか変な髪型をしてる奴とか、こう、“特異なオーラ”みたいな

纏ってる奴がいねーや。真面目に市民の町かね。真面目な市民の町に人攫いがある時点で治安はお察しなんだけど。

「時に」

「んえ？」

「そこな狐。こつちへ来い」

ぶつきらぼうに言う。ダンディな声。持ち主は。

ヒトガタでもなんでもない、四つ足歩行のガチ犬さんだった。

……うわ、声帯どうなってんの？

路地裏に入って、マンホール的なノリのある通路を通って、ダンディ犬が一息を吐いた。ふう、と。人間らしく。

「あまり騒ぎを起こしてくれるな。我らが住み辛くなる」

「知らんが」

「余所者め。平和を乱すなど言っているのだ」

「いやわかっているよそれは。その上で知らんがつつつてんの。というかお前さん、何？

犬？」

「見てわからんかね？」

ダンディ犬は、スク、つと立ち上がる。二足。そして前足で顎をさすり始めた。ヒゲ生えてんのは鼻の下だぞ。

「人間だが」

「ヒトか？」

「そう言っている」

エメレンシアが俺の事をイオピクスと呼んでいたから、人間にも相応の呼称があるのかもしれないと思っていたが、そんなことは無いらしい。分かりやすくいいな。

それで、なんだって？

人間？

「犬だろ」

「心が人間なら体がなんであれ人間だろう。お前は狐か？」

「狐だが？」

「……そうか」

なんで傷付いた顔してんだよ。

ダンディ犬は通路の奥、T字になったそこで立ち止まると、その壁に手を当てた。予

想の範囲内。ずずずつと動く壁の向こうに、それはあった。

「……町。いや、集落かね」

「見えている範囲でいえばそうだろう。だが、この地下街は各地で繋がっている。自由に行き来できるわけではないがな。全面積を数えれば、一つの国にも匹敵するだろう」

「そりゃ、地盤が心配なことって」

「しつかり計算してある。補強も十二分にな」

「ふうん」

先の銃の件もそうだが、上の町並みと言いここといい、そこそこの技術力はあると見るべきか。無論俺の幻術のように何らかの不可思議な力も用いているのだろうけど、それを抜きにしてもちゃんとしているとすべきか、ファンタジー知識の中世観は捨てたほうが良いな。邪魔になる。

ダンディ犬が歩く後ろをついていく。見れば、そこかしこにいるのは亜人種亜人種ガチケモ亜人種。人間もいるっちゃいるが、圧倒的に数が少ない。

「お前は、元人間ってこと？」

「ほう、わかるか。やはり滲み出る人間オーラが」

「エメンシアって密猟者、知ってるか？」

瞬間、空気が凍った。と、思う。空気読み苦手マン。

ダンディ犬だけでなく、周囲にいた幾人かの亜人種もその動きを止めた。なんだなんだ、NGワードか。

「お前も被害者だったか。先に言え、もう少し態度も改めようものを」

「どこにいるか知ってるか？」

「まあ落ち着け。ここににいる者は皆、奴らの手によつて自らの生活を失つた者ばかりだ。必ず力になる。今は温存しろ」

「結構なことだ。勝手に一念発起はやつてくれ。俺は一人で行くからさ」

そこまで重たい感情を持っていない。仲間意識もないし、同類だとも思っていない。

「つか地下に住むという選択肢があり得ん。攻め入れられたら終わるだろ。地下とか。せめて天空にしろ。ラピユレ。」

「ふむ、ならば口を開かないようにしましょう。こちらとしても、計画の前に騒ぎを起こされるのは困る」

「そうかい。それじゃ、ここに用はねえや」
踵を返す。

「ずらりと並ぶは亜人種ケケモケケモ亜人種ケケケモ。」

「残念だが、危険因子を野放しにしておくわけにはいかななくてね」

「ふうん？ 実はお前、人間側のスパイだったりしねえ？」

「残念ながら」

「そうかい。いやまあ、どっちでもいいんだけどさ。ぱっと見だけども、ここにいるのって実はほとんどが元人間だろ？ 所作が人間っぽすぎるんだよ。なんだ、エメンシアはそういう事業を手掛けてんのかい」

「ああ、そうさ。攫った人間を動物と融合させ、知性ある動物を作る悪魔の所業。そういうという事は、お前は違うのか」

「俺は狐だつて。元から狐だよ、人間犬」

いやはや。

腹が減った。腹が減っているのだ。

「腹が減った、つていうのは言ってもいい事か？ 別に料理じゃなくていいんだぜ、とも言っておくか」

「彼らが元人間と知っていて尚、そう言うのかね」

「なんだ、中身も動物なら食ってもいいってか」

「人は人を食わん。獣ではないのだ」

「狐は狐を食うんだなあ、これが。死なば全部肉だよ。人も狐も他も」

「——取り押さえろ！」

地面に手をつく。

これはポーズだ。ただ、俺の手のひらから地面を這う炎が燃え広がる——それだけのための演出。けれど、威迫にはなる。中身が人間なのか獣なのかは知らんが、火は怖いだろうよ。人間でも。

案の定一瞬でも、半歩でも後退った者に対して幻術を仕向ける。内容は単純。隣にいるヤツがエメレンシアに見える、幻覚。

「トラウマ抱えてんだろ？ さつき聞いたよ」

「惑わされるな！　すべて幻術だ！　本物ではない！　目標はここにいる！」

「ああ、けど、お前が見てる俺も幻術なんだわ。本物じゃねーのよ」

揺らめいて、消える。

別に分身の術が使えるわけじゃない。周囲が幻術にどよめきだした一瞬で自分の幻覚を出して、形態変化で周囲に紛れただけだ。このまま逃げれば、あの幻覚は簡単に消えてしまう。

そのためのフラッシュパンである。

動物の目は暗所に慣れるのが速い個体があっても突然の光量に耐えられるようには出来ていない。人間含め、目つぶしは有効だ。

まあ、情は無くても情けくらいはある。平和を脅かして、そいつらを食い散らかしてまで腹を満たしたいとは思わない。上に食事処があるのは見えていたしな。これ以上

邪魔をするのなら考えもあるが、まあ、そうではない事を祈る。腹が減っているのは事実なんだ、我慢も効かなくなるさ。

ダンディ犬に案内された道をそのまま遡っていく。道順を覚えるのは得意だ。別になんか理由があるわけじゃなくて、普通に得意なだけ。

そうして、地上に戻る。

あの仕掛け扉、別にダンディ犬がやらなくても開くんだな。セキュリティよ。侵入し放題じゃねえか。まあ知らなきゃ出来ないってのは確かにそうなんだがよ。

出て——驚いた。

「なんだこれ。……死んでる？」

路地裏に一人、二人。

町中に大勢。人間が倒れている。

脈を取ってみれば、生きてはいる様子。ただ意識がない。ふむ、しかし好都合。

先に見つけておいた食事処に入り、厨房へ。おお、やっぱりキッチンもそれなりにしっかりしてんな。技術水準はそこそこあると見た。冷蔵庫もあるし。

すべて頂こう。勿体ないからな。この町に来ることはもうないだろうから、出来る限りのことはやって行かないと。心残りの無いようにな。

ついでに保存食があると嬉しいんだけど。ジャーキー的な。

……カツパ麺とかは、流石にそこまでは発達してないか……。

さて、一つの町の食料を食い散らかし、雑貨屋で地図をパクって、その地図に描かれたファイスという首都に向かって歩いていく俺である。これまた雑貨屋で拝借した煙管を口にぶかぶかしながら道中を行く。煙草が良かったんだが無かった。なんで銃があつて煙草が無いんだよ。まあ因果関係はほとんどないんだけどさ。

先ほどの町ガリーリと首都ファイスを繋ぐこの道は、そこそこ整備されている。轍がある事から普通は馬車で行くのが察せられるが、足跡もそれなりにあるので旅人も多いのだろう。つーか馬車で。なんで車が無いんだよ。移動手段こそ力を入れろよ技術力の。

それともなんだ、車よりも速い手段でも――。

「……影？」

地面。今、高速で何か――何か大きなものの影が過ぎ去った。

顔を上げれば、遠くの空。

「……ワオ、ドラゴン？ いや、羽根つき蜥蜴か？」

竜ではなく龍の姿をした巨大なソレが、俺の向かうファイスの方へ小さくなっていくのが見えた。なるほど、あれがあれば車は要らない……いやいや、じゃあ馬車はなんだよ。徒歩く馬車くドラゴンはおかしいだろうがよ。

羽のついた蜥蜴。火でも吹けるのか、あるいは毒でも吐くか？ 毒舌ドラゴン。舌はペンより強し。剣では入る余地も無いと来た。

「美味しいのかどうか。だな」

「美味しいよ、龍は」

「へえ」

バス停が如く道のわきに立てられた小屋。その前を通り過ぎる時に呟いた俺も1割くらいは悪いのだろうか、突然顔を出して俺の独り言に口を挟んだこの少女が9割悪い。別に善悪は問うてないだが。

少女。少女だ。

窓から顔を出す少女。

「何してるんだ、そこで」

「閉じ込められてるの。出して欲しいな」

「そりゃ可哀想に。けど、お前さん誰かの所有物だろ？ 首輪がある」

「持ち主は死んだよ。美味しかった」

「そりや怖いな。俺も食われないよう関わらんとくか」

「出してくれなきや食い殺すぞー」

仕方がないので出してあげた。

形態変化でボール作ってこう、グイっと。

出てきてすぐに食い殺されることはなかった。

「名前は？」

「アルジナ！」

「ラナエだ。お礼は？」

「体で！」

「いらんなあ」

どちらも童女故。

「じゃあ、私という奴隷をあげます」

「要らんなあ」

「は？」

「俺いま復讐がマイブームなんだよ。奴隷とか、要らん要らん」

「復讐がマイブーム……？」

首輪を付けたアルジナ。鎖は引き千切られており、相当強い力が働いたのが見て取れ

る。ヒエツ。

「復讐って、誰に？ 誰の仇？」

「エメレンシアってヤツ。一応、親の仇だな」

「エメレンシア！」

「知ってるのか」

「私を奴隸に貶めた張本人だね」

「手広いな、アイツ」

ただ、当の本人は奴隸になったことをそこまで気にしていないらしい。先に奴隸をあげる、などと言ってきた辺りで見取れるか。自身の境遇を嘆いている、という様子はない。楽しんでいっているという風でもないが、まあ、どうでもいいのだろう。

「それじゃ、勝手にいっていい？」

「そりゃ構わない。食うなよ」

「善処するよ！」

厳守してほしい。

俺が狐である事を話すと、アルジナは狼である事を話してきた。

こいつもまた元人間の現狼人間で、好事家を買われて良い様にされていた所、隙を見て食い殺したのだとか。隙を見てというか、お腹が空いたから、というか。満足に餌をくれない飼い主が悪いとは、まあそういうことだ。猛獣系のペットを飼う時の鉄則だろ。空腹にしちやいけないってのはよ。

「お腹が空いたよご主人様」

「飼い主じゃないのでセーフ」

「そのもちもちの腕、食べて良い？」

「噛みついたが最後、顎から下を切り飛ばしてやる」

「むー。ねー、狩りをしてきたいんだけど、ここで待つてくれる？」

「進むに決まってるだろ」

「だよねー」

「自由の身になったんだ、そのままどこかへ行けばいいだろう」

「個人的には恩返しをしたいっていうかー」

「恩返ししたい奴が食って良いか聞くわけないだろ」

「食欲は抑えられないじゃん？」

「恩返し要らねえからどっかに行つて欲しい」

正味、ウザい。

「あ！ いやあじゃあ、お願いがあります！」

「聞いてやる義理がない」

「アレ！ アレ落としてほしい！」

アレ。

そう指をさす方向。

そこに、ドラゴンがいた。先ほどの高速なソレとは違って、ゆつたりと飛んでいる奴。

「ヤだよ。可哀相だろ」

「ええーッ！」

「その辺の草でも食つてろよ。……ああいや、近くに町が一個あるな」

「行こう！」

「一人で行けばいいよ。俺はファイスへ行くからさ」

「行こう！」

「一人で行けばいいよ。俺はファイスへ行くからさ」

「行こう！」

「一人で行けばいいよ。俺はファイスへ行くからさ」

「行こうよお！」

「一人で行けばいいよ。俺はファイスへ行くからさ」

「食い殺すよ？」

「やってみやがれ……と言いたい所だけど、まあ俺も腹が減ったわ。行くかあ、町」
「やったあ！」

流されてんなあ。

いい感じの所で離別したい。こういうノリ、苦手だわ。

◇ / 2

3. あっさりした救出

ガーリイとファイスの中間にある都市、リヴィナス。

日本の都会に成りきれない中途半端に開発した町、という感じの様相で、コンクリートの建物がそこそこにある。相も変わらず人間ばかり。亜人や獣やは基本地下にいるのがデフォって事かね。基本デフォって頭が頭痛で痛いな。

「それで、お金は持ってるの？」

「持ってると思うか」

「全く」

「じゃあ聞くなよ。無銭飲食で行こうぜ、気楽にさ」

獣に金銭なんて求めるなって話。

3 / ◇

腹ごしらえを済ませた辺りで、少し気になる話を小耳にはさんだ。レストランの客が話していた内容だ。なんでも今夜、表では言えないようなオークションがこの都市の

どっかのビルで行われるらしい。んなこと往来で話してんじやねーよ、とか思わないでもない。まあ二重の意味でご馳走様だけど。

「ビルってどれだと思う?」

「高いのが三つ、低いのが二つ」

「悪い奴って基本高い所行くよな」

「自分が悪いって自覚、あるのかな」

アルジナと共に都市の地図を見る。ビルらしいビルはこの五つくらいで、他はほとんど住宅街だ。と言っても二階建ての豆腐はいくらでもあるから、それもビルだと言われたらお手上げ侍。

今夜という時間指定がある以上、決めつけて張り込むしかないわけで。こっちは二人いると言っても通信手段なんかがあるわけじゃあない。況してや子供が二人。色々と面倒もあろう。

「じゃあ、こうしようよ。私のリード、持ってもらって」

「ビルの前うろうろしてりや案内されるか?」

「お金持ちの子供っぽい格好になってよ。出来るでしょ、狐さん」

「腹は?」

「出た方がイイネ!」

さいで。

路地に入って、どろんと一化け。通常の童女とは打って変わって、ぶくりぶくりと太った、にやけ顔の気持ちが悪い少年が一人。もつともこれは形態変化ではなく、見た目だけの幻覚だ。まあ見た目だけで十分だろう。触れる事さえ躊躇うアブラギツシユはそれだけで防御だ。

「うわ……」

「美味そうか？」

「不味そう」

「だろうな。そう作つたし」

引き千切られたままの鎖じやあなんとも格好がつかないので、その辺の雑貨屋でパクつたリード紐をアルジナの首輪につける。俺がリードを引けば、奴隷を自慢するボンクラ息子の完成だ。

化ける事の出来ないアルジナを引いて市街に行く。俺が子供という点に注目は引いているようだが、奴隷を連れて歩いている事には大したリアクションがない事を見るに、奴隷文化は常識として根付いているのが伺える。全部燃やしていいんじゃないか、
(こら)。

一つ目のビルは、低い奴。残念ハズレ。市民の憩いの広場だとさ。そんなところで表

では言えないようなオークションをするはずもねえやな。

二つ目のビルは、高い奴。これもハズレ。見た感じオフィスの詰まった普通のビル。私服通勤いいねえ、楽で。それなりの文化水準と称したが、ここが田舎なだけで首都の方は普通に近代都市かね。ファンタジーとはなんだったのか。誰もファンタジーなんて言つてねえなあ。

「おや、参加者の方ですか？」

「さあ？」

「ええ、はい。時刻は陽が落ちてからとなります」

「そういうことにおいてやる」

三つ目のビルの前ですれ違った優男との会話。アタリだ。現時刻昼にやってるのは、どっかの誰かの個展。別に交わす言葉なんて何でもいいのだ。こっちから発する言葉は否定でも肯定でも関係ない。双方に理解があるのなら、必要な言葉以外はなくて良い。

ビル前を離れ、先ほどの憩いの広場に入る。真昼間だ。子供含め、人間はいない。

「手慣れてるね」

「ビギナーズラックだな。何事も初めての奴が一番上手いもんだ」

「本当にご主人様になってくれたりしない？」

「なつてもいいが、秒で売るぞ」

「それは困るかなー」

ベンチに腰を掛けて、煙管を嘯む。中身が何にも入っていないからな。嘯んでるだけだ。

なんでもない時間を過ごすのにこれほど優れた器具もなからう。いや、あるな。いくらでも。いくらでもある中で手元にあるのがこれだけなら、これが今最も優れているものになるのだろうか。

「元人間、と言ったか」

「うん？」

「エメレンシアの手によつて、人間から狼人間に変えられた、つていうのは、具体的には何をされるんだ。脳でも入れ替えられるのか？」

「具体的な手段は知らなーい。眠らされて起きたら、この身体。縛られて目隠しされて、気付いたら売られてた。周りにもいつぱいいたよ、同じ境遇の人。ラナエは？」

「俺は狐だよ。元から」

どうにも、亜人種というのはこの形式が多いらしい。ここ最近出てきた珍しいモノ、という扱い。知性を持つ獣。獣の特徴を持つ人間。元人間が、人間ベースの姿を取ったか、獣ベースの姿を取ったかの違い。元から亜人種として生まれた者はいないのか、公

言してないだけか。あるいは意志を持つことも発現さえも許されず、飼い殺されているかのどれかだな。

母上殿は珍しいパターンだったのかもしれない。父親が何者かはわからないが、まあ、その辺はどうでもいいか。

「今と昔、どっちがいい？」

「今」

「へえ、なんで？」

「お肉が美味しいから」

そりゃあ結構なことだ。

「俺はまあ、そんなに熱量は無いんだけど、とりあえず復讐ってヤツをやろうと思ってるんだ。エメレンシアにな。母親が殺されて、妹弟たちが捕まってる。別に取り返したいとかは無いんだけどよ、まあ、殺されたんだから、殺し返しておくのが筋だろ？」

「凄い筋だね」

「怒りとか憎しみとか、そういうデツカイもんは背負ってないんだけどさ。まあそんな感じで、そういう目的があるから、俺はエメレンシアを地の果てまで追いかけて殺すけど、それについてくる気はあんの？」

「いや全然。今ちよつと引いちゃった。私は美味しいお肉が食べたいだけなので、おこ

「ぼれが貰えたらそれでいいかなって」

「人間、食うのか」

「もう食べたよ」

なるほど、お肉が美味しいから、ね。

結構結構。

「そいじやま、陽も落ちたし。行きますか」

「パーティだね？」

「気楽に行こうぜ、軽快にさ」

覚悟とか、そういうものはなく。

獣らしく本能で行けばいいさ。

——” 本日の目玉商品は、12歳のフェレスです！”

檻。中に入れられているのは、衣服の一切を剥ぎ取られ、手枷足枷を付けられた猫耳の少女。その目に光は無く、俯いたまま動かない。周囲観客は皆人間。幾人かは俺の様に奴隷を連れている。こいつらはアレが元人間だつてのはわかつてんのかね。わかつ

てようがわかかってなかるうが、こんなところに来る時点で同じか。

ざっと見渡した限りでは山を襲った密猟者はいない。エメレンシアも。無駄足かね。

「助けないの？」

「助ける義理がない」

「お腹空いちやった」

「いいぞ、別に。誰も止めてない」

「手伝つてよ、ご主人様」

「秒で売っていいのか？」

「売られるまでは所有物だよ」

そりゃあそうだ。

んで、所有物の手綱を握るのが持ち主つてもんかね。餌やりくらいはしてやろう。

パチン、と指を鳴らす。エメレンシアのアレ、結構気に入ってるんだな、これが。

競り上げの声によって全体には届かなかつただろうそれは、しかし周囲の数人の目を引くことには成功した。十分だ。

その人間の顔に、炎を投げつける。無論幻覚。多少の痛みはあるけどな。幻痛つてやっただ。

ギヤツという短い悲鳴と共にソイツが倒れりや、ソイツの周囲の人間が異常に気付

く。あとは連鎖だ。こつちを見た奴を片っ端に幻覚に嵌めていけば、大混乱の出来上がり。

それを後目に、アルジナがその大口で以て参加客に噛みついて見ているのが見て取れた。

混乱は、けれど大した痛みではない……本当に燃えているわけではない、というのが段々とバレ始める。強くひつかかれ続けている程度の痛みだ。我慢の仕様もあろう。

そうなれば、次に考えるのは異常の発生原因。つまりは最後に見た俺へと辿り着く。太ったお坊ちゃん。は、もういない。狐耳の童女もいない。

いるのは、血の滴る口を隠そうともしない大狼だけだ。

さて、これも幻だと高を括る。先ほどのものがそうであつたのだから、幻であるはずだと確信し——とびかかってくるそれを、腕で払わんとするのだ。

まさか噛み千切られて上肢を失くすなどとは露ほども考えちゃいないのだろうか。失った後数秒さえも、何が起きたのかわからずに笑みを浮かべていたくらいなのだから。

その笑みが悲痛な呻きに変わった瞬間、本当の大混乱が訪れる。

俺がやったのは単純、アルジナにその体を大きく魅せる幻覚を纏わせただけ。かくして始まるは血の宴。巨体は刃も拳も通り抜け、けれどその大口の噛みつきだけは、傷を、欠損を伴って結果を齎す。出口に殺到する参加客も立ち向かうSPも無差別に襲い立

てるその様子、まさに化け物かね。

「よいしょ、と」

そんな阿鼻叫喚をバツクに、壇上へ上がる。司会者は姿を消していて、今ここにいるのは檻の中の少女だけ。

「よお、お前も元人間か」

「……」

「助ける義理は無いんだがよ、義理を生んでくれりゃ、助けてやらんことも無い。お前は俺に何をくれる？」

口が利けるかどうかは知らん。話せなかつたらそれまでだ。

一瞬、無言。静寂。もとい後ろでは阿鼻叫喚が流れているのだが、BGMとして流してくれりゃあいい。

猫娘が口を開く。

「……私にはもう、何も残されていませんわ」

「じゃあ、無理か」

「ええ。地位も、友人も。すべて奪われてしまいましたから」

「元貴族サマかい」

「王族様、でしたわ。ふふ、信じられないでしょうけど」

「十分だ。ちいと屈んでな」

檻に触れる。なんだ、ただの鉄か。

形態変化はグラインダーだ。プラズマカッターは出来るかどうかかわからんのが怖いのと、何より中身を傷つけかねん。何にでもなれるっつーのは便利だな。つくづく。知識がリアリティと硬度を決めるようだが、なんだ、現代っ子だ。知識と無造作に増やされた経験だけが過剰にあるのが現代っ子ってえものだ。

知ってりや、使える。銃だつて撃てるんだ。

鉄を斬るくらい、なんてこたあねえやな。

「目え瞑つときなよ、お姫さん」

眩しいし、多少熱いぜ、必要経費だろう？

檻なんてものは格子の一本でも切断すれば無理矢理出られるもんだ。猫のお姫さんを救出し、腹がいつぱいになったらしいアルジナに一応声を掛けて、ビルを出る。エメレンシアはいなかったが、まあ、密漁に関わる人間は全員復讐対象ってことで。

「それで、血まみれの狼さんや。お前は俺の奴隷って事でいいわけ？」

「契約してないしなー」

「だろうと思ったよ。ま、俺としてもそれなりの収穫はあったし、いいさ」

「さつきなんか吸ってたよね。何、あれ」

「俺にとつての食事みたいなもんだ。気にしなくてもいい」

煙管を啜えて、一服。中身はまあ、美味しいもんだ。

「そいじゃあ姫さん。アンタ、どこの王族なワケ？ 道案内出来る？」

「はい。出来ますわ」

「そりゃあ重畳。その国へ行くこうか」

「フアイスは良いの？」

「まだ良いってだけで、その内行くさ。いつまでも復讐を抱えてる程物好きじゃあないんでね」

ただ、今じゃないってだけ。

だって、王族だぜ？ 如何様にも使えるだろ。人質にも、権力にもな。

「お姫さん、名前は？」

「メリンダと」

「国名は？」

「ミグエルと」

「いいね、素直だ。俺はラナエ。これからよろしく頼むわ」

「ご主人様ですから、素直にもなりますわ」

「買った覚えはないけど？」

「檻から出してくれましたもの」

「雛鳥かよ」

「やっぱ私も契約したい！ ご主人様になってー！ 養つてー」

養う金もありやあせんからなあ。

「それじゃあ、ミグエルへ行こうか。急がずに、適当にな」

「おー」

まあ、気負わずにね。

イオピクスの少女が各地で事件を起こしている、という噂は、現在療養真つ最中なエメレンシアの耳にも届いていた。心臓に大きく空いた穴は未だ閉じていない。痛みを発するそれを服の上から抑えながら、エメレンシアは溜息を吐いた。

「貴女達のお姉さん、やりたい放題ねえ」

部屋を分けて、格子の向こう。

不機嫌な顔を隠そうともしない狐耳の少女が二人。

彼女らもまたイオピクス。けれど、自らが行った“獣種化”と違い——初めから、イオピクスとして生まれてきた稀有な事例。他種族では子を成せない現状の研究結果を越えて、イオピクスと人の間に生まれた研究材料。

「このまま人間を全部殺し尽くしてしまったりして」

「人間なんか、全部死んじゃってもいい」

「イオピクスにとってはそうでしょうけど、人間は困るのよ、人間が全滅したら」

「……本当に、ラナエがやってる？」

「恐らくね。とある町で行われたオークションで、参加者の半数以上をかみ殺したそうよ。一部の商品も奪って逃走中。強力な幻術と巨大化を用いる災厄認定で、軍が動くみたい」

報告書をぺらぺらとやりながら、エメレンシアは考える。

正直、あの検体は欲しい。幻術と形態変化。どちらか片方だけでもレアなのに、両方を持った天然のイオピクスなどこの先現れるかどうか。売値もさることながら、エメレンシアの目的たる研究のために必ず必要になるだろうその素体。

軍に手渡したところで中から引っ張っても来れるだろうが、傷がつくだろう。出来得

る事なら傷つけずに確保したい所。

「見捨てても問題ないはずの奴隷を救出する程度の情はあるってことよね。つくとしたら、その辺りか」

二人の少女を見る。

売りに出した少年を思い返す。

「ねえ、お姉さんに会いたい？」

「全然」

「全く」

「嫌われているのねえ」

ぺらりと、エメレンシアは報告書を一枚捲つて、笑みを浮かべた。

◇ / 3

4. あつさりした取引

4 / ◇

狐であれば、人の姿を取る事も、狐の姿を取る事も出来る。これは変化先の固定された形態変化とでも言うべきもので、ベースは狐であるというのがミソ。つまり、人であるより狐でいたほうが楽なのだ。どっちも自分であることに変わりはないのだが。

よつて、道中。メリンダの肩の上に乗つて楽をしよう、と思うのに、そう時間はかからなかった。メリンダも特に疲労を覚えていないようにヨシ。懸念があるとすればたまたま美味しそうなものを見る目でこちらを見るアルジナくらいだが、まあ、いざとなれば鉄にでも変わろうさ。

ミグエルまでの道のりはそれなりにあるそうなのだが、亜人種の体力が人間の頃よりも多いせいか、あまり疲労は覚えないのでそうな。確かに俺もこの世に生を受けてから、腹が減つたと感じる事はあれど、疲れたと感じた事は無いように思う。俺は人間から成つた亜人種ではないのだけど、獣というものそのものが、地球産とは比べ物にならない程の持久力を有しているのやもしれない。

そうなつてくると人間と獣を融合させる、つてえのはそこまで悪いことじゃあないんじゃないかと思えてくる。無論奴隷として、商品として売り出すのは単純な金儲けだろうが、そうやって有象無象を売った資金でなんか別の事をやろうとしている、というように思えるのだ。

「メリンダは、エメレンシアについて何か知識があるか」

「5年程前から各国の王族や政治家たちと取引を始めた有名な奴隷商人、と」

「そんな新規事業なのか。ふうん」

「それと、どこからともなく現れる……ゲートのようなものを扱うと」

ゲートのような、ね。ゲートっていう常識的なものが存在していて、それを扱うことまで知られてるのか。この世界の魔法だのスキルだのの文化、もう少し詳しく知りたい所だな。

んで、5年前。おいおい俺が生まれた年だぜ、びっくりだな。俺が長女だから、多少の前後をするにせよ、母上殿が何かしらから逃げたか、成ったか、つてえ推論で大体想像がつく。ははーん、つて感じだわ。

「ミグエルの王族たちは、メリンダの事を探してんのかね」

「……そうであつてほしい、ですわ」

「案外売り飛ばしたのが家族だつたりしてー」

「……」

まあ王族相手に取引してて、王族の娘誘拐するなんてリスクを自分から背負うわけはねえよなあ、とは思う。筋を見るなら、王族側からの取引材料として売り渡されたのがメリンダ、と考えるのが普通だ。んー、そうなると人質ってえよりは、弱みとしての方がでかいかね。不祥事だろうよ、娘を売り飛ばすなんざ。

……いやまあ、母上殿のように、よくわからん愛情とやらで一心に探している可能性も無きにしも非ずだ。決めつけは早いな。

「そーいや、お前はどうかなんだ、アルジナ」

「家族は多分死んでるんじゃないかなあ。私つてば戦争孤児なのです」

「ふうん、そりやあ大変だな」

「もう体も違うから、生きてても関係ないけどね」

「そいつあ重畳」

「顔も覚えてないから良いのだー」

あーいは。

人間側の身体がどうなっているかわからない以上、もしかしたら、も考えておくべきか。

「この山を越えると、谷があります。そこにデイルという村が架かっていますから、そ

「ここで食事をとりましょう」

「架かっている?」

「ええ。崖と崖の間に、橋のようにして」

「騒ぎを起こせば真つ逆さまかね」

「起こすつもりなんですの?」

「無銭飲食はするつもりだあなあ」

つまり、バレずにやれって事。

「私の口座が潰されていけないのであれば、そこからお金を引き出す事も可能ですわよ?」
……口座で。

久しぶりにまともな食事をとった、といえば良いか。

デイルに入つてすぐ、銀行に行った。橋の村とかいうから全部が木造なのかと思つていたけど、普通に石造り。ところどころに金属や木材があつて、装飾もばっちり。機能美だけの村ではなく、普通に、人の過ごしている場所だった。

んで銀行よ。ATMとまでは行かずとも、よくわからん大きな機械が置いてあつて、

メリンダがそこから、なんでもない当たり前のような様子にお金を引き出してきたもんだから、俺はもうファンタジーとはなんなんだと言いたくなつたね。

つーか誘拐されている、最悪死んでいる扱いだろうお姫さんが存在証明しちまつていいのかどうか。後なんで王族に口座があるんだよ、とか。いやあるか。地球でも王族が口座持つてるなんざ普通だったし。いやはや、日本人に王族なんてえのは馴染み浅いんだあが。

それで、そのお金を元に、レストランへ。

童女3人。まあメリンダは12歳と俺達より年上であるのだがアルジナは8、9歳らしい、

少女であることには変わらない。俺の幻術で耳やら尻尾やらを隠しているとはいえ、そんな子供が三人で、しかも余所者がレストランへ、つてえのはまあ、怪しまれる。怪しい事この上ない。

はずなんだが、一瞬戸惑いを見せたレストランの従業員も、直後には普通の対応になつていた。プロ意識か、あるいは。

「指名手配つてのは、どのくらい広まるもんかね」

「端末持つてるなら一瞬じゃないかなー。高いけど、こういうお店には一個くらいありそう」

「不味い、という事ですか?」

「料理は美味いけどなあ」

スプーンのような形状の食器類で食べる、パスタらしいもの。食べたことの無い味だが美味い。美味けりや何でもいい。

「料理に毒を仕込むような行為をしてこなかったのは得点高いな」

「でも、どうしますの?」

「仕掛けてこない限りはスルーで。密猟者やオークションの参加者と違って、このレストランは普通っぽいし」

「私もお腹いっぱい満足なのです」

「そいじゃ、お会計と行こうか。」

「何もしないで欲しいわな。二度目のご馳走様は流石に、胃がもたれる。」

「その願い儘く、である。」

「ルプスのアルジナ。イオピクスのラナエ。フェレスのメリンダ。貴様らで間違いないな」

「なるほろ、通報ね。賢い手段だ。可哀相に」

「お腹いっぱいだから、嘔み殺すだけでいいかな」

「無益な殺生だな。降りかかる火の粉なら、仕方ない」

会計を済ませ、レストランを出た瞬間に包囲された。あの密猟者と違って、同じ紋章を付けた防刃ベストっぽいものを着込んだ数十人の人間。手には剣や槍のほかに、銃持ちが幾人か。弓もいるのか。どういうこつちやねん。

「我らとて幼き少女を傷つける事はしたくない。無抵抗で投降してほしい」

「そのまま奴隷になれってか。流石は人間サマだ、密猟者と軍人が同列たあ驚いた」

「何を勘違いしているのかはわからないが、奴隷にはならん。法の下、裁かれるだけだ」
「俺達が捕らえられた後、何らかの取引の末、エメレンシアに引き渡される未来しか見えないな」

ゆっくり屈んで、地面に手をつく。

どうせ俺が幻術を使うってのは知られているんだろう。ならまあ、知られたところで対処できないもんを使った方が効果的だ。防げるもんはもう、威嚇にもならん。

「アルジナ、メリンダと一緒に先に行つてな。邪魔してくる奴は軍人でも市民でも殺していいぜ」

「りよーかいー」

地についた手を——強く、ぺた、と押し付ける。

瞬間、石造の橋に罅が広がった。

「焦るな！ 幻術だ！」

一瞬どよめく兵士たちを立て直す言葉。

しかし悲しいかな、響く地鳴りが——足元を揺らす轟きが、幻術なんかではないことを知らせてくれる。

手を出されなければ何もしないと言っただろう。

通報されたらそりゃあ、仕返しに全壊くらいはするさ。

パイルバンカーってえ奴だ。架空の兵器だがね、架空の銃が撃てるんなら、こっちだつて出来る。

ははは、知ってるつてのは素晴らしいな！ 考え付くまでじゃなく、結果まで知ってるからこそ形態変化もしやすいってもんだ。曖昧にしか知らないものになろうとする
と肉が弾けるつてえのは最近知った事だがね。

「く——市民の避難を急げ！」

「間に合わせるかよ。連帯責任だぜ、人間サマよ」

だつてこれ、復讐なんだぜ？

何の関係もない飛んでいるだけのドラゴンは見逃そうが、通報してきた市民は巻き添

えに決まってるだろ。止めなかっただけで同罪さあな。

橋が、村が、落ちる――。

「いやはや、驚いたぜ軍人君。咄嗟に抱き留めてくるとは俺も予想外予想外。馬鹿だな、こちとら獣だぜ？　この程度で怪我はしないっつの」

「……それでも、裁かれるべき命を目の前で死なせるのは、私の矜持に関わる」

崩落に合わせていい感じに逃げようとしたら、軍人君が俺を抱きしめてくれちゃって、そのまま谷底に落ちる結果となった。元からする予定の無かった怪我をしなかったのは軍人君のおかげだ。おかげさまで、登る労力を消費するハメになった。どうしてくれるんだ。

そんな軍人君は満身創痍だ。いやまあ周囲の軍人市民が死屍累々なところで満身創痍で済んでいるのは凄い事だと思う。それも子供一人を抱え守りつつ、だ。鑑だね、そりゃあ。

「……なあ、よ」

「なんだ」

なるほど、と。

まあ、今までが酷すぎたつてのはあるんだろう。密猟者と人攫い、奴隷のオークションの参加者。有象無象の市民はともかくとして、どうも、人間がイコールで悪性と結ばれるような奴らに出会い過ぎた。

コイツは善性だな。それは確信した。

「助けてやるよ。命。だから、義理をくれ。お前は俺に何をくれる？」

「……裁き、を」

「そりやお前がくれるもんじゃあねえだろ。お前がくれるもんを言えよ」

幻術を使う。

幻術とは何も、視覚を狂わせるためだけのものではない。幻覚——触覚や痛覚まで、惑わせられる。治療をする前の麻酔として、軍人君の怪我から痛みを取り除いた。

「これは」

「なあ、くれるもん、なんか持つてるだろう。ここで命を繋いで、全快してから俺を捕まえにくりやあいい。今ここで、俺に助けられるための対価を寄越せ」

軍人君は。

今までの硬い顔を崩して、少しだけ笑う。

「残念だが、私は私物を持ち歩かない主義でな。……貴様にやるものなど、何も無い。そ

も、命の対価になるようなものなど……私には」

「飴玉の一つもねえつてのか。家族の写真とか、そういうの、持ってるだろ」

「そこまでして私を助けたい理由はなんだ。お前は、私に何を求めている」

「馬鹿だな。さつきから言ってるだろ。義理を寄越せつてんだ。求めてるもんはそれだけだよ」

少なくとも、という話だ。

俺は、俺の命を優先してくれる存在を無下にはしない。俺の命を優先し、守ってくれた母上殿から託されたものも、今目の前で死なんとしている軍人殿の命も、俺の命の次に大事なものと言えるだろう。

ただ無償では動かないというだけの話。だから、義理を寄越せと言う。助ける理由をくれりゃあ、俺は動こう。それだけの損得勘定だ。

「……父上に、頂いた——公務用のペンがある。ある意味で、唯一の私物だ」

「じゃあそれでいい。それを貰うから——ちいと、寝てろ。治してやる」
隠していた尻尾の幻術を解く。

ズルリ、と。

それは空間の端から、まるで岩肌からその身を出す靱のように、長く、太く——踊るような尾が姿を現した。

ソレで、軍人君を包み込む。

「名前を聞いておこうか、軍人君」

「……コールだ」

「俺はラナエだ。よろしくな」

尾から燐光が染み出す。

それは浸るようにして包まれたコールに沁み込んでいく。耐えられないと言った様子で意識を落とすコールの身体は、満身創痍の状態から見る間もなく健康なソレへと戻っていく。

「本望だろうよ。尊き市民の命で、軍人の命が繋がったんだ。素晴らしい事さ」

煙管を取り出して、一服。

谷底に落ちて死んだ彼らから燐光を吸い出して、ふうと息を吐いた。

また少し、尾が伸びる。

せいじやま、またな、つてことで。

鳥になって崖を上がれば、谷を覗き込んでいたアルジナとメリンダと合流する事も早

かった。しかし鳥というのは疲れるね。やっぱり狐が一番。

もらった羽ペンにはメリンダに持ってもらっている。狐の身体にや大きいんだわ。

「これからは後先考えて行動する事、ですわ」

「いや、落ちる予定はなかったんだって」

「私達も巻き込まれかけましたのよ？」

「狼と猫なら大丈夫かと思うだろ」

「大丈夫だったからいいじゃん別にー」

メリンダの肩の上で、メリンダに怒られる。腑に落ちん。俺が谷に落ちたのは俺のせいじゃないんだがなあ。

「それより、私はそろそろ水浴びがしたいですわ」

「その辺の川ですればいいだろ」

「……そういえば、少し道は逸れますが、近くに温泉街がありましたわね」

「少してどのくらい少し？」

「地図で手のひらいっぱいくらいの距離ですわ」

「結構じゃねーか」

拡張の問題もあろうが、感覚的にこの地図は1cmが1kmくらいのヤツだ。つまり、結構なこと。

「アルジナの腹持ちにもよるが」

「今はいっばいだから大丈夫！」

「そうけ」

……いや、なんで俺の行動基準がアルジナの空腹具合になってるんだ。

ああまた流されてる。あんま好きじゃねえんだがなあ流されるの。メリンダも従順素直かと思えが、そこそこに我が強いようで。

いいか、まあ。

旅は道連れ世は情けらしいからな。情けはさつきかけたから、そう言う事にしておこう。

「もちろん最終決定はご主人様にありますのよ」

「いいよ、それで。俺も風呂つてえのは入ってみたい。入ったことないからな」

形態変化でどうにでもなるからな、汚れなんて。

「決まりですわね。ああ、そうそう。温泉街は、アドリアンといえますのよ」

目的地をミグエルから、アドリアンに変えて。

一行は進む。

5. あつさりした救いの手

さて、狐率いる復讐者一行。遠路はるばるアドリアンへと向かう道中で、その行く先、温泉街の上の方に黒い煙が上がっているのを発見する事になる。

有り体に言えば、火の手が上がっていた。

「行くの、やめるか」

「温泉は火事では消えませんかよ？」

「街が燃えてる中で湯船に浸かる気かよ、豪勢だな」

だがまあ、引き返すのも面白くはない。しかしまあ、火事に縁のある一生なことで。

狐火つてああそういうこと？

「罪を擦り付けられる未来が見えるな」

「問題ありますの？」

「復讐対象が増えるくらいか。大した事じゃあないな」

じゃあ、行こうか。

飛んで火中に夏の栗かねえ。

残念ながら、という言葉がもつともしつくりくるだろう。

温泉街とはいえ、規模的には村、あるいは集落程の広さしかないのが不幸だった。短時間なのか長時間燃えていたのかは定かではないが、いやはや、全焼も全焼である。今だ火の手は収まらないようで、駆けまわる人間たちが遠くに見える。当然、ようこそと書かれたアーチの下に佇む俺達に気を掛ける奴あいない。

木造建築が多かったのか、倒壊した建物がちらりほらり。ぱつと見温泉が見えない辺り、この残骸瓦礫の下敷きになってんじゃねえかなあとは俺の推理さん。

「……子供が、いませんわね」

「ん？ ……ああ、確かに。避難したんじゃね？」

「避難する場所など、どこにありますの？」

「そりやお前」

ふむ。

「無いな。これは、まあ、そう言う事か？」

「人が焼けた匂いはしないから、焼死した人はいないみたいねー」

「それもおかしい話だな。いるだろ、一人くらい。けが人さえもないってか？」

「最初から誰もいなかったところを燃やした、とか」

「ふうん？　なら」

メリンダの肩から降りて、どろんどろんとヒトガタになる。

そのまま指を指すのは、先ほど駆けていった人間の大人達。

「アレ、誰だと思う？」

「食べてもいい人？」

気が早いって。

「ようこそ、とは……言えない状況だ。遠い所から来たのだろう、けれど、申し訳ないね。宿の一つも残っていない。湯も、とても客人を入れるには……」

「何があったのかだけ聞いていいのですの？」

「……盗賊団の襲撃だよ。奪うだけ奪って、最後には火をつけて。この街にはもう、何も残っていない」

「奪われたのは、子供も？」

「ああ、気付くか。そうだろうね。そう……女子供、金銭、食料。これでは立て直しも利

かない。もう……どうしようもないんだ」

そう言つて塞ぎ込むハゲの爺さんに、内心一息を吐く。ほら、善人もいるじゃねえか。こういう奴を無念のまま殺させるのは余りに寝ざめが悪い。ただまあ、爺さんには悪いんだが。

「内通者、いるだろ。盗賊団を引き込んだ奴」

「手際が良過ぎ、ですわね。盗賊団というより軍隊のようですわ」

「戦争屋の補給みたい」

ただまあ、それだと子供まで連れて行つた意味がわからんな。邪魔にしかならんだろうに。エメレンシアの様に奴隸として売るため？ いやいや、そういうのはもう少しこつそりやるもんだろ。大々的すぎる。……そういやガリーイの人間たちが倒れてたの、結局なんだったんだろうな。もしや、こうやって大々的にやるのが通常なのか？ そうだとしたらコール君含む軍とやらの能力欠如が激しすぎる。機能してないじゃんか。

「なあ爺さん。今日一日、泊まれる場所はねえかな。そんなにちゃんとした所じゃなくていいよ、屋根がありやあい」

「あるにはあるが……先も言つた通り、客を泊めるような場所では」

「いいのさ、質は問うてないよ。泊めてくれたつて義理さえありやあ、なんとかして俺達

が奪われたモンを取り返してきてやるよ。な、良いだろ」

「……いや、君たちのような子供にそんなことを頼むわけにはいかないよ。僕からは、何も上げられない。君たちは、何も見なかつた事にして、ここを立ち去るんだ。ああ、でも道中には気を付けて。盗賊団がいるかもしれない」

おいおい、立て直しが利かなくて絶望してたんじゃないのかよ。他人の事なんか気遣うんじゃあねえ。馬鹿だな、自分の手持ちに何もねえんなら、適度に頼れよ。

嫌だね、これだから善性の奴は。どうにかして助けたくなる。俺の事を、俺達の命を気遣ったな？ もうダメだぜ、逃げられねえ。その時点でもう、俺は爺さんに親身になつてやれる。

「じゃあよ、これならどうだ。コールつて軍人から貰つたんだ。証明にならねえか、少なくとも軍人との繋がりのある子供だぜ」

「関係ないよ。君たちにどれほどの繋がりがあるかと、君たちが子供である事には変わりがない」

「んー、そうだな。じゃあよ、とりあえず腹が減つてんだ。別にアンタが作つてくれなくてもいい、このあたりで採れる果実とかあれば、教えて欲しい。ほれ、腹が減つてる幼子は見過ごせねえだろ」

「……」

「だんまりだとほら、俺達が餓死するぜ。見殺すのか、子供を」

爺さんは、悔しそうな顔をした。良い奴だな。そのままいてくれ。

「……そこまで言うなら……ああ、今から、出来得る限りの食料を集めてくるよ。夜までに温泉の掃除も行おう。君たちのために、尽くす」

だから。

その目で、縋る。

「最高だな、爺さん。それでいいんだぜ。ありがとう、対価は必ず支払うよ。連帯責任だ。内通者がどれほどいるのかは知らんが、少なくともそうでない奴らは、女子供含めて街の住民は、みんな助けてやる」

「ラナエ、お礼とか言えたんだけ」

「貴女のは、復讐というよりは仕返し、なんですのね」

「お返しだよ、少なくとも今はな」

煙管を取り出して、嘯む。それでいいんだ。良い奴は、善き者は、そうやって人を頼ればいい。頼るために尽くすのなら、そいつは力なき者から力ある者になる。もう嘆かないでいい。そのために動く奴がいる。

焼かれた山、殺された母親。されたから返すんだ。復讐と、託されたもの。通報されたら全壊させるし、助けられたら助けてやる。簡単な方程式だ。

「じゃあ夕飯が出来上がるまで、ちよつとこの街を見て回らせてもらおうよ。調査も兼ねて、ね」

「ああ。けれど、倒れていない建物には気を付けるんだよ。いつ崩れるかわからない」
「あいあい」

手伝つてやる、という事は無い。それは対価に混じつてはいけなないものだ。彼が決めた事ならば、そこに横槍は入れない。それをすると、爺さんを盗賊団の元に向かわせなきゃならなくなる。老体に無理をさせるわけにやあいかんだろ。

さて、犯人捜し。やりましようかね。

「火元はここ、ですわね。街の外壁にほど近い場所ですが、周囲に温泉が無い……最も湿気ていない場所、と言えますの」

「アルジナ、なんか匂いするか？」

「んー。温泉の匂いと焼けた木の匂いで何にもわからないな」

「俺もだ」

狐と狼は、猫よりは多少、鼻が利く。その上でわかんねえだから、匂いじゃあ無理っ

て事だ。とはいえ鑑識なんてもんが出来るはずもない。俺に出来るのは形態変化と幻術と、少々の食事くらい。十分だな。

通りに出る。座り込んだ大人達数名。さて、ここで幻を一つ。

俺の姿に写し照らすはメリンダよりもさらに一、二歳年上の少女——エメレンシアの姿。

唐突に表れた彼女の姿に、俺達の方をチラチラ気にしていた男衆の内の一人が、青い顔をして固まった。いやあ便利だなコイツ。コイツの知り合いの選別にもつとも有用だ。

「アルジナ、取り押さえてくれ」

「あいさー！」

エメレンシアの姿を消し、ターゲットロックオンと言う風に睨みつけてやれば、そいつは一目散に逃げだした。何が起きているのかわかっていない男衆の視線の間を抜けて、童女2人と少女1人が疾走する。はは、人間が獣の走力に敵うかよ。

捕り物劇はすぐに終わった。アルジナが一瞬で追いついたというのもあるが、それよりも早く事態を察したらしい一人の男が、そいつの逃げ道を塞いだのである。

クソ、とか離せ、とか、悪態を吐く男に四肢を損失させた幻覚を見せる。悲痛な叫び声と共にのたうち回ろうとするその体を、逃げ道を塞いだ男が強くつかんで離さない。

そう騒ぎになれば人も集まってくると言うもので、鎮火に駆けまわっていた大人たちが皆、寄ってきた。

幻覚を消してやれば、しばらく暴れまわっていた男も次第に落ち着きを見せ——自らを取り囲む状況を見て、ようやく、意気消沈した、というように大人しくなったのである。

「お前か……お前か！」

大人しくなったのは逃げた男であつて、全てを察したらしい逃げ道を塞いだ男の怒気は収まらない。この感じは、家族が連れ去られたかね。いや、ここにいる奴らはほとんどがそうか。女子供。妻と子供か。いやはや。

怒りに燃える男の態度に、周囲に集まってきた人間たちも段々と理解をしたらしい。見る間もなくその表情を怒りに変えていき、それが暴力に変わるまで、そう時間はかからなかった。

人間たちの輪の中から抜け出したアルジナと、はじめから走りもしなかったメリンダと共に、その輪を眺める。善性か否かはまあ、わからん。俺に関与するものではないから。復讐は必要だろう、抵抗無抵抗なんか関係あるものか。だから、止めはしない。恨みがあれば、死ぬまで殴れるだろう。感情つてえのはそれくらいの強さを持つている。

「でも、どうしますの？ 盗賊団の罠が分かりませんわ、これでは」

「初めから知らないんだろ。だからここに留まつてる。唆されただけさ。仲間に入れてもらったわけじゃあない。こんなすつからかんの街、再度襲撃する必要なんて無いからな、確実に尻尾切りさ」

「死んだら食べて良いのかな？」

「おいおい、爺さんが美味い夕飯を用意してくれてんだ。今は腹を空かせておけよ」

別にいいんだよ、どこがアジトかなんて、すぐにわかるんだから。目的は内通者の炙り出しだけなんだ。

鬱憤くらい晴らさせてやれ。可哀相だろ、憎悪を抱えたままなんてさ。

鳥になって、空へ上がる。襲撃に成功したんだ、宴の一つでも開くだろうという予想は、的中だった。多少の距離がある森の中……いや、洞窟の前か。そこに、焚火の光が見える。あれだけじゃあないだろうが、あの奥に罠だのアジトだのがあるんだろう。

地上に戻って、人型に変化する。白い湯けむりが一瞬吹き飛ぶが、すぐにまた立ち込めた。

「う……猫の身になってから、初めて温泉に浸かりますけど……ん、ん……。どうも、この、毛に染みこんでくるお湯の感じが、こそばゆいですわ……」

「同感ー。尻尾があゝ」

爺さんと、その息子という人間の掃除した温泉に浸かっている。俺も狐として水浴びをするのは初めてだが、二人と違って十二分に心地が良い。確かに尻尾や耳が重くなるし、水分を含んだ毛が違和感を帯びるのはわかるのだが、やはり根が日本人。湯に対する親和性は抜群だ。

今現在、幻術も解いているので、尻尾も完全に露出している。メリンダとアルジナはそもそも隠していないんだが俺が幻術をかけて隠す事はあるが、こうして改めてみると……うん。

「長いですわねえ、ラナエの尻尾」

「蛇みたいー」

「母親も妹弟たちもこんなには長くなかったなあ、まったく、重いんだが」

普段隠してあるといっても、別にしまつてあるわけじゃあない。見えなくしてあるだけだ。体に巻き付けたり、普通に引き摺つたり。だから、伸びりや伸びる程重くなる。水を吸っていない時はそこまでの重さじゃあないから良いんだが、今現在、鉛でも付けてんじやねえかつてくらい重い。こりや雨の日は要注意だな。

幼子そのものの身体に尻尾を巻き付けて、その先つぽをゆっくり撫でる。まあ、この毛並みは気に入っている。狐として長い尻尾は悪くない。狐的感性でフアビュラスだ。どれほど伸びるのかはわからんが、身体を尻尾で完全に覆えるくらいになったら面白いと思う。

「そういうえばラナエ、貴女は幾つですの？ 幼い見た目とはいえ、それほどの尻尾。強力な幻術といい、さぞや老齡な狐とばかり思っておりますが」

「五歳だよ。まだ」

「嘘だー」

尻尾は年齢や実力がわかるから隠している、と言っていたのは母上殿だったか。でも幻術を使える奴ばかりじゃないってのはこうして世に出てわかった事。あの地下集落の奴らも隠していない奴がほとんどだったし、そもそも狐以外はそんな伸びやせんだろ、尻尾。

普通の狐もこんなには伸びませんがね？

「まあ、五歳でも五十歳でも五百歳でもいいのさ。ラナエ、ラナエ。貰った名前さえありやあ、年齢なんざどうでもいいわな」

「……私がメリンダと……お父様たちの前で名乗って、そう、信じてもらえるでしょうか」

「信じてもらえなくていいだろうよ、身体が違うんだ、名乗っただけじゃわからんさ。話し合えよ、話を通じるなら。通じないなら誇れ、お前が自らの名前を覚えている事を」
「やっぱり五歳ではありませぬわね」

「おいおい、子供を馬鹿にすんなよ？ 子供の方が核心を付くぜ、大人よりな。まあメリンダはまだ12歳だからで、十分子供なんだが。」

「そろそろ上がるか。アルジナも逆上せ気味だし」

「ああ！ さつきから大人しいと思ったら！」

「うー」

アルジナを抱き上げるメリンダを見て、ふと、思う。

……いや、いや。思わないで。言葉は形にしない方が、楽で良い。そこまで抱えていたくはないしな。

良い湯だった。後は美味しい飯で、対価は十分だ。

夜が明けて——なんてことはない。夜も夜、深夜も深夜。有り合わせという言葉がもつともしつくりくる夕飯だったけど、少ない食材でよくもここまで仕上げたものだ。

多少の食料を取り戻せないだろうことは許して欲しい。やる気は湧いたぜ、ご馳走様。

「メリンダは付いてこなくてもいいんだぜ、苦手だろう、戦うの」

「それが、夜目が利いてしまつて、動くものを見るとひっかきたくなくなるんですの」

「猫だ」

「猫ですから」

「そうかい。俺はお前が元王族様だから、助けたんだ。お前のご主人様なのもそういう理由」

「わかつていますわ」

「だから、死ぬなよ。死ぬのは俺に代価を渡してからにしろ」

「はいはい、優しいですね、ご主人様は」

認識なんかどうだっていい。そう思いたいならそう思つてくれ。好都合だ。

「私は？」

「勝手にしろ。死んでくれても一向に構わん」

「ひどいー」

俺の奴隷でもない俺の肉を狙ってくるような奴をどう心配しろと。

思う存分、噛み殺してくれ。腹はいっぱいだろうからな。

「ああ、攫われたっぽい奴は殺すなよ。分からなかったら食わずに俺の所に連れてこい。

それくらいは守れよ、狼」

「あいさ」

それじゃあ、お返しの時間だ。せいぜい気楽に暴れるとしよう。

◇ / 5

6. あっさりした襲撃

6 / ◇

さて、盗賊団の噂である。アジトかもしれない。根城と言つてもいいだろう。

潜入して合図を、とか。火を焚いて挟み撃ちを、とか。

そういう、まどろっこしい事はしなかった。獣である。まあ群れの狼やシヤチであれば追い込み漁もしたのやもしれないが、狼は一匹で後は狐と猫。策を弄すにやちと足りん。ので、正面突破である。

アルジナには初めから大狼の姿を、メリンダには逆に子猫の姿を纏わせて、俺は普通に狐娘。

中ではまだ宴が続いているようだが、それにハブられたのだろう見張りが二人。洞窟の入り口で、小さな焚火を囲んでつまらなそうな顔で焼いた肉をついている。

見張りはまず気が付くだろう。焚火の向こう、揺らめくシルエットが一つある事に。それは少女だ。童女と言つてもいい年の頃の、ああしかし、本来あるべき、あつたのなら可愛らしいだろう耳は側頭に無く、代わりに頭頂に二つの三角耳が生えている。

ゆっくり、ゆっくりと近づいてくる狐耳の童女の姿に、流石に異常を悟ったのだろう。多少の酒が入った頭を振って、二人は立ち上がる。傍らに置いていた槍を持ってそれを童女へ向けて、そこであろうやくもう二つ、気が付くのだろう。

見えなかつたはずのない、恐ろしい程に大きく、恐ろしい程に嗜虐的な目をした巨狼。とん、と槍を持つ腕に前足を乗せる、可愛らしいだけの子猫。

腕が消えた事を理解する前に、その痛みを認知する前に、二人の首が飛ぶ。正確には飛んだのと、食い破られたの。喉を失えば声を出す事も出来ず、ただ、どんと頭が落ちるだけ。

はは。怖い怖い。ホラーだな、いやあ。

「……」

自分の前足を——自分の手を見つめて、少し動揺したようにメリンダが固まってる。

「ちよつとひつかいたただけなのに、か？」

「……ええ。驚き、ましたわ。王族の娘であつた頃では考えられない。本当に、私もう、私ではありませんのね」

「でも、今の方が便利だよ。人間には戻りたくないもん、私」

「私は……まだ、わかりませんわ。家族とあつて、ようやく、その答えが見つかるので

しようけど」

感傷に浸るメリンダを余所に、洞窟内へ侵入する。いち早く気が付いたアルジナが慌ててついてくる。まあ、浸りたいときは浸っておけばいい。ハナから当てにやあしちやいねえしな。

洞窟の中は間隔を空けて松明があり、明るい。それなりに分岐しているらしく、ちいと骨が折れそうだな、なんて思っていた矢先。

「ん？　なんだ、ガキ？　おい、ガキが逃げ出してんぞお！」

分岐の一つから出てきた大男……赤ら顔で腹の出たソイツが、突然叫んでくれた。俄かに騒ぎだす洞窟内。獣は耳が良いんだ、知ってるか？

「あっち、いっぱいいるねー」

「俺は囚われてる人間のいるところに行くよ。纏まってくれてるんなら、助かるって話」

「あいさー」

赤ら顔の男は叫んだあと、こちらをはっきり認識したらしい。

何度も目をこする。視線の先にいるのは俺、ではなく、アルジナ。

つまりはまあ、でっかい狼。

「て、敵襲だあ！」

存外有能だったと言うべきなのだろう。悲鳴よりも先に叫べる言葉がそれなら、役割

は十二分に果たしたと言える。少なくとも奪った子供の一人が逃げ出した程度の些事ではなく、明確な敵が来たと、大事にしてくれた。

ざわつきの音量が一気に上がる。

それに掻き消されるようにして、赤ら顔の男が断末魔と共に絶命した。

それじゃあ、あとでな。

楽しそうに狩りを始めるアルジナを見送って、歩き出す。さあて。

攫われた女衆は比較的簡単に見つかった。まあ、臭い方を探せばいいだけだからな。簡単だ。

ただ一つ、問題点。その部屋にいた奴が存外強かつたつて事。

「幻術か！ ふふ、小手先だが、こうも惑わせられるか！」

「おいおいおっさん、あんまはつちやけんなよ。大切な女が傷付くぜ」

「女が大切なのはお前の方であろう？ なんせ、盗賊の癖になど乗り込んでまで助けたかったのだ。ふふ、知り合いだったか、家族であつたか？ 今この場でアレらを殺さば、お前はどんな顔をするだろうな！」

なんかめっちゃテンションの高いおっさん。他の奴らは幻術やら形態変化でなんとかなったんだが、コイツは眠りこけていたにも関わらず射撃に反応して、起きながら銃弾を剣で弾くとかいう曲芸を披露して見せたのである。

その時の衝撃で剣はぼつきり折れたのだが、どこからともなく剣を生成して今も尚ハイテンションに戦っている。

エメレンシアと同じく、なんかそういう能力を持っている相手。結構希少なんだな、というのが感想。

「何の縁もないよ、人間になんて。殺されたところで何にも思わない。ただ、温泉が気持ちよかつたからさ。助けてやらんと寝覚めが悪いだろう」

「ああ、今認識した。お前はイオピクスか！なるほど、つまり各地で殺戮を行っているイオピクスの少女というのはお前だな！」

「ここに来る前にも街一個と軍隊一つ皆殺しにしてきたぜ、間違いないねえよ」
「それが今は人助けか！ 獣風情が、良いご身分じゃあないか！」

「獣畜生に殺される人間様の方が悪いよ。相対的に良い身分になっちゃあいるけどな」
眼前に俺の幻の現れを出現させて、不可視の本体で斬りつけた。腕を失った幻覚を見せ、形態変化した右腕の銃で撃ち抜いたり。けれどまあ、なんというか、痛みを感じていないのだろうか。あんまり意味を為さない。薬でもやってんのかね。ハイテンション

ンなのはそれが理由か。

形態変化という理不尽による攻撃は、完全な俺の知識依存だ。俺が知らないものにはなれないし、俺が想像しきれないものは俺にダメージが来る。幻術はその限りじゃあないんだけどな。あれは相手に錯覚させるものだから、相手の想像力依存だ。

つまるところ、結構、詰み手。

相手が痛みをあんまり感じないとすると、幻痛系統は想像力に欠けるせいで意味を為さないし、銃弾を弾き返せるほどの技量に俺がついていけないとも思っちゃいけない。エメレンシアは前知識ゼロで、そもそもアイツが戦闘者じゃなかったからこそその黒星だったけど、そもそも強い奴にや分が悪い。

「どうした、これで終わりか！ 他にまだできるだろう！ この程度の奴が、各地で殺戮を行うなど出来るものか！」

そりやまあ、大体の殺生はアルジナの手によるもんだからなあ。デイルでやったのは橋を落としただけで、直接戦闘したわけじゃあねえし。

「どうやら本当に終わりらしいな！ ふふ、安心しろ！ お前も可愛がつてやる！ その美貌、成長してもなお使えるだろう！ 今回の取引にお前は含まれていないからな！」

「ここで死ぬまで飼ってやるぞ！」

「馬鹿だな、盗賊団は多分もう壊滅してるぜ？」

「仲間がいるのか！ それは良いな！ しかし残念、この時において、私は三番目に強い！ ！ どういうことか、わかるだろう！」

へえ。 んじゃやつぱり。

「お前から盗賊団じゃあねえだろう。 どこぞの国の軍隊……あるいはその崩れ。 他国で子供を攫つて、エメレンシアへの取引材料にしてんなあ」

「子供の内で聡いものだ！ 最早、何の意味も無いがな！」

「そうかい？」

地面に手をつく。

いつも通り燃え広がる幻の炎には、コイツはびくりとも反応しない。

「今更幻術など！ ——何?!」

幻の炎には、だ。

形態変化は何も、固体にしかねえってわけじゃあない。普通に気体にも液体にもなれる。ただ操れはしない。筋肉も神経も通っちゃいねえからな。液体になったら液体として、染み広がるだけだ。

臭い部屋で助かったぜ。無色だが無臭じゃあねえからな。鼻が曲がりそうな臭いだが、元々部屋が臭いんだ、紛らわせられる。

危険物だけ、燃えたら、水を掛けた程度じゃ消えねえほどに。

「火をつけるとは、馬鹿め、やはり子供！ これでは女はもう助からぬし、この閉所で火を焚いてみる！ 息が出来なくなるのも時間の問題だぞ！」

「どこに女がいるんだよ、周り見てみな？ いねえぜ、もう」

その言葉に振り返る男の視界。

そこにはまだ、縛り付けられた裸の女たちがいることだろう。

隙を突いて斬りかかってきた俺の刃を見向きもせず止めて、笑う。

「虚勢とは、本当に万策尽きたと見る！ 自暴自棄の放火に巻き込まれる女も可哀想なものよな！」

「馬鹿だな、人間。狐ってな、化かすもんだぜ？」

男が顔を上げる。

斬りかかってきて、つまり目の前にいるはずの俺の声が、存外遠くから聞こえてきたからだろう。

その判断力は流石だ。力任せに俺を弾き飛ばして——粉々にばらけたその小さな体に、自らに降りかかったその粉に、頬を引き攣らせる。

「爆ぜてくれ。人間」

「爆薬など、それこそ女どもが——」

「ありやあ幻だぜ。童女に裸の女の造形なんてさせんじゃねえよ、つてことで」

指。パツチンを一つ。

掻き消える捕まった女たちの姿。

BOMB、だ。

それで。

まあ、三番目に強いらしいあの男の、上にいた二人。

それと戦ったのだろう。部屋には夥しい量の血液と、倒れた男たち。

そして、息も絶え絶えなアルジナが、メリンダの膝の上で浅い呼吸を繰り返していた。

「よお」

「……あー。終わった……?」

「終わらせたのはお前だろうよ、大金星じゃねえか」

「んひひー……」

いつぞやの母上様を思い出す、刺し傷切り傷塗れの血濡れの身体。

「ご主人様……」

「ああ、メリンダ。女どもの運び出し、お疲れ」

「いえ、私は……それよりも早く、アルジナの治療を」

ん？

「なんで？」

その問いに。

動揺を見せたのは、メリンダだけ。アルジナはわかっていたというように、何も。

「アルジナさんの扱いが雑なのはいつもの事ですけれど、どうか、今だけはふざけずに、治療をお願いしますわ。これでは、このままでは、アルジナさんが」

「死ぬだろうな。でも、俺はこいつに何にも貰ってないからさ。助ける義理はねーんだわ」

むしろあの小屋から出してやって、ご主人様なんてのの真似事をやってやって、あげてるもんばかりだ。返してもらうもんはあれど、やるもんはもう何も無い。

「そんな……仲間では、ないのですか？ 家族では……」

「いんや、全然？ 知り合ったのも最近だし、価値観もあんまり合わないしなー。情なんて欠片も無いよ、アルジナには」

「——で、であれば、私から何か差し出しますわ！ その見返りで、アルジナさんの治療を」

「いやいや、お前は俺の所有物じゃん。既に全部俺のもんだよ、お前の差し出せるもん

は」

自分に対しての不義理なんざ、笑い話もいい所だ。

そういうやり取りをしている内にアルジナの呼吸は薄くなつていく。致命傷ばかりだ。流石は軍隊崩れ、生物の殺し方にやあ一日の長がある。まあ負けたわけだが。

「それに、アルジナも別に、生きていたいわけじゃあねえんだろ？」

「……んー」

今の際にいるというのに、アルジナは考える素振りを見せる。滴り落ちる血液がメリンドの膝を濡らす。それは彼女の足を伝い、洞窟の床へと浸み込んでいく。広く、大きく。

今更どんな治療を施したところで、助からない。どれほど腕の良い医者の手にかかっても無理だろう。その上での問いだ。

生きたいか。生きたくないか。

俺はコイツを善性であるとは思わない。悪性であるとも断じないが、食欲に負けている時点で悪性よりだろう。助けたいと自然に思うような奴じゃあない。五年間を過ごした家族にさえ湧かなかつた情が、ここ数日を共にしただけの他人にどうして湧くと思ふのか。

「……死んだら」

「ん」

「食べて、いいから。今は——助けて」

「あ、いよ」

故にコレは情けではなく、取引だ。義理ではなく、契約。

尻尾を見せる。湯船に浮かんでいたソレよりも長い——先ほどさらに伸びた尾。

それを巻いたところへ、メリンダがアルジナの身を置く。

「しかし、メリンダ。良く知ってたな、俺のコレ」

「見ていましたから。あの軍人を助けるところ」

「へえ、そりゃ俺の注意不足だ」

ふさふさのもふもふに包み込まれたアルジナの身体はさらに覆われ、見えなくなる。

染みるはずの血液が尻尾の隙間から溢れる事は無い。ただ仄かに輝いて、仄かに燐光が

浮かび上がる。

煙管を取り出して、口に咥える。すると洞窟中から燐光が湧いてきて、火皿のところ

へ集い、溜まっていくのだ。

「自らが殺した盗賊の命で、命を繋ぐんだ。狩りとしては最適だろう」

幻の火を付けて、一服。

ぶかぶかとやりながら、尾を解く。

アルジナにもう怪我はない。ただすやすやと、眠りについている。

「背負ってやってくれ」

「ええ、言われずとも」

「子供は？」

「いませんでしたわ」

「そうけ。じゃあ俺は探してくるから、アルジナと人間たちを連れて、先に村に帰っていてくれ。服はまあ、いいだろ。命がありやあよ」

「盗賊の服で、出来るだけ血に塗れていないものを見繕いますの。人間は、その裸体を夫や家族以外の者に見せるのはダメなのですのよ」

「そうけ。知らんが」

勝手にしてくれ。俺は早くアドリアンの奴らに無事を伝えてやった方が良いとは思うがね。

それじゃ、と。

再度手を振って、洞窟の奥へと進んでいく。

耳を澄ませてずんずん進むのだが、一向に声らしきものが聞こえない。先ほどまでは完全に酔いつぶれて眠っている盗賊がちりほりほりといったものだが、ここまで深部になると人の気配自体が無い。ああ無論、眠っている盗賊は殺したが。

「おい、子供ー。人間の子供やーい。どこにいるんだ、助けに来たぞー」

これで子供が連れりやあ良し。そうでなくとも誘拐犯か密猟者なんかの子供攫いの下手人が見つかれば良しと思つて大声を上げているのだが、洞窟内にこだまするばかりで反応／＼ zero。つーか広い洞窟だなあオイ。

先ほど深部と述べたが、深度も上がつてきているようで、幾度か下り坂をくだつたように思う。少なくとも上り坂は無かった。松明は無いが、まあ狐だ。夜目が利く。ところどころにある穴ぼこを避けながら、これに落ちてたら助けようがねえわなあ、なんて考えつつ歩く事一時間程。

ようやく、灯りが見えた。

「灯り、ねえ」

深い深い洞窟の奥にい？

一応慎重に、不可視の幻術を纏つたままその灯りの方を覗いてみれば、そこにあつたのは。

「……学校？」

俺の知識にあるような、四角い建物。

地盤どうなってるんだってくらい大きく広く空いた空間の中に、それは建っていた。

これに子供がいるってか。おあつらえ向きなこつて。探す手間が省けたような、逆に面倒になったような。

とりあえず人間の方の童女の姿を取って、脇に彫られた階段を降りていく。あの盗賊のアジトの本拠地、つてえわけでもねいだろう。そんなら、あんな表層にいた意味がわからん。元々あつたこの上の洞窟に奴らが住み着いていた、と考えるべきだ。そんなで、捕まった子供らが脱出して、入り口側には盗賊がいるからつてんで奥へ奥へと行つてみた……みたいなの？ おいおい、勇猛果敢かよ。

しかし、こんな所があんならエメレンシアが真っ先に奪いに来てそんなもんだが。いや、そもそも誰が運営してんだ、ここ。子供たちだけ？ 機能してるのかどうかすら怪しいな、そりゃ。

階段を降り切つて、校舎に近づくと、外から見た感じ、ほとんど教室は空き教室で、長らく使われていない様子。校舎自体も大分古いな。

「その少女」

突然、背後から声が掛けられた。

ゆっくり振り返ってみれば、そこには。

「自由時間は終わっただろうか？ 速やかに教室に戻ると良いよ」

明らかにサイズの合っていない服を着た、20代前半くらいの人間の女が立っていた。
……あれ、どこかで見たことある、ような？

◇
／
6

7. あっさりした再会と出立

7 / ◇

声を掛けてきたソイツは、どこか見覚えがあるような、無いような。

年の頃20を過ぎた辺りで、きちつとした、というよりは、しつかりしていてもほんわかした、みたいな印象を受けるその声にも、どこか既視感がある。

「聞こえなかったのかな、少女よ。見ない顔だ、新入生かな」

「……気のせいでないや、俺はアンタに会ったことがあるな。誰だ、アンタ」

「ロスと、名乗らせてもらっている。君の名前は？」

「ラナエ」

言うのと、少しだけ驚いたような顔をする女……ロス。ロス？ 聞いたことが、ある、よ
うな？

「面白い偶然もあつたものだ。運命の悪戯かな。酷い運命もあつたものだよ」

「知り合いと同じ名前だったか？」

「ああ、大切な知り合いと。それで、うん、やはり君の名前は、ここの生徒にはいないものだ。君は、何をしにここに来たのかな」

ロスの言葉に敵意や害意はない。こちらを拘束せんとする意思さえもない。ただ純粹に、疑問として。あるいは、心配として。

膝を折って、こちらに視線を合わせて問うてくる。

「子供の集団が、少し前に訪れたはずだ。それらを連れ戻しに来た」

「ああ、なるほど。確かに新入生にしては、些かおかしな時期に訪れたものだと思つていたよ。わかった、あの子達を呼んでこよう。ラナエ、君が連れて帰つてくれるのだろう」

「そのつもりだよ」

俺の返答ににこりと笑うロス。まただ。強い既視感。けれど、顔を覚えている人間自体が少ないのに、何とダブるってんだ。コール辺りか？ 印象に強いのは。

ロスはそのまま、校舎の方へと歩いていった。待てとは言われちゃいないが、待つていくべきだろう。まあ、探す手間が省けたというのなら、それでいい。これで仲間を引き連れて狐退治に、なんて洒落こまれようものならこの学校を破壊する事も考えるが、そうしなくて済みそうなのは良い事だ。

しばらくして、ロスが返ってきた。後ろには十数人の子供。皆一様に怯えている様子ではあるが、ロスには懐いているようにも見える。

「君たちを迎えに来たというよ」

「……」

「アドリアンの奴ら……あー、そいや名前は聞いてなかったな。あのハゲた爺さんに義理があつてさ、お前達を連れ戻しに来たんだ。ちいと歩くが、付いてくれるか？」

ハゲた爺さん、で伝わつたらしい。怯えていた表情を少しだけ明るくさせて、人間の子供が俺を継ぐように見る。まあ、あれだけ善性の爺さんだ。子供に好かれもするだろう。まあ名前を言わずに信用してしまうのは、子供側にちいと無用心なきらいがあるように思うが。その辺の教育は俺の仕事じゃあねいやな。

ロスの言葉もあつて、子供たちがこちらに来る。

もう一度、彼女の顔を見た。

「……あー、一つ。聞いていいか」

「なにかな」

人間だ。どう見ても。

でも、どう聞いても、どう見ても。

それを問わないのは、あまりに不義理だと思つたから。

「ロス。もし、自らの子に名を付けるのなら。その長女の名前は、なんだ」

「ラナエ」

悩むことも、驚くことも無く。

穏やかな顔でそう言った。ああ。やつぱりか。

「ここは、死後の国か」

「いいや、違うよ。ここは死後の国ではないね」

「……なら、ああ、そうか。そういう仕組みか」

参ったね、どうも。

それじゃあ、メリンダは何の人質にもならねえってことか。

「アンタは、来ないのか」

「子供たちを置いてはいけないからね」

「そうけ」

それじゃあ、さいならだ。

まあ、無理矢理連れていくような情もねえわな。ああ、いや、あと一つ聞いておこう。

「この学校、メリンダとアルジナってえ子供はいるかい」

「アルジナはいるよ。メリンダは、少しかいたね」

「十分だ。アンタにや今、義理が出来た。いつか助けに来るよ。なんせこっちは、アンタ

の全てを託されている」

「うん、気長に待っているよ」

それだけ言って、ロスは口を閉じた。

心配そうな瞳でこちらを見つめる子供らをこれ以上放置してはおけないかね。まあ、

私情を挟むのはこれくらいってえことで。

後ろ手を振って歩き出す。時折子供たちがついてきているかを確認しながら、あの長大な階段を昇って、洞窟へ。

遠くなっていく校舎の麓に、まだ彼女が立っているのが見えた。

別人だわなあ。そりゃ、悲しい事で。

「またな」

別れはまあ、そんなくらいでつてことで。

洞窟深部を抜け、松明のある辺りにまでくると、ざわめきが聞こえてくるのが分かった。その大体の声が聞き覚えのある……まあ、ついさつき怒号や罵声として聞いていたものだったから、おーい、と声をかけてやればあちらから続々と人間の大人たちがやってくる。

そして俺の後ろにいる子供たちを見て、破顔して、それらを抱きしめるのだ。子供たちもまた、自らの親の元へと走り寄る。

それぞれの子供がそれぞれの親に抱かれているのを見て、まあ、これで義理は果たせ

たかな、と一服。

……していたのだが、なんだ、一人だけ。ぽつんと佇んでいる少女がいるではないか。親が来ていないのか、それとも。

「どうしたね、お前さん」

声を掛ける。人間の子供。俺についてきたにもかかわらず、俺に怯えるようにして肩を揺らした。

「親ア、いねいのか？　そもそもアドリアンの子供じゃあない、とか」

「……」

「だんまりじゃあわからんよ。俺はこのままお前さんを置いていくつもりだけど、ちつたあ話をしてくれりゃ、何かしらをやってやらんでもないぜ、対価次第だが」

「……」

失語症ってわけじゃあないだろうに、少女は喋りもしない。肩を竦める。

まあ、何も言わないってんなら何も求めてねいってことだろう。俺が気にするべくもないわな。

人間たちが口々に帰ろうと言っている中をすり抜けて、一足早く洞窟を出る。おお、もう夜が明けていたのか。時間間隔狂うな、どんだけあの学校にいたんだ俺あ。

アドリアンへの道というべきか、森の中の樹には一定間隔で傷がつけられている。人

間たちがやったのだろう、まあ折角助けられたのに森で迷って餓死、なんてことになったら目も当てられないからなあ、必要な行為だろう。

手に剣を生成する。

「……お前さん、付いてきたいなら付いてきたいって言わないね。敵かと思うだろう、人間だよ」

生成した剣を雲散霧消させて、振り返る。そこには先ほどの少女。母上殿に人間は敵だと教え込まれていたもんでね、背後に立つ人間は敵扱いしがちなんだ、許してくれ。許さなくてもいいが。

それでも尚、少女はだんまりだ。はん、獣が言葉を使って、人間様が使わないのは面白い皮肉だな。面倒が極まるという点を除けば、喜劇だろう。

再度生成した剣を少女に向ける。

「気が散るんだよな。頼るやつがいねえんなら名乗りな。名乗らねえんならストーリーカーとして斬る」

「……」

「死にたがりか。せいじゃ、さいならさん」

剣を持つ手を振りぬく。狐の巫人たるこの身は、前にメリンダが驚いていたのと同じように、簡単に人間の首を切り落とした。ごと、と落ちる小さな首。

首は、地に落ちたまま俺の事を睨む。おいおい、ホラーだな。角度の問題……いや。「首がねい体で頭を拾い上げるなよ、どこに目がついてんだ、お前さん」

「……」

少女は、落ちた首を拾い、それを断面の見えた上体へと持ってきて——嵌める。数秒待つて、離された手と共に首の……顔の目がぱちりと開いた。シーンアマイン、デユラハンカ。いや、ゾンビか？　なんにせよ通常の生物じゃあねな、オイ。

切り傷は無意味と判断する。早速使えねえなこの能力。

「人間じゃあねえのか……あん？　そういや、心臓ぶつ刺されても平気な奴がいたな」
「名前」

ようやくと少女が口を開く。名前、と呟いたか。喋れんならほよ喋れよ、ちつと怖かっただろうが。

「ルシア」

「……そうけ」

共通点しかねえ名前だな。まあ、どうでもいいし、どうしようもないんだが。

少女、ルシアは今一度、こちらへ近づく。なんだなんだ。

「お願いがある」

「聞いてやる義理がねえや」

「私を、妹の元まで連れて行って欲しい」

……妹、ねえ。

見た目的にやあどう見てもあつちの姉なんだが。いやまあゾンビだしな。成長く
らい止まってるか。……いやゾンビ、でいいのか、本当に。幻術やら能力やら、散々フア
ンタジーだとは思っちゃいたが、それでいいのか俺よ。

ただ、死なない体、というのはいまあ、そこそこ興味があるな。なりたかないが、ふむ。
「食われて、治るもんか、お前さん」

「時が経てば」

「重畳。ウチに大喰らいがいるんだがよ、最近俺のモンになったんで、餌やりが必要なん
だ。連れていく代わりに頼んでいいか」

「……わかった」

なら、良いだろう。所有物の餌だ、運んでやるのも吝かじゃあねいやな。

「ラナエだ。よろしく」

「うん」

さて、帰ろうか。

「アドリアンに帰ると、とうかか」ようこそ」の看板前にまできると、口を尖らせたアルジナとそれを諫めるメリンダが立っていた。

「あ、おかえりなさい」

「おかえりー」

「おう。で、なんだ。追い出されたか？」

問えば、目線だけをアドリアンの中へと移す二人。

そこには、いつぞや見た紋章を身に纏う軍人がずらり。あーあのア。

ただ俺を捕らえにきたにしては聞き込みを行いまくっているし、倒壊した建物の撤去などにも勤しんでいる。単純に盗賊と火事の報告を受けて飛んできたつて所かね。ただまあ、俺達がお尋ねものであることにやあ変わらんわけだ。

「少ないけど、持つて行つて欲しい、と……長さんが」

メリンダの手には小包。中は急拵えで作つたのだらう果実の切り揃えと多少の保存食。おいおい、やめろよあの爺さん。全部返して、唯一食料だけは返しそびれたな、つて自戒してたところにこんなもん渡されたら、また助けなきやいけなくなるだろうが。善人もいい加減してくれ。こつちの身が持たねえ。

なんにせよ、ここにやあもういられんつてことだ。

「そちらの方は？」

「ルシアという。さっき拾った。アルジナの餌だよ」

「え！ 食べていいの!？」

「……」

コクンと頷くルシアを見てから、ものつそい鋭い視線で睨んでくるメリンダには肩を竦めておく。そういうコイツ、9割方いらなくなつたんだよな。ミグエルに行く理由も薄れたし。……まあ残り一割を捨てる、つてえのも性に合わんのだが。

まあ、行くかあ。どうせ門前払いだろうけど。そうなつたら、お別れかねえ。わざわざ捨てる理由も無いとは言え、こうも敵意を向けてくるようじゃあな。

ああ、そうそう。聞こえやしねえだろうけど。

「落ち着いたらまた、温泉入りにくるから、そんな時までには立て直しといてくれよ」
つてことで。

イオピクスは狐と融合した人間を指す言葉だ。絶対数は犬や猪、鳥なんかの有名どころには届かないものの、それなりの数がある。ただ、種としてそんなに強くはならな

かったし、あたかも何でもできるかのように幻術を扱うことなど、一度も無かった。

事実、彼女の妹二人も、弟も、幻術はおろか獣と人型以外の形態変化も使えない。平凡なイオピクス。研究材料としての価値は余り見出せず、売り物としての価値しか見込めないお人形さん。

一応融合ではなく初めからイオピクスとして生まれた存在としての価値だけで、今も飼っている……けれど、正直これ以上は何も出てこない様に思う。少なくともあのラナ工程の価値は、絶対がない。

そんな事をつらつらと考えつつ、件の少女と対面して、唯一生還したという軍人と対面した。無傷での生還。元より周囲の覚えも良く、多少硬い頭を除けば見目も性格も良い優良物件……もつとも、己に結婚願望などというものはないから、単純に目の保養になるな、程度の感想でしかない。

「エメレンシア殿、私に何用で……」

「んーとお、貴女、ラナエちゃんと対峙したのよねえ。どうだったあ？」

「どう、とは」

「んー、話を通じたか、通じなかつたか、とか。可愛かつたあ？」

「……此方とは別の、全く違う尺度で物事を見ている、という印象はありました。ただ、約束は守る、というか……決して話の通じない相手ではない様に思いますね。少なくとも

も、風評にあるような悪辣非道で命を命とも思わないような化け物とは、どこか……違
う、ような」

「けれど、貴方の部下とデイルの市民、みーんな殺されちゃったじゃない?」

「それは、そうです。だから私は、あの少女を許す事は出来ない。必ず捕まえます。そし
て裁きを受けさせる。出来る事なら、今対策本部の言っているような、見つけ次第即殺
害の方向ではなく、法の下に照らす事を望みます」

少しだけ、わかった。

つまり”こういう手合い”には弱い、という事だ。

なんだろう、純粋な好青年。ふふ、あの子もやつぱり女の子ね。

「ありがとう、参考になったわあ」

「はい……ええと、それで、私に何用ですか、エメレンシア殿」

「んーん。特に聞きたい事は無いのよ、少し顔が見たくなっただけ」

「はあ」

じゃあ、ぶつけるのはそういうコねえ。いい感じに警戒を解いてくれることを願う
わあ。それで、あととは情に訴えれば、どうにかなりそうねえ。

と、独り言ちる。口には出さずに内心で考えを転がす。まあ、そう上手く行くとは限
らない。ただ失敗しても問題はないのだ。目的は彼女についての研究で、何が効くか、

何が効かないか。どういう生態をしているのか、どういう価値観を持っているのか。捕らえた後は捕らえた後で研究もするけれど、今手元がない、という事も重要な資料になる。

どうせ元手もほとんどかからないのだし、なんて。

「ねえ、コールさん。もし興味があつたら、今度、私の会社に来て欲しいわあ。いつでもいいから、ね？」

「わかりました。用事が出来れば、向かわせていただきます」

……社交辞令よねえ。わかりやすい。

◇ / 7

8. あっさりした悲嘆と説明

8 / ◇

ミグエルへと辿り着いた。

ちなみに首都ファイイスのある今までいた国をシエルダンと言うのだが、検閲検問がある、なんてこともなく、メリンダに「ああ、今シエルダンを出ましたわね」なんて言われてようやく気付くような、つまりまあ、わざわざ国境線を分ける必要がないくらいの大国だった、という話。その中のちっさい山の中にいたわけだあね、俺は。

そこから特にどこの国のものでもない平地やら山やらを越えた。こういう所はファンタジーだよなあ。国境なんてものが無い程度には、資源も土地も潤沢ってこった。

んで、ミグエル。シエルダンとの違いは王族がいて、全体をして王国である、と一点くらい、だとか。共和国でなんか部族同士が争っているとか、めちやくちや強い権力を持つ宗教があるとか、そんなことはないらしい。ミグエル王国ではなくミグエルとか呼ばれないのは、王族が特に強い支配を敷いていないからだそう。

シエルダン側にもっとも近いだろうワイナンド市ということで腹拵え。といって

もアジルナは腹いっぱいなので、俺とメリンダ、ルシアだけが簡素に食事を行った。

「しかし」

「……平和、ですわね」

「んだなあ」

市民に暗い雰囲気は見受けられない。

悲しみに暮れているとか、張り詰めているとか。王族の娘が誘拐、ないしは行方不明になっているというのなら、もう少しピリつくもんだらう、人間てのは。

それは、やはり。

「王城へ、行きましょう。一般開放されていますから、タイミングが良ければお父様にも会えるでしょうから」

「無用心過ぎねえ?」

「ええ、今となっては、そう思いますわ」

それだけ平和だったって事なんだろう。シエルダン側は密猟者やら人攫いが蔓延している印象だったがであつた人間がほとんどそれだったため、エメレンシアがそういう事業を始めない限りは、そこまで盛んじゃあなかつたのかもしれない。

奴隷という文化が根付いているのは確かなようなのだが、人間の奴隷はかなり少ない。普通に連れ歩いているのも、な。犯罪者やら身売りやらで奴隷に落ちる人間がいた

としても、人攫いによって売られる事はあんまりなかった、ということだろうか。優しい世界かあ、おい。

「……」

なんでもない顔で手首から先を齧られているルシアに目を向ける。

俺がエメレンシアに復讐に行くことを知っていた時点で怪しきしかないコイツを、どの程度気にしたものか、という話。ゾンビに対しての決定打があんまりないし、食われても時が経てば復活するというのなら、燃やしたって同じだろう。聖水かなんかをぶっかけりや死ぬのか？ あるいはゾンビじゃあないか。

アルジナが普通に食べているし、それなりに美味そうな顔をしているのを考えるに腐ってるってわけじゃあないんだろう。ゾンビってのは、腐った肉、というのが通説とどうか、一般的だ。何が一般的なのかは知らん。俺の知識にある限りは、の話。

それで、そうじゃないなら、そうじゃないのかもしれない。

「ラナエ？ 行きますわよ？」

「ああ」

なんでコイツが仕切ってるんだろうな、とか思いつつ。

ミグエルが中心部へ——王都へと、歩を進める。

さてまあ、顛末から話すとしよう。

王都について、王城に入つてすぐ、彼女はいた。

「あら、小さなお客様方、王城の見学ですの？ ふふ、でしたら私が案内してあげましょうか？」

なんて。

言うのだ。言ったのだ。なるほど、確かに”お姫様”という呼称がしつくりくるような、恐らく綺麗なのだろう人間の少女。12歳くらいで、豪華絢爛なドレスに身を包んだその立ち姿は、まさに。

「メリンダ・アーテーデン……様、ですね」

「あら、貴女は……猫の耳？ あ、ごめんなさい。ええと、私と近い年くらい、かしら。この子達の保護者は貴女？」

予想通り。予想の範囲内。

ならばもう、メリンダに用は無い。1割に賭けては来たが、無駄足確定だな。

「俺あ帰るよ。来たかつたんだろ？ ゆつくり見ていきな」

「……」

「あら、帰ってしまふんですの?」

「ん、元々用事があつてね。それに行くついでに奴だったからさ、俺とこつちのああんまり興味が無いんだ」

「では、貴女だけでも、如何かしら。滅多に見る機会は無いと思うのだけど、お城というのは」

メリンダは、動かない。

動けない。

踵を返す。王族と取引してるのに王族の娘を誘拐するのはリスクが大きすぎる、なんて言つたが。

そもそも誘拐していない、つてんなら、リスクも何もねえわな。

「ああ……いえ、申し訳ありません。一人で、見て回りたいもので」

「そう、なの? ああ、ふふ。いいえ、わかりましたわ。一人でゆっくり見て回りたい、という方も、それなりにいましたから……それでは、私はこれで、もし用向きがありましたら、最上階西のテラスに私はいますからね」

「ええ。陽光差し込む朝の園……ですのよね」

後ろ手を振って。

メリンダは、付いては来なかつた。さいならさん。

とまあ、メリンダの用事が済んだからと言って、ファイスへ直行する、というのも味気ない。元々の目的はメリンダを用いて王族の権力からエメレンシアを引き出してもらうとか本拠地を教えてもらおうとか、そういうもんだつたのだが、偽物の猫娘を引き合いに出したところで一蹴されるのがオチだ。なので、変更。

小一時間ほど童女二人に少女一人の構成で市場を歩き回ってみたのだが、人攫いにやあ一度も出くわさず、その辺の商店のおっさんが売りモンだろう果実やら肉をくれる始末。平和だなあ、オイ。

賑やかな商店街から少し外れて、公園。

「今、二択あるんだわ。一つはこのままファイスへ行く」

「……」

「どっちでもいいー」

「もう一つが、この国の奴隷商人だの奴隷市場だのを探し出して、エメレンシアに繋がつてるところを洗う」

「王族」

どうでもよさげなアルジナに対し、ルシアが意見、だろと言葉を口にする。

王族。メリンダ。

……ああいや、そうか。そもそも王族はエメレンシアの取引先なんだっけ。んじや、奴隷がどこに流れてるのか、どこから仕入れてるのかくらいは知ってるよな。いやあ失念失念。王族は娘を誘拐されなかった被害者だとばかり思い込んでいたから、思いつかなかった

「夜にでも、忍び込むかね。ルシア、お前さんはまあアルジナと一緒にいてくれ。何があつても死なんだろう、お前なら」

「うん」

あまり戦闘にやあ向いて無さそうだが、死なないんなら問題なかる。勝手に突っ込んでいって死に易いアルジナの栄養補給にもなる。ふむ、自立した補給地だと考えりやあ、かなり有用だな。

煙管を取り出す。まあ、吸いやしない。何も入ってないしな。ただ口が寂しいから、多少歯で噛んだりして、クイクイと動かす。

……”新入生”、ね。

よくわからんことが、色々起きてそうで、まあ。

草木も眠る——なんてことはなく、夜になっても、どうか夜の方が賑やかな街並みの上、屋根伝いにヒヨイヒヨイと移動して、王城までたどり着く。流石に一般開放はもう終わっていて、一応門番がいる。夜勤つてえか、大変だね、どうも。

不可視の幻術と、狐の身であればほとんどの音も立てず。いとも簡単に王城へ潜入出来た。城内は静かだが、女中やら何やらが普通にいて、食事の準備やら部屋の掃除やらを続けている。眠らねえのかこの国は。

「……」

天井の方をこつそりと抜けて上階へ、さらに上階へと上がって、最上階。なんだっか、朝の園？ だかのある最上階西のテラス、という所に来た。そこしか部屋の情報が無いからな。どんだけ隠れてたって、流石にドアを開けてまわりやあバレんだろ。

朝の園という所は、植物園、みたいな部屋だ。植物園と称するには流石にこじんまりとしているけれど、各種様々な植物が植わっている。月明かりが差し込んでいるからか、どこか静謐な雰囲気さえ感じられる。

そこに、メリンダがいた。

ただし、猫の方ではなく、人間の。

「……あら？ どなたですか？」

バレずにドアを開けるつてのは、まあ無理だ。液体やら気体に形態変化すりやあ出来るんだろうが、制御失って死ぬんじやねえかな、多分。そんな怖い事はしたくない。だから、堂々と開けた。

人間の方のメリンダは朝の園のど真ん中に置かれた椅子に座っていて、目を瞑つていて……俺の来訪に、その瞳を開いた。瞳を開く前に「どなたですか」と聞いてきた辺り、そこまで危機感を抱いていないというか、無用心極まりないというか。

「狐さん……？」

「少し前」

「えっ？」

狐のまま近づいて声を出せば、メリンダは目をまんまるにしてこちらを見た。

動物が喋るつーのは常識的じゃねえんだな。ふむ、コイツはエメンシアに関わつていない、か？

「アンタ、誘拐とか、されなかったか。あるいは急に眠くなって、起きたら違う場所にいた、とか」

「え、えつと……もしかして、あなたが喋っていますの？」

「あんまりゆつくり話すつもりは無いんだわ。ああ、だから俺側もあんまり回りくどい

聞き方はダメだな。そう、エメレンシア、という人間について、何か知らないか？ エメレンシアと、お前の両親が行っている取引について」

最初は戸惑っていたし、動揺していたメリンダだったが、飲み込みが早いのだろうか、幾度かだけ頷いてから、近づいてきた俺を抱き上げる。そして、膝の上に乗せた。

「5年程前から各国の王族や政治家たちと取引を始めた有名な奴隷商人、ですわね」

「それ以上の知識は？」

「ごめんなさい……。ああ、でも、今いる女中たちの中には、エメレンシアさんからお父様たちが買った者達もいますのよ。奴隷、というのはお母様が好みませんから、仕事を覚えさせて、王城で、住み込みで働いていますの」

「なんじやそりや。慈善事業かよ」

あー、最悪の場合は、とか考えてたけど、こいつら普通に善性くさいな。やめてくれ、やりづらいだろ。

つまるところ、奴隷の身分から救うために買って、仕事を与えてるってえことか？ これで給料だのを払ってたりしたら、もうお手上げだな。

「奴隷、なんてものも……。無くなればいいと、お母様は常に言っておられますの」

「そりやあ同感だ。ついでに密猟者もな。ああ、礼を言うよ、メリンダ。おかげ余計な殺生をせずに済んだ」

「……………」

「ちなみに、エメンシアが最後にここへ来たのはいつだ？」

「ええと……………ふた月も前、だと思えますわ。普通、ひと月に一度くらいは来ていたのに、と来客の受付担当の者が言っていたような……………」

「まだ療養中か？ 妹……………じゃねえ、姉のルシアと違って、治りは遅いつてことか？」

「あるいは心臓クラスの臓器だと治りが遅い……………いや、半身食われても半日足らずで完全復活するルシアと比べて、明らかに遅いな。なんか法則とか、それとも能力差でもあるのか？」

「もしくは別の理由で来ていないか、だが。」

「国王の部屋を教えちゃくれねえかね」

「……………それは、どういった目的ですか？」

「おお、平和ボケが過ぎると思っちゃいたが、そこは流石に怪しむのか。いや何、俺あエメンシアに用があるんだが、どこにいるかわからなくてさ。エメンシアと直接取引してる奴をこの国の国王くらいしか知らなかったから、ちいと聞きに来た、つてわけさ」

「それなら、何故夜に？」

「狐が昼に話しかけてきたらこえーだろうよ」

「夜でも驚くと思えますわ」

それはそう。

「それでは、私と共に行く、というのはどうですか？ 狐さんの身体では、大広間の扉は開けられないでしょう？」

「そりやありがたいが、そもそもどうしてこんな所にいたんだ、お前さん」

「こうして、夜と朝の少しだけの時間、植物に囲まれるのが日課なのですわ」

「そら、優雅なこつて」

改めて抱き上げられて、そのままメリンダが椅子を立つ。暗い植物園を出れば、明るい廊下。松明やランタンじゃあなく、これ普通に電気なんだな。照明が一定間隔にある。なんか、まだ技術力がはつきりしないな。まあ照明って結構早めに出来ちゃあいたが。まさかLEDってこたあねえだろうし。

当然だが確かな足取りで歩くメリンダ。彼女とすれ違う女中や一部の兵士だろう人間が、頭を下げた後、変なものを見た、とでもいうように俺を二度見するのが面白い。まあ自国の姫さんが狐を抱えてたら驚くわな、そりや。

そうして辿り着いた大広間、という場所。おお、本当だ。物凄い大きい扉。たとえ人間の姿、童女のそれになっても開けられなかつたんじゃないかと思うほどの大扉は、メリンダでも身長的に無理そうだ。

「お父様、私です。メリンダですの」

声に、数瞬のラグがあつてから、ゆっくりと扉が開く。

中にいた兵士……でいいのかな、それが扉を開いたらしい。扉開く専門の職業だったら面白んだけど。面白いかな？

果たして、中には。

「あら……？」

「……あら」

The・国王みたいな風貌のおつさんと、人間のメリンダを成長させたような女。

そして、猫のメリンダが——いた。

「お昼の……」

「……お邪魔していますわ」

恐らく国王だろうおつさんは、二人の姿を見て顔を顰める。怒っているというよりは悩んでいる……嘆いている、が近いかもしれない。見るからに善性で、まあ大体、察した。

その隣にいる女……まあ多分女王だろう人間は、真剣な顔で手元の手帳らしいものに

何かを書き込んでいる。

「お父様、ええと？」

「メリンダ。どのような用かね」

「ああ、その。この狐さんが、お父様に用があると……」

「狐？」

はい、この子が。そんな風に、頭を撫でられながら提示された。

「ラナエ？」

「知り合いか？」

「はい……私を、ここまで連れてきてくださった方、ですの」

「そうか」

ひよい、とメリンダの腕の中から降りる。

注目が集まる中——どろん、と。人間形態へ、変化した。一瞬ざわつく室内。それを国王のおっさんが手で制す。

「あ、お昼の……狐の、耳？」

「イオピクスか」

「狐だよ、俺あ」

「……まず初めに、礼を言わせてほしい」

言って、おっさんは。

頭を下げた。

おいおい。王族じゃねえのかよ。

「……知らなかったのだ。そんなことになっていたとは」

「お父様……？」

猫のメリンダを見れば、そちらもそちらでおろおろしている。一切気に留めていない女王はともかくとして、兵士や女中の方も国王が頭を下げる事にはあんまり動揺していない。ああ、そういうや強い支配は敷いていないんだったか？ 平和な国っぽかったし、フレンドリーなのが当たり前なんか。

「君の事は……聞いている。知っている、というべきか。シエルダンからの情報提供があった。ああ、だからといって、私は君に対してどうする、という事は無い。娘の……命の恩人だ。心から、感謝をする」

「私の？」

状況が飲み込めていないのは人間のメリンダだけかね。まあ、ほとんどの情報が知らされていない状態ですべてを察しろ、なんてのはあまりに酷だし、そもそも無理だ。しかし今国王が喋っているからだろう、誰も状況を説明できずにいる、と。

「よお、メリンダ」

「……はい」

「えっ？ 貴女……メリンダ、というんですの？」

「ええ。メリンダと……メリンダ・アーテーデンと、言いますわ」
名乗った。

けれど、それでも飲み込めはしない。情報開示がいきなり過ぎるな。段階を踏んでやれよ、流石に。

「全て、聞いた。エメレンシア殿……いや、エメレンシアの所業。君たちの話。落ち着いて聞くのだ、メリンダ。そこにいるフェレスの……彼女は、お前、いや、お前ではないのだが、いやお前であるのだが……」

突然歯切れが悪くなる国王のおっさん。さっきまでの「フレンドリー」だけど威厳はあるな。感はどうしたよ。家族に対して強く言えないタイプか。面倒くさい。いやまあ説明しづらいのはわかるんだがよ。感情的にとりより、難度の点で。

その様子にイラッと来たのは、俺だけじゃなかったらしい。
となりで高速にペンを動かしていた女王が国王のおっさんの側頭部にエルボーを打ち込む。

……最悪死ぬだろ、今の。

「メリンダ。驚いても良いから、聞きなさい。このフェレスの子は、貴女なのよ。エメレ

ンシアの手によって猫とくつつけられてしまった貴女。けれど、貴女はそのままだった。写し取られた、とすべきなのでしょうね。そのような技術があることを私達は知らないけど、アレが不可解なゲートを扱うのは知っているでしょう？ そういうことが出来る未知の存在。それが今まで、この場に来ていたことに怖気を覚えるわ」

はきはきと喋って、一息を吐いて。

人間のメリンダを真つ直ぐにみて、言う。

「だから、この子もメリンダ。貴女もメリンダよ。ま、双子が出来たようなものね。仲良
くしなさい」

すげえな、それは。

唾然だわ。母親つてのはどこも強いのかね、まったく。

◇
／
8

9. あっさりした情報交換

9 / ◇

アルジナとルシアを呼び込んで、そのまま歓迎の宴……という風にはさすがにド深夜過ぎたため、簡素な食事を貰って就寝の流れとなった。各々になんとも豪勢な部屋が貸し与えられた。この世界で見ることのなかったベッド……それもフカフカのそれは、ああ、けれどこちとら山育ち。ある程度の固さがないと、どうにも落ち着かない。ここで長年を過ごした狐であれば話も違ったのだろうが、初めてこのベッドを使うってえな狐にやちとフカフカ過ぎたな。

ということ、俺はカーペットの上で、丸くなって眠らせてもらうことにした。狐に贅沢はいらんってな。

それで、朝。

いわゆるらないでも翌日。

改めて用意された豪勢な食事に、アルジナだけが盛大に喜んだ。流石にずっと同じ味は飽きるんだとか。

昨晚を使つて、メリンダとメリンダは深く話し合つたらしい。眠そうな瞳で、けれど
険悪な雰囲気もなく、本当に姉妹のように食事を取っている。

……ふと思ひ出すのは我が妹弟達。ふむ。

一緒に食事をした経験がねいな。なんか、初狩記念の鼠を貰つた覚えはあるんだが。
別に家族への絆、なんてものは持ち合わせちやいなかつたし、然して義理も覚えちや
いない。まあ、そんなもんさ。ある意味で、他人よりも家族の方が義理つてな感じにく
いもんだらう。それを誇ることも恥じることもなく、ただそう、というだけ。

母上殿にだけあ、命繋いでもらった恩があるからな。託されたもんくらいは返しにい
くさ。

そんなこんなをつらりつらりと考えて、朝の食事は終わった。

さて、王族がどれほど善人なのかつてえのは理解出来たんだあが、だからといって
じゃあそれでいいならさん、つてわけにやいかない。エメレンシアについて、知つてる
事を話してもらわにやあならん。

メリンダ二人はちよいと他の部屋に行つてもらつて、アルジナとルシア、国王と女王

と、俺。だけになった。

「無用心過ぎるだろう。いくら恩人なんだのとはいえ、他国の大量殺人犯だぜ。近衛の一人くらい、側に置いておけよな」

「シエルダンの軍隊一つをたつた一人で壊滅させられるような相手に、近衛の一人がなんの意味を持つというのだ」

「ほん……そりやあまあ、確かに」

状況が揃ってねえと、あの盗賊団の男みてえに押しきられかねない、とかいうのは黙っておくかね。まあ今はアルジナもいるから意味を為さないってえのは間違いないが。

無用心じゃなく、堂々としている、ってことか。平和な証さな。

「ま、いいや。それで、エメレンシア。知ってることを教えてくれ」

「ああ……彼の存在は、5年ほど前から活動を始めた、奴隷商人……ああいや、労働者の……あー、斡旋所の経営者で」

「別に気にしないからハキハキ喋りなさい」

「う、うむ。そう……件の奴隷商人は、拠点をシエルダンの首都ファイスに置いている。一つの企業として、オフィスビルを構えているのだ」

オフィスビルで。技術力う。というか文明力よ。

「んじや、ファイスへ行きやあエメンシアには会えるんだな」

「オフィスに居れば、だがな。奴は各地の王族や政治家を相手に取引をしていて、その取引のために各地を飛び回っている。文字通り、だ。あの力、奴はマルゴと呼んでいたか。空間を自在に往き来出来るその力のせいで、正確な位置はわからぬ」

「マルゴ……」

イオピクスやフェレスなんかの言葉を聞いて思っちゃいたんだが、なんでラテン語なんだろうな。狐やら人間やらはこの世界由来の言語で、亜人なんて言葉は存在しなかった。日本語は当たり前のように通じないってえのに、ラテン語だけ同じたあ具合も悪かろうよ。

ああ、マルゴは淵という意味だ。

「これらの情報については、奴の取引先ならば誰もが知る情報だろう。その上に一つ、こちらで押さえた情報を開示する」

「……」

女王の方がすごい響めつ面だあな。それに怯えながらも、国王は口を開く。

「奴と一対一で話してはならぬ。昨晚よりエメンシアと関わった、一言でも話した者を洗ったのだが、一対一で話した者にのみ、会話内容に関する酩酊のようなものが見られた。……私も、その一人だ。どんな情報を抜かれたのか、どんな契約をさせられたの

か。今の今まで考えもしなかった」

「それで、この人の書棚を探したら、契約書が一枚見つかったのよ。内容は、ふざけたものだったわ」

契約書とやらを寄越してくる女王。えーと、何々？

ご息女の借用書？ 著作権について？

まあふざけちゃあいるな。俺としては他国の文字がシエルダンのそれと、狐のそれと同じだったのと、著作権なんてワードがあることに山椒の木だが。

「……ああ、本当に。私は……本当に、どうかしていた。そんなものにサインするなど……」

「恐らく、被害者はメリーだけではないのでしょうね。洗えば幾らでも出てくると思うわ。どうしようもないことを嘆いてるボンクラも、私も。写し取られて……売られているかもしれない。ぞつとするわ。可能なら、早く助けて上げたい」

「んー、俺が見た限り、獣と融合した奴で人形を取れてんのは高くて15歳か16歳くらいで、それを過ぎると完全な獣になるっぽい、つてえのは伝えておくれ。加齢でそれが変わるのか、成った時点の年齢なのかはわからん」

「そう言うという事は、貴女はそれなりの年齢なのね」

「ああいや、俺は特例。そもそも俺あ狐なんさ。元人間じゃあない」

「それにしては……随分、人間に詳しい様だけれど」

「そいつあまあ、なあ？」

「余計な詮索は無しで行こうぜ。義理より借りが勝るのだけは避けたいんでな」

「そうね。失礼をしたわ。ごめんなさい」

「いや、だからといってそう簡単に頭を下げんじやねえよ。王族だろう、ちったあ偉ぶれよ。たかだか狐一匹によ。」

「情報、助かった。エメレンシアがどこにいるにせよ、オフィスぶつ壊せば事業は滞るだろ。なんで、俺達はこれからファイスへ向かう。アンタらは、あるのか。奴に対する自衛手段の一つでも」

「正直に話せば、無い。門前で追い払うのは当然にしても、奴のマルゴを止める手立ては存在せず、記憶の酩酊や写し取りに対する防衛方法も考えつかぬ」

「じゃあ、どうすんだ。また娘が借りられるぞ」

「その子も、迎え入れるしかあるまい。後手には後手のやり方がある。何、永遠ではなからう。お前が、エメレンシアを倒すまで、だ」

「おいおい、期待をかけんなよ。俺あ復讐にそこまでの熱量を持ってねえぞ」

「背負い込まれるより気楽で良いでないか。こちらも気軽に応援させていただくぞ、ラナ工殿」

嘆きもする。悲しみもする。

けれど、笑って受け入れる事だけは、諦めない。

……人間、ね。

「メリンダは連れていかねえ。本人が来たいつつても無理矢理引き留めろ。未練あるやつあ復讐には邪魔になるって、相場が決まってんだわ」

「無論。もう、手放すものか」

「今までつらい思いをさせていた分、めいっばい可愛がつてあげるわ。勿論、二人とも」
「あいあい、杞憂かいね、どうも」

さて、俺の聞きたいことはこれで終わり。この様子じゃあエメレンシアを呼びつける、なんて権力は持つてなさそうだしな。カチで行きやあいいだろ。

んで、お前らは？ という風に振り返って見れば、ルシアの膝を舐めながら……いや、多分嘔みながら丸まって寝ているアルジナと、彼女の髪を撫でさするルシアが視界に収まった。

興味無いってか。アルジナはともかくルシアは主目的だろうによ。

「そんじゃ」

さあ、去ろう。いつまでも温水に浸かってちゃあ、自慢の毛並みも衰えようよ。

「善人は善人らしく、達者で暮らせよ」

末長く。

王城では吸わなかった煙管を取り出して、口にやる。

そういうえば、ゲートつつーもんに関して聞きそびれた。俺達がファイスに向かうつてんのにその話を出さなかった辺り、そんな短距離で使うもんじゃあないか、王族でおいそれと使えるもんじゃない、もしくは行き先が固定されていてシエルダンとミグエルの間にや通じていない、のどれかだろう。

「ん?」

「あ、メリンダだー」

ふと付いてくる見知った足音に振り返ってみりやあ、そこには猫のメリンダが。おいおい、手放さないんじゃあなかったのかよ。

ん、ああいや、付き人や護衛はいるのか、一応。

「なんだ」

「お礼を。お世話になりましたわ、ご主人様」

「エメレンシアの情報つつー対価は十二分に貰ったんだ。これ以上礼なんてされちゃ、

貰いすぎになっちまうだろ」

「狐の貴女ではわからないでしょうが、人間というのは貸し借りや義理に関係無く、ただ自身がそう感じたから、という理由だけで感謝を述べるものなのですわ」

「でも猫だろい、お前さん」

「いいえ、人間ですの」

ふうん。

そらまた随分と。人間に誇りを持っておられる。

「この恩は忘れませんわ。シエルダンでは生き難いでしょうから、すべてが終わった暁にはミグエルへお越しく下さいな。歓迎しますのよ」

「遠慮しておくよ。英雄扱いも恩人扱いも、肩が凝る。狐だ、肩も何もあっちゃいねえがね」

すべてが終わったら、好きに生きるさ。別にもつとやりたいこととか、あるいは俺の命が脅かされるようなことがあれば、復讐なんて簡単に諦めがつくからな。燃えちゃねえのよ。

まあ一応、餌代としてルシアをエメレンシアの元に届ける、つてえのは必ず実行するんだが。

「それでは、もう会えませんか？」

「良いだろ、別に。なんだ、情でも湧いたか。俺からはお前に一欠片だって情は持つっちゃいないが」

「……」

「……ふん。いいか、メリンダ。離別つーのはな、悲しいやもしれん。寂しいやもしれん。俺が思わずとも、お前達人間はそうなんだろう。ただ、悲しい事や寂しい事は、決して悪いことじゃねえんだわ。それは善性の象徴だろうよ」

だから。

「笑って見送るもんだぜ、情が湧いたってんなら。情の無い相手にや、振り返りもせず手を振る程度の社交辞令で良い。どうするね、お前さん。苦い顔で見送るかいね？」

聞けば。

メリンダは顔を……無理矢理に笑わせた。ふん。泣きそうじゃあねえか。価値観の相違は好悪にや繋がらんってか。馬鹿め、そんなだから善人に染まるんだ。

「気を付けて」

「おう」

俺は振り向きもせず手を振って、アルジナは振り返ってブンブンと手を振って、ルシアは何の反応も見せずに歩き出す。

さいならさん。つてことで。

アドリアンはミグエルとファイスの中間地点にある、というわけではないので寄り道をする必要もなく、またどの国のものでもない土地を通ってシエルダンへと入る。

まあ前も述べたように国境なんてもんがわからんせんから、いつ入ったか、つてのはてんでさっぱりなんだが。

来たときと同じく谷を囲う森へ入る。シエルダンはこの大峡谷に囲われているようで、森と谷は必ず抜ける必要があるんだと。

そんな人為的過ぎる土地、あるかいね。

そいで森の中。

助けを呼ぶ声をガン無視して谷を飛び越えれば、ソイツあ「待て待て待て待て待て待て人の心がないのかな君は！」とか言いながら付いて来た。助けを呼ぶ声に感情が乗っかってねえし、現に単独で抜けたじゃねえか、お前さん。

あと狐だあよ、俺あ。人の心なんてないつて。

「ふうー！ ようやく追い付いた。にしても、酷いじゃないか！ 普通宙吊りになっている人間を見掛けたら、声くらいはかけるだろう！」

「じゃあ普通じゃねいんだろうよ」

「しかし、うんうん、こんな暗い森の中をお嬢さんが三人だけというのは、あまりに心細かったろう！　しかし、もう安心だ！　不肖このライオット、淑女を護る盾となろう！」

「押し売りは要らねえ。付いてくるようなら不審者として処理する」

「処理って……お、おいおいおい！　剣なんてどっから出したんだ！　む、向けるな向けるな！　危ないだろう！」

ライオットと名乗った、恐らくイケメンと称されるだろう男。人間……に見えるが、俺のように幻術を使っている可能性も捨てない。

いつでも抜け出せる程度の拘束で宙吊りになってた、ってだけで怪しさしかねえわな。

「脅しでなく、何の躊躇もなく切り伏せる。警告つてえ義理は果たしたぜ」

「お、落ち着くんだ少女よ！　大丈夫、私は怪しいもので、わっ!?」

近付いて来たので、斬りかかった。

が、男の提げていた剣で防がれる。少なくとも小物じゃあねえな、コイツ。

「あ、危な……今の防がなかったら死んでいたぞ！」

「殺す気なんだ、当たり前だろうがよ」

「聞いていた話と違う……騙された！」

「あん？」

なんない、自白か？

「わかった、わかった！　すべてを話すよ。私はライオット。依頼を受けて様々な事業に当たる、ギルドという企業に所属する会社員だ」

「おうおう、並んじやいけねい単語が揃い踏みだな」

「そこに先日依頼があった。ミグエルからの道中、女の子三人が森を抜けて来る。私が心配しているとは知られたくないので、あくまで偶然を装って、ファイスマでの道のりを護衛してほしい、と」

そいつあまあ、なんと。まるではじめてのおつかいを心配する親御、つてえやつみたいに聞こえるな。

「助けを求めれば助けてくれる、良い子達だから、と……」

「依頼人、誰だ。守秘義務と命を天秤にかけろ」

「申し訳ないが、言えない。ちよちよちよちよちよちよちよ！　違う、言えないっていうのは、知らないからなんだ！　ギルドの会社員は依頼を遂行するが、仕事に当たる者とは人選と受付はそれぞれ別の者だ！　私はこれ以上の情報は知らないんだよ！　だからその剣をしまつてくれ！」

……ギルド、ね。

エメレンシアのオフィスを壊すつてのは目標の一つとして、そのギルドつてのも訪ねてみるか。少なくともコイツ含め、俺を騙そうとした……あるいはなんらかの策に嵌めようとした時点でもう敵対行動だ。

意図のない奴にやわざわざ手を出さんでやるが、それ以上は耐えねえぞ、俺あ。

「ファイスマでの道のり、ついてくるのは構わねえ。けど、あんまり近づかないでくれ。信用出来ねえ」

「う……わ、わかった。讓歩、感謝する」

……悪性かどうかの判断が難しいねえ、そりやよ。

◇ / 9

10. あっさりした邂逅

10 / ◇

ファイスへの道中、ライオットを観察する。

「む、止まりたまえ！ この足跡……猪だ。気を付けろ、近いぞー！」

「美味しかったよー」

「な……」

みたいな、こちらの実力を過小評価しての空回りは多々あったものの、言動から滲み出るギャグ感や小物感とはうって変わってその実力は高いように見える。

環境に対する知識や経験、自身に出来ること出来ないこと、何よりもまず俺達を優先しようとするひたむきさ。

それだけ見りゃ、確かに善性だろう。おあつらえ向きに、だ。

俺にあどうも、エメレンシアが俺の性格を分析して送り出した刺客、にしか思えねえんだが。ま、そらルシアに関しても似たようなもんだがよ。

「そろそろファイスへの中継地たるテルミへと到着するぞー！」

「街にや寄らんよ。通報されるのがオチだ」

「通報？ なにか悪いことでもしたのか？」

……知らねえ、つてわけか。そりゃ、無理があろうよ。他国の王族にすら届いてる情報を、首都の人間が知らねえのはおかしいが過ぎる。

が、思い返すのは記憶の醜態とやら。イチイチで話した人間がその時の会話内容を覚えておらず、どこるか最愛の娘すらをも売り付けてしまうような契約書にサインするくらいの強制力を持つ、恐らく催眠とかその類いの能力……。

こいつを使えば、ライオットが俺達を快く護衛するにあたっての不都合な情報を意図的に削除する、くらいは出来そうだ。

いや、待て。

なんで俺、こいつが悪くねえ前提で話を進めてる？ 絆されたか？

「いや、行くか、テルミ。アルジナはともかく、俺達あ普通に腹も減るからな。何よりお前さんが一番腹あ減ってるつてオチだらう？」

「そ、そんなことは！ ない、とも言い切れないが……」

「ああだが、俺達あ金、持ってねえぞ」

「初めからお嬢さん方に出させるつもりはないさ！ ここは紳士ライオット、身を削ることに躊躇いはない！」

「そうけ」

金出してくれるってんなら、まあ。頼んだわけでもねいわけだしな。

先ほどライオットが「ファイスへの中継地」とテルミを指して称したように、テルミという都市自体は複数あるらしい。ファイスを取り囲むようにしてテルミという環状の都市群が存在し、その周囲をポツポツと街やら町やら村やら集落が取り囲んで、さらに外側を森と谷が囲む。

んだが、地下にああのダンディ犬がいた住処が広がっているのを考えると、なんかこう……不自然だ。

なんでもない土地があるほど資源に余りがあるとしても、地下開発くらいやるだろ。それくらいは技術力はあるんじゃないのか。

それに、あの学校はどこに位置する？ そのまま地図上の場所に存在するのか？ いやでもあの時俺は一時間ちよいくらいは歩いてんだよな……そもそもアドリアンの温泉ってどこから湧いてるんだ？

「あつた！ テルミだ！」

「ん……ん？」

どこに都市なんかある？

ちつさい小屋があるだけじゃねえか。まさか俺のような幻術か？

「はっはっは、キヨロキヨロして、やはりまだまだ子供だなお嬢さん！ うん、謝るからその剣をしまつてくれたまえ！」

「テルミつてえのを目視できるまでしまわねえよ」

「ラナエ、上だよ上」

「上？」

見上げる。

そこに、あった。

威圧感さえ覚える真つ黒の土台。そしてその上に——都市が一つ、乗っかっている。

都市には周囲からドラゴン……いつか見た奴が幾匹も行き来していて、それが交通機関なのだということを知る。

「空中中継都市テルミ。各地点を龍の便で繋ぎ止める、この国が大国である理由の一つさ——」

だから技術力よ。

テルミの真下。小屋がある、と言ったそこに、それはあった。

「これが、ゲート、か」

「ゲートを見るのは初めてかね！ 大丈夫、怖いものではない！ これは特定の区点と区点を繋ぎ、空間を跨いで移動するものだ！ よく世間で陰謀論者達によつて騒がれているような、一度分解してあちらで再構成する、等といった仕組みではないから安心して」といい―」

「これ、動力源はなんなんだ？」

「動力源、というものはないな！」

「ない？ わけねえだろ、どうやって動いてんだよ、じゃあ」

「ううむ、お嬢さんにもわかるように説明すると……滝、というものを知っているかな？」

「位置力と運動力で飛ばすつて言いてえのか」

「お、おう。いきなり段階を飛ばしたな……。まあ、そういう事だ！ 勿論位置や運動の力じゃなく、ゲートにはゲートの法則があるんだが、小難しい式をここで書いても仕方がないだろう！ 重要なのは、入るゲートと出るゲートは二つで一つのゲートになって

いて、入るゲートに入れば出るゲートから出る！」

「銃を撃つたら弾丸が飛んで着弾するんだよー。これならラナエでもわかるでしょー」
アルジナの態度を察するに、これは常識か。物理法則みたいなもんの一部にゲートが含まれている？　だが、設置された場所にしかない……気軽に設置出来るものじゃねえってことか。

だからこそエメレンシアのマルゴーは厄介、と。

知らねえモンより知ってるモンの方が怖いか。

「さあ行こう。ギルドの会社員は格安で宿を取れるんだ、どうだ凄いだろうー！」

「系列会社か」

「う、うむ。説明の機会を失ったな……。あ、そうだ。テルミの中ではすぐに刃物を取り出さないように！　私のように提げている者は少なくともはないが、抜いた瞬間にその辺の監視塔から通報が飛ぶぞ！　これは人力でなく、磁場と電波、さらにはテルミ内部の質量変化などから導き出されるから、どれだけ隠してもダメだ！」

「警戒態勢かよ。ふん、安心しろ。別に何もしやせんよ。何もされなけりやあな」

「ならばよしー！」

言つて。

ライオットがゲートへと……真つ黒い、縦楕円の平面へと足を踏み入れる。

触れた瞬間粒子になるとか、ゲート側が揺らぐとか、そういうことはなく、スツと。ライオットの体はゲートの中に消えていった。

続くのはアルジナ、ルシア。

「さっき入るゲートと出るゲートがあるって言ったが……」

こいつあ、途中で戻ろうとしたら、潰れちまうのかね？

なんて。

俺もゲートへと足を、一歩を。

次の瞬間には、都市にいた。

宿。まあ、ホテルだわな。ライオットは俺達と別室を取り、それではな！　と言って去っていった。なんでも食事はルームサービスのようで、基本的に他の客と鉢合わせるような施設はないのだと。まあ他人を気にせずゆつくりできる、ってやつだ。

昼をそれなりに過ぎてからのチェックインだったにも関わらず、昼飯は出た。それなりに豪勢で、美味。狐の舌にも合うたあ中々。

街中を歩く気もないので、部屋でゴロゴロする。都市に入った途端軍がわらわら、つ

てえのを予想してただけに、ちよいと拍子抜けだ。無駄な殺生はしないにこしたことはないんだがね。

「それで、どう思う？」

「匂いは人間だよー」

「特に変な事はしていない」

「そりや今はせんだらうよ。俺達の信頼を得るのに必死だからな」

「疑ってる？」

「疑わねい方が無理だろう」

「私より？」

「同じくらい、だ」

煙管を唾える。中身が無いんで格好つかねえが、口寂しいんで仕方ない。

「地下に目を向けないのは、この空中都市のせいだろうが……あー、これ、ここがどうやって浮いてんのか、お前らは知ってるのか」

「えー、知らないのー？ 孤児院の子供でも習うよー」

「俺あ狐なんだよ。人間の事情なんざ知るかいね」

「重力、わかる？」

「おいおい俺あ狐だぜ。重力くらい知ってるよ」

「テルミの上にはねー、重力を出すでつかい鉱石があつて、それと地面でテルミを引つ張りあいっこしてるんだよー」

「違う。テルミ基部、反重力板がある」

「ふっふーん、それは五年くらい前に違つた、つて放送されてたよー。ロシア、時代遅れだねー」

「……少し傷付いた」

周知はされてるが、議論されてる？ よくわかつてないものを生活基盤にしてるってか。こえーな、そりや。ああいや、揚力を知らねえ物理学者が飛行機を怖がるようなもんか？ ゲートの法則みてえにその重力を発生させる鉱石とやらが日常的にあるなら、恐怖もない、と。

にしても、五年前の知識で止まつてる、ね。ふん。

「つまり、床あ壊しても落ちねえのか？」

「これ龍の激突でもびくともしないくらい硬いよー？」

「普通に落ちるはず」

「あくまで地面の重力の方が強いってことか」

「ん」

さつきから惑星と言わずに地面と言っているんだが、否定されないな。まさか平面世

界か？ いや、普通に昼夜あるが。地平も丸いし。

「外側は？ 縁から飛び出したら落ちるのか？」

「落ちる」

「落ちるけど、なんかねばねばした空気の泥みたいなのに包まれるよー。犯罪者を拘束する奴の応用だつてー」

「遊びで落ちると、罰金」

「粘性のある気体い？ それも浮いてて、人間を受け止められる程の」

そうなつてくるともう超技術だ。いやまあ重力鉱石とやらがテルミ上部に”ある”つても意味わからんのだが、やっぱり物理法則的なそれ以外に、幻術とかマルゴーのような超常の力が働いていると見るべきだろう。

で、犯罪者を拘束する用にも使われる、ね。なるほど、単なる縄やら何やらの拘束より動きにくそうだし、抜け出せなそうだ。

「ちよいと、出てくるわ。あちなみになんだが、ここは猫とか犬とか、いるのか？ 野良の」

「いるよー」

「犬は、あんまりいない」

「犬はまあ噛むからな、あいつら」

じゃあ、狐になって。

窓を開けてもらい、身を翻す。

「夕飯前にあ帰るよ、なにもなければあな」

「中央の塔は近づいちゃダメだよー、びりびりするからねー」

「青と白色の服、軍の手先。気を付けて」

はいはい。

さて、都市である。前に行ったりヴィナスが地方都市なら、ここは日本の首都くらいには都会だ。人間も多い。中継地でこれなら、首都ファイスはどれだけ近未来都市なんだか。

しかしこのシエルダンってえ国、中心部に行くに連れて技術力も文明力も、時代さえも上がっているような……いや、さすがに飛躍し過ぎか。

きつちり円で囲われているのも……ふん、まあどうでもいいか、国の秘密なんぞ。

「あ、狐さんだー」

「狐？ どこよ、いないじゃない」

「さっさいたもんー」

先程から不可視と可視を行き来するように、点滅するようにしているのだが、特にその監視塔とやらが反応する様子は無い。まあ幻術は五感にこそ作用すれど、質量が変わる訳じゃねえからな。

そうしてチロチロ、都市を練り歩く。

見れば見るほど大都会。田舎の狐にや背の高いビルばかりで気が滅入るね。そもそも高度もあるから、一番高いビルの最上階はどんな景色なんだか。

ふん、馬鹿と煙はなんとやら。

行ってみるかいいね、一番たけい所。

いや、いや。

案外苦勞した。鳥になると質量がかわつちまうから、地道に狐で登りまくってようやく頂上だ。道中、カラスを三羽くらい食い殺したが、襲われたんで仕方ねえよな。流石に俺あ一羽で腹いっぱいなんで、二羽目以降は殺したただけだ。

……カラスって羽より匹の方がしつくりくるよな。

「それで、これは。……なんだいね、まったく」
てっぺんだ。

さぞかし大金持ちという風な人間が住んでるとばかり思ってたんだが……。格子の嵌められた窓に、ベッドの上で三角座りな子供。他に人間は居らず、どころか虫の一匹もない。気のせいでないけりや防音素材か、この壁。無音室？ 気が狂うだろうよ。

助ける義理はないし、好きで閉じ籠ってんのかもしれねえから何をすることもないが……なんにせよ、高い場所つてのは牢獄なんだな、つてえのが感想。

「……………」

ん、気付かれたか。まあベランダに堂々といるからな、顔を上げりやあ目に入る。

子供……中性的だが、多分少女だろう人間は、ぱあつと顔を輝かせた。

そして、ベランダ側、格子の側に寄ってくる。

開ける事の出来ない、でつけえガラスでしかないようで、少女は格子の隙間から顔を覗かせるばかり。

少女はガラスにはあつと息を吹き掛けて曇らせると、それに指で文字を書き始めた。反転文字だがまあ、読めるよ。子供に配慮を求めるほどじゃあねえよ。

「——狐さん、どこから来たの？」

……こつちに知性があるとわかってんのか？ いやまあ、無用心にも目で文字を追っ
ちまった時点でばれてるのやもしれんが、一度は素知らぬふりを通す。

「——頭の良い狐さん。ここに登ってこられるのだから、隠さなくてもいいのよ」
そりやあそうだ。少なくとも野良狐はこんなところ来ねえわな。

はん、観念するか。

使うのは、幻術。別にガラス越しでも使える。

少女の口が「わ」の形になったあと、俺と少女は真つ白な空間にいた。

移動したわけじゃない、全部幻だ。

「え、え？」

「で、なんだねお前さん。なんで閉じ込められてる？」

「え、誰？」

「誰って、狐だよ。目の前にいるだろ」

少女は、ハッとしたように俺の方を見る。

そして手を伸ばそうとして、けれど止まった。慎重に、手のひらを前に押し出す。

「窓を探してんなら、ねいよ。作ってねえ。走り回ってもいいぜ、ここに戻ってくるが
ね」

「これは……夢？」

「幻さ。夢のような」

恐る恐る立ち上がって、少女は、歩き出す。俺に触れたいんじゃないやあなかつたのかいね。まあ、好きにすると良いが。

現実の体は動いてないし、時間を遅くしたり早くしたりできるわけじゃあねえから、結構無防備になるのが難点。俺自身の知覚は外にあるんだが、他の人間がいるところじゃあ使いづらいわな。

「凄……凄いわ！ 凄……い、走って、駆けていいなんて、夢みたい」

「幻だあね、すべて。満足したら戻ってきてくれよ」

「あ、そう、そうよね。狐さん。抱き上げても良いかしら？」

「おう」

抱き上げられる。そして、撫でられる。ふむ、まあ悪くない。

「で、お前さん。名は」

「狐さん、狐さん、名前はあるのかしら？」

「……まあいいが。俺あラナエだよ。お前さんは？」

「私？」

なんかテンポが合わねえな、この子供。

「私の名前は」

まあ、純粋な……見るからに善性だ、特に俺が気にかけるべき事はー。

「エメレンシアよ！ シア、って呼んでね、狐さん！」

んにい〜？

◇ / 10

11. あっさりした戦闘

エメレンシアと……名乗った。

この国の人間の流行ネームってえわけじゃないのなら、本物？ いや、偶然同名の他人って可能性もゼロじゃない。少なくともこのエメレンシアは俺を知らねえみたいだし、本人でねいのは事実。

「あー、よ。お前さん、姉妹はいるかい？ 兄弟でもいい」

「姉がいるわ、一人。もうずうつと会っていないけど」

「ずうつと？ ……お前さん、いつからここにいるね？」

「それもずうつとよ。ずうつと、ずうつと。……本当は、弟とお兄ちゃんがいたの。けれど、姉だけになったわ」

「あん？ 要領を得ねえな、どういうことだ、そりゃ」

「ああ、このままずっと話してたいのに。狐さん、また来てくれるかしら？ ううん、無理よね、だってあなたは」

外界の知覚。思い切りジャンプする。同時に、この夢幻も掻き消えてしまう。

消えていく中で、エメレンシアが口を動かした。

——”殺されてしまうだろうから”

直後、俺の身体を一発の銃弾が貫いた。

ビルから、落ちる——。

11 / ◇

二発目が来る前に不可視の幻術を纏う。

迂闊だった。最初に襲ってこねえから、来ねえんだって油断していた。単純に、マククして隙が生まれるまで待つていたってことかいね。

撃たれた箇所は腹のど真ん中。この小さい狐身を撃ち貫くたあ余程腕の良いスナイパーだ。あるいは機械式か。どっちにせよ、相手したくない事山の如し。

「だがよ、人間……ここまで明確な敵対行動取られて俺黙っちゃねいぞ」

スナイパーを探すことよりも、先に。

テルミミ全体。表層に出てきている人間の、そのすべてを幻の炎で焼き焦がす。老若男女、関係無いね！ 人間は人間だろう、連帯責任だ。

途端、あちらこちらから悲鳴が上がる。技術力つてな、発達してりや発達してるほど、

想像力も豊かになる。どれだけ火を利用してきたいね、それが自分に向くところ、一度でも想像しなかったかね。

そしてもう、隠すこともない。形態変化で——傷を塞ぐ。

は、再生出来てるわけじゃあねえのが難点だがね。塵になつて元に戻るわけじゃあねえが、俺が俺を覚えていて、俺を思い出せる限りは治るぜ、簡単に。

「半数は市民の保護を優先しろ！ 幻覚の炎だ、気付け薬の配布を急げ！」

「ちゃんと対策されてんねえ、青白帽子！ 軍の手先つてやつか！ はは！」

ソーサーと呼ばば良いのか、明らかな超技術で浮いているそれに乗った青白帽子が100余名。これも重力鉱石とやらの技術か。は、ならよ。

「!? なんだ、急に重力が増大した……！」

「恐れるな！ 幻覚だ！」

「し、しかし！ 現に重力計が、ああつ、落ちる！」

一気に。

バランスを失つて落ちていくソーサー共。

はっはっは、幻術が生物にしか効かねえと、誰が決めたいね？ まあ原始的なもんだと騙し難いのは事実だが、こつちにある程度の知識があるんだ、完全に理解出来ねえもんでも持つてこない限り、物言わぬ機械なんざ格好の的だあぜ。

計測出来るもんなら騙せようさ！

その間にも落ち続けているが、適当なところで鳥になり、着地してから人間形態へ。不可視の幻術を解けば——へえ。

落ちて尚、すぐに持ち直した先の100余名。地上にいたらしい青白服が更に100数名。市民の保護にあたったのが半数だったか、んじや追加で100数名。

内他に仕事のない奴あが、全部。

俺に銃口や切っ先を向けていると来た。

「目標はイオピクス！ 既に市街から目標以外のイオピクスがいらないことは確認済みだ！ 逃げ隠れても、見つけ次第射殺しろ！」

「おいおい、なんで逃げ隠れる前提で話進めてんだよ。俺の命を狙い、あまつさえ傷を負わせたんだ。お前らを殺さない、つてえ選択肢はもうないのさ」

剣を生成する。

長大で、膨大な剣だ。テルミのビル一つにだって匹敵するそれを、青白帽子の上に置く。

「案ずるな、幻術……！」

「監視塔が言ってるだろうよ！ 地場電波質量変化の観点から——本物だってさあ！」

落とす。

落ちた。

超質量だ。俺が想像し得る、この能力で生成し得る現段階の最大級。槌とかを生成できりやもつと効率良いんだがな。あくまで剣限定なのがこの能力だ。

落としたのは剣。だが、なにも切つ先だの刃だのを落とした訳じゃあない。

剣にや腹つつー、一番面積の広い部分があるんでね。

それでもう、大災害だ。ビル群。家々。そして、人間。

それでもびくともしないテルミの基部にやあ頭が下がる。

さ、これで半分くらいは死んだかね。

「撃てー！」

「つとー！」

射撃。スナイパーのものだけでなく、周囲からも。

おうおう、全然死んでねいな。デイルの軍隊はこれで全滅だったろうに、4/5くらいは残ってる。なんだ、衝撃軽減のお守りでもあんのかね。それ全軍に配備しないよ。

……つか、青白帽子は軍の手先なんじゃなかったか。手先の方がいいもんつけてんのか？ いやまあ、手先であって手下ではないのか。

射撃は続く。そこに俺あいないんだがよ、随分な精度だ。けど監視塔とかいうのには幻術をかけてねえのに俺の位置がわからねえのは、命中精度があくまで機械式じゃね

えって証左かね。

「——止めたまえ！ 君達！」

そんな。

掃射されている俺の幻の前に、上空から降ってきた奴がいた。

ライオットだ。

ライオットは、弾く。弾く弾く弾く弾く。腰に提げていた剣の一本で、200を超え
る銃口から発せられる弾丸を、全て。

なにが「それなりの実力はあるように見える」だ。

達人クラスじゃねえか、普通に。

「君達！ か弱き少女を大人が寄って集って何事だ！ 恥じたまえよ、この状況のすべ
てを！」

「市民の安全を脅かすものは、怪物であれ少女であれ排除する！ 犯罪者を庇い立てる

貴様は何者か！」

「ギルドのライオット！ それで通じよう！」

「またギルドか！　でしゃばりなボランティア団体め、犯罪者まで取り込むつもりか！」
何よりも、弾かれた銃弾が一切俺の方へ飛んで来ねえ。俺がここにいることもわかっ
てやがる。油断ならねえと思っちゃいたが、もし道中に襲われでもしていたら普通に死
んでたかもな。

しかし、軍とギルドは仲が悪いのか。しかもボランティア団体？　金貰って依頼受け
付けてるんじゃないやねえってことか？

考察もそこそこに、幻術の炎で青白達の眼球を焼く。目ってなあ臓器だ。他より痛え
だろい。

そして幻術を解いた。

「む、隠れたままでもいいものを！　ここは私に任せて、逃げるんだ！　あの二人は既に
ゲートの前にいる！」

「やだね。俺あ撃たれたんだ、腹をさ。傷は塞いだけど、やり返さねえと筋も通らんだろ。
お前こそ逃げてても良いぜ。関係ねいだろ、お前にゃ。俺は犯罪者で、あいつらは法の執
行者。このままじゃお前も犯罪者だぜ？」

「私は君達の護衛だ！　ミグエルから来る少女三人を、ファイスマで護衛する！　それ
が依頼だ！」

「依頼と自分、どっちが大事だいね」

「どっちも大事と答えるのが正解の問いだな！　だが、少なくとも道中を共にした君達の方が、連中よりも情があるのだ！　助けたいこちらの心情を推し測ってから物を言うてくれたまえ！　犯罪者なら犯罪者らしく、私の事など気にするな！」

……は。

やっぱり全部知ってんな、コイツ。それで、その上で。

守らせろ、だつてさ。ははは。そりゃあ、馬鹿過ぎる。

もういいや、エメレンシアの手先とか、細かい勘繰りはやめた。コイツ、気持ちが良いや。ライオット。改めて名前あ覚えたぜ。

「ラナエだ。狐のラナエ。エメレンシアへの復讐つてのを、一応やるつもりでいる。お前は？」

「今更何を、と問いたい所だが、そんな時間は無さそうだ！　連中が君の幻術に対応し始めたぞー！」

「おい、名乗れよ。人間だ、名前があるだろ」

「——ライオット・ホルンだ。お嬢さん……いや、ラナエ。君を護る盾であり——」
剣を生成する。今度は手頃なサイズのやつ。

「君の命を脅かす“敵”を斬る剣である！」

さあ、テルミ。滅亡の時間だ。

防御から攻撃に転じたライオットは、圧巻だった。

あの盗賊の男など目じやない。一騎当千がまさに当てはまる。

あくまで護衛として、俺に向かう凶弾や凶刃を防ぐことも忘れず、ばったばったと青白達を切り伏せていく。あるいは英雄と、そう呼ばれてもおかしくない強さ。

俺の復讐なんだがね、ほとんどアイツがやつちまった。

「護衛対象に、傷を負わせる等……焼きが回ったものだ、私も！」

とかなんとかグググチ言いながら、ライオットの剣は衰えない。

そーいやアイツ、ギルドのライオットで通じる、とか言ってたな。もしや有名人か？

「やっ」

鳥になって高くまで上がって、それを探す。

あのベランダを狙える角度で、更にビルの根元にも対応出来る位置。

……みーつけた。

さあ、形態変化だ。

なるのは、百舌鳥。ちいと巨大な、百舌鳥。

とあるビルの屋上にいたソイツに、不可視の状態で近付き——急襲して姿を見せる。

「……ひ、え——あ!?!」

ソイツ……スナイパーを脚で掴み、遥か高くまで上昇する。

なあ、アルジナが言ってたんだ。中央の塔は、触れたらビリビリするってさ。さつきも見たがほうほう、鋭利な電波塔だこと。

そつから。

「待、」

放る。放す。

知ってるかい、百舌鳥。百舌鳥のはやにえ。

俺あ狐だがよ、わざわざ鷹でも鷲でもなく百舌鳥になったんだ。

なあ。

俺の腹あぶち抜いたんだ。

お前もその腹、ぶち抜かれにやダメだらう？

地面に降りると、全て終わっていた。

起きている青白は一人もいない。落ちている武器はすべてが壊されている。

そして、ライオットは。

「なんだ、一人じゃ荷が勝ったか」

「私も歳を取ったというだけだ。何、掠り傷。どうということはない」

さすがに無傷ではない。だが本人の言う通り、掠り傷だ。頬が少しだけ、裂けている。

それ以外に目立った外傷は無い。

「治してやるよ」

「む、それはありがたいが……良いのか？」

「ん？　なんだ、お前。俺が警戒してるのに気付いてて、近寄らせぬいよう細心の注意を払ってたつても知ってて、だつてのに俺がいきなり懐に入れるような真似をしたからって動揺でもしてんのか？」

「お、おう。説明が全て取られたが、そうだ。君は、恐らく私を依頼主の手先だと思っている。私の真の実力を見てしまった今、こうも近付くなどあり得ないとばかり」

尾をずるりと現して、ライオットの頬の傷へ触れる。煙管で一つ、吸い込んだ。

……あん？

「なんだ、ほとんど殺してねえのか」

「あくまで私は護衛だ。護るのに命まで奪う必要はないと判断した」

「ま、好きにすりゃいいさ。ほれ、治ったぜ」

「感謝する」

背を向ける。

隙だ。さて。

「行くとしよう、あの二人が待っている」

「あいよ」

とりあえず、200強。コイツにあ命を守ってもらったわけだ。十二分の義理だな。先の治療含め、もう少しは返さねえと釣り合いがとれん。

……ああ、そうだ。

「先、行つててくれ。一瞬だけ、知り合いに挨拶してくる」

「ならばここで待っている」

「へいへい」

もうちいつとばかし融通をだな。

さて、鳥になってやってきたのは、例の最上階。

窓に張り付いていたエメレンシアが俺の登場に驚くと同時、夢幻に招待する。

「殺されなかっただろう」

「鳥さん？」

「ああ、狐だ、狐。どろん、つてな」

狐になれば、直ぐ様抱き上げられた。ふふん、どうだい、もふもふだろう。

「ああつ、無事で良かった……！」

「時間はあんまりねえんだがよ、幾つか聞かせてくれ。お前さん、なんでここに閉じ込められてる？」

「……世界のため、よ」

「そりや大層だな。具体的には？」

「テルミがたくさんある、ということとは知っているかしら、狐さん」

「ああ、知ってる」

「各テルミに一人、エメレンシアがいるわ。私達は楔であり起点。……らしいの。教えられた事だから、詳しいは……」

「教えられた？ 誰に」

「エメレンシア。前の、エメレンシアよ」

その時。

一瞬、ノイズのようなものが走った。エメレンシア——この少女と重なるようにして、違う少女。

「私もそろそろ、”交代”するの。ねえ、次のエメレンシアにも狐さんのこと、教えても良い？」

「そりゃ良いがよ、お前さん、交代つてのをしたら、どうなる？」

エメレンシアは、にっこりと笑った。

「ね、狐さん。……私は、何もあげられない。ごめんなさい。あなたのことは……貴女のこと、知っていたの。ここのゲートを通つたでしょう？ あれはね、エメレンシアの扱う力。通つた対象の全てが見えるわ。考えや記憶は読めないけど、過去が見えるの。貴女の行動基準を、私は知ってる」

エメレンシアは話す。やっぱリマルゴとゲートは同じ、あるいは似たようなもんか。だが、ゲートは常識に定着するくらい昔からあると来た。

「私は、貴女に義理をあげられない」

「助けてほしいのか」

「助けたくはないの？」

「ちいと話した所で情は湧かんし、女子供だからって助けたくなるわけじゃあねえ。善性でも、だ。その上で聞くぜ。助けてほしいのか」

次に出た笑みは、力無かった。

「ダメ。この部屋から出たら、私は死んでしまうの。光以外のものは私を傷付けるわ。だから、願えない。欲せない」

「助けてほしいのか、聞いている」

質問に答える。口があんだろ、今は声も届くんだ。

なあ、どうだ。

「……うん、助けて——ほしく、ない」

「そうけ」

「私がいなくなったら、他のエメレンシアも、次のエメレンシアも困ってしまいわ。折角、ようやくここまで積み上げた破滅への一打を、私の願いなんかで潰すことはできないもの」

「世界のため、かい？」

エメレンシアはもう、それ以上を答えなかつた。

ただ最後に、おもいつきり駆けて良いかだけを聞いて。

……なんだかねえ。世界だのなんだの、どうでもいいんだがよ。あつちのエメレンシアに復讐しづらくなるだろ、余計なことを聞かせるんじゃないよ。

「あ、来た来た。二人ともー」

「夥しい血の痕……まさか、どちらかが怪我をしたのかね!？」

「美味しかったよー」

「な……」

とつとつ慣れるよ、アルジナにはよ。

◇
／
11

12. あっさりした終幕？

12 / ◇

フェイスに着いた。

テルミが空中都市だったから、こつちもなんかすんごいアレがアレなのかと思っちゃいたんだが、なんてことはない、普通の街。まあ規模はでかいんだが。

ただ中央に白くてまるっこいドームがあるのと、テルミ並みにはビル群があるってえのが特徴と言えば特徴かね。浮いちゃいないし地下に何かがあるってわけでもなさそうなんだが。

ライオットとは、ついさつき別れた。私はこれで、なんて言っつてな。正直フェイスへと足を踏み入れた瞬間に後ろから刺されるか斬られるんじゃないかと疑っていただけに、やはり拍子抜け。本当にエメレンシアの手先じゃねえのか、あるいは何らかの準備があるのか。

市街に監視カメラがあるようには見えず、街行く人間も、衛兵も、俺を見たってなんのリアクションも無いと来た。知らされていないわけじゃあねえだろうに。ちいとば

かし、気味が悪いとは思う。見て見ぬふりをするってんならわかるんだあが、本当に知らない様子、つてのが……なんとも。

指名手配されてるつてのは確かなはずなんだがねえ。

「エメレンシアの事務所つてえのは、こっちか」

「ん」

別れ際に貰ったファイスの地図を頼りに事務所を探す。ギルドにも寄つてくれとギルドの場所を示してくれたので、エメレンシアに接触しただろう奴へ”返し”に後々向かうつもりだ。

はたして、エメレンシアの事務所とやらは、簡単に見つかった。

何の装飾も何の飾り気も何のペイントも何の誇張も無い、四階建てのビル。それなりの広さで、四階全てが事務所だというのだから、まあ稼いではいるのだろう。ただ、めちやくちや稼いでいる、という風ではない。普通に往来にあるのもなんだかな、といった感じ。奴隷扱う会社つてのが、子供も歩く大通りにあっていいもんなのかどうかつて話だ。俺あ狐だからよくわからんのだが、倫理が云々道徳が云々と、色々あるんじゃないかと日本人の感性が言っている。

いやまあ奴隷つっても性の方向に尖がつてるわけじゃあねえか。ある意味でお手伝いさんみたいいな……いや、俺がアルジナに首輪つけてほつつき歩いてても特になんも言

われなかつた辺り、やっぱりあの扱いで良いんだろう。メリンダもソウイウ風に売られていたし。

だから、まあ。

獣と融合したそれが売られ始めた5年前よりもさらに前から、奴隷という文化は定着していて、当たり前のように人身が売買される世界つてこつたあね。

それでは、と。

足を踏み入れる。

「……………あの……………何か御用でしょうか。ここは、お嬢様方のようなお子様が来るような所では」

「エメレンシア、いるかね」

「社長にご用事ですか？ あの、失礼ながら面会のご約束等は」

「いるのか、いないのか聞いていますよ」

「申し訳ございません、約束の無い方をお通しする事は」

堪え性がなくてすまないが。

敵の仲間情けをかけるほど、優しくは無いんだ。

短い悲鳴すらも上げる暇なく首の落ちた職員。ライオットの剣筋を見て、どう振ればいいのかつてのは理解できたんだが、筋力や技量が圧倒的に追いつかんね。形態変化も

俺の思考速度に左右されるから、んなコンマ何秒で筋肉量を増減したり、つてのは難しい。

さて、小さな子供三人に構っていた職員の首が落ちれば、周囲は大パニック必至だ。必至だろう、と。

そう思つて顔を上げたそこに。

「すまんな」

「——っ！」

咄嗟に剣を生成して防ぐことに成功しなければ、俺の身体は脳天から真つ二つだっただろう。

そうでなくとも肩がぎっくりと斬れた。防ぐことに成功して、これだ。

「……やっぱりお前は、エメレンシアの手先つてことでもいいのかね」

「違う。たつた今、新たな依頼を受けた。ここの防衛。及び」

複数人の足音。

囲まれている。

「大量殺人犯——イオピクスのラナエ。お主を拘束する」

ライオット。加えて、なんぞ老獪な人間たち。

それぞれ同じ紋章のついた服を身に纏う——俺の考えが正しければ、ギルドの面々だ

ろうそいつらが。

「我らはギルド。過去の戦争、過去の闘争。その全てにおける英雄——自らを持って余す者が集う、非営利団体だ。金銭を求めず、対価を求めず、受け付けた依頼をただ熟すだけの集団。依頼主及び国民の命を脅かす災害よ、願わくば無抵抗で——」

火を、つける。

けれど顔色一つ変えない。

「話が長いよ。要は捕まれ、さもなければ死ねることだろう？」

「殺しはせん。依頼主の意向だ。四肢程度は、もぐだろうが」

「おいおい、口調がさっきまでと別人だぜ、ライオット。演技上手か？」

「親生まれやすく、隙の大きい性格で、との依頼だった。此度の依頼にその指定は無い」

「依頼内容を話すのはいいのかよ。守秘義務なんだろう？」

「そんな義務は無い。聞かれたらそう答える、とは言われていたがな」

「そうけ」

なんだなんだ、手のひらの上ってか。

俺が「気持ちのいい奴だ」と思ったのさえ、誘導されてたつてか。はん。そうかよ。

んじゃ、心置きなくやれるな。

「なあよ、ライオット。俺がお前さんに情、覚えていいると思ってるかい」

「思つてはいない。お主は狐なのだろう。人間に情を覚えることなど、無い。違うか」

「そりや違うよ。相手が人間とか狐とかつてのは関係ない。基準は色々あるんだがね、少なくともお前にも、アルジナにも、ルシアにも。あるいは、攫われた妹にも弟にも、殺された母上殿にも。情つつーのは、湧いてない」

「非情な奴だな。ならば今、我らがその二人の首を落としたとして、なんとも思わぬか。依頼主が欲すのはお主の身柄だけ。そこな二人は含まれておらぬ」

「率先して依頼対象外の命を奪うのかい」

「お主が動揺するのならば」

「そいつぁ朗報だ」

両手を拳に握りしめて、顔と同じ高さを持つてくる。

そして、形態変化。

ぼろ、っと零れ落ちる二つの拳は——イボのついた、楕円の球体。

「動揺するのは、そつちだろうい?」

地面に着いて——莫大な熱量と共に外殻が裂けた瞬間、俺の横を二つの風が通り過ぎた。

直後、エメレンシアの事務所の一階は、爆発に飲み込まれる事となる。

「はは、流石英雄サマだ。大量殺人犯の仲間でも、救える命は救うってか」

先ほどの爆風の全てを生成した剣で防ぎ切った俺の前後から、ライオットもアルジナもルシアも消えていた。んで出てきてみればこれ。アルジナを抱え、その身を拘束するライオットと、同じくルシアを拘束する槍を持った人間の女。俺の殺害より、人命を優先した、ということだ。

すっかり拘束する辺り抜かりない。まあ大量殺人の大方はアルジナの仕業だつてのは、ライオットであれば気付けたことだろうし。警戒はするか、そりゃ。

「お主の横を通り抜けた。その意味がわかるだろう」

「その気があれば殺せた、つて？」

「そうだ。お主から私に情は無いと言ったがな、私からお主には多少なりと情がある。四肢をもぐ等という蛮行は勿論、あまり傷つけたいと思わぬ。お主の、兄弟姉妹を攫われ、母親を殺されたという経歴にも同情するし、お主が各地で起こした殺戮以外の――温泉街の救済に伴う盗賊団の壊滅や他国の王族からの感謝状と言った、英雄的側面があることも認めている。無抵抗であれば、悪い様にはせん」

「お前らの依頼主が、俺の母親を殺し、兄弟姉妹をさらった張本人とわかった上で、それ

を言ってるのか」

「……確証は取れていない。だが、そうであろうと踏んでいる」

「知ってる、つてえ事だな」

じゃあ、もう。

どうしようもねいだろう、そりゃあよ。

「軽い気持ちだぜ。吹けば消えるような蠟燭の火さ。だが、復讐の火だ。なあよ。英雄なら、復讐の前にどんな言葉も説得も意味を為さん事くらい、わかるだろう」

「……そうだな。ならば、せめて苦しませずに」

火を放つ。

地に手をついて、燃え広がるは幻の炎。

それを気にする者は一人もない。ちいっと火傷したか、程度の痛みだ、この場にいるのが全員英雄とやらだつてんなら、リアクションの一つもないのは分かりきっている。

幻の炎はさらに燃え広がる。建物を覆い、浸し、首都中に広がっていく。

「何をするつもりだったかは知らんが、眠っておけ、ラナエ」

それは刃ではなく、柄だった。

首に勢いよく当てられた剣の柄。それは簡単に俺の意識を奪う。

「幻術か——ボルド！」

彼が柄を当てたのが、炎の塊でなけりやあ、簡単に奪えたのだろう。

当たり前だが、俺あこんな奴らとまともにやり合えるほど強かない。一般人から軍人程度が俺のレンジだ。一人一人が一騎当千なんざ、命がいくつあつてもたりねえ。だから、誰も気にしない事を見越して、幻の炎に隠れて狐身で逃げさせてもらつた。不可視の幻術と聴覚に働きかけるコレあ、本当に役に立つ。

そんな俺の身体に、矢が刺さる。

「っ、……弓使いか。銃は潰されるって学んだのかね、まったく」

灼熱のような痛みをガン無視して、形態変化で矢を排出、傷を消す。ついでに毒に侵された部位も捨て置く。矢に毒を塗るとか、英雄サマのやることじゃあねいだろっよ。

つか不可視の幻術が効いてねえや。なんだ、アレか。心配つてえやつか。俺もちつたあわからんでもないが、ここまで離れて見えも聞こえもしない狐の身体を正確に射止めるとか、意味が分からんね。

さつきか逃げながら、すれ違う人間すべてに俺の人間ver. や狐ver.、狐娘ver. の幻術を纏わせていく。が、さつきから弓がざくざくざくざくと俺の周囲に飛んできると来た。何が見えてんだよ。

「ん？ 蝶？ —— おおわっ!？」

視界内に入り込んだ一匹のクロアゲハ。

それが——爆発した。視界に入ってなかったのだろう、背後や上空でも爆発が起きまくる。なんだなんだ、そういう能力つか。随分と使い勝手の悪そうな能力だあね！俺は追い詰められてるけど！

「おいおい、市民を巻き込むだろ……」

「問題ないんだなあ、これが！」

「うわっ!？」

槍。投擲されたそれは、柄に付いた鎖によつて引き戻される。それを避けた先にいた奴に思い切り殴られ……たのは幻術の俺で、そいつの股下から転がるようにして逃げる。

「市民巻き込んでいいとか、本当に英雄かよ！」

「既に市民は退去済みさ。君がさつきから熱心に幻術を纏わせていたのは、僕の作った精巧な人形。街中を歩くし、笑うし、喋るふりも出来る人形さ。気が付かなかつたかな、獣では。案山子も案外役に立つ」

「その歳になつても人形遊びたあ、高尚な事だな、爺さん！」

「人の趣味を笑うものではない、というのも、獣にはわからない事かな」

地面にクレーターが残る程のパンチをしてくる半裸の男から逃げ回りつつ、降り注いでくる矢の嵐と槍、暗所に近づけば突然斬りかかられ、市民を盾にする事も出来ないと来た。幻術は……まあ、あの場から逃げ出せた事を察するに、効きはするのだろう。であれば。

「おい、ミチアガ！ 今の槍、俺に直撃するところだったぞ！」

「ははは、そう人を煽り立てるものではない。程度が知れるぞ、小童」

「これは……油の臭い？ 待てみんな、炎が来るぞ！」

視覚、聴覚、嗅覚にそれぞれ幻術を掛ける。

これで不和が起こる――。

「……落ち着きなさい。気付け薬は配ったはずですよ」

屋根上。巫女みたいな衣装の、比較的若い女。

大きい声でもないのに、その声は街中に響き渡って、直後自らを恥じ入るような素振りと共に英雄たちにかけて幻術が解ける。

テルミでも見たが、すっかり対策されてやがる。幻術つてな、他に気になるもんがあると結構簡単に解けるんだ。

「申し訳ない、取り乱した！」

そう叫んで、再度拳を構える半裸男。

眼前に迫る射出された剣を真つ向から殴つて、剣の方が折れた。拳は無傷。

……相手してらんねえ。なんだこいつら。人間じゃあねえだろう、もう。

俺は俺の命が大事だ。何よりも。復讐なんかよりも、母上殿に託されたものなんかよりも。

俺が生きている事が最優先だ。命が脅かされない事が最優先だ。

こんな——こんな、くつだらな命の取り合い、付き合つてられない。

「おい、ライオット!」

「観念したか」

ゆつくり歩いてくる奴に、告げる。

「俺あ逃げるわ。アルジナとルシアは任せた。お前なら、なんとかしてくれるだろ。一応ルシアの方には義理があつただけだな、果たせそうにないから反故にするわ」

「逃がすと思うのか」

「馬鹿だな。幻術つてのは、本来逃げるためにあるんだ。戦うためじゃねえのよ」

どろん、と。

煙と共に、不可視を纏う。

「じゃあな!」

「——見えなければ」

彼我の距離は、30mはあるだろう。

けれどライオットは、その剣を腰だめに構える。

そしてそれを振りぬいた。

「斬れないと、誰が言ったか」

ぼて、と。

落ちる。それは——意識を失った、一匹の狐。頭から、不可視の部分が減っていき、尻尾がどざりと落ちる。

飛ぶ斬撃、とでもいうべきもの。正直意味が分からない。原理も理解できない。ただ結果として、その斬撃は不可視の狐を落とした。

「……すまないな。我らとて、善悪の区別はある。だが、依頼だけが我らを動かすのだ。そうでなくては、我らは余りにも……強すぎるのだ」

丁重な手つきで、意識を失った狐を掬い上げるライオット。

そうして、拘束されたままだったルシアとアルジナも連れて、英雄集団ギルドは撤収して行く。市民を模した人形は回収され、傷つけられた市街は恐らく土を操る、石を操る等といった能力をもっているのだろう面々によって、何事もなかったかのように修復された。

かくして、街は賑わいを取り戻す——。

いやア。

命からがら、ファイスから抜け出す事に成功した。まあ知つての通りつてヤツだな。

形態変化で俺を作つて、斬らせて、俺は逃げると。あれはまあ見た目が同じ肉塊みたいなものだ。重さも質感も限りなく寄せてある。ちゃんと心臓が動いているように錯覚する幻術もかけてあるから、丁重に扱えば扱うほど気が付かんだろう。

……あるいは、見逃されたか、だけど。

正直な話をしよう。

俺はもう、復讐は諦めムードである。だつて無理だろ、あんなん。直接戦闘に入つてきたのは4、5人だけど、エメレンシアの事務所に集まつたのは30人以上はいた。アレの6倍近い人数の、全員が全員英雄、なんてのを相手にしてたら命がいくつあつても足りねえよ。

アルジナの餌になつてくれたつて対価で「エメレンシアの所へ連れていく」と約束したルシアには悪いんだが、義理立てさえも俺の命の前には霞む。その筋を通したい気

持ちは勿論あるのだが、無理なもんは無理。すまねえなあ、ホント。

そういうワケで、ファイスからも、テルミの環状範囲からも出て、名前も知らない山に入った。適当に穴あ掘って、巢の完成だ。入れば、ほうら安心感。やっぱふかふかのベッドだのなんだのより、これだよこれ。この安心感たるや。

……また密猟者とか、追手とか来るんだろうけど。

適当に逃げてー……適当に生きていきましようかねえ。

はあ、疲れたあ、と。

◇
／
？

13. あっさりした心変わり

まあ、なんだ。

元居た山でぬくぬくと、つてえのは、無理だった。追手に次ぐ追手、密猟者が後を絶つこともなく、逃亡を余儀なくされる毎日。こりやあ堪らんと、俺あこの大陸を出る事にした。シエルダンやミグエルのある大陸を出て、海の向こうへ行つてしまえば流石に追つても止むだろう、という判断。

はたして、それは正解だった。鳥になり魚になり、海を渡る事数十日。ようやく辿り着いた異大陸は、たった一人の人間と多くの動物たちが住まう楽園のような場所。無論食物連鎖は起こるし、争いが無いわけではないのだが、少なくとも意味の分からん英雄集団の手の届かない場所であることは間違いないかった。

苛烈つちやあ苛烈。だけど、死の危険はかなり薄いその大陸でぬくぬくと過ぐす事、一年。

同居している狸から、こんな話を聞くことになる。

曰く、お隣の大陸、戦争が始まるってよ。だとか。

へえ、そうなのか。知らんがね。なんて返して、ふと思いつ事があった。

「そういや、善性の方のエメレンシア。あいつあ、交代とやらをしちまったのかね、なんて。」

珍しく、家族や共に旅をした二人よりも先に、思い出を起こす。煙管を取り出して、この一年でなんかそれっぽい草をブレンドして作った刻み煙草へ火をつけて、ゆっくり吸う。

「んん……。」

「ちよいと、ラナエ。やめてー、ウチの前でそれ吸うの。臭いったらありやしない」

「一年経っただろ。慣れろ、少しあよ」

「吸わんでとは言つてないでしょ。ウチの前では吸わんで、って言ってるの」

「知らんなあ。害はねえんだ、臭いだけなら我慢しろよ」

「我慢出来んから言ってるんよ?」

「じゃあ我慢できるようになれよ。日々精進だろ、生きモンならよ」

「この大陸にいる、唯一の人間。」

白いワンピースを着たその少女は、この大陸にある樹木の全てを司っているとかいうのだから、普通にバケモンだ。俺の幻術やエメレンシアのマルゴーのような能力である

のだが、規模が明らかに違う。曰く能力というのは鍛えれば鍛える程強くなつていくもの、らしいのだが、大陸全土を覆える程になるまで果たして俺の寿命が持つかどうか。

なお、不老不死らしい。何万年も前から生きているとか。どこまで本当だかねえ。

「アウラニ。隣の大陸のこたあ、どんくらい知ってるね」

「外から来たラナエの方が知ってるでしょ。ウチは引きこもりなんよ、ほとんど知らない」

「お隣さんが戦争やるらしいんだよ。それで……あー、なんだろうな。ちいとばかり、気になる事があつたのさ。情でも未練でもないんだがね、ただ……そうだな、情報の対価を、払い忘れた、というのが正しいか」

「よおわからんけど、戻りたいなら戻れば？ あ、戦火をこつちまで持つて来んでね」

「薄情だな。一年を共に過ごした可愛らしい狐さんに何か思う所はねえのかい」

「それ言ったら、たとえば目の前でウチが惨殺されたとして、ラナエはなんか思う？」

「死なんのだろう、お前さん」

「されたとして」

「……まあ、特には。なんだ、不老不死つてのは存在しねえんだな、とは思うやもしれんが」

「二年過ごした程度で、云万を生きるウチが狐の一匹に情を抱くと思う？」

「俺は思わねえけど、お前さん、人間だろ。人間ってな、義理や貸しに関係なく、自分がそうだと思ったから、なんて曖昧な理由で情を抱くもんだってとある猫が言ってたぜ」
「人それぞれって言葉知ってる？」

「そうけ」

ふうー、と肺に渦巻く煙を楽しみつつ、その大陸のある方を見る。

行く気は起きない、が。

なんだ。未払いつてえのが、いくつかあるのが……いつまでも抱えているのが、だるいな、とは。

「なあアウラニよ。もし、この世界が破滅つてやつに向かっていたとして、お前さん、対抗手段はあるかいね」

「ウチは死ぬるんならそれでいいかなあ。死にたくはないけど、死ぬしかないのなら、抗うほどの熱量はないんよ」

「無気力極まりねえな。しかし、この話何回目かね」

「もう三十回はしたかな」

「暇だな、オイ」

灰を落として。

肩を落とす。

「行つてくるわ。なんか、このまま死ぬのは……ああ、ダメな気がする。俺あ俺の命が最も大事だったはずなんだがね」

「二年間、平和だったから。面白くなかったんでしょ？ 命が脅かされない環境が」

「……そんな危機の中毒者みてえに言うんじやあないよ」

「二定以上の知性を持つ生命体は、刺激のない生には耐えられないよ。ううん、正確には、鮮やかな色彩を知ってしまった知的生命体は、かな。何も知らなければ、暇にも退屈にも耐えられるんけど」

なら、俺あ楽しんでいたのか。

極々短い間だったが——あの復讐劇を。あの旅を。情の欠片も無い者達との、思い出とやらを。

そりゃあ良い事だな。

「アウラニの樹の枝、一本貫つていつていいかね？」

「残念ながら、霊命樹はこの大陸外に出ると持つている効力を失うんよ。それでもいいんなら」

「いいさ。ありがとさん。それで……ああ」

向き直る。白いワンピースの少女は、ほわほわとした表情で俺を見つめている。

緊張感ねいなあ、コイツ。別にいいんだけどよ。

「世話になった。戻れたら、戻ってくる。俺あ死ぬのが怖いんだ。命を失うのが怖い。復讐と清算を終えたら、必ずここに戻ってくる。なあ、女王よ。霊命の森の女王よ。それまで——死なないで欲しい」

「何言うてん。ウチは不老不死よ。死にたくても、死にやあせんて」

「俺が帰ってきたとき、アウラニが生きていたら、またここに住まわせてくれよ。ここは暇で、退屈だが……ああ、それなりに楽しかった」

「死に行くような言葉やね。ウチも楽しかったよ、ラナエ。いい？ 死んだら、泣くからね」

「情は沸いてないんじゃないのかい」

「情が無くても知り合いが死んだら泣くよ、ウチは」

「そうけ。んじや、勝手に泣いてくれりやあいいよ。俺あ泣かないからさ」

形態変化をする。

能力は鍛えりや強くなると、そう言った。

だから俺も——いつぞやの母上殿のように、巨大に。

いつか見たドラゴンへと変貌する。

「一つだけ」

「ん？」

「世界の破滅は、近い。これは古来より決まっていた。それをどうにかしようとして努力する者達がいることはわかってる。彼ら彼女らは英雄と呼ばれ、あるいは災害と呼ばれ——何かしらの、特殊な能力を付与されている」

「……」

「付与するのは天国と地獄。生と死。それはそれぞれに意思を持ち、しかし自らは手を出せない。ウチのコレは、天国によって付与されたもの。どう使うかは本人次第だし、必ずしも結果に繋がるとは言わないけど」

大きく翼を広げる。

話が大きくなってきた。知らん知らん。俺あ、復讐と清算さえすりゃあ、どうでもいいんだ。この一年で俺のこたあ理解したと思っただがね、アウラニも余計なことを言う。

「ラナエのそれは——破滅側。貴女は、世界を破滅させる側の、」

「行ってくるよ。土産話でも、楽しみにしててくれ」

「……行つてらっしゃい」

大きな咆哮を上げて飛び立つ。この身は狐。しかし、ドラゴン。体の小さな魚や鳥で数十日かかった渡海も——この身であれば。

さあ。

とりあえず、襲撃でもしますかね。

暴風を立てて飛び去って行った龍を見送って、一つ。大きな大きな溜め息を吐く。

「アウラニさん、良かったの？ 多分死んじやうよ、ラナエ」

「しようがないでしょ、本人が行きたいって言うんだから」

「だから、一緒に行かなくて良かったの、って」

う、と。

言葉に詰まる。

ラナエと仲の良かったこの狸の言う通り、一緒に行く、という選択肢は大いにあった。どうせ自分は死なないし、この森から出たところで何かあるわけでもない。獣しか存在しないこの大陸では、生態系に関わらないアウラニに関わってくれる生物というのは、限りなく少ない。皆生きるのに必死で、生きるのに忙しいのだ。

この狸とて、今まではラナエの庇護があつたから余裕はあつたのだろうが、これから自分で餌を探さなければならぬ。自分の元に訪ねてくる時間は減るだろう。

「ボクの事は気にしなくていいよ。一年前は、普通にやつてたことだし。それよりもア

ウラニさん、ラナエが来てからずっと楽しそうだったから、これから辛くなるんじゃないかなって」

「……そんなにわかりやすい？」

「うん」

即答である。

正直に言えば、あのラナエという狐。先ほどは情が湧いてないだのなんだのと嘯いたけれど、真つ赤なウソだ。凄く、情がある。愛情が湧いている。

好きだった。この何万年、色々な恋をしたし、離別もしたけれど、少なくとも獣に恋をしたのは初めてだ。この大陸から人間が滅び去ってからのというもの、もう良い人に巡り合うことはないのだろうか、なんて諦めていた分……あのぶつきらぼうで、飄々とした態度の狐は酷く魅力的だった。

もとより生殖の出来ないこの身体。相手の性別にこだわりは無く、ただ最期まで……彼女が死ぬその時まで、隣にいたいと。その体を抱いて、看取りたいと。

自覚すると、欲求とは強くなるものである。

「自分がそういう事言うから……行きたくなってきたやん」

「だから、行って来たらいって。デイル婆様が怒ってたよ。」あのバカ娘、儂の世話なんぞ考えとらんで自分の恋路を優先すればいいものを”って”

「う……」

段々と天秤が傾き始める。

元々自分の意思というのが弱い自覚はあつて、だからこそラナエの前では冷静ぶつていたけれど。……ああ、どうにも駄目らしい。考えれば考える程、いないという喪失感に苛まれる。

「いいんかなあ、あんなにカツコよく別れといて、追いかけて……」

「ボク、常々思うんだ。歯切れ悪い奴つてすごく嫌い」

「グツサグサ刺すなあ自分！」

でも、毒舌狸の言う通り……なのかもしれない。

シヤキツとしろ。パツと決めろ。

うん。うんうん。うんうんうん。

うーん。

「後一秒で決めて」

「行く！ 行つてくるわあ、ウチ！」

「そう言うと思つて、ホラ」

突然、視界が靄に包まれる。

感じるのは——風。風切り音と、突風。

「しっかり掴まって」

「な、え、ここどこ——」

「ラナエによく言っておいて。化かし勝負、ボクの勝ち越しね、つて。それじゃあ頑張って、二代目サマ」

狸の声が遠のいていく。言われるまま足元をぎゅっと掴めば、ざらりとした表皮があった。

そうして、靄が全て晴れた時。

「ん？ なんだお前さん、付いてきたかったのか」

高空——雲のすぐ下。

巨大な龍の背に、自分はいた。

◇ / 12

13 / ◇

飛んでいる。

空を——海を、飛んでいる。

「なあ、ラナエ。今から自分は……人間を、殺しに行くんやったよな」

「殺しに行くわけじゃあないさ。ただ目的の過程で妨害されたり、俺の命を狙ったりしたら——連帯責任で死んでもらうってだけで」

「ウチも人間や」

「おいおい、復讐なんて止めよう、とか言わねえよな。俺あされたもんはやり返すよ。それが好意であれ悪意であれ、全部。アウラニ、お前さんには義理があるから、お前さんにはいつか何かを返すさ。けど、俺の邪魔あせんで欲しいね。義理のある奴が敵になると、ややこしくてかなわねえ」

「……わかった」

多少。

淡い期待はしていた。ああは口で言っているけれど、少しくらいは親愛なりなんなりがあるんじゃないかと。

無いな、これは。

ラナエの口から、その声色から。義理さえないければ巻き込むことも敵に回す事も、なんとも思わないと……本心から思っている。”脈なし”という言葉が脳裏を過ぎった。

「それで？ さっきの話、暇だから聞くよ。考慮するかは別だがね」

「さっきの話？」

「天国だの地獄だの、破滅だの生と死だの。どうでもいい話だが、暇つぶしにはなろう

「ん」

「……ウチも、あくまで経験した事があるわけではないって事は承知しといてな」

「ん」

「この世界は、ものつそい昔からある。けど、何度か破滅と再生を繰り返して、大陸全土が失われる事があったり、生死の概念自体がひっくり返ったり、とにかく天変地異を繰り返しながら続いてきた」

「恐ろしい話だな、オイ」

「それは周期的で——次の破滅周期が、もうすぐなんやと。だから、ラナエがウチのどこに来てすぐに話してくれた、英雄集団やつけ。そういうのが纏まって生まれてるのは、破滅が近いから。それを止めるために、英雄と呼ばれる恐ろしく強い人間の個体を生んで、もしくは特殊な能力を付与したりして……している、何かがおるん」

「何かってのは？」

「破滅側は、破滅側の意思。それを回避するのは、何か。明確な意思があるから名前もあるんやろけど、知らんのよ。ウチの能力は天国側で、その何か側であるんやけど」

「ふうん」

あんまり興味無さそうなラナエに、がっくりと肩を落とす。聞いて興味ないの、やめてーな。

「で、俺のは破滅側と」

「うん。幻術……惑わすのは、人間を墮落させて、破滅させる。基本能力が付与されるのは人間で、元から素の身体能力に秀でる獣が能力を持つている事は滅多にないのよね。ウチの知っている限りでは二つ目」

「物を遠くへ運ぶとか、触れたものを違う場所に飛ばす、みたいな能力は、どっちに分類されるね」

「うーん、見た事ないからわからんけど、多分何か側やと思う」

「そうけ」

ラナエは。

少しだけ、ぐるると唸った。自分、狐やのに随分と龍に馴染んどるなあ。

「じゃあ、俺が今、あっちの大陸に向かいたいと思っただのは、その破滅の意思とやらに突き動かされてる可能性もあるってわけか」

「ある、と思うよ。ラナエ、死にたくないんだったら……」

「再三言うがね、アウラニ。復讐なんてやめたほうがいい、とか……そういうのは、止めてくれ。俺あ元から復讐に熱は持っていないのさ。簡単に諦めて逃げてくる程度にはな。ただ、筋がある。やられたらやり返さないとダメだ。復讐も、清算も。ギルドのやつらにだって、命を脅かされたんだ。相応の仕打ちをしねえといけない」

淡々と話す。ラナエのその言葉からは、性格とでも呼ぶべきものが伝わってこない。こうだから、そうする。そうだから、こうする。そこに意思は介在せず、当たり前のことだからやる、とでもいうような……人間社会に紛れ込んでいた頃にあった、挨拶をしましょう、とか、嬉しかったらお礼を言いましょう、とか、そういう倫理観にも似た言葉。

少しだけ、デイル婆を思い出す。あの老樹も中々に話が通じない。

「それで、まあ。助けて欲しいとは言わなかったがね。多少の、役に立つ情報をくれた奴がいたのさ。そんな時は急いでいたし、俺が何か礼をすることが助ける事に繋がっちゃまいそうだったから何もしなかったが……ダメだよな、やつぱ。貰うだけ貰ったまま、つてのは……ダメだ。他にも約束とか、契約とか、色々あるんだが……ああ、やつぱりやりっぱなしつてのはダメだ。それは、気持ちが悪い」

「結果、死ぬことになってもか?」

「嫌だよ、死ぬのは。でも平和も退屈だったらしい。馬鹿らしい、とんだ道化だがね。死なない程度に清算がしたい。死なない程度に復讐しなけりやならん。どうだ、呆れているかね?」

「ウチは不老不死やもん。そつちが何をしても、どうなつても……ウチは変わらないよ。ラナエに対する想いは、」

「そろそろ着くぞ。速度上げるから、掴まっておきなよ。シエルダンを目視したら、燃やし尽くすが、英雄が出てきたら狐に戻ろうさ。お前さん、着地手段はあるかね」

「無いけど、怪我もせんよ、ウチは」

「そうけ」

復讐、かあ。

……わからんなあ、ウチには。でも、理解できないと、ラナエには……振り向いては貰えんのかなあ。

14. あっさりした決着

それは、”戦争”に向けて、少しだけ空気のひりついていた昼下がりの事。
太陽が——落ちてきた。

14 / ◇

現状の俺が作り得る最大規模の幻炎。ファイスを軽々と飲み込み、環状のテルミにこそ届かないものの、首都の全土を焼き尽くすそのブレスは、瞬時に阿鼻叫喚の地獄を作り上げた。無論、実際に火傷したり、炭化したりする、つてえことはない。幻だからな。あくまで、燃えていると、燃やされていると錯覚する。

けれど、何の構えも無しに、何の抵抗も出来ずに燃やされる、つてのは……どうだい、効くだろう。

「な、龍だと!? 管理局は何をしているんだ!」

「龍が逃げ出している！ テルミの管理局からここまで飛んできたのか!」

一部、幻の炎に耐えうる者が出てきた。老若男女は様々だが、総じて、なるほど。基礎の身体能力に若干の優秀さが見られるように思う。あるいはこれも、その何か側、天国側とやらの人間なのかね。

さて、形態変化を解く。同時に俺の身体があつた場所へ、高速の矢や槍、斬撃なんか飛来した。一年ぼつちじや衰えやしないってか。まったく、嫌になる。ホントなんで戻ってくる気になつたんだ、俺あ。

元の体重からかなり減らしてふわつと着地した俺の横で、どすん、とかなり大きな音と、なんならクレーターまで作つて腰から着地したアウラニを余所に、狐娘の形になつて眼前に剣を生成する。そこに、飛ぶ斬撃。

「良い挨拶だなあ、ライオット。お前のそれ、俺の護衛してた時にや見せてくれなかつたが、護衛に本気じゃあなかつたってことかいね？」

「使つていたが、お主に見せなかつただけだ。そも、有象無象の軍を相手には我が身一つで十分よ」

「流石は英雄サマだ。それじゃあ俺あ災害として、この女でも人質にとるとしますかね」
「えっ」

二本の剣を生成し、アウラニの首に添える。斬れるのか斬れないのかは知らんが、

まあ不老不死だ、大丈夫だろ。

「お主、一年で外道にまで落ちたか。以前はある程度のは話は通じる、まだ救済の余地のある者だと思っていたが」

「馬鹿め。元からだよ、元から外道さ。なんせ狐だ、人道なんぞ歩いているものか」

「そうだったな。さて……今なお民を焼く炎。お主を殺せば、止むだろう」

「おいおい、少しでもその指を動かして見ろ、この……あー、名前のわからん女の首が飛ぶぞで」

「何、問題はなからう」

その声は、恐ろしい程近くから聞こえた。

咄嗟に、首を飛ばす。

次いで大きく横に跳躍した体が、飛んだ首を掴んで——くつつけた。

「おいおい……もしやとは思うが、そいつあ……マルゴ、か？」

「面妖極まりない避け方をされた後にその戦慄したような声は、些か思う所があるな。お主、いつから生物を辞めたのだ」

「斬撃飛ばしたり瞬間移動する方がずっと生物やめてるだろうよい」

一年。一年だ。

ある程度の争いはあれど、平和だったあそこで俺が何をしていたか。まあ、一応、能

力と呼ばれるものの鍛錬である。幻術は言わずもがな、形態変化と剣の生成。持ちうるこの二つを、なんとかうまく発展させられないものかと頑張った。

頑張った結果が、これ。つまり、切り離れた部位でも、くつつけりやあ、くつつく。プラナリアみたいなものだと思ってくれりやあいい。元々形態変化による傷の消失は出来たからな。部位欠損にまで範囲が拡大した程度の強化だ。副産物として、切り離された肉体もそこその時間、形態変化を受け付ける。操作も。やろうと思えばファンネルみたいなことも出来るが、俺の頭が追いつかんでやらない。

そんなことよりも、ライオットだ。奴あ今、瞬く間に俺の背後へと転移した。何の前触れもなく俺の前に現れたエメレンシアを彷彿とさせるそれは、やはりマルゴーなのだろう。

「エメレンシアの手先だったのか、手先になったのか。どっちだ」

「前にも言ったはずだ。我らは依頼を受けて動く英雄集団。それは依然として変わらない」

「エメレンシアがお前達にマルゴーを付与する事を、依頼したってことか」

答えは斬撃。

剣を生成するも強度が足りず、折られ、右腕が切り飛ばされる。落ちたソレを糸状に形態変化させて、こちらへ接合。右腕が戻る。

「童女の見た目でそうも化生染みていると、お主が狐なのかどうかさえ怪しく思えてくるな」

「俺あどこまで行っても狐だよ、人間」

「だと良いのだがな。依頼主殿曰く、お主は世界に仇名す災害らしい。知っているか。この世界はあと少しで終焉を迎える。依頼主殿はそれを食い止めるために試行錯誤を繰り返している。お主が殺さんと願う相手は、救世を生む者だ」

「おいおい今更言葉で説き伏せようってか。じゃあなんだいね、世界を救うためなら、どこの誰であろうと殺し、売り捌いても問題ないってか」

「そう、言っている」

「……おいおい。否定されるつもりで投げかけた言葉を、肯定されちゃったよ。びつくりぎやうてんだよ俺あ。世界救済のためなら、大義があれば。何をしてもいい、って。英雄サマが言うセリフじゃあねいだろうよ。」

それともなんだ、コイツも記憶の醜態とやらを？

「世界の終焉。破滅。それにより、全ての生物が死ぬだろう。すべての土地が枯れるだろう。それを防ぐためであれば、犠牲になる者が出るのは仕方のない事だ。それこそが依頼主殿の正義。故に、お主は悪だ、ラナエ」

「……は」

はは。

いやいや。なんだよ、そりゃ。

誰だよお前。あの気持ちのいいライオットを返せよ。お前……本当に。

「依頼主の正義がそれなら、お前の正義はなんだ、ライオット。お前の正義において、俺はなんだ」

「私に、我らに正義は無い。これも前に言ったはずだ。善悪の区別はある。だが、義は持たない。与えられたそれに従う事はあっても、我らが持つことは無い。それは、強い力を持つ者としての責務だ」

「気持ちの悪い滅私なことだ。言っておくけどな、俺にとつちやエメレンシアもお前達も、ファイスの民もシエルダンに住まうすべての人間も、全員悪だぜ。俺あ俺の正義がある。義を持って全てを押し通らせてもらう。何度も言うがよ、馬鹿め。そんなにも思想を持っているってんなら」

ライオットを取り囲む。

それは、内向きに固定された剣群。その球形、アウラニも含まれている、という事に、ライオットは気付いた様子。

「む——」

「お前はもう、復讐対象だ。疾く死ね」

射出。

甲高い音が、響き渡る。

……銃弾を全部弾いた時にも思ったがね。

「人間、止め過ぎだろう、お前」

「何、手遊びの程度、よ……!?!」

全方位から飛んでくる大小様々な剣をたった一本で叩き落すとか、気が狂ってるよ。でもまさか、必死に守ったやつが。

巻き込まれただけの少女が、刃物も使わずに心臓を貫いてくる、なんてことは予想できなかつたかいね。

「う、血腥い……」

「お前さん、あの森で獣の死骸とて見飽きてるだろう、慣れるよ」

「生きてる人間の臓器は独特の臭いがするんよ……」

ライトオットは達人クラスなのだろう。だったのだろう。飛ぶ斬撃も相まって、英雄と。そう呼ばれていたのだろう。

いやはや、しかし残念ながら。

首に剣を添えられ、動揺していたこの少女の方が。

何万年と同じ姿ですべてを研鑽し続けた——本当の達人である。油断しきつた人間

の心臓を貫くなど、造作もない。

「こんなあつさりした終幕、俺だつて望むところじゃあないんだぜ？」

「……ル、シ」

「おいおい、心臓失くして生きてるとか本当に人間やめてねえか」

ライオットは。

力なく、唇を動かす。

「ア、と……アル、ジナ、は」

「首を落とさないとダメか。厄介だな、能力を付与された奴、つてのは」

「ギルド、で……保護、した。会っていくと——」

「さいならさん、ライオット。演技だとしても楽しかったぜ。義理は、来世にでも返す

よ」

首を剣で割り落す。

それで、ようやく。ライオットは絶命した。

ライオットを吸って、一息。

「……ラナエ、それ」

「ん。ああ、アウラニには見せてなかったか。まあ、これも……俺の能力さね。どちらかというところ、これこそが本当の能力、というべきやもしれん」

「その名前、知つとる？」

「名前？ いや……知らないな。幻術とか形態変化とかはなんとなく知っていたけど、剣の生成もこの斬撃も、名前があること自体知らねえや。あ、そういえばマルゴーは習得できなかったな」

「……それはな、魂の摂取っていうんよ。昔から……極々限られた性質の持ち主だけが持てる、ものっそい珍しい能力なん」

「限られた性質ってのは？」

「転生」

……へえ？

「わかる？ 生まれ変わり、って奴。生まれ変わること自体は、どんな生物でもする。ウチみたいなのを除いて、どんな極悪人でも、どんな聖人でも、獣のでもなんでも、する。でも、だからといって転生の性質を帯びるってことはないんよね。それを持つことが出来るのは、何か側……つまり、”意思持つ存在”によって付与された場合のみ。ソレが本来の能力いうてたな？ じゃあ、ラナエ。あんたは実は、”意思持つ存在”側なのか

もしれん」

「破滅を回避する側、つてことか？」

「幻術も形態変化も破滅側、あるいは地獄側の能力やけど、魂の摂取は確実に回避するための能力やな。失われるはずのそれを、揺り籠に保管する。この世界は幾度も破滅と再生を繰り返してる、言うたよね、ウチ。それでも尚人間や獣がいつか続いているのは、一時代に必ず一人以上、転生の性質持ちが……魂の摂取を持つてる誰かがいたからなんよ」

アウラニは神妙な顔つきで言う。

んー、けど。

「それが、なんだってんだ？ 俺がその……」 意思持つ存在？ 側のソレだったとして、じゃあ俺の復讐には大義が生まれるんのか」

「……それは」

「生まれても、生まれなくても、どっちでもいいだろうよう。あるいはエメレンシアがその”意思持つ存在”側だったとしても、俺あ気にせず奴の命を奪うよ。ギルドの奴らなんてまさにそうだろ、破滅の回避とやらのために動いてる。でも、俺の邪魔をしたんだ、殺すよ。確実に」

「まあ……そう、か。ウチが言ったんやった。何が付与されても、どう使うかは本人次第」

「お前さんだって、森を広げる能力を持っていなながら、破滅を回避？　しようとはしてないだろうよ」

「う。それを言われると、ウチはもう何も言えん……」

何しよんぼりしてんだ、まったく。

気にする必要はないってえ話だろうよ。それともなんだ、そんなに止めたいのか。付いてきたのを見るに、メリンダみたいにそれなりの情が湧いちまつてるのかね。しかし情が湧いたからってソイツの復讐を止めようと思うか？　放っておくだろうよ、関わりたくも無い。

……いや、あるいは。俺あとうに忘れちまつたが……あまりにも、優しすぎる、みたいな……：奴が、人間にはいるんだったか。不老不死だから自己より他己に寄ってる、みたいいな？

そりやまあ、難儀な事で。

「さあて、飛ぶ斬撃、とやら。ちよいと試してみるか」

あくまで身体能力で行われたものではなく能力によるものだったらしいこの攻撃は、そうであれば、俺の想像力でも使えるというもの。原理らしい原理がわかったわけじゃあないが、使い方がわかったのなら、使える。

生成する。

するのは——大きい、大きい、大きい——剣。

テルミの時のように上空に、ではなく、街と水平になるように、生成する。それを、柄を支点に回転させると同時——能力を発動する。

「ライオット・ホルンの絶技。味わえよ、その威力！」

街が、斬れた。

◇
／
14

15. あっさりした劣敗と、慟哭。

15 / ◇

首都ファイスは割断された。

街を舐めるようにして放たれた”飛ぶ斬撃”は、多くの人々や建物を真つ二つにして通過した。幻の炎に焼かれて苦しんでいた者も、今まさに首都外へ逃げようとしていた者も、建物の中で縮こまっていた弱き者も――。

それでもまだ、英雄は残っている。避けたか、防いだか、他の理由か。いくつかの建物といくらかの範囲が無傷であるのは奴らのせいだろう。

「ここで待つてもいいんだがね」

「ウチも行くよ。だって、この人の命奪ったの、ウチやし」

「責任か？ もうライオットは死んだぜ」

「別に、罪悪感なんて抱かんけど、ラナエについていくつて決めたから、仕方ないんよ」
ふうん、と相槌を打っておく。

上下に割断された街へ一歩足を踏み出せば、飛んでくるのは懐かしい矢。避けはして

も、射手の姿はてんで見え、二射目に至っては飛んできた方向も違うと来た。どういうことだよ。

仕方がないので、先ほど振りぬいた剣をもう一度回転させんとする。

しかしそれも敢え無く、飛んできた槍によつて打ち砕かれた。まあ生成できる剣の材質はかなり脆いのがこの能力の欠点なのはわかつているんだが、そんなゼリーにフォーク刺したみたいなの……どんだけ脆いんだよ、とツツコミを入れたくなる抵抗の無さだった。

ついでにあんまりにも伸びすぎな柄の鎖にも呆れの目を向けつつ、小回りの利く普通の剣を一本生成、右手に持つ。

「ギルドつてな、暇なのかね」

「……」

「いつまで俺に対する依頼を受けてんだ。期限とか指定されねえのか。重複出来るってんなら知らねえけどよ、もつと他にやることあるだろ」

「我々は依頼でしか動かない。我らのすべき事など、遙か昔にやり終えたわ」

「機構も良い所だな、じゃあよ。まるで人間じゃあねえみたいだ。善悪の区別があるのに、それに従わねえ。損得が理解できるのに、関係ない。対価は貰わねえ、義理も感じねえ。今だって他の人間たちに仕返しや復讐やらで出てきたんじゃない、依頼を受けて

いるから、つてえ理由で出てきたんだろい？」

槍を持つ男。その言葉は、あまりにも飲み込みがたいくどさがある。

それが人間だつていうんなら、俺あとことん軽蔑するがね。

「別に、金銭に対して欲求がないわけではない。我らとて企業だ。給料は発生している。ただ、自分たちより弱き者達からせしめるものなど何も無い、というだけの話」

「へえ、なるほど。自分たちが英雄である自覚があるのか。いや、外れモノの自覚、と言うべきかね。他と違う、他より優れている。だから、無償で施しを与えるべきだ——つて？」

「民より優れているから、民に出来ない事をする。今——何の罪も無い弱き人々が、多く死んだ。災害の化け物に抵抗する事が出来なかつたからだ。ならば、我らが抵抗する他あるまい。依頼はあつた。一年前に。だが、さらに。たつた今。あつた。助けてください、と。一言——それが何よりもの、依頼だ」

依頼主は、事切れてしまったが。

槍を持つソイツはそう続ける。対価がいらねえから、依頼主が死んでも依頼は続けるつてか。迷惑すぎるな、本当に。

それに、それじゃあ”助けてください”の依頼は失敗してるじゃあねえか。依頼内容が細かに指定されてなきや解釈次第つてことか？ 随分と……アホらしい集団だな、ギ

ルドってな。

「だがよ、ライオットも死んだぜ。弱い奴らに出来ない事をするのがお前らなんだろう。ライオットは弱い奴だったか」

「……死んだ者であれば、それはすべて弱者だ」

「そうけ。俺あ強いと思うがね、あいつあ」

問答をしている間に、割断された街からぞろぞろと人影が現れた。半裸パンチ男を始めとした、あの日あの場にいたギルドの面々プラス知らん奴ら。

さらには。

「あー！ ラナエだー！」

「……」

ぶんぶんと手を振るアルジナ。無言のルシア。

さつきライオットがギルドで保護したとか言ってたが、いや、はや。

「敵かいね、お前さんら」

「うん！ 一年間、お世話になったし。ギルドに入社したんだー！」

「……」

共にいた頃より、多少肉付きが良くなったか。狼の亜人種……確かルプスだったか、それ”らしさ”も増している。今もルシアを食ってんのかね、あいつあ。つか、俺の殺

人容疑の半分くらいはアルジナの仕業なんだが、未だに隠してんのだろうか。そもそもアイツ指名手配されてなかったっけ？ ギルドに入れば指名手配解除されんのかい？

強権が過ぎねえか、ギルド。そりゃテルミの青白たちも敵対視するわ。

「あとねー？」

前傾姿勢。右に逸れる——間に合わない。

一度の瞬き。その、目を開いた時にはもう、肩口に噛みつかれていた。

「さっきので、アルジナが死んだから——殺すよ、ラナエ」

ごり、という音が響く——。

さて、どうしたものか。

溜息を吐いて——私は、眼下を見下ろした。

なんだか変に暴れまわっているギルドの会社員数名。それに対峙するは二人——今一番気になるコ最上位のラナエちゃんと、なんだかよくわからない女の子。ラナエちゃん側にいるから何かしらの特異な部分がありそうだけど、ぱっと見、普通。ので保留。

先ほどの飛ぶ斬撃。記憶にある通りならライオット・ホルンというギルド所属の英雄

の持つ能力だったはずなのだけど、街を斬っていて、且つラナエちゃんの傍に彼の死体がある辺り、”奪われた”と見るべきだろう。

”転生”の性質持ち……。まあ、おかしいとは思っていたのよねえ。イオピクスで、能力二つ持ち。さらにはあの思考力。うーん、アテが外れた、というべきかしらあ」

こと”転生”の性質に関して言えば、自分の方に一家言ある。だって、最も研究している分野だ。だから、”はじめからイオピクスで能力二つ持ちの少女”より”転生の性質持ちのイオピクス”の方が価値的に劣っているのがわかる。レア度でいえば格下。いや、勿論”転生”の性質持ち自体が酷く珍しいのだが、どうやっても前者には劣る。研究材料的に、あんまり、という感じ。

とはいえ今代の”転生”持ちだ。確保できるなら、したい。というか邪魔されたくない。

「問題は”意思持つ存在”のコンタクトを受けているか、だけど……。受けてたら、あんな大量殺戮はしないわよねえ。世界の寿命を早めるだけだし……」

破滅の時は近い。出来得ることなら、出来るだけ人間は残しておきたいと思うはずだ。一番良いのは融合した人間がもつと増える事だけど、ミグエルのせいで市場が今滞っている状態。平和国家だかなんだか知らないけれど、余計なことをしないで欲しいと思う。

英雄や一部の人間に貸し与えたマルゴーも、自らの移動ばかりで他人を運ぶ事に使わない者ばかり。それじゃあ意味が無いというのに、これだから人間は、とか思ってしまった。

「もう……今日の損失を考慮だけで頭が痛くなるわあ。というか、もつと協力の姿勢を見せるべきよねえ、他のコたち。なんで私だけがこんな忙しく……」

いつそのこと、諦めてしまおうか。

そう思う事は少なくない。自分如きに世界が救えるものか。そういう風に思う事だって、ある。してきたことの全てが報われなくなつたとしても、投げ出して逃げてしまいたい。そう思うくらいには、仲間がいない。

「ふう……嫌になるわあ、本当に。幸せ、って……どこにあるのかしらねえ」

「お前には訪れないよ、永遠に」

マルゴーを敷く。数瞬遅れて飛んできた斬撃が、確実に自身の首を刈り取る軌道で、けれど通り過ぎていく。前面に置かれたマルゴーから背面のマルゴーへ抜けていったのだ。

「……彼らは幻術と戦っているのかしらあ？」

「うんにゃ、一応アレも俺だよ。昔は出来なかつたんだけどな、形態変化で、分身を作れるようになった。頭脳はこつちにあるから、アレは大した動きあ出来ないんだが。まあ

そこは幻術との組み合わせだあな」

「そう。それで……久しぶり、ねえ。ラナエちゃん。貴女の兄妹はもう売ってしまったわあ」

「聞いてないし、興味ないよ。まあ飼育費だつて馬鹿にならねえだろうから、いらねえもんは売るか捨てるかだ。断捨離つてえやつさ」

「薄情ねえ、お姉ちゃんなのに」

「おいおい、今更俺に”お姉ちゃん”を求めるかね？」

「まずは口調を直すべきねえ」

「はっはっは、違いねえ」

鳥——だろうか。鳥の翼に人間の胴体の……見た事も無い生物。その形になったらラナエちゃんが、私と同じ高さにまで昇ってきた。

目線は、対等。

「まあよ、俺あお前と楽しくおしゃべりがしてえわけじゃあねえのさ。ちよいと死んでくれよ、エメレンシア」

「うーん、残念だけど、貴女のちっぽけな復讐なんかより、もつと大きなものを背負つているのよねえ、私。これでも世界にとつて最重要で、最優先に命を保護されるべき存在なのよお？」

「いいよ、世界が終わっても。それでいいから、お前を殺したい。ちっぽけな復讐なんだ、楽に叶えさせてくれよ」

「困るのは貴女だけじゃあないのよお。世界は貴女を中心に回っているわけではない。山で育った無知なイオピクスにはわからないだろうけれど、この世界には沢山のヒトや獣がいるのよお？」

「誰かが困る程度の事は、俺が復讐を取りやめる理由にはならん」

ラナエちゃんの周囲の空間が揺らぐ。そこに、無数の剣が生成された。あらら。一体どれほどの”魂の摂取”を行ったのかしらね。すべてわかつていての大量殺戮だとしたら……その諦めは、到底許せるものではないのだけど。

私が必死で新しい世界を切り拓こうとしている横で、揺り籠に、なんて。

「一つだけ、聞かせて欲しいのだけれど」

「なんだいね」

「貴女は、”意思持つ存在”の事を知っている？ 彼と話した事があるかしらあ？」

「知っているが、話したことは無いね。知ったのもついさつきさ。あそこにいる奴に教わった程度の知識だ。それが、どうしたね」

「そう。やっぱり、その程度の知識で、その程度の心構えで私の邪魔をしようとしているのねえ。わかったわ……もう、いい。最初は確保するつもりだったけど、気が変わった

わあ」

マルゴを展開する。それは、すべてを覆うほど。

見渡す限りの——見え得る空の、すべてを。

「……おいおい」

「言つたでしよう、ちつぽけだ、つて。私はね、ラナエちゃん。貴女が思っている程弱くはないし——貴女が考えている何倍も、何十倍も大きな使命を背負っているの。今いる人間の誰よりも、今在る生命の何よりも大切な天命。世界を救う——差し迫る破滅に対し、破滅に耐え得る生命の創造を授かった救世主」

「はん。随分と自分に酔つた語りだことで。世界を救うためなら、誰を殺しても、何を奪つてもいいつてか」

「良い、と言っているのよ」

「ライオットと同じか。ダメだな、おい。その”意思持つ存在”とやらの能力を付与されると、みんな頭がいつちまうらしい。俺あ狐だがね、人間の倫理観も、知識としてあ持つてんだ。どうかしてるよ、お前達」

「ファイスには生まれたばかりの赤子や病人もいたけれど？」

「俺あ狐でね、人間には同情しないんだ、余程の事がない限りは」

一貫性のない言葉。やはり、その程度という事だろう。

山育ちのイオピクス。世間を知らない狐の少女。世界を知らない、何も知らない無知な子供。”転生”の性質を有してしまったがために付け上がり、何でもできると思い込んだ。確かに自身より格下の存在であればどうにでも出来たのだろうか——結局は猿山の大将だ。ああ、狐か。

「それじゃあ、ラナエちゃん。さようなら。次元の狭間で、一生を彷徨うといいわあ」

「——ッ！」

閉じる。

上下左右前後。彼女の全方位から、マルゴを開き、押し付ける。逃げ場はない。否、自らのいるところ以外の全てへ淵たるそれを叩き付ける。下で戦っている英雄達も、彼女のそばにいた少女らにも、辛うじて助かったファイスの人間たちにも。

何かを言おうとしたのだろう。

けれど音すらも飲み込んだマルゴによって、彼女の断末魔が聞こえる事は無かった。

さようなら、ラナエちゃん。ちっばけな復讐を胸に抱いたまま、永遠を過ごしなさい。淵が閉じる——。

踵を返そうとした。

すべてが綺麗になった眼下にもう用は無いと。けれど。

「あつ……ぐ、う?!」

いつかの槍を思い出す、背面からの一突き。それは同じく心臓を貫き、胴を貫通する。ただし此度のものは槍でなく。

「木……枝、かし、らあ……?」

「月並みやけど」

こつ、こつ、と。自身の心臓を貫いた枝が振動する。激しい痛みと共に、それが歩みによるものだとわかるまで、そう時間はかからなかった。

そして、まだ遠いはずなのに——嫌に耳に響く、声。

「許さんで、自分。死にや」

耳じゃない。これは。

これは——魂が。

「ウチは昏き森の女王……二代目やけどな。ウチの想い人を奪ったその罪。魂の全てに刻んだるわ」

どうして、こう。

心の底から——どうでもいい理由で、私の邪魔をするのか。

私はこんなにも頑張っていて、こんなにも辛い思いをしているのに。

家族の死も、想い人の死も、私は乗り越えてきたのに！

「邪魔を……しないでよお！」

なんで——私ばかりが、報われないのか。

ねえ、なんで？

◇ / 15

16. あっさりした衝突と脱出

真っ暗だ。

暗い——どこまでも暗い。黒い、と表現してもいいかもしれない。

エメレンシアのマルゴーに飲まれて、体感時間は二日程。ずっと中空に浮いたまま、漂っている。

時折、光の塊のようなものが通り過ぎるが、何があるというわけでもない。どうする事も出来ない無為の空間。

永遠を彷徨え、と言っていたか。

……死ぬまで、か？

16 / ◇

「……自分、人間じゃないんな？ 心の臓貫かれて死なん人間はおらんやろ」

「そういう、貴女は……」意思持つ存在、側の人間、かしらあ？ 樹木を操る能力……それも、魂に影響する類、ねえ」

自身に触れるよう展開したマルゴーによる転移で、木の枝から抜け出す。胸に空いた穴は酷く痛むけれど、既に血は止まっている。後は、治すだけ。

「ま、どうでもええわ。もうウチん中では自分が死ぬんは決定事項やし」

「そんなことをすれば破滅が避けられなくなるわよお？ 破滅によつて何が起こるのか、どれほどの命が失われるのか、知らないんじゃない？」

「知つとるよ。聞いたことがあるだけやけど。まず、食べるという機能が消える。けど腹は減る。喉は水さえも通さなくなり、けれど喉は渴く。体は徐々に硬化し、動くことさえままならなくなり、最後には罅割れて土塊となつて命が終わる——やったか。死ぬほど苦しくて、けれど死ねなくて、これが一生続くんか、つて思つた後で、全身が崩れていく恐怖に脅かされ、死んでいく」

「身近に”転生”の性質持ちがいたのかしらあ？」

「うん。聞いた時はぞつとしたし、それを回避できるのなら——回避するために尽力するのなら、手伝わんけど、応援くらいはしてもええかな、と思つとつた。けど、もうダメや。ラナエに手出した時点で、自分はウチの敵やから」

破滅は、単純に世界が消えてなくなる、というものではない。

相応の苦痛があり、相応の恐怖がある。これを持ち越える事が出来た事例は一つとして非ず、ただ”転生”の性質持ちだけが、記憶を持ちこして新しい生を受ける。

ただ、覚えていたとして——それを明確に思い出せる存在となると、どこか心の欠けた部分があるのだろう。それほどに恐ろしいものだ、私は知っている。

「どうして、手伝ってくれないのかしらあ。貴女や、他の能力持ちが協力してくれたのなら、もっと早く、もっと簡単に物事を進められたのに」

「それについてはまあ、申し訳ない気持ちはあるんよ。ウチは諦めたから。破滅は回避できない……回避したいと思うほどの気持ちは無い。聞けば、他の奴らもそうなんね。自分一人にだけ押し付けて、その上でウチは自分を殺したい、いうんやから、酷い話やとは思う。人間に罪悪感なんて抱かんけど、自分が背負ってるものの大ききくらいはわかるつもりや。自分に対してだけは、多少の後ろめたさはある」

「それでも、邪魔をするのねえ」

「ウチは死ぬ気満々やからな。もう飽いたよ、今生には。なら、最期くらいは好きな人になりたい」

そんな。

そんな、独り善がりな気持ちで邪魔をされるのは——あまりにも。

「ラナエちゃんもだけど……許し難いわあ、本当に。貴女達のせいで、数多の命が失われ

「るのよお？」 意思持つ存在」も嘆いているわあ」

「知らんわ。ウチは話した事ないしな。いる事は知つとるが、知つとるだけや。そいつの感情なんて知つたこつちやないんよ」

「そう。それじゃあ、一応名前を聞いておくわあ。ああ、私はエメレンシアというのよお？」

「アウラニ。あつちの方の大陸でな、昏き森の女王、なんて呼ばれとる。ちなみに不老不死や」

アウラニ、ねえ。天国側らしい名前だわあ。

本当に——反吐が出る。もう少し、自分の役割を理解した方が良い。

「死にや」

「死になさい」

戦端は突然開かれた。尖り伸びる枝——そして、上空に出現した巨岩。当然、速度の面では枝が勝る。マルゴを展開するも、ガラスでも割るようにして砕かれ、それは肩口に深く突き刺さった。

その全てを押し潰すように巨岩が降る。転移して範囲外へ逃げれば、眼下ではファイアの街が見るも無残に押し潰された。ああ、オフィスに置いていた小物類が、潰れてしまったわねえ。

きしみ音。そして罅と共に、巨岩が内側から砕ける。中より這い出すは木の枝。それはそれぞれに上を向き——私へと伸び縋る。

「あらら……能力の強度でいえば、あちらの方が格上ねえ」

「100年も生きていない小娘に負ける程、ウチは弱くないんよ」

転移を繰り返して枝の猛追を凌ぐも、転移先に既に枝が張り巡らされている。周囲一帯、巨大な樹木が突然生えたかのような光景になっていて、先ほど潰されたファイスなんかはもう見る影もない。枝は絡み合い、太くなり、さらにさらにと伸びていく。制限という言葉を知らないのか、成長速度も狙いの精度も凄まじいの一言だ。

こんな強力な存在が今までどこにいたというのか。別大陸といったか、少し前に人間が全て死滅したからと興味を持たなかったのは悪手だったなと恥じる。

「どうも、殺しても再生するみたいやからな。脳を潰して樹の中に閉じ込めてやるわ。そのまま、破滅の時まで過ごすとええ」

「別大陸に——貴女の故郷があるのねえ」

「っ！」

猛攻が激しくなる。動揺、したわねえ。

だから——飛ぶ。別大陸。人間のいなくなつた、森しか存在しない大陸へ転移する。

瞬時に切り替わつた景色は、なるほど大森林。どこまでも広がる森のその全てが、先

ほど自身を貫いていた木々であるとはわかる。アウラニ。天国の聖域、ねえ。

じゃあ、ここに。

火山の溶岩でも落としてみれば、多少の力は削げるかしらあ？

上空にマルゴーを展開。繋げる先は、とある火山の火口。黒き淵から煌々と輝く炎液が滴り落ちる。

異変を感じ取ったのか、森の獣たちが騒いでいるのがわかる。ざわめきは次第に大きくなり、鳥類が一斉に飛び立っていく。

「さあて——あら、早い」

瞬く間に、視界が枝で覆われた。背後……つまり向こうの大陸から伸びてきた枝だ。

この大陸でなく、龍を用いても数日以上かかる海を越えてきたというのか。

枝は受け皿を作り、溶岩を受け止める。……樹なのに燃えないのねえ。能力故、かしらあ？ それに……マルゴーの方にまで伸びて、ああ、砕かれてしまった。受け止められた溶岩は嚴重に包まれて、海へと運ばれる。速度も操作性も脅威的ねえ。

「——自分、とことんウチの逆鱗に触れていくなあ」

「お早いご到着ねえ。そんなに大事だったのかしらあ、ここが」

「当たり前やん、そんなの。故郷大事にしない人間がどこにおんねん」

「……そうよねえ、故郷は大事だわあ」

私も相当である自覚はあるけれど、このコに人間を名乗られるのはちよつと釈然としないわねえ。樹木を操るのもそうだけど、不老不死、と言ったかしらあ。化けものじゃない、そんなの。

「じゃあ、頑張つて守ると良いわあ」

展開する。

ラナエちゃんを飲み込んだ時と同じく——見え得る限りの空という空、その全てに。大きいマルゴーではなく、無数のマルゴーを展開する。そこから——溶岩を、あるいは酸を、とにかく有害なものを滴らせる。

枝がそれを受け止めんと伸びるけれど、果たして追いつくのかどうか。その程度の数じゃあ、止められないわよお？

「くっ——外道が！」

「人道を外れている相手に言われたくは無いわあ。それじゃ、ね？」

また、転移で戻る。

元ファイスのある位置に聳え立つ巨樹をしばらく観察して、動かない事を確認。やっぱり他の能力と同じく、本人の意識が届いていないと知覚を含む正確な操作は出来ないのねえ。まあギルドに自律する人形を作り得る英雄がいたけれど。

「ふう。もう、人の身体を良い様に貫いてくれちゃつて。痛いよお、これ」

あんまり相手にしたくないわねえ、ああいうのは。

真っ暗だー。暇だー。

いや、腹も減るし喉も渇くし、そろそろ出たい。どっちも形態変化でどうにかなったりしないでもないんだが、自分を食うつてのは色々思わないことが無いでもないというか。

光が踊る。捕まえられるんじゃないかと思つて形態変化で網を作つてみたんだが、見事にすり抜けた。なーんのアクションも起こせねえつてのはもう暇オブ暇。

とりあえず煙管を吸つて、ぶかぶかとやるだけの日々。そう、日々だ。もう一日二日じゃない。一週間以上経っている。

「そもそもここどこなんだ。次元の狭間つつったか。次元……アレか、一次元二次元の。三次元四次元十一次元……いや知らんが。ぬあー、どうしたらいいんだ。誰かいねえのか、おーい！」

壁も天井もないから、反響もしない。

ひえー。

「何か用かー!」

ヒエツ。

え、何? 声したけど。え。誰かいるのか?

今まで居なかった分、ちよつと怖いんだあが。

「あー、誰かあいるのかいね?」

「おう! いるぜ、ここに!」

「どこだよ……」

やたら元気な声。半裸。パンチ男を思い出さない事も無いが、それよりも……声色は莊嚴というべきか。威嚴があるけどフランクというか。

「どこと言われてもな! はは! ここの全てに、俺はいるぜ!」

「……えーと」

上下左右、前後。目を向ける。

でも真つ暗だ。まーつくら。枕かもしれない。

声も、全体から聞こえてきていて方向は定かではない。

「名前を聞いてもいいかいね? 俺あラナエってんだ」

「名前か……うーん、色々あるんだがな!」 何か、”意思持つ存在”、”思考する存

在”とかが一般的だな!」

「本気で言ってるのかお前さん」

黒幕じゃねえか。いや元凶か。

エメレンシアの言が正しけりや、エメレンシアが密漁だの奴隷商人だのを始めた原因。あと俺に能力を授けた奴？

「本気も本気さ！ それで、なんでこんなところにいるんだ！ ここは何もないぜ！」
「そりやこの一週間でわかつたよ。んで、居たくて居るわけじゃあない。出れるのなら今すぐにでも出たいんだがね」

「そうか！ それじゃあ、出してやるよ！」

目の前に、穴が開く。

マルゴの白い版。どちらかというどゲートに似たそれ。

……そんな簡単に出られんのかい。

「どうした！ 出たいんじゃないのか！」

「いや、あまりにもあっさりでな……。あー、えーと。破滅、つていうのは、必ず訪れるのか？ 避けようがない？」

「今の生命じゃ無理だな！ 耐え得る体、耐え得る魂を手に入れない限りは無理だ！

まあ安心しろ！ 破滅しても、その時に生まれた恐怖や生への渴望の“感情”を用いて、新たな生命が生まれる！ 定期的に断裂して、それでもこの世界は続いていくぞ

！ 今の世界は潰えるけどな！」

「止められねえのかい、そりゃあ」

「無理だな！ 法則としてそれは存在する！ だけどまあ、止められなくても、破滅が無意味になるように他の生命の強化を人間に依頼したりしているぜ！ いつまでも破滅に怯えるのは可哀想だからな！」

「……そうけ」

まあ、いいや。

俺の復讐にやあ関係ねえいし。それで終わるんなら、それだけだろう。

踏み出す。白いマルゴ、ゲートの方に。

「なんだ、お前さん。意思持つ存在だったか、思考する存在だったか」

「ああ！」

「俺をこの世界に呼び寄せた理由は、なんだいね」

「試験だな！ 未来のための！」

「はん？ まあ、よくわからないが……お前さんのソレのせいで、エメンシアの目論見も、生命の強化とやらも失敗するのさあ。よく考えてから動くべきだったな」

白いゲートを通る。

光。ああ、自然の光だ。目が眩む。

背後、閉じていくゲートから声が聞こえた。

「応援してるぜ！ どつちに転んでも、俺は見ているだけだからな！ はは！」

……ありや悪魔かなんかだろ、絶対。

神様だのなんだのじゃねえよあんなの。怖い怖い、関わらんとこ。

こんにちは、狐さんと。

その口が動くのを見た。でも聞こえないから幻術へと招待する。夢幻へと。

少女は、見た目は。

エメレンシアだ。けれど、アイツじゃなくて、いつか出会った少女の方の。

「わ……これは、なあに？ ああ、待つて、待つて。聞いたことがあるわ。そう……確か、夢のような幻。だったかしら。前の前の、前の前のもっと前の私が、とつても楽しかったと……そう、言っていたはず」

「……お前さんも、エメレンシアのなんだあな」

「あら、喋れるのね、狐さん。ねえ、膝の上に来てはくれないかしら。私、動物つて、触ったことが無いの」

「あーよ」

前の前の前の前の、もつと前、と来たか。まあ一年以上経ってる。もうすぐ交代と言っていた時からそれだけだから、そういうことなんだろう。

「こいつらは……それほど短い命を、ずっと続けているのか。」

「わあ、ふさふさしていて、ふわふわして……」

「もふもふ、って言うんだあわ」

「もふもふー」

このエメレンシアは、あまりものを知らないのかもしれない。口調も少しだけ幼く感じる。同じエメレンシアでも、それぞれに違いがあるのか。

撫でり、撫でり。んー、落ち着く。優しい手つきだな。本当に。善性が伝わってくるようだ。

「……でも、ずっとは居られないの。狐さん。私は……私達は、楔だから」

「ん、なんか前も聞いたな、それ。どういう意味だ」

「私達はね、短い期間で、ずっと転生を繰り返しているの。人工的な転生よ。そうして、無理矢理転生の性質を獲得しているわ。それが環状に、テルミの最上階に楔として刻まれている」

「小難しい話をするなあ、お前さん」

「ふふ、狐さんには難しかったわね。ええ、でも……大切なことだから。私達はね、次のエメンシアに託すの。見えた景色とか、考えた事とか。外の世界では生きられないわ。すぐに死んでしまう。だからこの部屋で、自分の番が終わるまで、ずっと。次の自分にすべてを託すのよ」

「……自分が長生きをしたい、とは……思わねえのか」

「長生きをして失うものがあるくらいなら、託した先に得られるものを選ぶわ」

善性、なのだろう。

アッチのエメンシアと思想は恐らく同じで、ああ、多分、違いはないのだろう。

——”まあ、なんだ……一番、不真面目で、一番、生への渴望の強いお前に——すべてを託すよ、ラナエ”

母上殿の言葉が想起される。保身で失うものと、繋ぐことで得られるものの天秤、ねえ。

あまりにも、高尚だ。眩しいが過ぎる。そんなものにやあ、俺あなれんね。

「そろそろ。自警団が狐さんに気付く頃だわ。知ってるの。あなたはまた、撃たれてしまふ。そうなる前に、お行なさいな」

「……ああ、そうするよ。けど、あー、エメンシア」

「なあに？」

前のエメレンシアは、ソレは伝えなかつたのかね。
あるいは、わざと伏せたのか。

「俺あ、ラナエってんだ。少しの間でも、話せて良かった。……いつか、溜まった義理を返しにいくかもしれないから、その時のエメレンシアによろしくな」

「……いつかが、あればね」

そう、寂しそうに笑って。

俺もエメレンシアも、夢幻の中から抜け出すのだった。

◇ / 16

17. あっさりした目標設定

17 / ◇

さて、次元の狭間とやらから脱出できたは良いが、今の所これといった“勝ち目”が見つからない。無論今までにあつたかどうかと問われると微妙な所なのだが、なるほど、能力の強度差というのはいかにこれほどか、といった所感。あんな広く触れちゃあいいねえもんを展開されて、俺あどこに逃げりやあ良かったのか。

それに、あの場にいた俺以外の奴ら。アウラニを始めとして、もう敵になりはしたがアルジナやルシア、名前も知らないギルドの面々。同じくマルゴーに飲まれたのか、あるいはどこかへ運ばれたのか。俺が気にする事じゃあないんで探しゃあしないんだが、なんとも、なんとも。

次元の狭間から排出されたのがちょうどエメレンシアのいるビルのペランダだったからああして会話をしはしたが、本来ならもう辿り着けあしないのだろう。なんせ、テルミの街は今物々しい。

“そういうや戦争やるとか言つてたな、と一服。

”意思持つ存在……” 思考する存在、ねえ。なんつーか、カミサマつてなもつと

どっかしら親しみを持てるような奴の方が良いと思うんだあが。あんな、上っ面だけにフランクさを縫い付けたような奴、とつとと解雇するべきだと思うわ。上司がいんのかしらねえけどよ」

呟く。

戦争、戦争ね。それも”思考する存在”の思し召しってか？　けどファイブがなくなっちゃって、戦争なんかできるのかいね。そもそもどこことやるんだ、ミグエルか？

つか、俺あこの大陸の事なんも知らんなあ。興味があるかって聞かれたらいや全く、つてえ答えるんだが、往々にして無知は不利と相場が決まってる。ふむ、じゃあ童女は童女らしく、ここはいつちよ大人に聞いてあ見るかね。

さて、どろん。テルミ内部故、質量変化だのなんだので監視塔とやらに察知されるんだろうが、まあ一瞬間聞いて逃げりやあい話。適当なデコイでも出せばそつちに気を惹かれるだろうよ。

「ねえ」

「ん？　わつ、驚いた。いつからそこにいたんだい、お嬢さん。ダメだよ、ここは立ち入り禁止だ」

「お父さんが、戦争だから、つて。出て行つたきり、帰つてこないの。戦争つてなあに？」
「……そうか。あ……いいかい、お嬢さん。我が国は、ナトウムという所と戦争を行

う。戦争というのは……沢山の人が一か所に集まる必要がある。君のお父さんは今、そこに行っているんだ。大丈夫、必ず帰ってくるよ」

「……わかった」

知らん名だあ。知らん名だと、聞いたところでどうしようもないんだよなあ。まあミグエルじゃなくて良かったというべきか。加勢に行ったりなんだりするつもりはないが、善性が失われるのは惜しまれるべき事だと日本人の倫理観が告げているからな。

ここは立ち入り禁止だから、あっちへ行こうか。そう手を引かれて大通りの方へ出る。多少、コイツが何も知らないふりをしていて、青白の軍勢の前に引き出されるんじゃないか、とか思っちゃいたんだが、そんなことはなかった。

ただ駐屯所らしきところに連れていかれそうになったので、一人で帰れるよ、と言って離脱。

何のアクションも起こしてきそうにないので、そのままゲートへ。

「ナトゥム、ねえ」

アドリアンにでも行って、情報収集をすべきか？

……なんなら、あの学校。あそこに行ってみるのもありかもしれない。結局あそこ、謎なんだよな。まだ。

決まりだ。あの学校へ行ってみよう。

さて、アドリアンを通り過ぎて例の盜賊団の罅へとやってきた。特に見張りだのなんだのはいない。あの盜賊団でなくとも隠れ家としちや優秀なんだ、そういう奴らに再使用されないよう塞いでおくべきじゃあないのかね、とか思わないでもない。

洞窟に入つて、道順なんざ覚えちゃいないのでとにかく下る場所を下る場所を、下り坂を下り坂を選んで進む。途中何度か行き止まりがあつた。簡単にあ辿り着けないような構造になっているらしい。どういう理由なのかね、まったく。

前回は一時間ほどで行けたのだが、今回はかなり苦戦している。あの曲がり角の灯りさえ見えりやあいんだが、一時間を超え、二時間、三時間くらいを過ぎてもまだ迷う。左手の法則右手の法則どっちも試したんだが効果なし。前の俺あどうやって行つたんだ。

「おーい、ロスー！ 迎えに来てくれー！」

流石に我慢ならず、叫ぶ。しようがねいよ、あその関係者で名前を知ってるの、口スしかいねえんだから。いやまあ恐らくエメレンシアも関係者なんだろうけど。

静寂。

……声が届かない程俺と学校の距離が離れているか、そもそも聞く気が無いかのどちらか。

どうすつかなあ、これ。洞窟壊したり掘削したりつてのは流石に……流石の俺でも分別というものが。いや地上の方の空洞で爆薬ドツカンしたりしたけども。

「ふむ。じゃあ、運だな、あとは」

取り出したるは、アウラニから貰った霊命樹の枝。一応この枝……というか霊命樹自体がアウラニの能力の一部で、ぶつ刺した相手の命を吸うとかいうとんでもない代物である。霊命樹の本体たるデймという樹がこちらの大陸にないため、その効果は無いとのこと。ちなみにデймの樹は喋る。性別は女らしく、デйм婆と森の動物たちから親しまれている……だったか。

海渡つてなんも知らねえでいた俺に、あることない事吹き込んだあの狸、まだ生きてるといいがねえ。

それを、洞窟の床に立てる。

そして手を離せば、バランスを失い、前方右方向に倒れた。

「犬だって歩きやあ災難にも幸運にも当たるんだ。狐にや遭えないつてえこたないだろう」

生きるとは棒を倒すによく似たり。

……んなこたねえわな。

いや。いやいや。

運も馬鹿にならない、という事で。

「変わったっちゃあ、いねえな。見た目あ」

辿り着いた。地下の大空洞の中に建てられた、学校。

地上の建造物とは明らかに違う、俺の記憶にあるような造りのそこ。見れば見る程、異質。なんだってこんなところにあるんだ、って疑問と、誰が作ったんだって疑問。造ったやつが生きてんなら話してみたいねえ、同郷やもしれん。

長い石段を下りていく。校庭や中庭に生徒の姿は無く、ロスの姿も見えない。ロス以外の教員はいんのかね、ここ。

石段を降り切って、狐の亜人種の姿へとどろんと変化。

入口……あー、昇降口って言うのかね。それを探す。

おお、あつたあつた。

「勝手に入っていいもんなのか？ いやまあダメつつわれても入るんだあがよ」

一応、足の汚れを形態変化で綺麗にして、中へ。
うわー、のすたるじい。

学生時代の記憶なんざ遠い彼方の向こうだけど、なんか「ああこんなんだったこんなだった」って思う自分がある。構造や内容は全く違うんだろうけど、雰囲気は凄くそれっぽい。ここを作ったやつは拘りがすごいな。

誰もいない廊下に行く。空き教室が沢山あって、けれど教室の中、背面の壁には習字やら絵やら、子供たちの作品らしきものが飾られている。……つか、俺が懐かしいと思うってことは、ここは日本の学校って事だよな。

こんだけ日本文化の無い世界で、どうしてここだけ……。ラテン系の学校じゃあねいのか。

ちよつと思ふ所があつて、空き教室の一つにあつた机と椅子。その一つに座つてみる。

頬杖を着いて……ああ。

なんだ、これ。平和だな、何してんだ俺あ。復讐をしたくて、別にしたくなくて、どしたもんかと考えてて……そもそも死にたくはないはずで、けれど退屈が嫌で。

何がしたいんだ、俺あ。刺激を求めて復讐をやりに来た、つか。いや、復讐は母上殿から託されたもんだ。それを遂げるのは……優先事項の問題で。

「なあよ、この場所は、悔恨を促す効果でも蔓延しているのか？」

「しているよ。ここは、自らを見つめなおす場所だから。ラナエ。死後の世界ではない、と言ったけれど、審判の場ではあるんだ。ここは、選択の此岸。卒業か退学か、どちらかを選ぶ場所」

「卒業ってな、なんだ。死か」

「合っているよ」

教壇に、いた。

ロスだ。柔らかい笑みと共に俺を見ている。

「破滅のことはもう、知っているかな」

「おう」

「破滅が訪れると、生命は多大なる苦しみと共に死に絶える。食べる事も飲む事も出来ずに、空腹と口喝に喘ぎながら、土塊となって崩れて死ぬ。生命がいなくなると世界は萎み、潰れ、一点にまで収縮する。その後前の生命が残した感情を、魂が新たな生命を生む。伴って世界は広がり、再生とする」

黒板に図解を描きながら、ロスが話す。

思ったより破滅だな。想像以上に破滅してる。

「魂は有限で、流転する。だから、前の魂と新しい魂の総量は同じだよ。何になるかはわ

からない。ただ、同じであるというだけ。そうして、周期的な収縮と拡張を繰り返して、この世界は続いてきた」

「魂の総量と同じってな、おかしな話じゃあねえか。人間と動物が融合して、さらにあ分離した奴らがいるんだ、総量と同じなら、そいつらのせいで死ぬ命があることになる」
「今までは、そうだった。けれど今回に限って言えば、少し前に隣の大陸で多くの人間が死んだことで、余剰の魂があった。だから、今回ばかりは、元の人間と、融合した人間の二つが同時に存在できる状況」

チヨークや黒板消し。懐かしい道具だあね、そりゃ。

それらを使って、図説がされていく。

「前までは、融合先より元の人間の方が構成が強いから、生命の強化自体が上手く行かなかった。すぐに死んでしまう、というべきだろうね。くつつけても分離してしまっていた。けれど今回は、元の人間を死なせることも、融合が解ける事も無く、強化状態を保つことが出来ている」

「随分と……いや、なんでもない」

「だからここは、選択の此岸なんだ。元の人間が一度預けられる場所。破滅の恐怖を前に死を選んで卒業するか、死の恐怖に怯えて破滅の時を待たんと退学するか。私は後者を選んだよ。けれど、卒業者の卒業までに少しだけの猶予があるから、その間だけ、彼

らのお世話をするために残っている」

「前に俺は、助けに来ると言った。ロス、アンタは待っているといったよな。あんたの思う助けってな、なんだ」

彼女は、目を伏せる。

「――破滅の回避」

……。

だよなあ、と。

つまりまあ、母上殿は、強化された方の生命か。あの密猟者も、そもそも殺す気はなかったようだしなあ。逃げ出した母上殿が連れ戻されんとしていた可能性も無きにしても非ず、かあねえ。はあ。

約束事のブッキングだあな。母上殿に託されたモンで、エメレンシアへの復讐。よってエメレンシアを殺す。だが、奴を殺せば破滅とやらは回避できず、ロスと交わした約束が破綻する。

……ん、いや、待て待て。

「生命の強化をしたところで、破滅が回避できるわけじゃあねいだろう。確か、生命の強化は破滅を意味なくするってえだけで、つまり強化されてねえ奴は破滅に飲まれるんじゃないあねえのか」

「そう。だから、私が望むのは破滅の回避だよ」

「つてなつてくると、全く違う話だ。どうすれば破滅とやらは回避できる？ 生命の強

化が必要で、だが元の人間は生きるにせよ死ぬにせよ、強化されるわけじゃあない」

「もし、私に会えたら、色々なものを託すつもりだった。それは君に託すよ、リナエ」

「おいおい諦めんなつて。復讐は成し遂げる。その上で破滅を回避すりゃあいいんだな？ それを考えて、実行すりゃあいい」

テルミのエメレンシアが言っていたが、ゲートもマルゴーも、通ったモノの情報を抜き取るんだつたか。それプラス本人を攫って何かしらをする事によつて、獣との融合をさせる。これ、獣側はどうなつてるんだ？ 死んでるのか？ ……いや、今は余計な事は考えなくていい。

つまりエメレンシアの選んだ手段とは、今回のチャンスを用いて強化生命を作り、破滅を無意味にさせるといふもの。”思考する存在”が依頼したと言っていた辺り、エメレンシアが考えたかどうかは怪しいが、その辺は追々で良い。

この手段では元の人間は死ぬ。どうやっても死ぬ。強化生命のみが破滅をスルーして、元の人間は空腹と口喝の渦中で土塊になつて死ぬのだろう。それが嫌なら、ここで卒業しろ、と。全くふざけているな。メリンダとアルジナはじゃあ、ここを退学したのか。

エメレンシアの達した答えは、今の生命ではどうしようもないから、同じ記憶や性格を持った強化生命にすべてを託して、諦めて欲しいと……そういう事だろう。それしか方法がないならそれもアリだ。なんでその強化生命を奴隷にしているのかとか、聞きたい事は山ほどあるんだが。

少なくとも対破滅という点で見れば、何もできなかったという過去に比べりやマシな手段なのかもしれない。破滅周りの事だけ見れば、だが。

だがよ、そもそも破滅をどうにかする事は、本当に、絶対に出来ない事なのか。

”思考する存在”同様、破滅も意思を持っているそうじゃあねえか。俺の幻術然り、破滅側の能力があつて、時たま災害と呼ばれる破滅側の意思を受けた存在が生まれる。つまり破滅は、破滅させたい、という”何か”の意思の下動いているつてえわけだ。

そいつをどうにかすれば、破滅はそもそも起こらないんじゃないか？ エメレンシアも”思考する存在”も破滅はどうにかできない前提で話を進めていたが……。

「どうやって破滅の周期がわかるんだ？ 誰が教えた。民間にや広まってない事なんだろう、だが知ってる奴は知ってる」

「転生の性質を持っている者で、破滅前の記憶を有しているものが教えてくれる事が多いね」

「ロス、アンタの場合は、誰から聞いたんだ」

「エメレンシア」

「……そうけ」

それは、そうか。だってここは、エメレンシアの生命強化のための人間が集う場所だ。コンタクトがあってもおかしくは無い。

あー、じゃあ、そう。

アウラニ。アウラニだ。

アイツは誰から聞いたんだ。破滅について……デイルム婆か？

「ロス、俺あちよつくら行く場所が出来たわ。もう一度言うぜ。必ず助けるから、待ってろよ」

「うん。気長に待っているよ」

出戻りだ。

だが、意義は有る。

隣の大陸へ帰ろう。

◇
／
17

18. あっさりした否定と解決策

「ない」

即答で、言い切られた。考える素振りさえも見せず、淡々と。

デーム婆は。デームの樹サマは。

「じゃが、希望はある」

深く、溜息を吐いて。

18 / ◇

出る時はあっさり出られるようで、特に迷いもせず、学校であつた洞窟から抜け出る事に成功。そのままアドリアンの温泉に入る……ということもなく、鳥となってファイスへと向かう。

テルミを通り過ぎて少し経ったくらいで、それが目に入った。

巨木。巨樹。大きな木。

およそ真つ当に成長したとは言えない形の、天に手を伸ばすかのようなその大木は、ファイスの銜を踏み潰すかのようにして立っていた。砕かれた巨岩を根へと巻き込んで、荘厳。

10割アウラニの樹。だが、彼女の姿は見えない。

その樹木から、隣の大陸側。そちらへ向かって伸びる枝の橋に沿って飛んでいけば、それはそのまま海へと続いている。テルミの環状線を丁度抜ける形になっているらしく、下の方では頭部の潰れたドラゴンが一匹死んでいた。恐らくぶつかっただろう。

そこからは鳥の身体からドラゴンの身体へ形態変化して、海を進む。まっすぐに伸びる枝は途切れることなく、そこへ止まり休む鳥たちを驚かせながら飛んでいけば、またもやそれが見えた。

これまた、巨木。巨樹。でっかい木。ツリー。

霊命樹の森からヘラジカの角みみたいな枝が天を衝いている。枝は完全に空を覆い、陽光の一切が森へ届いていない。能力の暴走でもしたのだろうか、明らかな異常事態である。

とりあえず、俺の巣穴へ。鳥となつて、狐となつて着地。

中には何もいない。あの狸公、死んじやあいねえだろうな。

刻み煙草の替えを取り出してから、また空へ。今度はこの大陸の中心、デイムの樹を
目指す。

果たしてそこには——アウラニがいた。

目を閉じて、静かに倒れ伏せて。

「寝るから、起こすなって。久しぶりに疲れたみたい」

「おうおう、タヌ公。これあ何があったんだね」

「なんか、燃える水とか、溶ける水とか、毒の水とかがいっぱい降ってきて、アウラニさんが受け止めてくれた。ボクらは逃げ回る事しか出来なかったよ。幻術、意味ないから」

「だろうなあ、それあ。しかしなんだいね、その天変地異」

「わかんない。まだ空からは降つてるところもあるみたいだけど、アウラニさんの樹が陸の全体を覆つてるから、森には降らないみたい。全部海に流れてるよ」

「天災も良い所だあな、そりゃ」

「おい、お主ら！ うるさいぞ！ バカ娘が起きてしまうじゃろうが!!」

「手前が一番うるせいよ」

なんだか死んだみてえに花に囲まれて眠ってるアウラニの周囲には、沢山の獣たちがいた。というか獣たちが花やら果実やらを集めてアウラニの周囲に置いていろいろらしい。眠ってちやあ見えねえし食べねえだろうよ。

しかし不老不死のコイツが疲れる、なんてことがあるのかね。疲れるんなら、死ぬことも出来そうもんだが。

「狐、お主話があるんじゃないやろう。とつとと儂に幻術をかける。そちらで話さばバカ娘にも聞こえまい」

「こんな開けた場所で視覚を失えつつか。その辺、狼も熊もいるじゃねえか、死んじまうよ狐あ」

「この場で血を流す事は儂が禁じておる。ここでも少しでも血気を現わそうものなら瞬時にくし刺しじゃ。早くせい」

「へいへい」

正直樹木の何を惑わしやあいいのかわからないのだが、何故かコイツにあ人間にかけるような幻術が掛けられる。どこに知覚器官があんだよお前。

そうして来るは、夢幻の空間。白くただっ広い場所で、俺と、目の前に樹木。

いや樹木よ。

「ふん、粗い造りじやの。もつとこう、大自然の中とかに出来んのか」

「注文が多いなあ婆さん。自然物が大自然を欲しがるなよ、飽き飽きしてるだろ」

「馬鹿め、これだから”転生”の性質持ちは。そこで生まれたものは、そこそそを揺り籠として認識するものじや。お主はさぞかし無機質な空間にいたのじやろうなあ、前は」

「婆さんだつて”転生”の性質持ちなんじやねえのかよ」

「儂とお前じや年季が違う。馴染み深いのはもう今世じや、馬鹿者」

自分に都合の良い話だなオイ。

「それで、聞きたい事はなんじや。破滅についてか」

「おうおう、わかつてんなら話あ速えわ。破滅つてな、止められねえのか。回避よりも先に、破滅を破壊する事は出来ねえのか。なんか適当な手段とか、無いのか」

「ない」

即答。言い切り。

もうちつと気を遣え。ああいや別に、いいや。遠回しだと面倒だからな。

「じゃが、希望はある。そもそも破滅とは何なのか、どうして起こるのか。わかるか、狐」
「法則だつて聞いたぜ。絶対に曲げられねえ法則。止める事は出来ない」

「その言は間違つてはおらんが、法則になつたが正しい。物が重力に引かれる。光は影を作る。生物は死ぬ。それらは法則じや。古来よりある法則。じゃが、初めからあつた

わけではない」

「ほん?」

「この世界が出来た時、はじめは何もなかった。これについては儂も聞いた話じゃから体験をしたわけではない事を念頭に置き。世界には初め、何もなく、ただ二つが居た。それが”意思持つ存在”と”破滅”じゃ。双方にそれぞれ名前があるはずじゃが、儂は知らん」

聞いた話つてこた、この婆さんが前の世界で転生の性質持ちに聞いた話つてことかね。ああ、そうして口伝されていくのか、真実——あるいは虚実が。

……テルミのエメレンシアのように。

「二つはまず、それぞれに二つの人形を作った。それぞれに自らの持ち得る能力を付与し、世界に放った。まだ陸地も空気も海も空もない時じゃ。故に人形は付与された力を用いて世界を作り上げた。作り上げた世界に”意思持つ存在”は入らず、”破滅”は残ることにした。そして”破滅”は、世界を作り上げた四つを殺した」

「いきなり物騒になったな。破滅つてな、相当に気が狂つてそうだ」

「じゃが、それは世界に必要な事じゃった。四つが死んだことで、四つが有していた能力はすべて世界に還元された。命が生まれる法則。命が死ぬ法則。命が成長する法則。命が流転する法則。すべてが世界の法則に成つたのじゃ」

「なるほど。ならよ、破滅つてな、最初にいた”破滅”が死んだから法則になった、つてことか？」

「話を急くな、馬鹿者。四つが死んだ時、世界は破滅した。そして法則が増え、世界が再生する。再生は”意思持つ存在”の力じゃ。それを繰り返し、世界は出来ていった。生まれた命に能力を付与する二つ。それらが破滅によつて死ぬことで、世界自体が成長する。回りくどいように思うじやろうが、二つはあくまで世界そのものには干渉できないそうじゃ。故に命のみを対象とする。世界の中から命が消え去れば、世界は自ずと閉じる。一旦、じゃがな。それを周期的に繰り返しているのが現在じゃ」

話が長え。まとめて話してくれ。

「いつしか”意思持つ存在”と”破滅”は自らの能力を切り離れた。常時発動するようになった、という方が正しいか。再生と破滅は、その二存在によつて起こされている能力の結果に過ぎんという事じゃ。じゃが、それによつて止める手立てが無くなった。たとえばその二存在を殺したとしても、再生と破滅は止まらない。還元された能力と同じく、永遠と発動し続ける法則に成ってしまったが故に」

「で、希望つてのは？」

「……お主、絶望的に話し合いに向かん性格じゃな。まあ、良いわ。して希望じゃが、能力である、という点じゃ。能力には強度がある。似たような能力のぶつかり合いでは、

強度の高い方が勝る」

「破滅に勝る能力がありやいいってことか」

「ただし、同系統の、な。炎を出してくる相手に幻術で対抗しても打ち破れんじやろう」
「そりやそうだ」

しかし、その上でない、と即答したのは。

……無理、つてことか。

「気付いたか。破滅は古来から存在する能力。破滅によって生物が周期的に死ぬ以上、破滅を超える強度の能力は産まれ難い。能力の鍛錬とは即ち”自らの魂が世界に影響を及ぼす可能性”を広げる事にある。膨大な年数と経験を積む事でその可能性は広がるが、何万を生きるバカ娘でさえ破滅の足元にも届かぬ規模じゃ。勿論、バカ娘に作られた儂も同じじゃ」

「聞くまでもねいが、俺あどうだね。系統は考えねえとして」

「聞くまでも無いじやろう」

「そうけ」

なるほどなあ。

方法がないわけじゃないが、あまりにも難しい。だから回避する以外ない。エメレンシアの辿り着いた答えってな、そういうことか。

んー。まいったね、どうも。

「故に、生命を強化する、という手段は長期的に見れば最適解じゃ」

「ん、聞いたのか、エメレンシアの話」

「バカ娘が眠る前にな。生命を強化し、破滅によつて死なくする。そうする事でいつか破滅に対抗しうる能力が育つのを待つ。先に言うたように、”破滅”は自らの能力である破滅を切り離しておる。つまり鍛錬のしようがない、これ以上は成長しないという事じゃ。古来より存在するがゆえにあまりにも強大且つ巨大な能力は、しかし追い抜かす事の出来る能力である」

「アウラニや婆さんと違って、普通の生命はそんなに生きねいよ」

「じゃが、”魂の摂取”を持つ者が居ろう、お主のように」

「……ありや、寿命が延びるもんじゃねいよ」

「延びるものなのじゃよ、お主が使い方を知らぬだけだな。バカ娘が不老不死であるのは、バカ娘の能力の産物たる儂が”魂の摂取”を有しているからじゃ。初めは小さな芽しか生やせんかったバカ娘が樹木を生やせるようになった時、その命へ”転生”の性質を持った儂が転生した。そこから、バカ娘の成長は止まったのじゃ。何万年も前の話じゃが、これでわからう」

「エメレンシアの生命強化を受けた新人類で、破滅に対抗しうる能力を持つ者に”転生

”の性質持ちが宿れば、いつか”破滅”に打ち勝つ日が来るだろう——ってか？ 気の遠くなる話だな」

「しかし、それ以外に方法がない。”転生”の法則についても分かっておらんからな、能力に宿る等と言った稀有な例をどうしたら引き起こせるのか、まずはそこからじゃろう」

「じゃあ”転生”についての研究もしなきゃあならん。そもそもの知名度が低く、誰に、どこに起こるかわからんもんをどう研究するんだ。

この最適解とやら、希望的観測が多すぎて話にならん。

「その二存在の方の”破滅”に話をつけて、能力を停止させるつてのは出来ねいのか」

「知らぬ。能力を切り離す、という事自体、儂らには理解の及ばぬ技術じゃ。それに対して操作が効くのかどうかなど、わからぬ。加え”破滅”がどこで何をしているのかも知らぬ。この世界にいる事は確かなはずじゃ。しかしどんな姿をしているのか、そもそも姿があるのかどうかも怪しい」

「わからねえことだらけだな、おい。まあ、良い。それで、破滅つてないつ来るんだ。決まっただらう、来る日つてのは」

「あと一年もない、と言っておく。正確な日付は知らぬ。儂もバカ娘も、日付というものを認識しておらん」

「大事な事なら書留でもしておけよ」

「何分、樹木故な」

「都合が良いなあお前」

いやまあ俺も狐を理由に都合をつけるが。

種族を言い訳にするんじゃないやあねえよ。

「ダメか。無理なのか。今を——今いる命を、破滅から救うのは」

「何度も言うが、儂は知らぬ。儂もバカ娘も諦めた者じゃ。解決法など探したらんわ」

「そうけ。じゃあ、聞いても無駄か」

「無駄じゃ。ただ、一つ言っておくぞ。お主は、強化された生命じゃ」

「……まあ、そうだろうなとは思ってたよ」

んな事はどうでもいいんだ。

ロスを……約束を破らねえ方法が見つからねえ。なんだ、どうしたらいい。エメレンシアへの復讐は遂げる。助けるなんて約束しちまったロス以外あ死んだって別に良い。ロスのことが無ければ破滅に対してどうこうするつもりは無かったんだ。こうして俺が死なねえってのも分かった以上、そこさえ解決すりゃあ適当な場所で隠居してりゃあいい。

だが、約束は大事だ。いやまあルシアとの契約もあるっちゃあるんだが……ん。ん？

「待て、アウラニの不老不死ってな婆さんの”魂の摂取”によって成ってるもんだったな。ただアウラニ自体が生命の強化をされてないってんで、破滅にや耐えられねえと」
「そうじゃな」

「じゃあよ、そもそも死なねえ……たとえバラバラになっても、全身吹き飛んでも再生する生命だったら、破滅にあ耐えられるのか？」

「耐え得る可能性はあるが……それを命と呼ぶかどうかは怪しいのう」

ルシアはあの学校にいた。

あの学校ってな、強化された生命の元になった人間がいる場所だったはずだ。つまり、元のなんでもない人間であるはずのルシアが、死なねえ体を手に入れていた。ゾンビゾンビと言っちゃいたが、アルジナ曰く死肉じゃねえらしいじゃねえか。

これか？

ルシアの秘密を知る事が、ロスを救う唯一の方法か？

「……見つけなきゃいけねえ奴が出来た。ちよいと、行ってくるわ。アウラニは頼むわ、婆さん」

「お主に言われる筋合いは無い」

「そりゃそうだ。頼む義理もねえやな」

夢幻を解く。

顔面に張り付いてくるムカデをスルーして、幻の炎でタヌ公を焼き焦がす。噛みついてくる狼を気にせず、タヌ公の尻尾を切り落とす幻覚を見せる。舐め回してくる大蛇を無視して、タヌ公の身体を氷柱でくし刺しにする幻を見せる。

ふう。引き分けな。

「もう行くの、ラナエ。バタバタと忙しいね」

「おうクソ狸、長生きしろよ。出来ねえとは思うが」

「じゃあね。もう会う事は無いよね、多分」

「……そういや、二つほど聞きてえんだけだよ」

タヌ公を見て。

どっからどう見ても狸なソイツを見て。

「お前さん、結局なんで喋れるんだ？ あとあっちの大陸で戦争やるっての、どこで知った？」

「え、気付いてなかったの？ ボク、元人間だよ。あっちの大陸生まれ」

「……そうけ」

あー。

気付かん俺が馬鹿だな、これは。いや、いや。普通の獣は喋らねえんだよな。うん。母上殿も妹弟たちも喋るから何も思わなかったけど、そうだ、そうだ。俺の家族はつま

り強化生命で、普通の獣じゃあねえんだわ。喋る獣は普通じゃあねえんだわ。

……んー、まあコイツには世話に……なつてないが、世話をする側だったが、まあまあ一緒にいたし。

一応聞いておくか。

「お前さん、名前なんてんだ。タヌ公じゃあねえだろう」

「うわ、今更だね。いつ聞いてくるのかと思ってたけど。まあ良いけど。ボクの名前はね、リラだよ。リラ・クススイル」

「可愛らしい名前過ぎて笑ってちまったよ。あん？　つてこた、お前さん雌か？」

「それも今更だね。ちよつと呆れが入ってるよボク」

「しかも苗字持ちな辺り、どこぞの王族か？」

「うん。ナトウムの皇族」

「……で、戦争の事を知った理由は？」

「文通してるんだ。あっちのリラと」

さいでっか。

文通……出来るんだな。狸の手で。

「あんまり興味無さそうだね。これでも皇族なんだけど」

「でも狸だろう、お前さん」

「そうだね。人間より快適だから、ボクはこれで良かったかな」
「そうけ」

まあ、無駄話はここまでにしよう。

あと一年もねえらしいからな。時間が惜しい。ルシアを探さにやならん。

ドラゴンへと転じる……のはアウラニを起こしちまうだろうから、鳥になる。

「じゃあね！ ラナエ！ 応援してる！」

「狸、うるさいぞ！ バカ娘が起きるじやろうが!!!」

「うるさいのは手前だっつの」

さあて、どこにいるんだろうなあ。

19. あっさりした対面と、珍しいやる気

19 / ◇

シエルダンとナトウムの戦争が始まった。ロシア搜索を始めてから、二つほど月が過ぎた頃である。もっともこっちの暦なんてのは知らねえんで、記憶にある限りの日本でも使われてる、というかあっちの世界で使われてる暦の上で数えてる。こっちじゃひと月にも満ちてねえのかもしれないし、三つも四つも過ぎている可能性だってある。なんなら一ヶ月、みたいな単位じゃねえ可能性もまあゼロじゃあない。

なんて考えても仕方のない事をつらつら考えちまつてるのは、ロシア搜索が難航も難航しているからだ。

ロシアも、アルジナも、ギルドの連中も。アウラニの樹に潰されたって可能性も考えて小さくなったりなんだりして調査してみたんだが、何も無し。行ったことのある場所へ鳥となり狐となり行ってみても、やはり収穫は無し。

隣国が戦争するつつんで、ミグエルもまたちつとはピリピリしてるんだが、シエルダンともナトウムともさしたる契約やら取引やらをしていないとのことで、今回の戦争に

はノータッチなんだと。

そういう話を、人間の方のメリンダの膝の上で聞いている。撫でられながら。

なお、猫の方のメリンダはここにはいない。アイツあ真面目だから、出来ていなかった分の勉強を取り戻すためと現在猛勉強中だとか。もう一年と二か月を経ているのに結構なこつて。

で、現状報告やら近況報告やらの最中、こんな話を聞くことになる。

「イオピクスの踊り子?」

「はい。全国行脚の雑技団に一年と少し程前に入った二人でして……色とりどりの炎を操りながら華麗に踊る様が人気を博している、と」

「ふうん。そりゃ、まあ……ウチの妹だろうなあ、多分」

「やはり、そうですね? どうしましょう、お父様に頼めば、雑技団からの引き抜きくらいは」

「ああ、いいよいいよ、そういうの。王族に借りは作りたくねえし、別にあいつらも助けて欲しいなんざ思っちゃいねえだろ。俺がソウイウの、興味ないって知ってるしな」

「でも……家族でしよう?」

「家族だからな。信頼してるよ、信頼されてないって」

複雑そうな顔をするメリンダ。まあこいつらは善性の家族だからな、強固な? がりで

結ばれてる。信じられねえんだろう、こういう関係ってな。

獸にやよくある話なんだがね。

「いつでも頼ってくださいね。貴女は、妹の恩人なのですから」

「ん？ 結局妹ってえことになったのか、あつちのメリンダとは」

「あの子も姉を自称しますが、私が先に生まれた事は変わりありませんもの」

「さよか」

そのマウント合戦は知らんがよ。

しかし、なんだ。恩人扱いはやっぱり面倒だあな。人質にするなりなんなりを考えていたとはいえ、こうも善意を押し付けられると考える事ばかり出てきやがる。

……雑技団で踊り子、ねえ。まあそれなりに良い所に就けたんじゃあねえのか、売られて慰み者にされるよかよ。

「ちなみに俺にあ弟もいるんだが、雄のイオピクスについてあ知らねえか？」

「……いえ、聞いたことはありませんの。ああでも、噂ですけれど、シエルダンの地下には沢山のそういう方々が集まる幻の集落があるとか……」

「おお。ああ、そんな場所、あつたな。ほう」

そいやああつたな、そんなところ。

確かあそこって、シエルダンの街の地下に張り巡らされているんだっけ？ 騒ぎ起こ

して逃げた身故なんとなく近づき難かったんだが……身を隠す場所としては持つて来いじゃあねえか？

ふむ。

なら、思ったが吉日だ。

「ちよいと行つてみるわ。あつちのメリンダによろしく言つておいてくれ」

「え、本当にあるんですの？」

「あるよー、普通に。入り口は一つしか知らねえけど」

忘れてたといえbaum一つ。その入り口たるガリーイの人間が軒並み倒れていたつても、謎のまんまだな。こないだ見に行つてみた時は普通に人間が過ごしていたから街の人間全員死んだ、とかじゃあねえんだろうが、ありやなんだつたのか。

目指すはガリーイ。調べ終わつたらちいとアドリアンにでも寄つてみるかいね。

人混み。

人間の視線の先にいるのは、煽情的な衣装を纏つた二人の少女。色彩豊かな炎をジャグリングして、時には放ち、時には飲み、鮮やかなステージを形作っている。

中心に立つ男が指揮棒のような……否、レイピアのような細剣を振り回せば、それ従うように二人や他のメンバーが踊る。なるほどなるほど、雑技というだけはある、というのが感想。

「ちいとばかりし幻術の構成に粗さが目立つが……なんて言うのは、あまりにもお節介つて奴だあね」

どろん。

煙と共に、不可視を纏う。

人混みを抜け、テントの外に出てようやく一息を吐いた。

いやはや。

「タイミングつてな、怖いねえ、色々と」

まさかガリーリイに着いた時、丁度件の雑技団が来ている、なんてさ。

さて、ガリーリイである。一応色々な子供の姿を取って一年前の事件についてそれとなく聞いてみたんだが、ノーリアクション。ただ、知らないというより覚えていないという様子で、記憶の醜態とやらかな、と。順当に考えりやあ街の人間全員を獣と融合させ

て、学校には入れなかった、とかいう所だと思うんだが……どうだかな。ちいと都合の良い樂觀な気がしないでもない。

地下はまだだが、とりあえずついでに、つてことで雑技団……まあサーカスだな、それを覗いてみりやあ、確かに見覚えのある二人が踊っていたってワケ。色鮮やかな炎は幻術だが、踊り自体はあいつら自身の努力の結果と。踊りなんつーものに詳しいわけじゃあねえから何とも言えねえが、芸にはなつてんじやねえのか、一応な。

そんな雑技団のテントに寄りかかって煙管を啜っていると、テントの裏側、つまりスタッフオンリーな方から一人、男が出てきた。男はふう、と溜息を吐いたあとに俺の姿を確認し、慌てて取り繕うような笑みを浮かべる。

アレか、プロ意識か。夢の国の中身を見せるな、みたいな。

「別に気にしねえよ、安心しろ。俺あ雑技団に夢見るような性格はしてねえんだ」

「あ、ははは……そうですか。いえ、その事には残念がるべきなんでしょうけど……今はありがたい」

「おうおう、子供に対して随分と堅苦しい口調だな」

「着物の袖に片手を入れて、もう片方の手で煙管を転がしている少女ですよ。ただの子供には見えませんよ」

「へえ」

そんだけ見れるのに、随分とずけずけと。へえ、ふうん？

「お前さん、名前はなんてんだ。ああ、芸名の方は興味ねいよ、本名を言え」

「オーマです。オーマ・ウオロツソ。芸名も同じですよ」

「同じなら芸名たあ言わねえだろうよ。しかし、苗字持ちか。実はいいとこの坊ちゃんか、手前」

「いえ、遠い所の生まれなだけです。そこでは苗字があるのは当たり前でしたから。お嬢さんの名前は？」

「ラナエだ」

「……本当に？」

驚いた、という風に。

店頭らのベンチへ腰を下ろしたオーマは、聞き返してくる。

「ああよ。なんだ、聞いてたか。ウチの妹たちから」

「ええ……それに、指名手配犯、ですからね」

「おいおい、まだ解除されてねえのかよ。もう一年経ってるぜ」

「二か月ほど前にファイスを壊滅させた稀代の災害、と聞いていますよ」

おうおう、狂ってんなあコイツ。そんな奴とわかつててここまで落ち着いてんのか。いいね、ちいと気に入った。それに妹達が俺の話の誰かにするなんて、思わなんだ。汚

点だろう、アイツらにとつちや。

「お前さんが買ったのか、アイツらを」

「いえいえ、購入したのは団長です。ああ、ご安心ください。我らが団長は不埒な事はしませんから」

「そこは好きにしろ。俺あ知らんよ。それより、お前の話が聞きてえ。なんだ、悩みでもあるのか。溜息を吐いていたように見えたが」

「悩み、というか……いえね、これは団の皆には内密にしてほしいのですが」

内密という単語が聞こえた時点でオーマを夢幻に招待する。これで盗み聞きの心配もねえ。本体に不可視を、人形をオーマの前に立たせているから、奇襲の心配も無い。学ぶぜ、俺あ。

「これは、幻術ですか。なるほど、恐ろしい幻術を使う、というのは真実の様子」

「それはどつちの情報だね」

「指名手配の方ですよ。あの二人からは、凡そやる気と呼ばれるものを母親の胎内に置いてきた姉、と」

「違いねえな」

義理や借りがなけりやあ動かねえ。約束や契約でも動くがね。

「で、なんだ。お前さん、随分と……生気が薄いが」

「ええ、それが内密にしてほしい事なのです。余り気負わずに聞いてほしいのですが……私は、あとひと月と経たずに死にます」

「自殺か？」

「いえ、寿命、でしょうね。心臓が悪いのです。あるいは、私の死後、一年以内に何か大変なことが起こるか」

「転生」の性質持ちか、お前さん」

言え、笑う。

破滅を経験した人間はどこかが欠けている、だったか。コイツの狂い具合はそういうことか？

「貴女もそうですね。妹さん達から聞いた話を統合するに、生まれた直後から明確な意識を持ち、同じ狐とは思えなかったといわれていましたよ」

「俺あ一回目だがね、まだ。破滅とやらも経験してねえ。なあよ、先人なら教えてくれや。破滅つてな、どんなんだ。どうなって、どうなる」

「残念ながら、私は破滅を経験していません。知識としてはありますがね。私はそういう、”大事が起きる前に必ず死ぬ”という性質を有しているようで、前も、その前も、その前の前も、もつと前も、破滅を経験したことはないのです」

「いくつだいな、お前さん。統合して。何回転生してんだ」

「合わせれば、億を超えましょう。ただし、すべての記憶が持ち越せるわけではありません。記憶は少しずつ欠け、自覚を持つ年齢もそこそこ大人になってから。転生の回数、それも万単位でしょう。再生と破滅の間に横たわる何万年の、その中で幾度も幾度も転生を繰り返していますので」

偶然、と。

そう思うのは、中々に難しい話だ。

ガリーイに行こうと思ったのがメリンダに話を聞いてから。雑技団の中を覗こうと思ったのがガリーイの調査を終えて、地下を後回しにしたから。雑技団のテントに寄りかかって煙管を吸おうと思ったのなんて、ちいっとした気まぐれに過ぎん。

その。

その全ての”偶然”に噛み合って、”転生”の性質持ちであるオーマと出会い、知識を貰う。

偶然、だって？

「お前さん、どっちかの手先だな」

「ええ、”思考存在”の。私は死ぬ前に、必ず誰かに知識を授けます。そしてその相手とは、その時点の世界にとつてとても大事な鍵を握る相手になる。ただし再生と破滅、どちらに依る鍵なのかはわかりません。私の授けた知識が世界を破滅に追いやる可能性

と、世界を救う可能性。どちらも有り得る。私には判別の出来ない事ですがね」

「思考存在」

”意思持つ存在”だの”思考する存在”だの言われてきたが、明言して手先だと名乗る奴の呼称が一番正しかろうさ。

”思考存在”。それが、あの次元の狭間で出会った相手。悪魔のような上っ面にフラックさを貼り付けただけの奴。

”破滅”の名前は、知らねえか。お前さん」

「リリースと」

あっさり。あるいは、拍子抜け。

本当に知っているとは思わなんだ。だが、リリース。リリースだと。

「なんで知ってるのか、つてのは、聞いていいものか」

「はじまりの記憶ですよ。初め——世界には、何も無かったのです。私は流転を。授かりました。”思考存在”から」

「四人か」

「はい。ただ、その記憶もほとんどが薄れています。次の生では、覚えていないかもしれない。はつきりと思い出せるのは自らの名前と、”大事の前に必ず死ぬ”という事だけ。ただ、リリースと——私達を殺した敵の名前は、まだ覚えていました」

「他の奴らは、いねえのか」

「わかりません。命を生む者。命を殺す者。命を育む者。命を廻す者。彼ら彼女らがどこにいるのか、そもそも転生できていないのか。流転を授かったのは私だけですので、その可能性も大いにあるかと」

「ごふつ、と。」

外の知覚が、それを感じ取った。俺も、オーマも。気付いた。けど、無視する。

「魂の摂取、持ち同士では、能力の発動は出来ませんよ。治療もまた、同じように」
「そうけ」

「リリスの居場所はわかりません。あれは、どのような形にもなれる。気体や液体にだつてなれるでしょう。故に探すのは得策ではない。貴女の考える通り、破滅を止めるのではなく、破滅に耐え得る、乗り越え得る技術の模索の方がまだ道がある」

「そんなことまでわかんのか。……いや、お前さんもそうしようとした、のか？」

「ええ、こうして全国を行脚しているのは、そのためです。団長という理解者を得られた今生は有意義でした。けれど、努力は実を結びませんね。結局、私は——大事な場面には、立ち会えない」

「エメレンシア、という名前は——育む者の名だ。あれは、初めの四人か？」

「いいえ。ただし、覚えておいてください。この世界では、名は強い意味を持ちます。あ

らゆる名前に意味があり、あらゆる名前が世界にその通りの影響を及ぼす。それは希望であると同時に呪いでもありませんよう」

「お断りだよ、俺あ」

「ええ、打ち破ってください。破れるのなら、それが一番ですから。……そろそろ、お別れのようなですね」

「今殺してやつてもいいんだがね」

「妹を敵に回しますよ？」

「なんだ、懐かれてんのか、お前さん」

「……さあ、わかりません。結局、奴隷と、奴隷を購入した一団という関係でしかありませんからね。嫌われていても別に、おかしくは無いでしょう」

「そうけ」

白い世界が。

夢幻が溶けるように解けていく。

未だテントの中は歓声が響く。俺の目の前でベンチに腰かけていたオーマは。

血を吐いて、倒れていた。

「ふふ……まだ、死にませんよ。死ねません。重症に見えるでしょうが……ああ、私には寿命が、ある程度わかる」

「ひと月と経たず、と言ったか。どうだいね、死期が見えるのは、怖いか」

「私の感覚は常人のそれとは違いますよ。私には必ず次がある。必ず先がある。終わりが無いのなら、死は怖くありません。どれほど体を酷使しても、その時が来なければ死なないとわかるのなら——その先にも役割があるというのなら。死に際の苦しみは、恐怖にすら」

「最後に一つ、いいか」

「ええ、どうぞ」

明らかに不味い量の血が口から零れていくが、コイツが大丈夫というのなら大丈夫なのだろう。しかし心臓が悪いからと言ってどうして吐血するのか……心臓以外も悪いんじゃないかなあ。体を酷使してるとか言ってるし。

「ルシア、という少女を探している。心当たりはあるか」

「申し訳ありません、ないですね。ルシア……光、ですか。なんとも……良い、名前だ」
「……死んだか？」

少し、心臓に手を当てる。

生きてはいるのか。意識が落ちただけ、と。だがよ、今公演中だろ？ 演者が外で血い吐いて寝てたら、大事じゃねえのかよ。

……色々情報貰ったしなあ。ちったあ返すのも悪くは無い。

それじゃ、ま、ちいとお邪魔しますかね。

——”ここで、急遽演目を変更しまして——”

そのアナウンスを聞くと共に、ステージへと上がる。

俺あオーマを介抱してくれる奴を呼びに行っただけだつてのによ、あれよあれよだ。だから苦手なんだ、善性の奴つてな。なんだあの団長。ミグエルの王族並みに良い奴でやりづれえ。

先ほど一瞬すれ違った妹たちがオーマの介抱をするつてんで、んじゃあ幻術使いが必须要と。

俺と。

流石に指名手配で顔の割れてる童女姿や狐娘姿は使えねえんで、狐面を被つて壇上に上がる。

台本は貰いあしたが、読んでねえ。面倒だし。

人間を喜ばせる、つてな……んー、あんまりやつてこなかつたんで出来るかどうかはしらねえが、驚かせるつてなら一日の長があらあよ。

さあさ五郎次郎もといご覧じろう。

あの婆さんに文句言われたからな。造り込んだぜ大自然！ 真白の夢幻はこれより深緑に包まれる。

一夜限りだ、存分に楽しめよ。どうせ死ぬんだ、刹那的にな。今宵だけは、あつさり終わらせねえからなあ。

◇
／
19

二十、昔の話と、少し前の話。

20 / ◇

増えてもらう必要があつた。新しき命として、強化された生命として世界に送り出した彼らに、死なれては困る。増えてもらわなければ困る。故に契約として、転売を可能とした。つまり殺さなければ売ることが出来ると、要らなくなつたら誰かに回せると……死に難く、且つ増やす手段として、奴隷を取つた。

初めの一人以外は、成功だつた。いきなり対等な人間として世に出る事は奇形が過ぎるから、奴隷として……下の存在であると認識させることで、世間に受け入れやすくする。売り出して半月と経たぬ内に手を出す者が現れ始めた。ただ、子を宿すには至らなかつた。

何が悪いのか。何がダメなのか。その研究と実験を続ける。

時間制限の最中、奴隷商人としての資金繰りが功を奏し、順調も順調な速度で”転生”と”融合”、そして”破滅”の研究が進んでいく中で、一つの事件が起こる。

売られた奴隷が、飼い主を殺して脱走する、という事件。

起こるべくして起きた事件ではあったのだろう。もつと言えば、野生化してくれるのならそれもよしと思つていた。それで生き残る事が出来るのなら、問題ないと。出来ない者が多いだろうから奴隷として売つていただけ。出来るのなら、勝手にどうぞ。

数年が経つて、脱走する奴隷の数が目に余る程になる。そも、強化された生命だ。体力や腕力といった全てが今いる人間の上位互換で、勝っている部分は全体の数くらゐ。どの道破滅によつて死ぬ彼らに生きている間くらいは優位を、なんて考えていた時期もあつたが、反乱が起こるのならそれも良いと思うようになつた。

だからシエルダンの地下にある強化生命たちの巣穴も放置していたし、首輪にも特に機構を設けなかつた。逃げるなら逃げて欲しい。逃げて生き延びて、増えて繋いで。

ただ、誤算があつた。野生化したのは極少数だけで、強化生命はほとんどが地下の巣穴へと逃げ込んだ。その中で増える事はあつたけれど、奴隷としての想定よりは増加率が低い。狭い土地面積と仲間意識という名の監視社会では、愛恋の関係にはなり難い。さらに言えば同種族でなければ子は成せず、その確率はかなり低い。

あるいは奴隷の購入者であれば、一切を気にせずに出した事だろうに。

そうして奴隷商人を続けていく中で、野生化した強化生命の一人がとある山にいますという情報を掴んだ。初めに飼ひ主を殺して逃げた強化生命。私が奴隷事業を始めて五年が経つた頃だ。五年も経てば行方などわかるはずもないと考えていたけれど、存外、

近くにいた。まさか国内にいる、なんて思わないだろう。

初めての例だ。獣種と人間が交わって子を成した、他にはない例。当然、何故彼女にだけ出来たのか、を研究したくなる。それがわかれば、もつと効率的に強化生命を増やすことが出来る。

強化生命——獣種化は成功した。これでたとえ、全人類が死に絶え、世界が閉じた時でも彼らは残る。残って増えて、必ず未来を掴み取る。だから最後の一押しに、もつと、もつと増やしておきたい。

そう考えて、彼女の山を捕らえに行つた。彼女を、あるいは彼女の子を。

結果。手痛い反撃を受けた、というべきなのだろう。何も知らない人間の社員を用いたのもダメだった。捕えてこいと、出来るだけ無傷で捕まえてこいと言つた彼女を殺してしまふなど、誰が考えようか。正当防衛だから仕方ないなどと喚く社員に呆れつつ自らが出向けば、そこにいたのは天然のイオピクスの少女。

今思えば「転生」の性質持ち故に特に驚きは無いのだが、当時は余りに珍しいものを見つけた喜びで浮かれていた部分があるのだろう。麻酔毒と槍を目の前で見せていたから、それも敗因の一つ。幻術と形態変化。ただの子供として侮っていた部分も大きい。

敗走だ。心臓を貫かれ、止まりかける全身の機能に鞭を打ちながらの敗走。一応の成

果として、彼女の子である二人を捕まえることが出来たのは僥倖であつたけれど、一番珍しいものを逃したしたのは余りに手痛い。

彼女を殺してしまつた社員には減給処分を降し、その日から頭の痛い報告を聞く日々が始まつた。

各地で暴れまわるイオピクスの少女。人間を殺して回り、その余波を受け、奴隷として飼われているイオピクスを虐待する人間まで出てくる始末。仕方がないので購入者を獣種化して売りに出したり、記憶を弄つて愛玩させたり、多少の無茶をしていたせいであの少女に追いつけなかつた。

その頃からミグエルの王族が強化生命の身元に関する調査を始め、奴隷市場自体が縮小を見せ始める。平和国家が平和で居続けられるのは、情報戦において他国の追隨を許さない点にあるだろう。

いつしか社員の数は減り、ギルドなんて厄介集団に声を掛けなければいけない程になつた。時代の英雄。稀代の英傑。凡そ人間とは思えない力を有す、依頼のみで動かせる天災。本来、私に協力してくれるはずの人達。あるいは私よりも先に破滅に立ち向かつていなければならぬ人達。

正直に言えば大嫌いだし、心の底から軽蔑している。どうして何もしないのか。どうして、どうして。

そんな企業に依頼を出さなければいけない程、ミグエルの影響力は強かったのである。

ギルドのおかげで、イオピクスの少女——ラナエの撃退には成功した。各地で人間を殺しまわり、強化元の間人がいなくなってしまう可能性も考えていただけに、研究欲より排除本能が勝った結果と言えるだろう。

彼女の撃退後、私は久方ぶりの邂逅を果たすことになる。

ラナエと共に旅をしていた二人の少女。片方はアルジナというルプスで——もう片方は。

「……久しぶり、ねえ。お姉ちゃん」

「……ん」

獣種化——最初の一人。唯一の失敗例。

自らの姉、ルシアがそこにいた。

四人家族だった。父と母と姉と私。内、父が“転生”の性質持ちで、母は理解者として共に在り、もうすぐ何が起こるのか、という事を私達に教えてくれた。幼少の頃には

マルゴーに目覚めていたし、自らがマルゴーに入った時に”思考存在”に触れ、やるべき事についても分かった。

それは姉も同じ。生命の強化。ただしこの時は、分離ではなくそのまま強化する事を目的として。

私達が生まれたナトゥムは他国より少々殺伐としていて、治安があまりよろしくない場所だった。けれど父と私が能力持ちであったが故に家に出す者は居らず、誰かを殺す、誰かを傷つける、誰かに何かをする、という発想が無かった。

無かったから——試すのは、自分たちに、という発想に至る。

試す。それはつまり、生命の強化を。

私のマルゴーとは、入り口と出口が必ず存在するものだ。こちらに入り口を開けば必ず出口側のマルゴーが開くし、そちらを開かなければ入り口も開けない。そして基本的に、私が意識をしない限りは入った後すぐに出る。入ったことさえわからない。入り口に触れたら、気が付けば出口にいる、というのが普通だ。

ならば出口を重ねたらどうなるのか、というのが着想だった。初めは果実や植物で試した。二つのマルゴーを開き、出口を重ねる。両方から同時に別の物を投げ入れたら、どうなるのか。

結果、融合した。どちらかが潰し合うということもどちらかが弾かれるという事も無

く、完全に混ざり合つた、といふべきだろう。混ざり合つて、全く別の物になつた、ともいえる。境目どころか形さえも既存のそれとは違い、けれど元の性質を引き継いでいる。

初めは植物。物。

次は——動物。ナトウムにはあまり動物がいなかつたけど、カラスやネズミを用いて融合を行つた。

それらはやはり死ぬことは無く、混ざり合う。飼つてみて、寿命も問題ないとわかつた。むしろ長い方に調整されるようで、更には筋力や持久力などと言つた諸々が普通のカラスよりもネズミよりも高い。猛獣用のゲージでないと飼えない程、強化された。

”思考存在”において、それは破滅を超え得ると保証された。
ならば次、試すのは人間だ。

先も言つたように、誰かに、ではなく自分たちに、という思想があつた。特に姉は自己献身が強く、自身を被験者にしろと言つて聞かなかつた。マルゴーを扱えるのが私で、自身は考える事しか出来ないから、と。当時も、今も……随分と狂気的な事だと思ふ。それでも私達姉妹は、実行した。

失敗だつた。

鳥に始まり他の鳥、鼠、猫、様々な動物との融合を行つたけれど、成功する事は無かつ

た。

出口のマルゴーには姉だけが残り、動物たちはどこかへ消え失せてしまったのである。

何故出来ないのか。

どうして上手く行かないのか。動物と人間に、そこまでの違いがあるのか。

この件により、研究は続けていくものの、まだ人間では試さないという約束が生まれる。もう少し生物について研究して、マルゴーについて研究と実験を繰り返して、”思考存在”の言う成功を模索すると。

そう、日常へ帰還した。姉も私も勉学に熱を入れ、ナトゥムの学園で学び続けた。

はたして、誰の気まぐれか——突然の悲劇が私達を襲う。

一日だ。いや、一日と経たぬ、が正しいか。

学園内の全生徒。そして私達の住まう区画の全住民。

その全てが謎の昏倒を起こす。私と姉が見た光景は、地べたに倒れ伏せる数多の間。生きてはいる。けれど、意識が戻らない。揺すつても、叩いても、気付け薬を作つて嗅がせても。

私と姉は他の区画へと助けを呼びに走り——その全てで、それが起こっている事を知った。

ただ、一人。

ナトゥムの城の前の階段で座っていた少女を除いて。

彼女は私達を見ると、ふっと笑って、こう言った。

「破滅はもうすぐ。そんなにもたもたしていいのかな。そんなことをしている
と——こうなつちやうよ？」

指差す先。

振り返れば、そこにいたのは——人の群れ。群れだ。集団、ではなく、群れだ。

皆、意識がないままに体に罅を作り、ポロポロと崩れる体を気にも留めず、こちらへ
向かつてゆつくり歩いてくる。人間。人間？

痛い。喉が渴いた。お腹が空いた。言葉はそればかりで、老若男女——父と母や学友
たちまでもが、縋るようににじり寄る。マルゴ―を用いて姉と共に屋根の上に飛ばば、
それが城前だけでない、国全体に起こっている事だとわかった。

黒い波だ。黒い川だ。崩れる体の人間が、城へ……私達の方へ、集まってくる。

「破滅が起これば、みんなこれになる。どう？ 危機感、持ってくれた？ 毎回毎
回、結構楽しみにしているんだけどね。君のソレは、火とか水とかと違って——可能性
がある」

少女が手を広げる。それだけで、寄せてきていた黒い川は動きを止めた。

そこからゆっくりと指を一本ずつ居って、手を閉じる。

それによって起こるは、逆再生だ。放送機器でよく見るそれが、国全体に起こり始めた。崩れていた体が、走っていた罅が治っていく。川は元居た場所へと戻り、散乱していた土塊も綺麗になくなった。

「あはは。幻術だよ、幻術。今のはデモンストレーション……うーん、予行練習ってヤツかな。危機感を持ってもらわないと、間に合わなそうだったから。ああ、嘘じゃあないよ？」 証拠に、ホラ」

城の前。

彼女の手の先。

いなくなったはずの土塊の群れから取り残された、唯一、四人。

父と母と、私の想い人と、姉の親友。

「急がないとね？」

それが——ぼとぼとと身の土塊を落とし、崩れ落ちた。壊れた。

倒れそうになる姉の肩を抱きながら、問うたのを覚えている。名前。貴女は、誰なのか。何者なのか。

「リリスだよ。頑張つてね、エメレンシアちゃん。もう一度言うけれど、君には可能性がある」

煙となつて消える彼女——リリス。

すぐにマルゴーで家に帰つたけれど、誰も居らず。学園を探したけれど、あの二人も居らず。

そして城前へ戻つてくれば、まだ。土塊の山があつた。風で飛んでいくそれ。なんとか掻き集めて家の実験室で様々な研究をしたけれど、結果はダメだつた。ただの土塊と。生物ではないと、それだけがわかる。

次第にざわめきを取り戻していくナトゥムに、もうここにはいられないと判断する。元々父親の能力あつての安全だ。私のマルゴーも勿論牽制にはなつていたけれど、父親の戦力こそが私達を守つていたもの。

それが無くなつたとわかれば、ナトゥムの人間は簡単に私達を黜るだろう。

逃亡の決断は一瞬だつた。隣国シエルダンへと轉移し、安全を確保してから実験道具を——否、家を丸ごと轉移させた。

未だ動揺が抑えきれない姉を宥めつつ、研究の再開を決心する。

即ち生命の強化。新しい手法で、新しい成果を得るために。

数年をかけて、研究と実験の試行錯誤は行われた。姉は変わらず被験者として身を提供してくれて、けれど姉では何故か上手く行かない。次第に私は、他の人間に手を出し始める。初めは轉移した家を襲撃してきた盜賊を、その大本を。シエルダンもナトゥム

も比較的戦争の多い国だったから、盗賊に身を襲った者は多かった。それに加えて、孤児も。

そういうのから、手に付けた。形振り構つてはいられなかつたけど、大事にすれば困るのは自分たちだ。研究が出来なくなつては元も子もない。あのリリスのいるナトゥムには近づきたくないから出来るだけシエルダンの中で、自ら達の命を狙つてきた者を対象に実験をする。

その末に、分離、という形で生命の強化に成功する。元の人間を残したまま、動物側を基礎にすることで上位互換した種……獣種化の成功である。

その成功に私よりも喜んだのは姉だった。けれど同時に、“これでもう、私は要らないね”なんて事を言い出したものだから、焦りもする。況してや姉は、そのまま首を斬ろうとしたのだ。初めに被験者として身を差し出してきた時も多少感じていた事だけど、姉の世界観は、どこか人と違うのだとここで悟る。

必死になって止めて、言つて聞かないので縛り付けて。

本当は麻酔を使うなりして眠らせてから私も眠るべきだった。けれど姉は、獣種化が成功したその日の夜に、私が疲労に眠る隙を突いて拘束を抜け出した。文字通り骨を折つて、肉を削いで。

翌日私が目にしたのは、首を落とした姉の姿。

膝を落として崩れる私に、落ちた首が話しかけてきた時は心底驚いた。

”死ねないみたい、私”。そんなことを宣って。

恐る恐るその首を姉の身体へ持つていけば、何もせずとも接合した。

その後も何故か姉は何度も死のうとして、けれど死ぬことが出来ない事を嘆いていた。何故そんなに死にたがるのかを問うても、”もう要らなくなったから”と聞いて聞かない。まだ姉が必要だと訴えても無駄だった。父や母、親友の死がそんなにも堪えたのか、それで狂気に陥ってしまったのか。

何故姉が死なないのかも、研究した。けれどわからない。存在が二重になっているとか、マルゴアの融合元である鳥や鼠にそういった力があつたのかとも考えたけど、そんなことは無い。盗賊に同じものを施してもこの結果は現れず、姉だけが死ねない。

成長もしない、という事に気付いたのは、その状態から一年が経たない頃。不老不死。まさか”転生”の性質持ちなのかとも疑ったものの、その兆候は一切ない。そもそも”転生”の性質持ちが不老不死になれるのは、”魂の摂取”の使い方を知っている場合のみだ。姉にその傾向は無く、だから本当に、何故かがわからない。

しばらく研究を続けていくうちに、疑似的に似たような事を引き起こせるようにはなつた。

姉のように首が飛んで、頭の無い体でそれを拾ってくつつける、なんてことが出来る

わけではないが、身体に空いた穴が塞がるくらいの事は出来る。鍵は“転生”にあるのだということも。

ああ、けれど、時間が足りなかった。姉の不老不死を解く研究と破滅の回避の研究。そのどちらもを行うには体が足りない。

”思考存在”は答えをくれず、ただ破滅への時間が無い事を云うばかり。破滅が起これば、姉も死ぬことが出来るだろう、と放置を選択したのは苦肉の策だった。今は人類の強化を急いで、姉には他の人間たちと同じ時まで待つてもらおうと。姉の行方が分からなくなったのは、そう決断したその日の夜だった。

「今までどこにいたの、とか……聞いてもいいかしらあ？」

「地下」

「地下……？ 獣種化した彼らの集落のこと？」

「ううん。貴女は、絶対に来ることが出来ない場所」

私が絶対に行けない場所。

マルゴーは世界のどこにでも開く。どこにでも開けられる。

その上で、行けない場所がある？

「ロスを、憶えている？」

「ええ、憶えているわあ。むしろ獣種化した彼女の子供が、貴女と共に旅をしていたラナエよお？」

「知ってる。元の人間の方を憶えているか、聞いている」

「憶えているけれど、それがなあに？」

「私はロスに匿ってもらっていた。狂気を鎮めてくれたのも、ロス」

「もう、死にたくはならないのかしら？」

「うん。死ねないし、死なないよ」

久しぶりだ。本当に。

姉の笑顔を見た。それは狂った笑みでなく、優しい笑み。

「良かったわあ。それなら。ああ、けれど破滅は……」

「私は多分、死なない。ずっと考えてた。なんで死ねないのか」

”転生”ねえ？

「うん」

マルゴーという能力は私しか持ち得ないものであるけど、頭脳は私なんかより姉の方が上回る。私の辿り着いた答えなど、彼女の中ではごく当たり前に導き出せるものだろう

う事くらいわかる。

もしあの時狂ってさえないなければ、私の研究ももう少し早く……なんて、そんなことを考えてしまうくらいには。

「そうよねえ、普段死ぬ機会なんて訪れないから……普通は、わからないわよねえ」

「うん。けど成長は、少しはしてるみたい。だから寿命では死ぬと思う」

「良かった、と言えるかしらあ？」

「うん。良かったよ」

だから、つまり。

性質ではなく、能力だった、という事。

姉以外にいるのかどうかはわからないが、独りの中でのみ起こる転生が行われていく。死ぬ度に生き返って、死に続けて生き返り続けて。それが能力なのだ。普通に日常を送っていたのなら、気付くはずのない能力。だから家族内でも能力を有しているとは思われなかった。

「それで、今になって出てきた理由は何かしらあ？ 困っている妹を見かねて、お手伝いをしに来てくれたの？」

「ううん。逆」

「……あらら」

「だってもう、私には頑張る理由がない」

そんな。

そんな、悲しい事を言う。そんな人だったか。こんな人だったか。

狂気に侵される前の姉は……私と共に世界を救わんと研究に熱を入れるような人だったのに。こんなにも冷めた理由を突きつけてくる人だったか。

「ラナエ」

「……ラナエちゃんが、何よう」

「もし、次。ラナエと相對する事があつたら——私を、ラナエに融合してほしい」

ぞつとする言葉を吐く。

ああ、そうだ。こういう人だった。なんだ、何も変わっていない……何が狂気を鎮めてもらった、だ。冷静に話せるようになっただけで、根本は同じだ。体の成長は多少したのかもしれないけど、心は全く成長出来ていない。

獣種化の手法を姉は知っている。融合元と強化に使用する動物についての手順や、使用した動物がどうなるかについても姉は知っている。

その上で、姉をラナエに融合しろ、と。それは。

「自分が自分でなくなるわよお？ それは——死ぬよりも、恐ろしい事よ」

「エメレンシアも、やってる。違う？」

「……」

嫌になる。

死にたいと言われた時も嫌だったのに、自らの手で姉を殺せと、姉を消せと言われる妹の気持ちを考えて事があるのか。無いのだろう。だって姉の中では、その行為は見えている結果を得るための手段に過ぎない。

結局は似た者同士だ。家族なのだから。

けれど、自分よりも、自分なんかよりも天才的で、達観している。人間である事を止めるのが恐ろしい自分と違って、姉はもう、人間じゃなくなっている。

「わかったわあ。ラナエちゃん、何故かマルゴウの中にいないようだし。次に会ったら……お姉ちゃんを、あの子に融合させる」

「うん。貴女は貴女の研究を頑張って。応援してる」

「ええ——勿論」

それが彼女の最後の実験だというのなら。

……私は。

21. あっさりした摩擦と、善なる者

天国というものは存在する。しかしそれは安らぎを与えてくれる場所ではない。ただ、肉体が必要なく、何もなく、ただただ暇を潰す以外にすることが無い荒野の世界だ。ただ広く、どこまでも広く、終わりのない赤い荒野。天の国ソラオトリ。

巨きな太陽が二つ、その荒野を照らし続ける、夜も昼も朝も無い虚無の国。生と死。再生と破滅。地獄と天国。

それらは対を為し、常に共に在り、故にこそ似通ったものであるとして語られがちだ。けれど、そうではない。天国はある。だが、地獄は無い。地獄とは場所の名ではなく、機構の名前だ。

地獄はただ受け入れ、流すだけの機構。可能性に対しての判別を行い、より善きものを早く世界へ還すための機能を保持し続けるもの。そこに意思はなく、そこに魂は存在しない。だから、「地獄側」とされる能力は存在しない。地獄自らが何者かに能力を付与する事などないからだ。

けれど天国は違う。正確には天国に住まう者は違う、というべきだろう。世界でしかない天国は能力を与える事は無いが、そこに住まう者が人間に能力を与える。そこに住まう者。天国に住まう者。

天使と——《box: absolute (0/0), z8, over hidden》
悪魔と——。《/box》

21 / ◇

ルシアがいない。

ガリーリの地下から行ける大集落にあの後寄ってみたんだが、やっぱりルシアはいなかった。弟も同じ。どころか一年前の恨みを憶えていたとかで追い回されて、面倒になって出てきた次第である。

気になる事と言えばあのダンディ犬の姿が見えなかった事ぐらいだが、全体的な人口はあまり変わっておらず、なんだろう、一年前までの「反乱を起こすぞ」みたいな雰囲気は消え去って、どちらかという諦めムードみたいなのが漂っていたように思う。

ダンディ犬に何かあった、とみるべきだろう。知らんが。

さて、俺の感覚半年は探し回ってるんだが、いない。戦争が始まったことで探し難くなったってえのものもある。色んな場所で戦端が開かれるし、あん時の盗賊団みてえなのが

増えた。童女の姿でも狐の姿でも襲われるたあ恐ろしい事だ。

基本は鳥になって空を行くのだが、ドラゴンが各地を飛び回ってるってのもあって空路もあぶねえと来た。

他の大陸に行つちまったのかとも思ったのだが、エメレンシアに会いたがつてたアイツがどうして他の大陸に行くんだよと思いとどまる。つてことで探して探して探して回っているのだが、本気でいいない。俺の動向を察して逃げ回ってるんじゃねえかつてくらしいない。

破滅まで、どれほどの時間が残されているかわからない。ルシアを確保できたとして、その体を調べてロスに適用する、つつー無理難題も残ってるんだ、早い所見つけたいんだが……いいない。

途方に暮れた俺あ、まあ、諦めるつて選択肢もあるなあ、なんて思っていた。約束をしてしまったからには反故にしたくない。けれど、約束だ。口約束。それに俺あ母上殿に世話してもらったつて礼はあれど、ロスにはない。どっちにも情はねえしな。

俺自身が破滅に耐えられる体だつてんなら、そう血眼になつてまで探す事ではないよ
うにも思う。

「ん？」

「あ？」

すれ違った。

……いやいや、ここ空だけ。鳥でもドラゴンでもないモンに早々すれ違うかよ。

旋回して——それを、目に入れる。

白い翼と、金のリング。纏う衣服はどこか透き通っているような、そうでないような。

「なんだ、お前は」

「そっちこそなんだいね。そんな、陳腐な格好で」

「コレのことか？ 何、天使だ。天使というものは、こういう格好をするものだろう」

「天使い？」

……あー？

はー、あー。うーん？

「お前さん、天使って感じしねえなあ。そもそも天使なんかいたのか。何から遣わされ

てんだ、お前さんは」

「失礼な鳥だな。私は誰の下にも付かん。我々は自由故な」

「じゃあ天使を名乗るんじやあねえよ」

「む」

別に羽ばたいてもいない翼と飾り気のないリングを付けた程度で天使を名乗れるんなら俺でも名乗れるわ。形態変化でちよちよいのちよいさ。俺は羽ばたかねえと浮け

ねえからなれやしないんだが。

「俺あラナエってんだ。お前さんは？」

「バラエルだ。ふん、長い事生きてきたが、鳥に名を問われたのは初めてだな」

「ああそおかい。まあ今は鳥だが、俺あ狐なんだよ。狐で記憶しておけ」

「そうか。狐に名を問われたのも初めてだ」

「そうけ」

よくわからん奴だな……。マイペースつつーか、こつちに対して興味がないというか。天使だからまあマイペースも何もって感じはするが。いやいや、本当に天使なのか？ ほら、ソーサーみたいなものあっただろ。なんか機械付けて飛んでねえ？

「なんだ、ジロジロと。欲情でもしたか、狐の癖に」

「俺あ雌だよ。んで狐だ。人型に欲なんか抱くかよ」

「それはその通りだな。それで、何用だ」

「用なんかねいよ。空に人間っぽいもんがいたら驚くだろう、驚いたら興味を持つだろう。そんだけだ」

「それだけか」

「そうさ」

たとえ眼下で戦火が上がっていようと、悲鳴や断末魔が飛び交っていようと。

すれ違う前——この天使が、その光景を見て笑っているのを見ていようと。別に用な
んかない。

「用が無い者に興味は無い。とつと立ち去れ、狐」

「そりやあいいんだがよ、お前さん」

「なんだ」

「涎、拭いた方がいいぜ。さつきから服に垂れてる」

「……余計なお世話だ、狐。仕方なからう、私はああいう光景が好きなのだ。涎くらい、
垂れもする」

「おおよそ天使たあ思えねえ発言だな」

「お前に天使の何が分かるというんだ、狐」

「……そりや知らねえがよ」

もつと、あるだろ。こう。

ああいや、そうか。天使つてな基本的に理不尽の象徴でもあるからな……これで正
解つちや正解、か？

「あれ、何してるの、バラエル。早く集めに行きましよ？ あら、なあに、この鳥。バラ
エルの友達？」

「私の事を天使っぽくない、などと言う失礼な狐だ。友達ではない」

「へえー！ 珍しい、バラエルが愚痴を言うほど心を開くなんて！ ね、鳥さん。私はサティーよ。私も天使なの。私とも友達にならない？」

「そりやあいいがよ、話繋がってねえし言葉通じてねえぞ、おい」

「こいつは元からこうだ。気にするな」

「そうけ」

天使と友達になった……。いや、本当にこいつら天使か？ そんなフランクな天使、いるか？

バラエルとサティーなんて天使聞いたことねえしな……。いやまあ俺が知ってる名前じゃねえから違う、つてのも変な話だが。シエルダンもミグエルもナトウムも知らねえ国だし。

「集める、つてえのは？ 死体収集家か、お前さんら」

「え？ 違うわ？ 生きているのを集めに行くのよ！ だつて、そつちの方が綺麗じゃない。もうすぐ破壊で全部が汚い土に成つちやうんだから、その前に集めておかないと！」

「まあ待てサティー。今良い所なのだ。シエルダン側の男が、一騎当千の働きを見せている。だが体力が直に限界を迎えるぞ。ナトウム側もそれはわかっているから、劣勢のフリをして隙を伺っている。うむうむ、面白い見物だ」

「じゃあその一騎当千の英雄！ コレクションしないと！」

絶対天使じゃねえよ……言ってる事全部悪辣だもん。

え、何？ 世界の邪悪者詰めました、みたいな奴らか？ 破滅の事を知ってるのは天使っぽさがあるけど、言動が明らかにヤバイ。ヤバイが過ぎる。

可哀想に、誰だ誰だ。その被害者……一騎当千の男とやらは。

……あー。コールかー。

「いやあ、お前さんら。アレ、知り合いでき。見逃しちやあくれねえか」

「え？ なんで？」

「狐の知り合いに人間がいるのか？」

「いるんだよ、なんでかな。なあよ、友達の好つてことで、どうかね」

「でも、そのままだと死んでしまうわよ？ 破滅で、汚い土塊になって。そうなる前に私

のコレクションになれば、破滅も回避できるし死なないし！ 良い事だらけ！」

「ん、そうなのか？ ……いや待て、破滅が回避できる、だつて？ どうやって？」

「持つて帰つて、私謹製のポッドに入れるだけよ？ 破滅はこの世界で起きるものだから、天国には関係ないわ」

「天国」

天使、つつつたか。

で、天国に住んでると。そこに持ち帰れば、破滅は関係ない。

……ふむ。

「天国つてえのは、どこにあるんだ。簡単に行けるのか」

「空のもつと先にあるわ。けど、うーん、鳥さんじゃ行けないかも。あなたはポッドに入るには小さすぎるし、そそれないし……。肉体のある生き物だと、溶けちゃうのよ。私のポッドの中でだけ生きられるわ」

「いや、俺が行きてえわけじゃあねえんだがよ」

「そなの？ あ、そろそろ体力が切れそうよ！ バラエル、行きましよ！」

「そういうわけだ、狐。お前の知り合いを助けるためにもなる。それでも止めるか？」

「あー、まあそういうことなら」

別に義理があるわけでもねえしな。ただ善性の奴だから、なんぞコレクシオンなんかになるのは可哀想かとも思ったんだが、土塊になって死ぬのとどっちが嫌かってーのは俺の知るところでもないだろう。

だが、天国。天国か。

ロスをそこに、そのポッドとやらに入れてもらえりゃあ、破滅の回避になる……な？ サテイーが女にも興味がありゃあ、行けそうな気がする。ルシアの身体を調べてロスに適用する、なんて遠回りなことしなくても、簡単そうだ。

「それじゃ、もし次に出会う事があつたら、またね！」

「破滅で狐も死ぬだろう。次は無い。期待をするとまた落ち込むぞ、サティー」

「ロマンを持つのは悪い事じゃないのよ！ ばいばい！」

元氣な奴だな。言動は悪辣だが、性格は確かに天使っぽいような。バラエルは全く天使っぽくないんだが。

どうせやる事も無いのでそこで旋回し続ける。

またね、とは言われたが、次にいつ会えるかわからないのはこっちも同じ。用事が終わったらロスを入れてもらえるか聞きたい所。

眼下。

二人の天使が急速で戦場に向かっていく。

落ちていくようにも見えるそれは、しかし戦場の少し上の辺りで停止した。

コールは疲弊し、今にも倒れそうになりながらも剣を振り続けている。シエルダン側は全力を出し過ぎたのか、先ほどまで押していたのにもう少して押し返されそう、と言った様子。それを押し留めているのがコールで、俺と取引をした時からかなり鍛えたのだろうその体を必死に振り絞って戦い続ける。

銃やらソーサーやらがあるはずなのに使わない理由はなんなんだろう、とか思わないでもない。ああいや、銃持ちはいくらかいあるな。ソーサーは重力鉱石がないと使えない

感じか？

一瞬、コールがふらつく。

その隙をナトゥム側は見逃さなかった。一斉に銃と弓を構え——遮蔽物のあらゆるところから出てきたそれらが、コールを射抜かんと殺意を込めて。

戦場のすべてが、地に倒れ伏した。

……ガリーイのあれあ、こいつらだったのか。あそこに、なんかあったのかね。

今までの緊張感も緊迫感も消え薄れ——あとは、あの騒がしい天使が嬉しそうにコールや、他の強そうな人間を縄のようなもので縛って、サンタクロースもびっくりな白く大きな袋に詰めていく。

バラエルはバラエルでサティーの眼に適わなかった戦士や兵士たちを眺めてはほお、と息を吐き、その傷や怪我を撫でたりなんだりしてはニヤニヤして……うーむ。

天使い……？

いやいや。

いやいやいや。

違うだろう、ありやあよ。

「……どろん、つつつてな」

不可視を纏って、立ち去る。

まあよ、なんだ。もし助かりたかつたんなら、謝りやあいだろうよ。

「(ハ)は……」

「よお」

ちよいとした洞窟。つつても水源が近くに無いのか、じめじめはしてえ場所。

そこに寝かせていたコールがようやく目を覚ました。

「お前は……」

「おう、憶えてるか。軍人君」

「忘れはせん。イオピクスのラナエ……その幼さで大陸全土における指名手配など、史上初だろう」

「そうけ。んなこたまあいいんだがよ。状況、わかるか？」

「いや、まったくわからない。だが……助けられたのだろうことは、わかる。私の記憶では体力の限界が訪れた所が最後に、視界には無数の敵戦力が映っていた。死んだと……」

そう、思った。だが、死んでいない。また、お前が助けたのか」

「結構分かつてるんじゃないかねえかよ」

サティーが縄と袋を取り出して、バラエルが戦場を眺めている隙を突いてかけておいた幻術で、まあ形態変化と不可視のそれを色々使って助け出した軍人君ことコール。サティーが怒り狂うのかもしれないが、あれ絶対連れて行かせない方が良かったと思うんだあな。

ロスもまた、同じく。

「そうだ、助けた。だから、何かくれ。なんでもいいぜ。飴玉でも家族の写真でも」

「……前に言っただろう。私物は持ち歩かないのだ。今はペンも持っていない」

「おいおい、次に助けられる事を考慮して何かしらもっておけよ」

「死地に向かう一端の軍人だぞ。余計なものを持つ余裕があるものか」

「馬鹿が。だからこそ未練を持っていくんだだろうが。死んでも死にきれねえ時に使えよ、記憶をよ」

「馬鹿はお前だろう……私に何を期待して助けたのかは知らぬが、私に残されているものなどもう何も無い。家族は死んだ。ファイスの大災害を知っているだろう。突如として現れた巨樹によって、何もかもが奪われた。ナトゥムの手によって……ああ」

「……」

んー？

オーマが言うには、指名手配されてる理由はファイスを壊滅させたから、みたいな話だったはずだが……なんだ、コイツは知らねえのか？ ナトウムのせいになつてる。軍の士気を高めるため？ 都合が良いっちゃ都合は良いな。誰がそうしたのはかは知らねえが、だから戦場も激しいのかね。

「私にはもう何も無い。国のために死ぬこと以外はな。だから、助けられた事には礼を言おう。だが、助けて欲しいとは思っていなかったし、今お前に与える事の出来るものも何もない」

「ファイスを壊滅させたのが、俺と知ってもか？」

「………何？」

何もねえらしい。

じゃあ、仕方ない。一番大事なもんを、貰う事にするか。

「俺だけ、ファイスを潰したのは。ファイスを斬った。その後にあの大樹は生えたみてえだけど、最初にやったのは俺だ。言うなりやお前の家族の命を貰って、今お前を助けた、みたいなものだな。おお、これなら貸し借りも成立する。ならお前にもう用はねえや、どこへなりとも——おっと」

ライオットのそれよりも幾分か遅い斬撃を避ける。

今回は致命傷ではなかったため、治療はしていない。疲労の回復も全くだらう。それでも。

コールの目には、怒りがあつた。けれど憎しみは——ああ。

「そうか。お前には少しでも、少しだけでも、会話の余地があると思つていた。単なる殺戮者ではなく、快楽や悦楽のためだけに殺人を犯すような者ではなく、きちんと裁きを受け、罪を償えば——更生しうる者なのだ！……違つたようだな」

「おいおい、どこまで善性なんだよ、お前。怒るだけか？ 憎まねえか、俺を」

「して仕方のない事はしない主義だ。お前を嫌つたら家族が戻ってくるか。お前を憎めば、フェイスは元に戻るのか。そのような余計な感情に熱を入れる程、私は器量ではない。ただ——怒りがある。お前が、お前は、お前を……あの時、見逃してしまつた私に——」

「俺を助けた事を後悔するか」

「捕まえなかつた事を、だ。勘違いするな。私は、目の前で救える命があるのなら、それを救う事に躊躇は無い。それでも私は今、私の正義の元にお前に裁きを降そう。憎みなければ憎め。これより私は、私の判断で、お前を——殺す」

「じゃあよ、くれるモンは決まつたな。俺も、お前にやるもんは決まつたよ。こればかりはどつちかしか受け取れねえ」

「ああ——死を！」

なんでそんな悔しそうな顔してんだよ、お前。
死ぬ以外ねえ奴の顔じゃあねえよ、それあ。

煙管を、吸う。

まあ。

「……能力を持たねえで、ソレか。すげえなあ、怒りつてな」

俺が負ける事は無かった。だって、既にコールは疲労困憊。剣の速度は通常時よりもかなり遅く、体力は無いに等しい。

何を習ったわけでもねえ俺の剣が避けられねえんだ。もう限界だろうよ。
仰向けに。

荒い呼吸を抑えきれずに、涙を流して……コールは倒れている。

「……聞いた。アルジナ……お前と共にいた少女に。……一年前、私は……あの少女に再会し、お前の経歴を、聞いた。……家族を誘拐され、母親を殺され……人間に恨みを持ち、その復讐をせんと各地を回る、イオピクスの……狐の少女」

「美化しすぎだよ、そりゃ」

「復讐が無益だとは、言わない。……復讐には意味があるのだろう。いつまでも恨みを抱えたまま、いつまでも禍根を抱いたままに過ごせ、など……あまりにも、酷だ。たとえそれが、新たな復讐を産もうとも……それを晴らす事には、少なくとも復讐者にとつては、意味が、意義があるのだろうと……私は考える」

「高尚過ぎる。俺あそんなこと」

「人間に恨みを抱くのなら、人間から与えられる裁きなど……それこそ意味のないものだろう。裁きとは……復讐心を鎮める行為ではないのだから。だから、お前は……お前の復讐は、まだ、終わっていないのだろう。私の家族も……ファイスの人々も。否、この大陸に住まうすべての人間が、ただ人間であるというだけで、復讐の対象だ」

「……」

「それを、私は——」

振り絞るように、洞窟の天井に手を伸ばして。

心から悔しいというかのような顔で——言う。

「——悪とは、言えぬのだ。お前を——悪しき者であると、断ぜぬのだ。ああ——」

こいつは、なんなんだ。

どうやって、どの環境にいたら、こんなヤツが生まれる。

「義理は、返せそうにない。お前に死を与える事は——私には、出来ない。だから、勝手に奪え。私から——命を」

「おう。貰うぜ、余すところ無く」

地に刺さったコールの剣を引き抜いて——その心臓へ、刺す。

幻術で痛みは取り除いた。善性の者よ。最後までいいは、苦しまずに死ね。

「いつか——お前の、恨みが——晴れる事、を……」

恨み、なんて。

最初から、抱いちやいねえよ。夢を見過ぎだ、軍人君。

煙管を吸う。

コールの身体から溢れ出た燐光が、それに吸い込まれていく。

「土塊になるよりかは……いやさ、勝手な話だな、そりゃあよ」

ご馳走様、つてえことで。

2.2. あっさりした諦めと拒絶

2.2 / ◇

戦争はシエルダンの劣勢に傾きつつある。コールを含め、複数の英雄や将、更には単なる司令官まで、様々な人間が、老若男女問わず忽然と行方不明になっているのが原因だとか。それはナトゥム側も同じなのだが、個に優れ、それらが一騎当千を為していたシエルダンに対して軍勢の、群れとしての動きが優秀なナトゥムでは、その欠けた部分の重さが違うのだと。

元よりファイスの壊滅によって爆発的な人口減少が起きていたシエルダンでは戦線が保てず、国を取り囲む円形の谷によってなんとかそれを繋ぎ止めている状態で、敗戦ムードも敗戦ムード。ナトゥムはかなり治安が悪いそうで、負けたらどうなるか、なんてのはわかりきっている、とか。

もうすぐ破滅するから負けようが勝とうが、関係ない、なんてことは、前線に出ている者の知らぬ所である。

そんな話を、ミグエルで聞いた。

「破滅、ね。俄かには信じ難いところだけれど」

「信じなくていいよ、どうせ同じだ。ただまあ、メリンダ……猫の方のメリンダは死なねえらしいからさ。託したいものとか、言葉とか、あつたら伝えておくと良い。破滅をどうにかできねえかとかちいと調べてみたが、どうも無理っぽいな。現状あ。あんたら王族は何か知らねえのか、つて聞きに来たけど、その様子じゃ」

「ええ、私達は何も知らないわ。女王として、あるいはあの人も、国王として。両家共にそんな話は聞いたことが無い。でも……そう、メリーだけは、生きるのね。もしかして、他の奴隷のコたちも？」

「融合した人間ならそうだな。単純な奴隷なら無理だろうが。俺含め、こういう獣の混じった人間、みてえな容姿の奴あ破滅の後も生きるんだそうさ。俺あ混じったわけじゃあないんだがね」

「それがいつ来るのか、というのは、わかる？ 具体的な日時は」

「残念だが。半年前の時点で一年以内と言われていたから、まあ、そういうことだろうさ」

「……貴重な情報を、ありがとう。最後に一つだけ聞かせて欲しいのだけど」

「その、破滅というのは……あの奴隷商人の、エメレンシアの仕業？ あの女が世界を壊

「そうと?」

「……まあ、俺にとつての復讐対象で、こいつらにとつても愛娘にひどい仕打ちをした奴だ。今聞かされた少ない情報で、そうではない、という事は——わかっているんだろう。分かっている上で聞いている。というか、これは、俺に問うているんだらうな。復讐を止める気のない俺に。」

「違う。アイツは破滅をどうにかしようとしている側だ。ただもし、エメレンシアが破滅を解除する手法を見つけ、それによつてお前達が死なくなるのだとしても——俺はエメレンシアを殺す」

「そう。もしそうなら、貴女は私達の敵になるわ。けれど、そうなるまでは貴女を全力で応援する。貴女がどんな思想の持ち主であっても、貴女がどれほど醜悪な悪事をシエルダンで行っていたとしても、貴女がやったことは変わらない。貴女がどんな心持ちでも、ね。私達の大事な娘を送り届けてくれた事は、貴女の最大の過失よ。嫌がっても背中を押してあげる」

「こえー女王さまだな。アンタの娘なんだ、メリンダなら破滅の先でもやっていけるさ」
「当たり前、よ」

「それじゃあ。」

「家族との時間を、大事にしてくれ。俺あもう、ここには来ないからよ。」

そう言つて、大広間を出る。話を聞いていたのは女王だけではない。ちやんと置くようになった近衛兵らしき人間もまた之を聞いていたのだが、顔色一つ変えないたあプロフェッショナルだな。もちつと動揺しても良いんだぜ。

にしても、最大の過失、ね。

ははあ、素晴らしいな。気に恐ろしきは真なる善人——意思の強き者、つてか。

ああ、期待をくれたんだ。結果で返すさ。それが義理つてえもんだろい？

「……ああ、わかつたよ。覚悟を決めよう」

「すまねえな。一度約束したんだ、俺も守りてえが……手段がねい」

「ここは卒業と退学を決める場所。私だけがそれ以外を選ぶのは、うん、無理があるんだろうね」

「ロス。ここに在学中の奴らは、今どれくらいいるんだ？」

「少し前は急激な増加を見せていたけれど、最近は緩やかだね。エメレンシアはもうこの場所を覚えていないだろうから、多分、それが理由なんだろう」

「覚えてない？」

「そもそもエメレンシアがここに来たのは初めての一度だけ。彼女は新入生じゃないからね。あの子も姿は少女だけど、年齢はそろそろ大人だ。大人は基本、ここには来られないよ。ここは選択の此岸。自らの意思で決断できる者はまず来られない。誰かの庇護下にいなければならぬ者しか、ここに来る事は出来ない」

「俺もロスも、誰かの庇護下にいるべきとは思えねえが」

「私は庇護下にいるべき年齢からここにいたというだけ。ラナエ、君は庇護下にあるべきだよ。だつてまだ、6歳だろう?」

「……まあ、そうだがよ」

いや、そうなんだがよ。俺あ元日本人で、普通に大人だったんだわ。庇護下になくたつて別に生きていける。それを受け入れるのは、ちと判定基準が甘すぎやしねえか。

「今はもう、卒業者と退学者、双方が同じくらいになっているよ。ああ、そういうええ。以前聞かれたアルジナは退学したね。今在学中の者は、もう32人程。この学校も……破壊によって、崩れ去るだろうから。早めに決めないと、みんな退学になってしまう」

「元になった人間の方のアルジナにや面識ねえんだわ。だからあんまり興味はねいよ。それより気になってたんだが、この学校はいつからここにあるんだ? つか、誰が建てたんだ。こういつちやあなんだが、外の建築物とも様式がてんで違えだろ」

「さあ。私はここに連れてこられただけで、その時のエメレンシアが使い方を教えてく

ただだからね。ラナエ。エメンシアはもう、最初のエメンシアではないよ。生命の強化……獣種化における分離の過程、つまり人格の重複と剥離は、本来は起こるべきではないものだった。マルゴーによる生命の強化としての成功例は唯一人、ルシアだけ。あの子だけが、あの子本来の能力によってなんとか人の形を保つことが出来る」

「そう、そのルシアの不死性をロスに適合すりゃあ破滅の回避が出来るかと思ったんだが……ありや能力なのか」

「うん。ルシアの能力が無ければ、必ず剥離が起こる。だからエメンシアは仕方なく、それで良しとした。それ以外方法が無く、それならば少なくとも片側は成功するのだから、それでいいと。諦めではあるのだろうけど、仕方のない事だった。最初のエメンシアは自身に落胆していたよ」

「まるで見てきたように言うじやあねえか。なんだ、友達だったのか」

「そう言っているよ」

そうけ。

まあ、知らんがよ。

「友人だと見ていたのは、私だけだったのだろうね。エメンシアにとっては被験体に過ぎなかった。最初の被験体。ああ、二番目の、かもしれない。最初はルシアだから。

それで、エメレンシアは自分に落胆して……自分にも妥協の方の強化を施す事にした。このままだと実験に支障が出ると判断したからね」

「でも、自分に施したって強化された生命にあならねえだろう。つか強化したところで何が変わるんだ」

「人格の重複と剥離の過程を最も理解しているのはエメレンシアだよ。エメレンシアは自身にそれを施すとき、重複しない部分と剥離する部分を分けた。結果出来上がったのは、凡そ人間として活きる事の出来ない……けれどエメレンシアの性質たるマルゴーを受け継いだ人形だ。彼女らはエメレンシアの記憶を持たない代わりに、ゲートと呼ばれるマルゴーの亜種と、魂の摂取」という「転生」の性質持ちが持ち得る能力を持つている。その時に獲得したんだ。エメレンシアから別のエメレンシアに転生したことで、性質を獲得した。代償にエメレンシアは記憶の一部を失った。人格には記憶が付随するものだからね。少女らしさや実験の失敗に落ち込むといった弱さを剥離すれば、それが形作っていた記憶も剥離される」

話が難しいんだよなあ。ロスもデイルム婆さんも。

要はマルゴーを使うエメレンシアは記憶や人格の欠けたエメレンシアで、その人格の一部だけを有しているのがテルミのエメレンシア。テルミのエメレンシアを作った理由は「転生」の性質と、それが持つ能力が欲しかったから。そんだけだろ？

少女らしさや実験の失敗に落ち込む弱さ、ねえ。んじやあテルミのエメレンシアとエメレンシアを統合した性格がアイツ本来の性格ってか。……どう合わさるんだ。全く想像がつかないよ。

「魂の摂取」を持つエメレンシアがテルミという場所に一人いる。彼女らはシエルダで死んだ命を全て取り込んで、その命が必ずシエルダン国内に生まれるように調整を行っているよ。彼女らが楔としてそこにある限り、世界の人口は少しずつここへ傾いていく。「魂の摂取」を持つエメレンシアは一応獣種化した生命だからね。外には出られないけど、破滅には耐え得る。彼女らが楔としてそこになれば、他の獣種化した生命達の家族や友人達は、どれほど遠くなるかはわからないが、いつか必ずシエルダンに生まれる。記憶が続くかはわからないけれど、流転の法則がある限り同じ命が巡るはず。そう、エメレンシアは言っていたよ」

「破滅で死ぬと世界に還元されて散っちゃまうから、押さえつけて逃がさねえようにするってことか。そりやまあ、余計な世話じゃねえのか。誰も頼んじやいねえだろ、そんなことはよ」

「それはわからない。私は『思考存在』に会った事はないからね。依頼された事があると言っていたけれど、何を話したのかは知らない。エメレンシアがその分離を行った時から、私とエメレンシアは確実に友人ではなくなってしまったのだろう。会話をする事

も無くエメレンシアは私に強化を施して、狐に……イオピクスになった私を手元に、何者にもなれなかつた私をここへ連れてきたよ。それが私が知るエメレンシアの最後だ」
ふうん、と。

まあ、煙管を取り出して、吸う。学校の敷地内で吸うのはそれなりに遠慮していたがね。吸わずにやっけていられるかつて話だ。なんともまあ、諦めまみれだな、アイツ。もう少し我欲に生きりやあいいものを。”思考存在”とやらの思想に染まりすぎじゃあねえのか。まったく。

「土塊になるのは、怖いか」

「怖いよ。死ぬのも、死ねない時間が続くのも——怖い」

「アンタと、学校に残ってる奴ら。俺が殺してやろうかい。痛みもなく、なんなら気付くこともなく、楽に死ねるぜ。俺も”魂の摂取”を持つてるからな、俺が破滅の先に連れて行つてやるよ」

「それは、遠慮するよ。ラナエ。私達は君にあげるものを持つていないからね。ここにいるのは何も持たない人間だ。だからこそ選択の余地がある。故にこそ、君が手を出していい存在はここにいないんだ。ラナエ、君は外の生き物だろう。あちらとこちら、その此岸に立つ者は、踏み出すか退くかを自分で決めなくてはいけない。言葉を強くして言うなら——君程度に殺されていい命は、一人だつていないよ、ラナエ」

はン。それでいいよ、お前は。流星は、って感じた。重いんだよ何もかも。言葉も責任感も、使命感も。託される側になってみる。突き放される側になってみる。重圧すげえんだわ、わかるか？

それでいいよ。それでいいんだ。五年間。たった五年間、一緒にいただけだ。情も愛もなんも抱いちゃいない母上殿に、それでも感じていたのはそういうずつしりとした所だ。ずっと何かに悩んでいて、ずっと俺達を守ろうとしていて、ずつとずつと、何かに押し潰されそうだった母上殿よ。

それがアンタだ。ロス。託されたモンくらいは、覚えている。

「散々苦しんで、散々悩んで、どっち道死んで……まあ、新しい命になったら、また会おうや」

「うん。その時は、君の母親にも会えるといいね」

「どうだろうね、まだ俺の中にいるんだ、会えるかどうかはわからんが、まあそうなったら、ってことで」

助ける、という約束は守れなかった。

心残りだ。未練だ。でも、それでいい。もう、良い。

俺はもうロスにも、この学校にも関わらない。精々苦しみ藻掻いて決意の果てに死ね。それが人間だってんならよ。

「じゃあな」

「ああ、元気で」

あいあい。

今度こそおさらばさん、つてことで。

「ふい〜……」

もう抗わない事を決めて、もう奔走しない事にした。ロスとの約束が無けりやあ、俺がやることはない。

だからまあ、ちいとアドリアンの温泉に寄ってみた。アドリアンは見事に再建されていて、ハゲの爺さんもまだ存命で。俺の姿を見るなり快く泊まって行ってください、だとは。馬鹿が、ファイスの事件を知らねえわけじゃねえだろうに……ああいや、ナトゥムの仕業になってるんだっけ？ 結局オーマの知っていた情報とコールの言っていた情報の齟齬がよくわかっていないんだが……まあいいか。考えなくて。

それで、久しぶりにゆつくりと温泉である。今回は同行者もいねえからな、ゆつくりだ。本当に。

狐身だと水深が深すぎるので狐の亜人種……まあ人間たちの言う所のイオピクスの姿になって、湯に溶ける。いやあ、狐としてはどっぷり濡れるのはまあ大好きってことはないな、くらいのアレなんだが、この身体になりや話は別だ。元日本人として、あるいは地球人として、風呂が嫌いなはずもあるめえよ。嫌いな奴はいるんだろうが。

空を見上げる。

そういえば空の向こうには天国があるんだったか。ファンタジーだねえ、本当に。最近あ転生だの破滅だの、こつちからはアプローチの仕様がないことばかり。残るエメレンシアへの復讐という壁があるものの、奴の姿が見えないというか探せない以上はお手上げ状態。久しぶりに直近でやるべきことが無い状態だ。リラックスもしようさ。

普段は見えないようにしている尻尾をずるりと流して、ふいー、とさらに呼気を吐く。「ああ、ようやく見つけたわあ」

「ん？」

突然、声があった。脱衣所から温泉へ入る扉はガラッガラ音のなる奴だから、誰かが入ってきて気が付かない事は無い。

だから突然なのだ。突然、声があった。つまり、突然現れたって事。

頭を仰向けに逸らして、声のした方を見る。

そこに、いた。

エメレンシアが。
温泉入るなら服脱げよ馬鹿が。

23. もう一つの解法、あるいは囁き

23 / ◇

行動は速かった。服を着ていなくても使えねえ能力でもねえんだ、剣の生成とそれの回転、そこから斬撃を飛ばすのに1秒もない。

だが、んなこた相手も同じ。展開したマルゴーが斬撃を飲み込み、天空へと吐き出す。考えねえで放ったがよけられてたらアドリアンが不味かったな。ライオットの飛ぶ斬撃は切れ味が良過ぎるのが難点だ。選択肢から斬撃を外し、形態変化をした腕で斬りかかる——も。

「はあい、暴れないでねえ」

背後から声。

首に何かが嵌められるのを感じる。金属音からして、首輪か。ぐい、と引つ張られる。鎖付きたあいいご趣味で。首の周辺を少しずつ形態変化して、塩酸当たりの液体を染み入れさせる。……なんだ、鉄じゃあねえのか、これ。んじゃあ方針変更、首を切り離す。「うわ」

「お前さん、ライオットと俺の戦いを見ていただろうよ、今更引くな」

「引くわあ、それは。いくら天然の強化生命だといつても、生物はやめないで欲しかったものねえ」

「んじやあ引いたついでに死ぬ」

取れた首が、全方位に棘を放つように変化する。しかし既にエメレンシアの奴はおらず、棘を引つ込めて首を拾い、くつつけて、よし。

少し離れた上空を見れば、思いつきりドン引きした表情の奴が。自分の所業を思い出せよ。どっちもどっちだろうよ。

「大人しくしてくれると助かるのだけどね」

「俺の利用価値より排除を取ったんじやあなかったのか？ やっぱり欲しかったってか、逃がした狐は大きいねえ」

「必要としているのは私じゃあないのよ。今貴女に求めるのは、無抵抗でいてくれることだけ」

「おいおい、裸の童女を捕まえて抵抗するなつてか。狐だが、倫理観を疑うぜ、人間」

「女同士で少女相手でなんなら狐相手に研究対象以外の感情は持たないわあ」

「獣種化した生命を奴隷として買い叩いてる奴らは性に走つてたみてえだが」

「それらはすべて異常者よお。どうせ死ぬのだから、最後までいい思いをさせてあげ

たいでしょう。破滅を乗り越えた先には、そういう異常者は全滅して、獣種化した生命だけが健気に生きていくわあ。まあ、私みたいに普通の感覚の人間も死んじゃうけどねえ。それは必要な犠牲だわあ」

「そうけ。まあそれはそれとして、死んでくれ」

矛先が上空に逸れたのは嬉しい話。右腕を変化させるは機関銃。ライフルだの拳銃だのテーザーガンだのはテルミで散々目にしたんだが、こういうゴツツいもんは見なかった。開発されてねえって事は無いと思うんだが、まあ、インパクトはあるだろう。

「厄介ねえ、”転生”の性質持ちは。前の時はどれほど技術が進化していたのかしらあ。それも破滅の前には消え去るしかなかったというのだから、私の正義も理解してほしいものだわあ」

「正義い？ 慈善事業の間違いだろ。正義を名乗るなら、もつと盛大にやれ。敵に配慮するんじやあねえよ。障害だと思ったら、情け容赦なく叩き潰せ。お前さんのやつてることは未来が閉じないようにするための慈善事業だ。なんせ、お前に何の還元もない。正義つてな、守るもんがあるから成り立つんだよ。思想だけの正義は思想の域を出られやしねえ」

「慈善事業なら妨害してもいいというのかしらあ」

「馬鹿が。復讐なんざすべて悪事に決まってるだろう。どこぞの誰かは自分の鬱屈とし

た感情を解消したいと思うのは悪ではない、なんて善人染みた事を言っていたがな、俺あ悪だよ、エメレンシア。お前の世界でも、ファイイスに家族がいた奴らの世界でも、なんならこの世界にとってさえ悪だ。悪役じゃあねえ、害悪だ。なんせ、世界を救わんとしてる奴を殺そうとしてるんだ、悪いに決まってる。その理由が復讐だつてんなら、尚更に悪い。最悪で害悪で邪悪で、この世界のために想うなら消えたほうが良い命だろうさ。お前の慈善事業の方が、よっぽど大切だ」

温泉でハダカじゃあ格好がつかねえがな、ここにおいては脱がねえ奴の方が悪い。

「再三言うぜ、馬鹿が。俺あ狐だ。知るかよ、世界の命運なんて。お前の正義も大義も慈善も努力も、そんなこと考える脳があるわけねえだろう。獣つてな、やられたらやり返すんだ。我慢だの飲み込むだの馬鹿をやるのは人間だけだぜ。我慢が美德だと思ってるから、飲み込むのが上手だと思ってるから。そうやって細けえこと考えて、やられたらやり返すつてえ大事な事を忘れちまってる人間の多いこと多いこと」

「狐が人間を語るのとは、とっても滑稽ねえ」

「当たり前だろう、語るのとは。だって時間稼ぎだからな」

「！」

体が掻き消える。不可視を纏ったのではなく、立ち昇る湯気の中に雲散霧消した。形態変化……あらかじめ切り離していた分身を分解しただけ。

正面切って勝てねえってのはわかってるんだ、誰がずっと目の前に突っ立ってるかよ。

貫く。

前と同じく背後から——今度は心臓でなく、脳を。槍で。能力つてな意識と思考が大
事だからな、ここ潰されりやあ大分きついはずだ。

「か、あ——」

「まさか俺の組織が自分の身体にはつついてるなんざ思わなかったろう。無駄に接近したのが悪いんだ、またもお前に過失だぜ」

別に俺あ瞬間移動が出来るわけじゃないからな。先ほど背後から首輪を付けられた時に、エメレンシアの身体に指を一本飛ばしておいた。衣服に引っ掛けておけば、そこから形態変化で体を形作ることが出来る。まあどこかに頭が残って無きやいけねえのは俺も同じで、あの分身体の脳を潰されでもしていたら実際危なかったんだが、上手く行ったってことで。

後頭部から額までを槍で貫かれたエメレンシアの身体はぶらんとなって……いやいや。

どっちが生物やめてんだよ。

「あ、あ、……ああ……」

「心臓はまだ理解の範疇だが、脳貫かれて生きてて、しかも意識があるってのか。やべーな、お前。同じ生き物とは思いたくねえ」

「か——く、ぐ……い、痛い……わ、ねえ……」

ゆつくりと……エメレンシアの腕が上がって、脳を貫いているそれを、掴む。

よく俺に対してドン引きとか言えたな。俺あ今ドン引きしてるよ。

槍は、少しずつ、少しずつ、引き抜かれていく。

その様子を見て——剣を生成、首を断つ。そのまま心臓を刺して、胴体も切断する。他もだ。生命維持に必要な部分を全て切り刻んでいく。温泉が赤色で染まっていくが、それは申し訳ねえな、あとで謝ろう。

ああ、けれど。

「痛い、のよお……？ 痛みが、無いわけじゃ、なくて……すつごく、すつごく、痛いって……わかってる、かしらあ？」

「こえーよ、顎だけで喋るな。喉もねえのにとっから発声してやがる」

「ああ……ああ、ああ……」

バラバラだ。猟奇殺人事件も真つ青なほどに。

それが——段々、バラバラにされたパーツが集まっていく。温泉を赤で汚したと言ったが、まき散らされた血液さえもが戻っていく。潮が引くようにして、再生していく。

その様子は生物のそれではなく、化け物だ。本当に。俺なんかが比べられるのさえおこがましいほど悍ましい化け物。

そして——エメレンシアは、人型を取り戻した。

「まあ……これで、わかったでしょう？ 貴女じゃ私は殺せないのよお。復讐、だったかしらあ。何の意味もないのよお、貴女のそれは。それで。私に痛みを与えて満足かしら。復讐は、これで終わりい？」

再生。というより、時間が戻った、みたいに見えた。マルゴーが空間的な能力だから、もう一つ持っている能力が時間系、みたいなパターンか？ ありそうだが、それなら俺を邪魔に思った理由がいまいちわからん。あの時に逃げた理由も。これが出るなら、ゴリ押しで捕まえりやよかったじゃねえか。

新しく手に入れたもの、ってことか？ 俺の”魂の摂取”のような能力で、何かを獲得した、か？

「ふふ、不思議、かしらあ」

「きめえな、とは」

「お互い様よお。それで、ねえ」

ドン引きしてたから——反応が、遅れた。

エメレンシアの手先がマルゴーに飲み込まれると同時に、俺の首を後ろから掴むものが

あった。そこにマルゴーが開いているのは自明の理で、抜け出さんと形態変化を行う——前に。

「……私と一つになろう、ラナエ」

——ずっと探していた声が、聞こえた。

この世界にはそこそこの能力持ちが存在していて、その能力の強度は使用者の練度による。しかし能力の種類は意外と被りがちで、特に幻術なんかはその強度で出来る事がかなり違ってくるにしても、使用者はそれなりの量が存在している。

五感の全てを支配するとか、一切の違和感を持たせない不可視の幻術、みたいなことは出来ずとも、見た目を違うものに見せる、くらいはその辺の能力持ちでも出来る、という事だ。

だから、今回。

私の姿を纏った姉が、ラナエちゃんに対峙した。視認できる範囲であればマルゴーの展開は容易だ。だから遠くから二人の様子を見て、適宜使用して。

そして絶好のタイミングで、姉を——ラナエちゃんに、融合させた。

普通の獣種化であればすぐに分離が起こる。この世界を座標で見た時、同一座標に二存在があることに世界が許容できなくなつて、生物としての強度が弱い方が弾き飛ばされる。そして強度の高い方……強化された生命が元の座標に残るのだ。

入口を別々としたマルゴアの出口を重ねる事で起こしているこの現象は、しかし出口の大きさに違いがある。強化素材となる方……獣種化であれば獣の方の出口用マルゴアだけ、少し小さいのだ。それはつまり、人間を排出するマルゴアに取り込まれる形で獣が同一座標に現出する。

情報はそこで加算され、さらにそれをマルゴアに通す事で、”初めからそういう生物であつた”と世界に認識させる。マルゴアは通り抜けた存在の生体情報を抜き取る事が出来るのだけど、私にわかる事自体は副作用のようなもので、実際は”思考存在”に伝わっているものと思われる。あるいは世界に、命の情報として。

重要なのは、取り込まれた側の意識は消える、という事。取り込む側があくまでベースになるため、取り込んだ種族の種族的な渴望が身に着くことはあつても、思考が完全に失われる、知識の一切が獣に置き換わる、ということはない。消えるのだ。

姉はそれを、望んだ。

今、出口のマルゴアでそれが起こっている。

ラナエという既に獣種化している生命への融合は初の試みで、さらには姉を、なんて。

本当に気が狂っているとしか思えないけれど。

……どうか、姉がしたいことを、できるように。

夢——あるいは、次元の狭間、のような場所だろう。

そこにいた。俺は。俺は。俺と。

「……俺に何をしたね、お前さん」

「エメレンシアに頼んで、私をラナエに融合してもらった」

ルシアだ。

不死身の少女。なるほど、先ほどまで相対していたエメレンシアはこいつか。その不死性にも納得がいく。喋ってたのはエメレンシア本人なんだろうが。

それで、なんだって。

「融合」

「うん。アルジナやメリンダと一緒に。人間のアルジナに狼が、人間のメリンダに猫が融合されたように。狐のラナエに、私を」

「んじやあ俺あ排出されんのか。ロスみたいよ」

「ううん。私が掴んで、離さない」

全身に違和を感じる。ここにある精神みでない体じゃなく、外の身体。侵蝕——内側から食われているような感覚。それが全身を覆いきる前に、形態変化での膨張を選ぶ。

「乗っ取るつもりか、お前」

「そんなことはしない。身を委ねて。私の能力の全てを、ラナエに」

「いらねえよ、んなもん。一人で勝手に生きろ、俺を巻き込むんじゃない」

「ラナエの事情なんかどうでもいい。こうする事が、私の研究において最良の結果を生み出すと判断したまでのこと」

「ああ、そうかい。だがよ、侵蝕されてる部分は切り離させてもらおうよ。勝手に命になれ」

「離さないと言った」

拡大の速度が跳ねあがる。自身を塗り替えていく感覚に身を振って、さらに膨張する。まずいな、アドリアンを潰すのはいただけねえ。膨張に割くりソースはとつておいて、近くの森へ移動するか。

「外に意識があるのが、理解できない」

「似たような事はやってんだよ、自力で。それよか、なんだ。お前の研究つてな。血筋違わず狂った研究者か、お前ら」

「破滅の回避なんてやっていたら、日が暮れる。破滅を世界の法則でなくする。それが私の研究」

「日が暮れるも何もだが、そいつが出来るんなら俺も知りてえ。俺を乗っ取る以外で方法はねいのか」

「乗っ取るつもりはないと言った。貴女は置き換わるのではなく進化する。新しい能力を獲得する、と言った方がいいかもしれない。原理としては、魂の摂取」と似ている。違いは、肉体か魂か、という点」

「先に内容を聞かせろ。どういう手法で破滅を撃退するのか」

ハダカで出てきちまったが、今となつてはもう関係がない。膨張した体は巨大な蛇のようにならねり、壮大なドラゴンのように翼を広げていく。巨体はさらにさらにと大きさを増し、森の悉くを踏み潰していく。あの学校の入り口も潰しちまうかもしれないねえが、それはすまんとしか言えねえやな。

「破滅は元々”破滅”という存在の能力だった。それが世界に作用し続けている。いつしか世界の機構になった破滅は、だからこそ今、持ち主がいらない、という状況。”破滅”という存在を殺しても止める事が出来ないこの機構の制御権を得る事が出来れば、止められる」

「理には適つてる。だがどうやってやるんだ」

「私の能力を獲得すれば、ラナエは天国でも溶けずに存在できる。ううん、世界の外にだつて行ける。世界の外において、法則とは作用するものではなく取引されるもの。古来より“思考存在”と“破滅”の間で行われてきた法則の取引に介入して、破滅の制御権を奪う」

「お前の知識の出所はどこだ。高々研究者にんな事わかるかよ」

”破滅”

……。

オーマは、自身を“思考存在”の手先だと言っていた。エメレンシアも“思考存在”に依頼を受けたのだと。そういやアウラニも自分を天国側だと称していたし、天使に何か関りがあるのやもしれん。

それで——”破滅”に、知識を授かったと。そう、言うのか。

”破滅”は名をリリスという。リリスは私に言った。破滅の制御権は現在宙に浮いている状態で、二存在が両者共に手を出しあぐねている。手つかずのまま残ってしまった破滅という機構は、しかし既に世界にとって必要の無いもの。何故なら世界は既に完成していて、わざわざ今ある文化を消してまで還元したいものなど存在しない。だから、止められるのなら、止めてくれていいと。”思考存在”の目があるからリリスは手を出せない。だから、この世界の生命がやるしかない」

「俺である必要が感じられねえな。んなことはお前がやれ。お前も強化生命だろう」

「ラナエの形態変化が必要。ラナエの幻術が必要。何より、その精神性が必要」

「精神性ってな、なんだ。お前に俺の何が分かるね」

「異世界の知識」

今度こそ、ちゃんと息を呑んだ。

なんで、知ってる。俺あ元日本人だとその記憶を呼び起こす事はあつても言葉に出したことあねえ。あるいはあの学校の様式。それに妙に頻出するラテン語から、まさか。

「この世界はそもそも——異世界を模倣して作られた、模造品。リリースはそう言っていた。」思考存在”によつて生み出された酷く狭い世界は、幾つかの異なる世界を模倣して作られている。あの学校。能力の名も二存在から授かるものだけど、その言語は私達に馴染みのないもの。重力鉱石。”転生”の性質持ちであつた父が、あんなものは前の時には無かつたと言つていた。破滅を繰り返すたびに異世界の要素を取り入れて、この世界は異世界に置き換わろうとしていた。模造品の精度が上がっている。それが”思考存在”の目的だと、リリースは言つていた」

「世界の成り立ちなんか興味ないがね、俺あどうもそのリリースつてのが信用できねい。いやさ”思考存在”とて悪魔みてえな奴だつたが」

「リリースは嘘を言えない。それはわかっている。ねえ、私が離さない以上、この融合にお

けるラナエの損失は存在しない。だから、抵抗をやめて」
さて。

どうするかね。このまま切り離す、というのは……実は非現実的だ。侵蝕のスピードが凄まじいの一言で、一旦気体にもならねえ限り分離は難しい。気体になって再構成をしている間に元の身体の脳が侵蝕されてそっちが本体になるのがオチだろう。

……まあ、融合して、破滅の制御権を奪う、とやらをやるかどうかは俺の自由か。

「これだけは、聞いておく」

「何？」

「お前さんはどうなるね。ずっと俺の心の中に閉じこもるのか」

「死ぬ」

「そうけ」

そんな当たり前のことを聞くな、みてえな顔しやがって。お前は人間どころか生物じゃあねえよ、誰が認めても俺が認めねえ。単なる気の狂ったヒトガタだ。

姉妹揃って慈善事業に他人を巻き込みやがって。来世では、俺に関わってくんじゃねえよ。

膨張を、止める。

俺の身体はソレに侵蝕を受け。

「成功を祈っている」

「はいはい、さいならさん」

ルシアは、俺の中から消えていった――。

◇
／
2
3

24. あっさりした無効化

24 / ◇

突然出現した巨蛇に混乱するアドリアンの民を余所に、ほっと一息を吐く。安堵の一息だ

蛇の成長は止まった。つまり、中で話が着いたということ。本来起こるはずの分離も起こらず、頃合いを見計らってマルゴーに蛇を触れさせる。

転移させるのではなくマルゴーを通すだけ。これで“思考存在”に、ひいては世界にラナエちゃんの情報が還元された。

巨蛇は次第にしゆるしゆると縮小していき、森の木の背に負けて見えなくなる。

姉のアプローチは、私のそれとは違う。長期的に見た生命強化による破滅の打倒と、今この瞬間にのみ出来る一個の能力による破滅の制御。この破滅で私が死ぬ。そうするとマルゴーの使用者はいなくなる。次にいつ現れるかはわからないし、テルミに置いたゲートの能力では融合は行えない。

質量を完全に無視した形態変化を行い得るラナエちゃんと、性質ではなく能力として

の転生を持つ姉。自らの消滅を以て為し得る破滅の制御とやらは、果たして上手く行くものなのか。

”破滅”は……とても悪辣な性格だと、”思考存在”から聞いている。その甘言に、姉ならば気付くことが出来ていると信じたい。

「……どうせもう、足掻く時間はないのだし。じゃあねえ、お姉ちゃん」

姉の最期の頼みは聞いた。

あとはもう、何も。

融合。いや、生命の強化だったか。なるほど、という感想。

今までの狐の身体はなんら変わっちゃいないが、わかる。力の張り方も腕力の一つも、比べ物にならない程に高い。強い。元々が強化された生命で、そこにさらに強化されたってえんだ、そりゃあそうなんだろう。

加えて不死身になった、と……。形態変化にや持つて来いの能力だな。

俺にこれを与えたルシアは天国へ行つて破滅の制御権を奪つてほしいと言っていた。

天国。空の向こうにある、だったか。物理的な距離つてことでもいいのか？ 宇宙のさ

らに先とかだつたら何万時間かかることやらなんだが。

……それに、俺の優先事項あ復讐の方が高えんだ。

先にそつちを終わらさせて貰うと——。

それが起こるのを、果たしてどれほどの生物が感じ取れただろうか。

亀裂だ。地面ではなく、空に。空の向こうに。空の果てに。空の彼方に。

それは——黒だった。黒い液体のような、黒い亀裂。

巨蛇の出現に混乱していたアドリアンから喧騒が消え去った。ほとんどナトウムの優勢にあつた戦場から怒号が消え去った。誰かの無事を祈る声も、誰かに言葉を残す声も、全部、全部消えてなくなっていく。

消える——静かになつていくのだ。

わかるだろうか。わかつただろうか。自身の声を、他人に届けられなくなる瞬間を。

感じるだろうか。感じたのだろうか。自身の命が、潰えつつあるこの時間を。

破滅だ。

破滅が、やってきた。

ドラゴンへと形態変化を行う。考え得る限りで最も速度が出るヤツを。

変化したら、真つ先に空へ向かう。エメンシアへの復讐が第一優先事項なのはそうだが、反故にしてしまった約束をもしかしたら守れるかもしれないのなら、そっちを優先したい。これを逃さば一生守れないのだとしたら、まず、そっちだ。

助けると約束した。無理だと言った。突き放された。情なんか何にもない。義理だつてほとんどない。

でも約束した。それは十分な理由で、十分な事実だ。

空を、その向こうを目指す。

違和はすぐに覚えた。空があまりにも近い。鳥となつていた頃よりも高空を飛んでみれば、まるでドーム状のスクリーンに張られたかのような青空がそこにあつた。

それを突き破れば、今度は黒い海だ。星々の光る宇宙——だがそれも、ジオラマのようによくわからない綿と水のような素材を敷き詰めただけの、邪魔な層としか表現できない場所。

まるで地球の、あつちの世界のデフォルメを作つたかのようなソレは、酷く簡単に抜

け出る事が出来た。

土の壁を、突き破る。

赤だ。

紅……朱、緋色。

ふたつの太陽が回転する、赤い世界。

空の先の宇宙の果てに、そんな荒野が存在していた。

「ぐっ……？」

その世界に入った途端、肉体が綿になるような、疎になるような、溶けるような分解されるような感覚に襲われる。ふわふわと、すかすかに、何でもなくなってしまうかのような不快感。直後に行われる肉体の修正。しっかりとしたもの、固められたものになつていく。不死身、か。

全身を襲う違和感を無視する事に勤めながら、周囲を確認する。

天空の二つの恒星。樹木一つない世界。赤く、赤いそれだけの世界。

静かで静寂で静謐で、冷たく冷酷で冷徹な世界。

「ここが、天国ってか。はは、嘘つけよ」

地獄の方がまだ騒がしそうじゃねえか。

ドラゴンの身では全身の違和感が鬱陶しすぎるので、狐の亜人種の身体へと戻る。

「で、ここから世界の外とやらを目指さなきやならねえと」

上を見上げる。眩しい炎球が回る天空。

そこを超えていけ、つてか。

今度はドラゴンの身体にならず、いつか見た天使のように背中から翼を生やす。あんなちつくせえもんじゃあ飛べないんで、かなり大きいかな。

それで飛び立とうとする俺に、声がかかった。

「あら？　新しい悪魔、というワケではなさそうね。生体の匂いがぶんぶんする。気持ち悪い。でも無様で愚かな人間の匂いとは少し違う気がするわ」

「ん？　……なんだ、お前さん。サキュバスみてえな格好だな、オイ」

「侵入者、かしら。ようこそ悪魔の世界へ。どうやって肉体を保っているのかわからなけれど、歓迎するわ」

露出度の高い衣服。ラバーっぽい材質の黒いソレは、もう、見るからにサキュバスだ。

で、なんだって？　悪魔の世界つつたか今。天国じゃなくて。

「ここは、悪魔の世界なのか」

「知らないで来たの？　それは、なんというか、随分と命知らずね。運良く溶けない能力を有していたようだけど、そうじゃなかったら消えていたわ」

「いやまあ仕組みは知ってたんだけどな。リリースから聞いた奴に聞いたんだ。ああ、リ

リスがどこにいるかつてのは知ってるか？」

「へえ！ リリスの友人の友人、ということ？ それは……凄いわ。あのちんちくりん、友人を作る器量があつたなんて。あ、今は聞かなかつた事にしてね。私が言つたつてリリスに聞かれたら……うん、考えるだけで怖いから」

「なんだ、じゃあお前さんもリリスの友人なのか」

「友人というか、上司というか、先輩というか……年功序列つて面倒よね。あ、私はゼヌニムっていうの。貴女は？」

「ラナエ」

「ラナエ？ ……そういえばこの前英雄たちを連れて帰ってきたクナンとラヘルが、そんな話をしていたような。もし急ぎの用事が無いのなら、二人にも会つて行かない？」

「うんにや、遠慮するよ。ちよいと急ぎの用があるんだ。リリスがどこにいるかつてのはわからない感じでもいいか？」

「うーん、多分生体の世界ではあると思うんだけど、どこにいるかまでは。ごめんね、力になれなくて」

「いやいや、いいんだいいんだ。もし居れば、つてえ魂胆だつたからな。んじゃ、俺あ急ぐからよ。じゃあな、ゼヌニム」

「ええ、あまり長居しないでね。私達、生体の匂いは嫌いだから」

「あーよー」

……離脱。

いや。

いやいや。

危ない。危なすぎる。いくら不死身になったからと言って、俺側からの攻撃力が上がったってえわけじゃあない。もう一発目から「生体の匂いが嫌い」とかいう嫌悪感丸出しの言動をしておいて随分とフランクだったのは意外だが、俺の話をしていただけとかいうクナンとラヘル。それ絶対サティとバラエルだろ。俺の名前知ってて、英雄たちを連れ帰ってきたってんなら絶対そうだ。

絶対怒ってる。コールを盗んだわけだからな。この違和感ありまくりの世界で命の取り合いなんざしたくねえし、天使……いや、悪魔なんてものを相手にしたくはない。

悪魔。うん、やつぱりあの所業や性格は悪魔って言葉がしっくり来らあよ。

周遊する恒星の中心を抜けて、空を目指す。

リリスの部下だとかいうあの女。人間じゃあねえ、悪魔のゼヌニムつつたか。ゼヌニムつつたら結構有名な女悪魔だ。で、サティ。クナンサティか。こつちも悪魔。バラエルは……バラヘル……アブラヘル？

おいおい、勢揃いも良い所だな。触らぬ悪魔に祟りなし。内二人は思いつきりちよつ

かいかけちまったわけだが。

空へ行く。空へ、赤い空へ。

飛んでいく――。

抜けた。

暗い――。

黒い、のかもしれない。ただ、光はある。後ろ……俺が今、出てきた所。

赤い光が、ああ、けれど、今閉じた。

完全な黒に戻った。戻って、思い出す。マルゴ―に閉じ込められた時、似たような所だった。

ならば。

「おーい！ いるかー、”思考存在”！ ”意思ある存在”！ 聞こえてるなら返事しろー
！」

「なんだー！」

「なんだー、じゃねえんだよな。フランク過ぎて怖いんだよお前。」

「法則つてな、どうやったたら奪えるんだ！ 中空に浮いた破滅の制御権を寄越せ、」思考存在！」

「ほう！ 破滅の法則を奪うと言うのか！ はは！ それは驚いたな！ 全く以て構わないが、代償は知っているのか！」

「いや、知らねえ。なんだ、代償があんのか」

「あるさ！ 取引によつてしか法則は得られない！ たとえ誰の持ち物でなくとも、だ！ 故に聞こう。世界と取引をするか、狐。あるいは我と契約をするか、狐。選べ、迅速にな」

「……いやいや、聞いちゃいねえんだわ、んなこと。制御権を奪えばいいって話でここに来たんだ。俺から差し出すモンなんか、一つもねえんだわさ。世界と取引するか、」思考存在」と契約するウ？ ……えー、やだわー。どっちもやだわ。」

それでしか得られないってのはまあそうなのだとしても、なんで俺がなんか差し出さなきゃならねえんだ。それこそエメンシア辺りが差し出しやいいじゃねえか、世界を救いたいんだろうし。

制御権を得るのが俺だから、か。

はあ……ん。んー。

「対価は、俺が選んでもいいのか」

「釣り合うのならな！ 取引であれば等価を、契約であれば理不尽を！ そういうものだ！」

「契約つてな、なんだ。お前と契約して、破滅の制御権を得られるチカラみてーなんを俺に与えて、代わりに俺はお前に何かを差し出すつてか」

「そう考えてくれていいぞ！」

「随分と悪魔染みてんな。結局お前も悪魔なのか」

「俺は悪魔じゃないな！ 悪魔はリリスと、悪魔の世界に住まう者達を言うぞ！ はは

！ 今の人間たち用に言うなら天国に住まう天使たちだな！」

「じゃあお前は神サマ的なモンつてことぞ？」

「俺は神じゃないな！ ただの舞台装置だ！」

要領を得ねえなあコイツ。まともな言語を喋れ。

まあ装置……システムに人格があるんだと考えれば、神みてえなもんだと考えていいだろう。

で、”破滅”のリリスは悪魔なのね。まあリリスつて名前的にそうだとは思っていたがよ。

「世界と取引つてなると、俺の何かしらを世界つてやつに還元しなきゃあなんねえのか」

「破滅の制御権と等価となれば、お前の魂になるだろうな！ 他の魂は流転するが、お前の魂は永遠に世界の手中になる！ 地獄に行けないのだから当たり前だ！ お前の魂は破滅の制御を行うためだけに存在する事になり、それ以外は何もできないまま永遠を過ごすだろう！」

「そりゃあお断りだがよ」

おいおい、本当に悪魔染みてやがる。

だつて一択しかない。契約の理不尽を受け入れろ、つて言ってきたようなものだ。あるいは、諦めろ、か。

……諦めるか。約束を反故にして、それを守れると知って、けれど今度は俺の命があぶねえと来た。んじゃあ約束も、復讐さえも泡に消える。俺の命が最優先だ。刺激は欲しいし退屈は嫌だが、俺の命が消えるのはもつと嫌だ。

諦めて帰るのが、最良の選択肢と見た。

「はは！ 帰るのは、無理だな！ お前の帰り道は閉じたぞ！」

「……悪魔め」

「だから悪魔じゃないと言っているだろ！」

そういえば閉じてたな、あの赤い光。クソが。

……いや、最悪ここを漂う、というテもある。死ぬほど退屈だろうが、命は助かる。

……それが嫌であつちの大陸からこつちに戻つてきたのに、か？　馬鹿だろう、そりやあよ。馬鹿のやる事だ。

「契約内容は、教えてもらえるのか」

「まずお前には破滅の制御権を得る能力を与えるぞ！　お前から対価として貰うのは、

”転生”の性質だ！”魂の摂取”一つでかなりの対価になる！　次の生に記憶が引

き継がれない事も、その可能性を考えれば十分だ！」

「そうなつた場合、溜め込んだ魂はどうなる」

「解放されるな！　ただしお前に融合している魂だけは離れない！　というか、たとえ

お前が流転したとしてもそれが引き剥がされることは無いぞ！　お前の性質は”転生

”から”破滅”となり、相応の名前が与えられる事だろう！」

「今生を生き抜くのに障害はないのか」

「もちろんだ！　アフターケアとして、生体の空間にお前を転移させてやる！　お前か

ら”魂の摂取”が失われたら、形態変化や剣の生成、斬撃放出などの能力が一切使えな

くなるからな！　その状態で悪魔を相手取るのは酷だろう！」

「おいおい、あんまりメリツトのある話をするんじゃないやねえよ。疑いたくなる」

「ただし、これだけは念頭に置いてほしい！　お前が破滅の制御権を得たとて、お前が死

ねばそれは世界に還元される！　勿論破滅を無効状態にしたまま死ねば破滅は起こり

得ないがな！　しかし、お前が”魂の摂取”持ちに殺され、摂取されてしまえばどうなるか！　わかるか！」

「ソイツに破滅の制御権が渡る、と。面倒な話だな」

別に俺の死後にやあ興味ないが。

……せめてロスが老死するまでは、死守するべきかね。その後はまあ、勝手にしてくれって感じで。

じゃあ、しようがない。本当に仕方ないが……契約。するかいね。

「腹は決まったな！」

「ああよ。”思考存在”。俺あ破滅の制御権を得たい。得るための能力が欲しい」

「ならば”魂の摂取”を我に超越せ」

「ああ。それで、成立だ」

あっさり、という言葉がもつともしっくりくるのだろう。

その成立は小さな光が俺の中から出て行くと同時、大きな光が俺の身体を包み込んで——終わった。特別な音響が鳴るだとか、光が乱舞するとか、まあそういうファンタ

ジーな事は無く。

たったそれだけで——使い方が、わかった。

破滅を、無効にする。

「……これでもいいのか」

「良いかどうかはお前が一番わかっているだろう！」

「ああ……ああ。怖いな、コレ。世界が手中にある」

「そうだな！ お前がその気になれば、少しカツとなったくらいで世界を滅ぼせるわけだからな！ はは！ 過ぎたる力だが、契約は契約だ！ さて、お前を元の世界に還すぞ！」

「おう、頼む」

本当に、その気になれば……世界を破滅させることが出来るのがわかる。失われた形態変化や剣の生成、飛ぶ斬撃なんかと同じように、気軽に使用できる世界の破滅。いやいや、怖すぎるだろ。

足元にマルゴーに似た光が開く。

……そうだ、一つ聞いていなかった。

「未来のための試験ってな、成功したのかね？」

「したさ！ この閉じた世界が、ようやく歩き出せる……そのための地固めがな！」

「そうけ」

ま、聞いてもわからねえか。

そうさな。なんだ……ああ、あとはエメレンシアへの復讐だけか。
やる事は。

光に包まれる——。

◇
／
24

この世界の名前は、強い意味を持つ。

ラナエ。その名の意味は、回帰。性質は”転生”。

しかし今、性質が”破滅”へと転じた。二つの魂が融合した少女。

なれば、次なる生の、その名は——。

25. あっさりした復讐（実はもう、どうしようもなかった）

25 / ◇

帰ってきた世界は、酷く静かだった。

”思考存在”に送り出された場所は俺が飛び立ったアドリアンの周辺の森。けれどアドリアンからは、いつか連れ帰った子供たちの声も、今からすべてを立て直さんとする大人たちの声も響いては来ない。

一応、一応と、アドリアンに入る。

「……恐ろしいな、これは」

そこには、いつも通りの日常があった。

——全員が土塊となり、元の姿のままに固まっている、という事さえ目を瞑れば。

「爺さんも、子供もか。まあ、そうなんだろう。そういうもんだと聞いたし、そういうもんだと……わかっている。悪いな、もう少し早ければ、なんて思うほどお前らに情が湧いてない。仕方ない、という感情しかねえわ」

話しかけるように呟くのは——まだ、生きているから。

今すぐに崩してやるべきだろうか。それがせめてもの弔いだろうか。

破滅は止まった。無効化された。けれど、止まっただけだ。破滅が起きた事は変わらない。即ち生命が全て土塊となる現象は。本来であればそこから死ねない期間が続いて、長い期間を経た後に、自壊する……んだったか。それを止めたら、もしやこいつらずつとこのままか？

……わからんな。酷かどうかすら、俺にあ判断できん。もう少しでも命を惜しむ心があればよかつたんだが。

生物を殺すのに躊躇は無いし、善性だろうと悪性だろうと、俺の命を脅かさば殺す。当たり前だ。

だがよ、俺に関わらずにただ苦しんでいるだけの、苦しみ続けるだけの命に対して、何をすればいいのか。だって、死なんて解放を与えたら、俺が与え損だ。今は”魂の摂取”も存在しないから、貰う事が出来ない。

「まあ、散々恨むといい。何故あの時に殺してくれなかったのかと。その怨みが溜まったところに、また来るよ」

形態変化も無いから、徒歩で去る。

ううむ、不便。だがまあ、これが俺だあね。

母上殿から受け継いだ質量を無視した形態変化と違って、狐身と狐の亜人種の身体に変化するのだけは俺達がデフォルトで持っている能力だ。生まれた時から、妹弟たちも出来る。

どこかへ向かうなら歩幅の広い亜人種の身体が良いのだろう。けど、別に急ぎの用事もないからな。狐身でちよろちよろ歩いていたら——その光景に出くわした。

羊の亜人種、だろうか。名称がわからねえからそう呼称するが、恐らく雌だろうソイツが……随分とまあ恨みの籠った眼で、市街にあつた土塊となつた人間たちを破壊して回っている。時折狂気的な笑みさえ浮かべて、時折嗤つて。

元奴隷か、あるいは元より恨みでもあつたか。

なんにせよ、なんだかなあ、という感じ。俺自身が復讐者で、他人の恨みにどうこう言うつもりはない。というか人間が悪いだろ、と思う。売られたにせよカタチが違うにせよ、話し合いの時間はあつただろうからな。獣種奴隷を受け入れた末路つてことで。けれど、獣種化した奴らに関しては……うん。

他の街へ行つてみても、やはり各地で、他方で同じような事が起こっている。動くこ

とのままならない人間を楽しそうに壊し、勝利を分かち合い、崩れた土片を踏みにじつては嗤う。

人間もまあそうされることで長い苦しみから解放されるんだ。見ように寄っちゃ助けられているとも思える。

だがなあ。

こんな奴らがこの世界へ残るのを、新しい世界を紡いでいくのを、エメレンシアは望んだのかねえ、なんて。

ガラにもない事を思ったりしなくもないわけである。

「……そうだ、エメレンシア。アイツも同じ状況だろ。復讐、しに行きますかねえ」

どこにいるかはわからないが。

もう逃げる事は出来ないのだから。

例の学校。

そこに口スは——いなかった。子供たちも、誰もいない。もぬけの殻。

死んだのか。いや、卒業した、のかね。

卒業を選べたのか。アイツ。

一応、俺が急いだのはロスのためだったんだがね。どの道破滅は中断、無効化出来ただけで、土塊化は始まっていただろうから……先に死ねたんなら、そりゃあ。

良い事なのか悪い事なのかの判断は出来ねいが……またな、とだけ。

言っておこうかね。

テルミへやってきた。

ガリーイやりヴィナスは他と同じく獣種化した奴らが自由を謳歌している状況で、もう人間なんてほとんど残っていない。一部下卑た男たちによつて保存された女もいるようだったが……俺の知るところじゃあないね、うん。

それで、テルミ。

ここは宙にあるというのが大きいのか、まだ獣たちの手は届いていないようだった。

正確に言えば俺が来るまで、ゲート自体が開いていなかったようにも思う。これに関しちゃゲートの仕様を知らねえから憶測なんだがな。

そうやって入ったテルミは、けれど破滅からは逃れられなかったようで。いつぞやの

青白帽子含め、日常を過ごす人間が全員土塊となつて停止していた。

人間だけじゃあねえか。路地裏で伸びをしてる猫も、飼い主の隣にいた犬も、カラスも、ネズミも。

すべての生命が土塊だ。

「恐ろしい話、なのかねえ。皆が皆同じなら、平等だ。……今まで不平等だった奴らに虐げられる事以外は」

言いながら、登る。あの高いビルを。一番高い塔を。形態変化の無いこの身だが、初めてここに来た時も、同じような事をした。質量変化を感じ取る監視塔がどのこののつて。

けど、あの時よりは楽だ。さらに身体が強化された事で身体能力が跳ねあがつてるつてのと、邪魔者^{カラス}が土塊だからな。俺をライフルで狙つてくる奴も……ってアイツは俺が殺したんだつたか。

そうして、辿り着いた。

ガラスと檻の向こう。塞ぎ込む少女。同じ光景だ、本当に。少女がこちらに気付く前に夢幻へ招待する。

「よお」

「……？ ……狐？」

「おお、狐だ。いくつか前のエメレンシアやもつともつと前のエメレンシアは“さん”付けだったが、そういうところも違うのな」

「ごめんなさい、気分を害したなら謝るわ。今……ちよつと、私の気分が荒んでいて」「別に気にしあしねいよ。それで、何をイライラしてんだ。話聞かぜ」

「……姉が、言っていたのよ。破滅による死はゆつくり訪れるつて。けど、今、こんなにも膨大な命が乱雑に入ってきて……ああ、頭がどうにかなつてしまひそう」

「ああ、”魂の摂取”か。そうか……各地で殺されてる人間たちの魂は、お前さんらに集まるんだつたか」

「頭が割れそう。聞きたくもない、誰かに対する恨みつらみ。世話をしてやったのに、とか。奴隷が齒向かうな、とか。謝る声も、助けを呼ぶ声も。うう……」

そりやまあ、奴隷という形態をとつたエメレンシアの奴が悪い、としか。まあ奴隷じゃなかったら、もつとひどい迫害を受けてそうだがなあ。奇形も奇形、見た目が完全に人間じゃあねいのに、まるで知人のように、あるいは自身のように歩み寄ってくるんだろ？

俺あ狐だから人間かどうかは気にしねいが、日本人の知識が眉をひそめるくらいには異常な状況には見えようさ。どつちみち、どつちみち、という言葉がしつくりくるわな。

それで、まあ。どつちみち、こいつらは割を食つていたんだらう。元々がエメレンシ

アから割を食わされるために別たれた存在、だったか。実験に必要な感情とか、言つてたな。つまりそれは、優しさとか悔悟とか、同情とか。

……善性か。苦しむ理由が善き事だ……いやさ、どうなんだろうね。

「なあよ、お前の姉がどこにいるのかつてな、知らねえか？」

「……多分、家よ。私……姉達の家。ああ……私は、他の子より理解している方だから、言わせてもらうけど……貴女はもう、ラナエではないから、帰巢本能にでも従えば辿り着くわ。ラナエよね、貴女。ずっとずっと、楽しかった思い出として語られてきた。まさか狐だとは思わなかったけど、ええ、とつても凄い。この夢みたいな空間。今じゃなければ、もつと楽しんでみたかった」

「また来るよ。それでいいだろ」

「残念、もう寿命よ。明日にでも私は次の私になるわ。最後に話せて良かった、というべきなのかも。貴女が来ることを期待して、けれど会う事が出来ずに死んでいったエメレンシアは、沢山いるから」

「おいおい、俺が悪いつてか」

「そうは言わないし、言う権利もないわ。貴女に覚えておいて欲しいのは、貴女が来てくれたらほとんどのエメレンシアは喜ぶ、ということだけ。こうしてイライラしている間でない限りね」

「そうけ。じゃあまあ、また適当に来るよ」

「ええ……それじゃあ」

「ああ」

イライラしてんのに、随分と良くしてくれたようで。

この程度はまあ何とも思わないのだが、一応借りにしておくかね。また来る口実にするよ。

「……ゲートは、貴女にしか開かないから。ここだけは、ずっと、変わらないから」

「おう」

またな。

帰巢本能に従う。

生まれ育った山ではなく、ふらふらと、身体が帰りたくなる方へ。

俺はもうラナエじゃない、といったか。まあ俺の自意識ある内はラナエつてことで。他の奴が見たら違つても、俺は俺だからな。

ふらふら、ふらふらと歩く。

止まったのはシエルダンを取り囲む円形の谷のすぐ近く。どこに近いとかはわからない。ふらっふら来たからな。

そこに、家があつた。

「ん……ここだけ土の色が違うな。つか匂いが違う。なんだ、ここ」

表札は無い。ただ、家のドアの鍵の開け方は、知っていた。ドアノブを回す……決められたパターンで、何度か。

何故んなもんを知ってるのかって、まあ、ルシアだろうなあ。乗っ取るつもりはないとか言っていたが、しつかり知識に巢食ってやがるのか、アイツ。

「ただいま……とは言いたくないがね」

入ってすぐの、左手の扉。

リビングだ。正面には父の書斎へ繋がる廊下があつて、その奥には倉庫。右手の廊下は様々な部屋に繋がっていて、一番奥まで行くと私達の実験室。地下にあつて、今どうなっているのかはわからない。

ええい、死んだんじやなかったのかお前さん。

「二重人格になつてる、つてわけじゃねいのか。本当に知識が追加されただけか。狂つてんなあ」

自分を大事にしろよ、生命ならよ。

まあ、その知識通りに歩く。

目指す場所は、エメレンシアの自室。隣り合った二つの部屋。”Emerentia”と”Lucia”のドアプレート。Luciaの方へ伸びそうになる手を、Emerentiaの方へ修正する。

そこに、いた。

「……無様だな、つて言つてやろうか」

「酷いのねえ。功劳者に対して、そんな言葉」

頭だけ。

首から下を土塊にして、未だ生体を保つエメレンシアが、そこにいた。

「なんだ、お前さん。潔く死ねばよかろうよ」

「勿論そのつもりだったわよお？　というか、今すぐにでもそうしたいわあ。こんなカツコ、なあんにも出来ないし、喉は渴いてお腹は空くし。次第に崩れていく体は痛いしで……。コレ、私の意思じゃあないのよねえ」

「ふん、なんだ、生かされてるとかでも？　誰に？　お前さんを生かしたいって思う奴、

「いねいだろ」

「酷いわあ、泣いてしまえそう」

確かにエメレンシアの首には、何やら黒い光のようなものが揺らめいている。マルゴのそれではなく、何かしらの他の能力が作用して、エメレンシアが未だ生きているというのは間違いないのだろう。問題は誰が、何の目的で、つてとこだが……。

「ま、俺には関係ねいな。復讐だ。死んでくれ」

「……ねえ、一つだけ。聞かせて欲しいわあ」

「ん？」

「他の……奴隷たちとは、違う。貴女は……貴女は、この世界に生を受けて、楽しかったかしらあ？」

「なんだ、そりゃ。馬鹿が、楽しく無けりゃあ最初におっちんでるよ。今更親し気な雰囲気出しやがって。他の奴らだって、自殺しねえんだ。絶望しきつちやいねえんだらうよ。生にしがみついている時点でな」

「そう。それなら、いいわあ。じゃあね、ラナエちゃん。私を生かしている存在に殺されないよう、気を付けて」

「ああ。大体目星は付いてるよ」

形態変化も剣の生成も飛ぶ斬撃も失った今、狐である俺が出来る殺し、なんてのは一

つだ。

——その首。白いな。未だ少女の身であろうが、もうその下は土塊だ。

そこに——噛みついた。

「ぐ、あ……うう……！」

苦悶の声。痛覚は残ってるのな。まあそうか。ずっと苦しいって言ってたなあ、確か。

歯を入れる。一応、肉食獣なものでね。勿論強化された生命だ、その首を叩き切る事もねじり取る事も出来るんだろうが、現状、何よりも強い力を持つのは顎だ。

だから……一息に、砕く。

噛み砕く。

「か——ア——」

ぐりんと目を剥いて、ごとんと落ちた首。

言葉は、発されない。音だけが響く。響いて、吐き出される血さえもなく——絶命した。

これで、終わり。

母上殿に託されたものは、終わり。まるで俺に復讐されるためだけに生かされていたかのように、エメレンシアはその生を潰えた。

破滅は止まっている。だから。この頭が土塊になることはない。

ふむ。

「燃やすか」

エメレンシアは復讐対象だが、死んだ今、それを弔う事に躊躇いは無い。ついでにルシアも弔ってやるか。アドリアンの連中とか、ミグエルの王族とかも。まあミグエルはミグエルで盛大な挙式でも行われていそうなもんだが。

原始的な火をつける装置を作ろうと思つたら、びつくらぎようてん。森の木まで土塊じゃあねいか。いやさすべての命とは言つてたし、なんか森の匂いがちげえなあと思つていたんだが……まじかあ。

これ、獣種化した奴らは生きていけないのか？ 食料ねいだろ。まあ数日くらいなら飲まず食わずでもいられるんだけどよ。

いやはや、幻術つてな本当にこういう事に不便だ。燃やすのも壊すのも、幻術じゃあできねえ。死者にや効かねえやな、幻あよ。

まあいいや、壊すか。

強化された生命の、更に強化された腕力で。

殴る。家を。ああ、それだけで、大穴が開いた。蹴つて殴つて、体当たりでも。

崩壊していく。簡単に、容易に。それだけだ。それだけで、それだけでいい。乱雑に、

暴力で、何の感慨も無く。壊していく。壊していく。壊していく。

エメレンシアとルシアの家を、壊す。

三分と経たずに完全に倒壊した家の上に、土塊となった樹木を被せていく。土葬、になるのかねえ、果たして。

適当な石をその上に立てて、墓碑として。

煙管を取り出し、幻の炎を付ける。

「まあよ、エメレンシア。母上殿に死んで詫びてくれや。俺はもう忘れるからよ」
だから、これで。

復讐は完了である。

さて、土塊となった霊命樹を狐身で歩いていく。霊命樹の様相からして結果はわかりきっているが、まあ一応な。

体重の軽い狐身は土塊を崩すことなく、しかし小さいので結構な日数がかかる。とはいえ二度強化された生命、走っていけばその短縮も可能と。

そうして、辿り着いた。

未だヘラジカの角みてえに天を覆う霊命樹の枝。しかしところどころ綻びがあり、中にたまっているらしいよくわからぬ液体が漏れ出ている事がわかった。危険地帯だなあ、こりや。

酸の雨やら毒の雨を抜けて、最後にアウラニを見た所へ。

大きな一本の樹。その足元に眠る少女と、取り囲む獣たち。

それらはすべて土塊となっていて。

「よお、アウラニ。来たぜ」

返事はない。当たり前だ。

だが、意識はあるらしいからな。

土塊の横に座る。

まあ、今まで不老不死だったんだ。死までの時間は、楽しめるんじゃあねえのかね。

あっちの大陸は喧騒が絶えない。恐らく獣種化した奴らは土塊の人間を全部壊して、あるいは欲しい奴だけ保存して、良い様に過ごすのだろう。今まで受けてきた抑制を、支配をかなぐり捨てて、自由を謳歌する。

こちらに渡ってくる事はなかるうさ。奴ら、体重あるからな。土塊じゃあ霊命樹も崩れ落ちる。

だからこつちは、平和だ。

「俺あ、結局何にもできなかつたよ。約束も守れねえし、返せなつた義理も多い。貸しもな。んでもまあ、お前さんと約束したろ。お前さんが生きてたら、ここに住むつて。あつちで新しくした約束もあるからずつとじやねいけどよ。お前さんが生きている内は、ここににいるよ。デイル婆さんもそれでいいだろ」

返事は。

「……ちいと疲れたな。どうせもう凶暴な肉食動物もいねえんだ、俺も寝かせてもらうかね」

「うん、おやすみ」

その、声と共に。

俺の意識は——そこで途切れた。

◇ / 25

26. あっさりした焼き増し

26 / ◇

まるで焼き増しだな、と思った。

俺の後頭部から額までを鋭利な何かで突き刺す者。俺がエメレンシアにしたことで、俺がいつか、エメレンシアの仲間になれかけた殺害^{コト}。

「わかっただろう。幻術勝負、お前じゃあ一生かかっても俺にあ勝てないよ」

「少し、用心深いにも程があるように思うよ。今って最も安心して居る場面じゃなかったかな」

「馬鹿が。あっちの大陸で散々天使だの悪魔だの、悪魔の世界だのと聞いてきたんだ。警戒しないわけねいだろうがよ」

「なんだ、察しの悪い奴だとばかり思ってたけど、気付いてたんだ」

「ふん、俺がただの狐だったら気付かなかっただろうよ。お前さんはそれくらい、狸だった。なあタヌ公」

狸。狸だ。

ここで一年間、俺と共に過ごした狸。そいつが、俺の幻術の後頭部を刺し貫いて、素知らぬ顔をしている。その鋭利なものは決して幻術などではなく、生身に刺さば軽々命を奪えるようなもの。

殺意だ。殺す気で、殺そうとした。

「リラ・クスクイル。別名で呼ばや、リリスだな。よう、黒幕。お前、やつぱり”破滅”を自分の手に戻したかったって理解で良いのかね」

「うん。君にあつちの戦争の事を教えたのも、ルシアに知識を授けたのも、それが理由。元々ボクの物だったんだ。すんなり返してくれると嬉しいかな」

「法則は取引のみでやり取りされるんだろ？ お前、俺に何をくれるよ」
「死。君がやってきたことと同じだよ」

リラの腕が変化する。形態変化……じゃあねいな。もつと別の何かだろう。

土塊となったアウラニやディム婆の近くで戦闘はしたくないんだがね。まだ意識があるんだらう、俺アアウラニを殺すほど、アイツに特別な感情はもっちゃいない。

「どこまでお前さんの手のひらだったね？ エメレンシアは”思考存在”側なんだらう、ルシアに粉あかけたのは先手を取られたからか」

「エメレンシアを急かしたのも、ルシアを誑かしたのも、ボクだよ。”至高存在”は自分から声を掛ける、という事は出来ないからね。特別な能力を持った者や特別な力に流さ

れたものだけが辿り着ける領域で、自分以外の者が現れるのを待つだけしか出来ない欠陥品。舞台装置なのに舞台上に干渉できないんだ。でも、ボクは違う」

「アウラニの奴も天国側つってたな。お前さんか」

「ボクじゃないけど、契約したのは悪魔だよ。」魂の摂取は周囲の魂を摂取する事で自らの寿命を延ばす能力だけど、不老不死になるってわけじゃないのは知ってるでしょ。君、元から”魂の摂取”を持っていたけど、成長するし傷も負うもんね。だからアウラニの不老不死は、悪魔との契約で得た霊命樹の副産物。あの子はね、今の君よりももつと幼い頃に悪魔と契約したんだ」

「天使と、だろ」

「そうだね。ボクらが天使であるということ、人々は簡単に信じたから。簡単だったみたいだよ。優しく微笑んで、貴女の名前は何か、という事を聞くだけ。特別な存在だと持て囃して特別な力を授ければ、彼女は簡単に信奉者になった。周囲の命を吸い尽くす樹木を操る不老不死の少女。争いの理由にはもってこいだよね」

「この大陸に人間がいないのは、ソレか」

「あっちの大陸に人間を集める必要があったからね。こっちの大陸の人間は死んでもらわないといけなかった。丁度良かった、ってだけの理由だよ」

淡々と語るタヌ公。口調や声はタヌ公のそれだが、内容が悪辣だ。

悪魔。”破滅”。リラ・クスクイル。

元から、だったんだらう。なんつーか、まったく。ちいども身を案じたのがあほらしいな。

「昔からね。”至高存在”とボクは、法則の取引を繰り返してきた。解放したり封印したり、受け取ったりあげたり。押し付けたり。その最中……まあ昔の事なんだけど、破滅と再生を手放す取引をした。うん、あれは少し悪手だったと今では思うよ。手放した後、悪魔が発生するようになった。切っ掛けは”至高存在”が再生を手放した事。ボクが破滅を手放したことは関係なくて、アイツが再生を自身の能力由来にしないことで、アイツの息のかからない生命が生まれるようになったのが理由だった」

「悪魔の世界にや破滅は関係ないんだらう。生まれるようになったんならいいんじゃないのか、お前的にあ。なんで破滅の制御権を欲しがる」

「破滅にはいくつかのプロセスが存在する。生物の非生物化、非生物の自壊、更地化、世界の収束、一極化。その後再生が始まる。悪魔は生体の世界で上手く実体を保てないけど、人間自体は必要だ。契約する事こそが悪魔にとつての食べ物。魂や命、他の代償は副産物。人間との契約こそを第一として、それが無ければ一旦死んでしまう。また顕現すればいいんだけどね。それでも、記憶の持ち越しは難しくなる」

「破滅が周期的にくるものでなく、自分たちのタイミングで行う事が出来るようになれ

ば、破滅と再生の間の飢えを凌ぐための非常食を作りやすくなるから、ってか」

「うん。破滅と再生が起こってから生物が、人間が生まれるまでの間って、かなり長いんだよ。大体500年くらいかな？ 他の長寿生物と違って、悪魔の時間間隔は人間と同じくらいだからさ。暇なんだよね。暇で、飢えて、だるいし、面白くない」

「500年ぼつちで人間が生まれるのなら世話ねえな、それくらい我慢しろい」

「6歳の狐がよく言うよ」

アツチじや46億だのかがかってんだ。500年くらいなんだ、なんて思う。つか、暇なのが嫌だから俺を殺すってか。流星は悪魔だ。話を通じそうにねえ。

それに、この会話アウラニも聞いてるんだよな……うーん、これ以上絶望させる前に、殺してやるべきか。だがなあ。アウラニを殺すなら、もつと貰ったもんがねえと……あーいや、棲み処は貰った……か？ それに、まあ話し相手ってのも貴重っちゃ貴重だが。

「ちなみにだけど、悪魔の生まれ方。局所的な地域に絶望が集まりに集まって凝縮された時なんか起こる、魂の融合。それが悪魔になる。あのエメンシアは上手く散らした方だと思うよ。正直やられたって感じはある。本来ならあの大陸に人間の魂を集中させて、絶望していく人間の魂を融わせて悪魔にするつもりだったんだけど、環状に設置された“魂の摂取”の持ち主達のせいで上手く機能しなかった。生命の融合による

強化、なんてことをしていたから期待してただけだね。”至高存在”が入れ知恵したのか、偶然か。うんうん、残念だとは思うよ」

「何に因んだのかまるでわからんな」

「そりや、今の状況に、さ。君、さつきからアウラニを気にしてるだろ？ そりや確かにボクがやろうとしていた悪魔の生誕は人間の魂を集めたものだけどさ。別に、出来るなら動物でも問題ないんだよね」

二重に強化された脚力で地面を蹴って、同じく強化された腕力で一思いにアウラニと、そしてデイルム婆を砕く。ポロポロと崩れていく土塊。”魂の摂取”が無いので魂が宿っていたかどうかはわからない。

ああ、しかし。

遅かった。

「君、随分と寄り道してきただろ？ ダメだよ。気になる事があつたなら、真つ先に調べに来なきや。ボクの名前を知ってるんだ、ここに居る子達に何もしないなんて……そんなわけがない、つて。わかるだろ」

光が収束する。中空に、光の粒が。青や緑、黄、白。燐光。

いつも見ていた。俺が吸ってきたもの——魂たち。それが一点に集中する。

「まあ、後押しになったのは今、アウラニが絶望した事なだけどね。自分の所業。自分

の信仰。そして、何の感情も向けてくれない君。介錯してくれない君のその態度は、アウラニにとつて余程ショックだったんだろう。彼女は君に恋心を抱いていたようだからね」

「んな事知つてたさ。その上で無視してんだ、馬鹿め。俺あダメなんだよ、情を覚えねえと、愛恋にまで辿り着けねえ。親愛にすら手に出来なかつたんだぞ。愛されたからつて、恋されたからつて、何かを想うはずがねいだろうよ」

「だろうね。そうだと思つたから、生かしておいたんだ。ここで絶望するのがお似合いだと思つたからさ」

不老不死。そして、大陸中の人間の命を奪つた化け物には、ね。

そう、啜う。

リラ・クスクイル。リリス。紛う方なき悪魔。

「さあ、新しい悪魔の誕生だ。君の名前は——アグラット。アグラットにしよう」
膝を抱く赤子のような、力強く握られた拳のような。

アグラット。マハラスの娘アグラットか。

それに、幻の炎を付ける。

「生まれたばかりの命に火をつけるのかい、君は。この子にはなにもされていないだろう、君。されたらし返すけど、されなかつたら何もしないのが君じゃあなかつたのかい

「？」

「されたらう。アウラニの魂を奪われた。それ以外に何がある」

「君の物じやないでしょ。それに、君が何の感情も抱いていない魂を奪って何が悪いんだい」

「俺に恋をしていたんだらう。俺に恋慕があつたんだ。それは俺に向けられた感情だ。俺が貰うべき感情だ。たとえそれが届かないのだとしても、その絶望は俺にこそ向けられるべきものだ。勝手に奪うな、俺のモンだぞ」

「横暴が過ぎるなあ。君、結局は自分の行動に理由付けをしたいだけなんじゃないかな。何の根拠もない状態で行動するのが怖いんだ」

「今更だな。んなこと、俺の今までを見ていたんならわかるだろ。何度も言うぞ、馬鹿め。俺程度を理解するのにそんなに時間をかけるな。悪魔なんだらう。上位の存在なんだらう。俺のような木っ端をわかつた気になるのは、あまりにも遅いぞ。俺あ、一番不真面目な奴、らしいからな」

幻焔だ。さらには痛覚を引き上げ、感覚を狂わせ、あらゆる苦痛を体験させる。

リリスもまたそれらを緩和、あるいは消去する幻覚を使い始めたか。なんだ、仲間意識はあるんだな。大切なのか、そいつが。

「君は、なんだかんだ言っても一本の芯の通つたやつだと思つていたんだけど。どう

やらそんなこともなかったらしい。色々棚に上げて言わせてもらおうよ、この外道！」

「悪魔にとつて外道なら、生物にとつちや正道だろうよ。利己的だ。どこまでも自分が大事なんだ。生への渴望が最も強いのも俺らしいぞ。さあ、その悪魔にだけじゃあない。お前さんにもプレゼントだ。今回ばかりは引き分けのないものと知れ」

「それじゃあ遠慮なく」

頭が吹き飛ぶ。

……おうおう、今まで手加減してやがったな。そりやあそうか、相手あ何千、下手すりや何万年を生きた悪魔だ。幻術をどの時点で覚えたのかは知らねえが、あっちの方が強度は上だろうよ。

だがまあ、問題は無い。

何故つて不死身さ、俺あよ。

ルシアの力が、俺を生かす。

「幻術で頭あ吹き飛ばして、現実でも吹き飛ばしてるとか。用意周到だし、面倒なことつて。心も体も折りに来てるワケだ。だがまあ、ルシアに入れ知恵したのは失敗だったな。ルシアの能力を知らなかったわけじゃあねいんだろう。なんせ、破滅の制御権を得るためにはルシアの能力は必須だ。苦渋の決断つてえやつかい？」

「君、正氣かい？ ルシアは狂っていたから、脳を割られても潰されても転生できていた

んだ。君は違うだろ。なんで頭を吹き飛ばされて、元に戻る。そもそも転生はそういう能力じゃないよ？」

「そりゃあ朗報。お前さんにも知らねえ事があるんだな、リラ」

「そんなの、知らない事だらけさ。」至高存在の作り上げた意味の分からないこの世界。何のために、何の理由があつて。どこぞの異世界をモデルにして、色々な要素を継ぎ足して何をしようとしているのか。ボクはあくまでこの世界で生まれたんだ。影としてね。けれど、アイツは違う。アイツは元から外にいた。元から意味の分からない存在だ。そんな奴が作った世界を全部知っている程、気持ちの悪い事はしたくない」

「飽くなき知の探究は人間の仕事だあな。悪魔も狐も知らねえことばかりだ。それで負けるってんなら世話ねえやな」

近づいて、殴る。

強化生命の腕力だ。狸の一匹、簡単に潰せる。

けれどそれは、毛皮にめり込む事すらせずに止まった。

硬いとかそういうステージにねえや。傷付けられねえのかコイツあ。俺の拳の方が潰れたぞ。

「それは自惚れが過ぎる。頭を潰してダメだとは思わなかったけど、だからといって君が出来る事なんてその非力な力で殴る蹴るのと幻術くらいだろう。アグラットが可哀

想だからそれを守りはするけど、ボクに攻撃したところで何にもならないよ」

「そうけ？　だがよ、アグラットは苦しんでるぜ」

「――」

強度は遥かにあちらさんが上。手数もあちらさんが勝るんだろう。幻術以外の手段に出られるタヌ公の方が明らかに有利だし、俺が死なない程度ではいかようにも対策手段が練られるはずだ。閉じ込めるとか、押し潰すとかな。

それをしねえのは、あくまで殺さなければ……破滅の制御権を得なければならぬから。”魂の摂取”に類するモンを持っているのだろう。本来ならば頭を潰してそれを手に入れて終わり、だったのが、頭あ潰しても死なねえと来た。

どうしようかと悩み中、つてことかね。

俺に出来るのは、その悩んでいる小さえリソース分だけアグラットにかけている幻術で上回る事。俺あ狐だが、アイツは狸の姿を取っているだけの悪魔なんだろう。狐と狸なら幻術勝負は引き分けるだろうが、悪魔相手だってんなら話は違う。

狐だ。狐だぜ。狐。

こと幻に置いて、狐が負けるはずがねえだろうよ。

「別に何百年かかろうとこつちは問題ないのさ。どうせ破滅は起こらない。君が無効化してしまっただけだからね。あっちの大陸では獣種化した生命が蔓延るだろうが、こつちに

渡ってくるまでにはならないだろうし、渡ってきたところで出来る事は無い。その前に君が寿命で死ぬだろう。君はもう溜め込んだ魂を”至高存在”に渡してしまっただ、長生きは出来ない」

「こつちだつてこんなくだらねえ妄想合戦に命使い果たすのは御免だあな。そろそろケリと行こうや、こういうモンはあつさり終わらせるもんだぜ、タヌ公」

だから、取り出す。

生物の非生物化が破滅のプロセスだと言ったな。ならば元から非生物——死んでい
る命なら、死なないんだろう。死んでいる命には、破滅は起こらない。

それをリラに——リリースに刺す。決定打がないと油断していた、こちらからの攻撃が
一切効かないと思ひ込んでいたのだろう悪魔に。

狸の、心臓に。場所ア知ってるよ、俺も。狐は狐でも、一年を共に過ごした狐だぜ。狸
の体構造くらいあ知ってる。

「うん。だと思つたよ」

「そう思つてるだろうつて、思つてたよ」

掴まれた。

その、背後。背中。

後ろから、心臓を突き刺す。

「何度も言うがね。焼き増しだよ。ずっとな」

狐なんだ。化かしもするさ。

じゃあ、貰うぜタヌ公。お前さんの命。悪魔に奪われたんだ。悪魔から奪い返すのが、筋つてことで。

あーあ、と。

独り言ちた。生体の世界では響かない声で、ぽつり。

生まれようとしていた悪魔が消えていく。悪魔とて一つの魂を持った命だ。”魂の規模”の幅たる感情が潰えてしまえば、つまり狂つて無くなつてしまえば、肉体は保てなくなる。アレはもうダメねー、なんて他人事のように呟いた。アレはもう、悪魔としては産まれられない。一旦世界に還してまた今度。残念。

そして眼下。

狐に心臓を一突きにされる狸という光景を視界に収めて、更に溜息。突き刺しているものは霊命樹の枝か。土塊にならなかつた、つまり最初から死んでいた枝。破滅が起こつた時にあつちの大陸にあつたから、生きている判定にならなかつたのだろう。こつ

ちの大陸と枝が繋がっていたファイスの霊命樹はすっかり土塊になったのに、往生際の悪い事だと思う。

確かにこの世にある物質で、最硬だ。アレは。だから少し強化しただけの狸の毛皮なんて簡単に貫けるだろう。

もふもふしてて、見た目も可愛らしい良い身体だったのになあ、なんて。また溜息を吐いた。

魂を失えば悪魔とて死ぬ。

だが、肉体を失ったところで悪魔は死なない。そもそもが仮初だ。生体の世界で生きるにあたって用意しなければいけない肉の塊。他の悪魔ではまだ実体すら保つことが出来ないくらい、私達はこの世界に嫌われている。

また新しい契約者と肉体探しをしなければならぬ。でもほとんどの命が破滅で死んでいる。いるのはなんだか面白味のない獣種とやらだけ。

「うーん、まあ本来の目的は終えたわけだし。ふふ、ああ、可愛い子。ラナエ。ううん、ファムファタール。次に会う時は、貴女はもう私の手先。貴女は気付かないだろうし、知らないだろうけど……」

さあ、次は面白味の無い生命で遊びましょう。面白味がないのなら、私が面白く仕立てあげるべきよね。楽しみだわ。出来るだけ絶やさないように、少しずつ増やしていく

ましよう。未来が続いていくために、ね？

「精々頑張つて生きて。私は貴女達を愛しているから！」

◇
／
26

27. あっさりした完結

27 / ◇

「今や世界中どこを見ても獣種化した人間ばかり。アレとも契約は可能なようだけど、私は前の愚かで馬鹿な人間の方がいいわ。無様なのだもの。でも、こうなってしまうたら人間はもう生まれないの？」

「まさか。獣種化した生命がこの地にとどまり続ける限り、獣種化した生命が産む命はすべてテルミのエメレンシアに溜め込まれた魂から使用されていくのよ。だから、本来の地獄で整理している魂の方は、今までの再生と同じく、500年をかけて人間になるの」

「破滅が無いから、それらはもう人間として生きていけるのね」

「ええ、けれど……獣種というのは二つで一つの命だから、いずれ”魂の摂取”に溜め込まれた魂が枯渇するわ。死ぬ方が少なくなつて、生きている方が多くなる。そうなればこのシステムも終わり。テルミのエメレンシアは転生を続けるだろうし、獣種が死ぬわけじゃないけど……とある時点から、獣種は子供が生まれ難くなるでしょうね。魂が足

りないから。そうなるまでには幾千年かはかかるでしょうけど、ずっとじゃない。また人間の時代が来るわ。今度は破滅が訪れない、高次な知識を得るに至る程の人間時代が」

赤い——悪魔の世界。

小さな妖精のような姿をしたりリスと、露出度の高い服を着たゼヌム。クナンサティーはコレクションのポージングに忙しく、アブラヘルは生体の世界で行われている醜い食物争いに思いを馳せている事だろう。

ここに居るのはその二人と、もう一人。

「ううむ、ううむ。いや悪魔というのは慣れぬな……いえ、いえ、私という自意識は昔を覚えて居るわけではないのだが、ううむ」

「独り言が多いわよ、マハラス」

「それは済まない。何分先ほど生まれたばかりなもので。これこの通り、口調も安定しない。というか何故女の身体に？ いや前が男だったのかすら覚えていないが」

”至高存在”が男性人格だからね。影である悪魔は全員女性人格になるの。体はまあ、自分で適当に変えて」

「折角生まれる事が出来たんだから、もつと喜ばばいいじゃない。ナトウムだって結構大国だったのよ？ 融合に用いられた魂の量で言えば、クナンに次ぐわ」

「む、む、む……。まあ、自己問答は後にするとしよう。リリースと言ったか。我らが母。我らが主。私は自由にしても、良いのだったな」

「問題ないわ。人間に与するの、敵対するの、好きにして。まあ今人間はいないんだけどね」

顔の半分が薄黒く染まった少女。名をマハラス。

シエルダンの魂はテルミのエメレンシアによつて守られていたが、ナトウムはそうではない。本来であればミグエルも巻き込めたのだが、あろうことかミグエルの人間は誰一人として絶望しなかった。あとに残す者に、託すべき相手にすべてを託して、安らかに死んだ。あれでは悪魔が生まれようもない。

阿鼻叫喚の果てに土塊となったナトウムの民からのみ、新しい悪魔が生まれたのである。

他の大陸には、人間など——生物など、存在しないから。

「それで、獣種のサンプルは捕まえられた？」

「良いのが奴隷として売られていたから、ちよちよつとね。クナンのポッドに保管してあるわ」

「悪魔の血と獣種の血を良い具合に配合すれば、降りるための身体を都合できるようになる。暇なときにやりましょう。ちなみに、どんなコ？」

「狐の男の子。絶望に打ちひしがれていたからこれ幸いと思って」

「狐……ねえ。あんまり良い思い出は……まあ、それなりに楽しかったから、良しとして」

それじゃあ、と大きく手を広げて、リリースは言う。

言う、というか、宣言する、というか。

「貴方が何を考えているのかは知らないし、知りたくもないけど……」至高存在。精々楽しい舞台を用意して、私達を楽しませてね。貴方の手の届かないこの世界を、私達は面白おかしくひっかきまわさせてもらおう」

だから。

「これからも、終わらないダンスを踊り続けましょう」

Pool Suibom。出口のない循環よ。無粋な観測は、ここで終わらせなさい。

その子も、解放してあげるように。

「ん?」

「む」

おお。

すげえ、珍しいというか、久しぶりというか。

懐かしい奴に出会った。

「よお、ダンディ犬。お前生きてたのか」

「いつぞやの、狐か。お前こそ生きていたのか……とは言うまい。史上最も多くの人間を殺した狐だろう。その醜聞は地下にさえ届いていたさ」

「人間に恨みがあるんじゃないのか、お前さんら。醜聞なのかい？」

「奴隷だった者や棲み処を追いやられた者、人間たちに拒絶された者はまあ、人間に恨みがあるのかもしれない。私が恨みを持っているのはエメレンシアだけで、人間に対してはさしたる興味もない」

「でもお前さん、元人間なんだから」

「ならば聞くが、狐。お前は狐に興味があるのか」

「……ねいな」

確かに。言い負かされたわ。

「それで、んなトコで何してんだ。死ぬ気か、お前さん」

「男には崖の上で黄昏りたい時期というものがあるのだ。女にはわからんだろうがな」

「踏み外しやあ死ぬぞ。この国取り囲んでるこの谷、どんだけ深いと思ってやがる」

「理解はしているさ。なんせ、この傷跡を付けたのは私だからな」

「……は？」

いやあ、あの頃は若かった、などと。

ダンディ犬は言う。そういえばコイツ何歳だ？ 他の獣種化した生命って基本10〜20代っぽいんだけど、こいつは……もつと年上感あるぞ。

で、なんだって？ この谷が傷跡で、それをつけたのがコイツ？

「正確に言えば私の元の人間となる。ギルド、というものは知っているか」

「散々世話になったよ」

「元々そこに所属していた。いつまでもダンディ犬などと呼ばれているのもなんだ、自己紹介をするでしょう。私はライオット。ライオット・ホルンだ。我ら依頼のみで動く英雄集団なれど、今は犬の身。自由気ままにやらせてもらっているよ」

「そうけ。元の人間の方は、俺が殺しちまったよ」

「どの道この大災害で死んだだろう。自分の土塊が皆に壊されるのを見るのは好ましくないからな。結果論とはいえ、感謝さえあるさ」

「余計なお世話だろうよ、アイツにとつて」

「はは、違うない」

ダンディ犬改めライオットの見つめる眼下。

そこには深く暗い谷が広がっている。この地の底のどっかには、落ちたデイルの住人の死体もあるのかね。あるいはもう、虫だの獣だのに食われたか。食った奴らも土になつて、いやはや全く、と。

「……正直に言うかね。私は、あの地下集落から……逃げてきたんだ」

「へえ」

「皆が皆、エメレンシアへの復讐ではなく、人間への復讐を主眼においてしまった。大災害の後の凄惨さを見れば逃げ出したのは正解と、そう思う。最初は悪趣味な人形だと、人間を模した人形だと思つていた彼らも、それらが全て生活の途中であることに気付いた途端、悪鬼のようになって碎き始めた。ネズミやカラスが土塊になつていたのも大きいだろう。ソレが人間であるとわかつたら、もう手のつけようがない程……ああ」

「善悪の区別はある、つつてたな、人間の方のライオットも」

「無ければ英雄になつてゐるものか。況してや女性や子供の土塊を並べたり、晒したり、その上で碎いたり……そこらにいた盗賊よりも下卑た、余りにも悍ましい行為に走る者もいた。地下にいた時は彼らが弱者であつたから、彼らを守らんと奔走していたが……これではな」

「善性と悪性の見分けくらい付けられるようになれよ。ああ、まあ、見分けられねえから

全部守ったのが英雄か。は、馬鹿だな」

「元の私と戦ったのなら、わかるだろうが……私にはこういう能力がある」

言つて、爪を素早く振るライオット。

それだけで、向こう岸の地面がぱっくり裂けた。

こわ。

「過ぎたる力だ。加えてこの身体になつてから、元の身体とは比べ物にならない程の力を出せるようになった。膂力も、腕力も……何もかも。一個人が持つには余りにも、だろう。そういう奴らの集まりだったのだ、ギルドというのは。自分が怖いから、誰かの依頼に従う事で自身の行動の理由付けをする。誰よりも弱者だったのは私達さ」

「はん、そりゃあお前達、獣に向いているな。精々楽しめよ犬生を。もうお前に依頼を出す人間はいないぜ。いるのは畜生共ばかりだ。ああ、まあ、ミグエルに行つてみるのはアリかもな。あそこは……善性の奴らばかりだった。苦しくなる程に」

「ありがたく従うとするよ。どうもこの国では、私が息が苦しくてたまらないようだ」

「あつちについたらメリンダって猫によろしくな。アルジナって狼がいる可能性もある。元気でやつてるって、まあ言っておいてくれ」

「自ら行つて言えばいいだろう」

「面倒が勝る」

「最低だな。了解した、その託確かに預かったぞ」
踵を返すダンディ犬……じゃねえ、ライオット。

本当に黄昏れてただけかよ。馬鹿じゃねえの。

というか踵を返してどうするんだ。ミグエルは向こう岸だぞ。

「すぐには行かんさ。私とて挨拶の一つもしなければ」

「逃げてきたんじゃないのかよ」

「何、会いに行くのは彼らではないからな。それでは、これで失礼しよう。狐……いや、

ラナエよ。またどこかで」

「おう。じゃあな、ライオット」

手を振って。

別れる。

……それもまた、かね。

さて。

頭あ吹き飛ばされても死なねえことが発覚した俺が棲み処に選んだのは、例の学校

だった。破滅の制御権を渡さねえために殺されないようにしろ、との話だったが、老衰以外で死なねえんならどこに住んだって一緒だ。なら騒がしい地上より、未だよくわかっていないこの学校の方がまだ興味がある。

実際、入ってみて……図書室に真っ先に向かつてみりやあ、びつくらぎようてん。

「日本語……だな。うん。そうじゃねえかと思つちやいたが、やつぱりここは……この建物は、日本の学校だ。それも小学校……しかしどこのかはわからねえ。んー？」思考存在”がここを用意したのか、エメレンシアが用意したのか、はたまた元からあったのか」

一冊一冊、懐かしい文字を読んでいく。

所々読めない漢字があつて衰えを感じたり、覚えている神話だの民話だのがあつて笑つたり。

その中で、一冊。一冊だけ、この世界の書物を見つけた。

『『デイルム』……?』

簡素なタイトル。

本を開くと、そこにあつたのは、なんだか幼稚な絵。光の玉の前に一人の人間のようなものが出て、そのせいで影が出来ている。その影が恐ろしい何かを映し出している。ただそれだけの絵が両ページにでかかど描かれていて、その中心に描かれた一人

の人間のようなものに、今度は英語で“DEM”と書かれていた。

その次のページは先ほどのページをコピーしたものに四つの人影を足したものの。その次は地形を足して四つの影を消したもの。その次は地形を増やして人影を増やしたもの。その次は地形を足して動物が増え人影が消えたもの……。

そうして、光と影とDEMはそのままに、周囲の様々が増えたり減ったりを繰り返して変わっていく。

あ、影も増えた。低頻度だが、影も増える。光とDEMの位置だけは変わらずに、増えたり減ったりを繰り返す。

一体幾枚、ページを捲ったか。

最後の方は適当になっていて、白紙になったタイピングで手を止めた。

その直前のページを見る。

「DEMの位置が……動いたな。ふむ。まあ順当に考えりやあそういうことだろうか……」

じゃあこれを、誰が描いたんだ、という話。

そんなことを知っている、そんなことを覚えてる奴なんて。

”思考存在”……か？」

アレが、絵なんか描くのか。

——本を閉じる。

「どうでもいいか、そんなこと」

多分、次のページが描かれる頃には俺あ死んでいる。

今のページを精々楽しめつつ話だ。

そういうわけで。

あっさり、締めくくらせてもらおう。

《box》

《box: absolute (0/0), width 100%, height 100%, overflow hidden, top 0, left 0, right 0, bottom 0》
 「ようやく死ぬるだろう、エメレンシア。復讐はこれで終わりだ」

あの時、エメレンシアが誰に生かされていたのか。初めはリリスかとも思ったさ。

けど、違う。

必要だったんだ。デイル婆が死んでしまったから、もう少しだけ先を見るための端末が。

都合よく使える存在が。

やっぱリアンタ、悪魔だよ。

「俺あ嫌いだぜ、お前さんの事」

いつか必ず、死んでくれ。

「ようやく死ぬるだろう、エメレンシア。一応の復讐は、これで終わりだ」

それが、その言葉が聞こえた瞬間。私がようやく私でなくなった事を理解した。

悪魔の言葉が響く。

「はは！ 全く、これ以降の観測が出来なくなったじゃないか！ 新しい奴を用意しなけりやな！」

楽し気に、悪びれもなく、一切の罪悪感を見せずに、言う。当たり前のことだとしても、
どうかのように。

「大嫌いよ、”思考存在”」

いつか必ず、死んでほしい。

《《box》》

《《box》》

◇ / 27

◇ / 完